

旅する女

〈旅館『吉野川』登場人物〉

碓氷 瑞穂…居酒屋『かま田』元店員。

霧島 翼…運輸安全委員会委員。

霧島 燕…旅館『吉野川』の主人。霧島翼の父。

霧島 朱鷺子…旅館『吉野川』の女将。霧島翼の母。

津軽 洋子…旅館『吉野川』の料理人。

島風 真里…客人。安政大学政経学部教授。何者かによ

つて殺害された。

潮路 大輔…客人。安政大学政経学部新4年、島風ゼミ

のゼミ長。

白鷺 快二…客人。安政大学政経学部新4年。

常盤 涼香…客人。安政大学政経学部新4年。

有明 浩成…客人。安政大学政経学部新4年。

日向 海里…豊永診療所医師。

黒潮 祐介…高知県警捜査一課警部。黒潮の上司。

瀬戸 遥…高知県警捜査一課刑事。霧島の元後輩。

児玉 実里…碓氷の義理の母親。故人。

〈『電車館』登場人物〉

剣 礼士…秋田新幹線運転士。現在休職中。

釜田 神威…居酒屋『かま田』店長。

大和 叶…居酒屋『かま田』店員。碓氷の後輩。

比叡 暁…『月刊サフィール』記者。大和叶の姉。

水郷 真矢…『月刊サフィール』カメラマン。現在行方不明。

播磨 敦史…『電車館』初代当主。『エルム模型』創業者。

故人。

播磨 真里…播磨の妻。旧姓妙高。

山嶋 宗吾…『電車館』当主。『エルム模型』会長。何者かによつて殺害された。

鹿島 ひばり…山嶋の妻。秘書を兼任。

羽黒 華…『電車館』お手伝い。

白根 菖蒲…『電車館』元お手伝い。故人。

敷島 丈…客人。『三辺製作所』現取締役。

三辺 治作…『三辺製作所』前取締役。故人。

島海 高志…客人。宝永大学商学部講師。

矢野 友久…秋田県警捜査一課警部。

犬塚 麗央…秋田県警捜査一課刑事。矢野の部下。

安部 濤…秋田県警鑑識課。

八雲 克子…警視庁捜査一課警部。

沖 緑…警視庁捜査一課刑事。

〈路線概説〉

土讃線…香川県の多度津から徳島県の阿波池田、大歩危などを経て高知、さらに高知県西部の窪川に至るJR線。琴平以南は非電化。途中、峻嶒な四国山地を縦断するために急曲線と急勾配、トンネルが続く劣悪な環境を有している。特急『南風』が岡山〜高知間を一時間、ここに結んでいる。

〈車両概説〉

JR四国2000系…JR四国が鉄道総研と共同で設計・製造した特急列車用気動車(ディーゼルカー)。急曲線を高速で走行するために、カーブで車体を内側に最大5度傾けて、遠心力を打ち消す機能を備えた世界初の『振り子式気動車』。非電化路線の大幅な高速化の礎となった世界的名車である。現在は老朽化により後継車両への置き換えが進み四国西部での活躍に留まるものの、かつて

は四国のほとんどの特急で使用されたJR四国のエース車両である(写真①・②)。



→写真①

→写真②

〈前回までのあらすじ〉

剣からの想いに応えられない碓氷は、育ての母が眠る高知県の山奥にいた。しかしそこで霧島と共に殺人事件に巻き込まれてしまう。島風教授が殺害された事件はゼミ生の常盤が連行されたことで一応の解決をみたものの、それに疑念を抱く碓氷は剣に助けを求める。

一方、雑誌取材の付き添いで『電車館』を訪れていた剣らも現地で殺人事件に遭遇していた。館の当主、山鳩が密室状態の自室で変死体となって発見され、カメラマンの水郷が姿を消した。過去の事件と合わさり、事件は混乱の度合いを深めていく。

碓氷瑞穂と剣礼士、二人の謎と愛を巡る物語は終着駅に辿り着く。

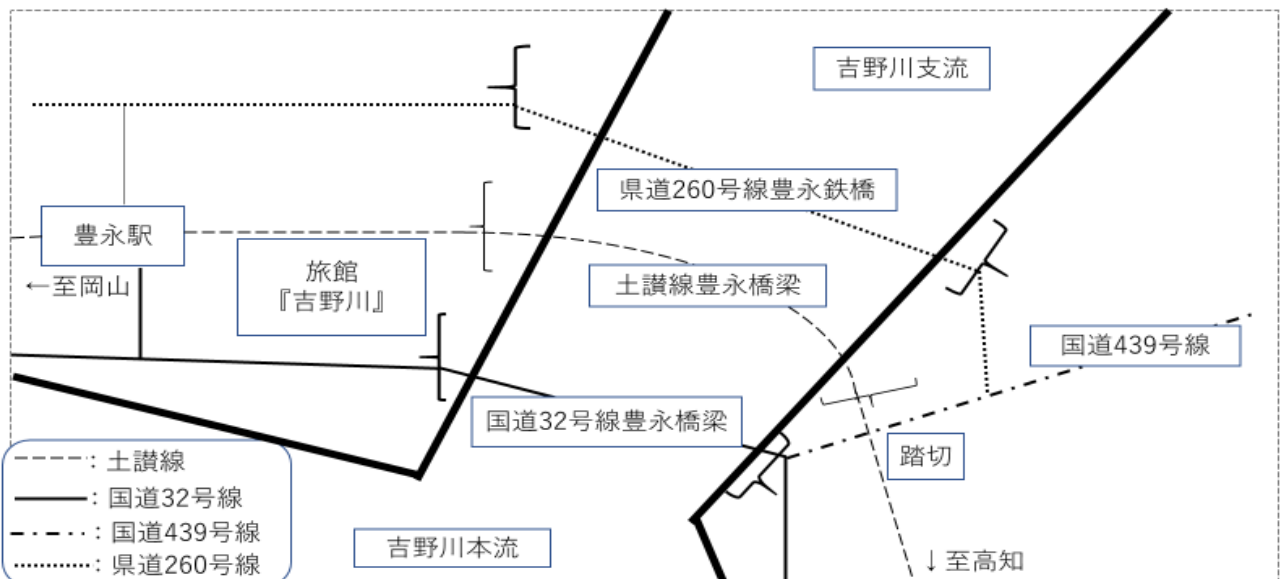
〈後編・目次〉

第七章	検証
第八章	血筋
読者への挑戦	
第九章	電車
第十章	汽車
第十一章	看破
第十二章	真相
最終章	決別
エピローグ	帰還
おまけ	未来

〈前編・目次(承前)〉

プロローグ	郷愁
第一章	到着
第二章	来客
第三章	事件
第四章	捜査
第五章	証言
第六章	誤認

## 高知県大豊町・豊永駅周辺地図



→図①(再掲)

\* 釧札士 —— 秋田県横手市・『電車館』

電話越しに瑞穂さんの声を聞きながら、僕は決心した。一刻も早くこの事件を解き明かし、彼女を助けに行く。絶対に。

\* 碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

いつものように穏やかな札士さんの声を聞いているうちに、ささくれ立って昂っていた私の神経は平静を取り戻してきた。

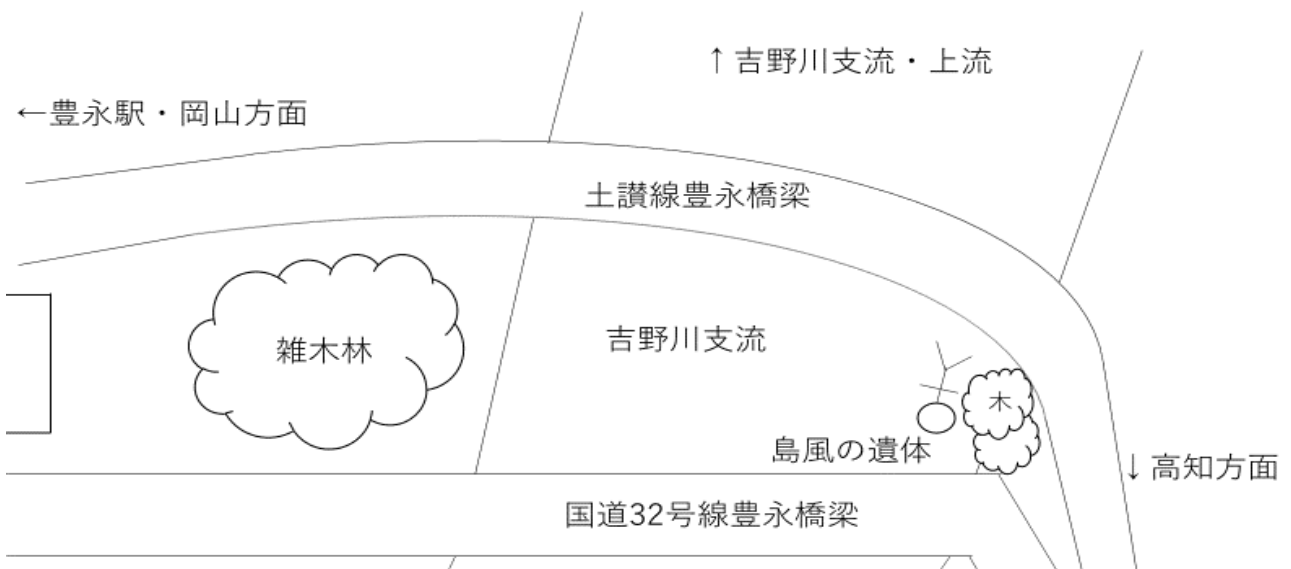
私は高知でのことを吐き出した。順序もぐちゃぐちゃ、理性もぐちゃぐちゃ、何もかも混ぜこぜになった状態で、心の叫びを電話の向こうに投げつけた。札士さんはそれを一つ一つ辛抱強く受け止め、そして丹念にほぐしてくれた。

『……ここまでの話をまとめると、瑞穂さんは常盤さんが犯人ではない、と思っているんだね？』

「ええ、そう。だって、証拠になる睡眠薬を部屋に置いておくなんてあまりにもお粗末だし」

『そっだね。霧島さんが言っていた『南風』の屋根を使ったトリック、あれをそのまま使えば睡眠薬を川に捨てるか、もしくはもっと遠くまで運ぶこともできたかもしれない。風圧を考えると重石とかがいると思うけどね』

## 島風 死亡現場



→ 図② (再掲)

どうして気付かなかったんだろう、言われてみればその通りだ。

『ただ、警察が常盤さんに焦点を絞ったのも理解できるよ。睡眠薬については疑わしい部分もあるけれど、実際に出てきてしまった以上、疑わずにスルーするわけにもいかない』

札士さんによる筋の通った発言に、私はしっかりとした地面に立っているような気持ちになった。

「札士さん、何か考えはある？」

電話の向こうで、彼は少し考え込んだ。

『そうだなあ、瑞穂さんが食堂で焼酎をかけられた件、あれが少し気になるな。島風教授は何をそんなに驚いたんだろうね？』

「それは私も思ってたのよ。でも、面と向かって津軽さんに聞くのもアレだし」

『そうだよ。もう一つ気になるのは、睡眠薬について』  
札士さんもそれについては訝しんでいるみたいだけど、そこから先の発言内容は私も気付いていない事象だった。

『睡眠薬は四錠ぶんが空になっていた、って話だったよね？ 島風教授、一人を眠らせるのに、そんなに使うものかな？』

虚を突かれた。

『……言われてみれば、そうよね。そういえば、常盤さんも食後に眠そうだった、って霧島さんが』

『どうだろう、一概に関係があるかどうかは分からないけれどね』

そりゃそうだ。現場にいる私にも分からないのに、現場にいない札士さんが……いや、あの人なら分かりそうなものだけだ。

「それはそうと、礼士さん。あなたは大丈夫なの？」  
私は話題を変えた。恋人が巻き込まれた事件についても、頭の奥底ですっと気になっていた。

『どうも変な話でね……』

礼士さんは言葉を選びつつ、私に事件のあらましを語ってくれた。

『……そういうわけで、密室殺人と失踪事件が同時に起きてしまつてね。参つたよ、本当に』

『過去の事故死と放火も、どこかで絡まっていそうね』

『これはまだ何も根拠は無い仮説だけど、何か動機に繋がる部分があるんじゃないかと思うよ』

私には判断しかねるけど、過去に館の中で死人が出た時も密室だったらしい。

「そつちにも大学の先生がいるのね」

『うん。どうも、島風教授と過去にいざこざがあったみたいで。……でも、瑞穂さんの方で起きた事件とは無関係だと思うよ。昨夜、島海先生は部屋から出ていないし、仮に出たとしても島風教授の死亡推定時刻にはこつちにいた。アリバイは完璧だよ』

仮にアリバイが無かつたとしても、そもそも高知と秋田を一晚で往復できるようなトリックは無いだろう。

「ねえ、礼士さん。……これから私はどうすればいい？」  
数秒、電話先が黙り込んだ。

『そつだね……とにかく、自分の身の安全を最優先にして。瑞穂さん、今はあなた一人だ。自分の身を守るには、この事件には下手に関わらない方がいい』

沈黙があつた割にはありきたりな返答が返ってきた。

『心配なんだよ。本当は、今すぐにでも迎えに行きたい。でも、僕も動けないし、それに……』

『それに？』

『……瑞穂さんが身の振り方を決めるまで、僕はあなたに何もしない方がいいのかもしれない。そう思つてたし、今もそう考えている。でも、もう耐えられないよ』

礼士さんの口調が、いつもとは少し違って早口になっていた。

「礼士さん？」

『瑞穂さん』

一段と低い声で、最愛の人は言う。

『必ず助けに行く。一刻も早くこつちの事件を片付けて、絶対に迎えに行く。だから、今は耐えてほしい。……駄目かな？』

そうか、と私は気付かされた。

礼士さんに導かれて私がどんな変わったのかと思つたけど、そうじゃなかつた。私も、同じくらい礼士さんを変えていた。互いに互いを結び合い、そして照らし合つていた。

「……分かつた。待つてるわね、礼士さん」

事件に進捗があつたら連絡することを約束し、私は長電話を終えた。

あの人は待つていてほしい、そう言つた。でも。

私は一抹の申し訳なさを感じながら、次の行動を決心した。

私がこの事件を解く。待つてなんていられない。

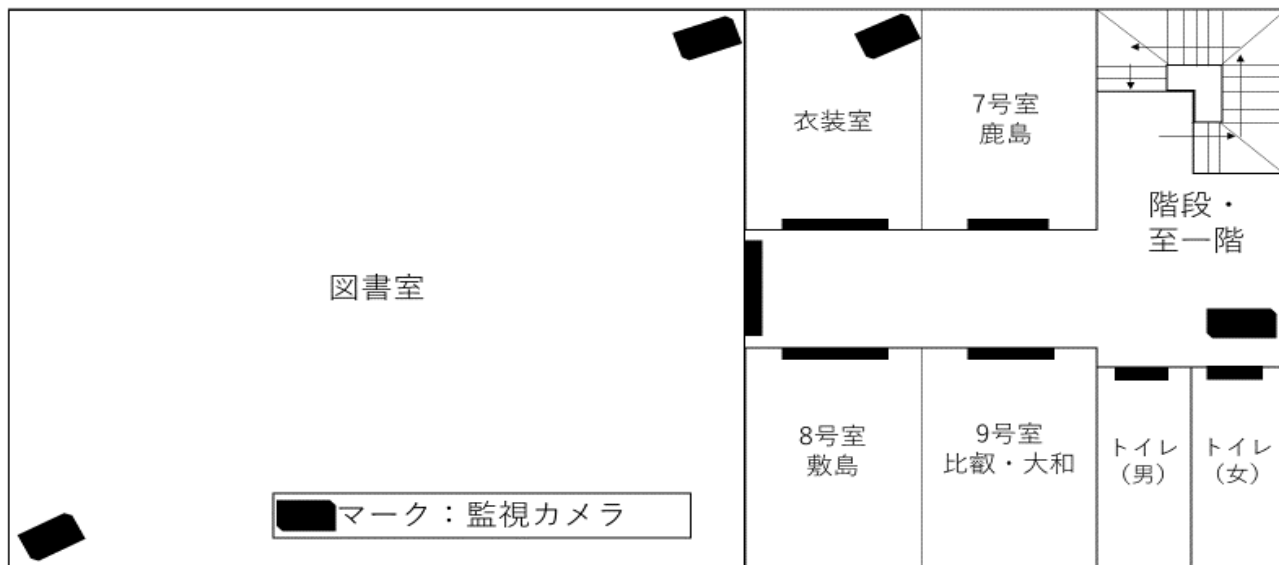
\* 釧路士 —— 秋田県横手市・『電車館』

電話を切ると、スマホの画面に表示された通話時間は軽く1時間を超えていた。こんなふうに時間がぶつ飛び感覚、『電車館』に来てから初めてかもしれない。

## 『電車館』1階



# 『電車館』 2階



とりあえず渡り廊下を経て食堂車に向かうことにした。バリアフリーを意識したのか、食堂車に向かう通路には段差はおろか坂道も無かった。食堂車の床面高さとのこの館の一階の床面高さはきれいに揃えられているみたいだ。食堂車に入ると、釜田さんが出迎えてくれた。

「お、剣。電話終わったか？」

「ええ。そのエプロン、どうしたんですか？」

「見りや分かるだろ、昼飯を作ってたんだ。もうみんな食べ終えて、お前のぶんだけ残してある。食うか？ 腹が減っては何とやらだぜ」

お言葉に甘えて、腹ごなしを済ませることにした。食堂車の厨房で実際に料理をするという貴重な経験ができる釜田さんが少し羨ましかった。

「確水はどうだった？」

厨房の奥から釜田さんが尋ねた。

「元気でしたよ。向こうの事件の様子を細かく教えてくれました」

「そうか。あまりウロチョロしねえように言っとけよ？」

あいつ、時々見境無くすからな」

それは僕も危惧しているところだ。一応言い含めておいたけど、どこまで伝わっているかは分からない。瑞穂さんを守るためにも、彼女が事件に首を突っ込む前に駆け付けたいといけない。釜田さんの言葉は僕を少し焦らせた。

落ち着け。焦ってもどうにもならない。深呼吸していると、釜田さんが昼食を乗せたお盆を運んできた。ホットコーヒーと……何だ？

「ほらよ、即席のハンバーガーもどきだ。たんと食べ」

「いただきます」

こんがり焼いたトーストにトマトとレタス、鱈のフ

ライを挟んでタルタルソースで味付けしたものだ。ハンバーガーもどきというか、こういうのってクラブサンドって呼ぶのでは？ さくさくした食感に少し元気が出た。二つ目のサンドにかぶりついていると、犬塚刑事が入ってきた。

「ああ、剣さん。ちょうど良かった、お見せしたいものがあるんです」

「何か新しい発見でもあったんですか？」

出っ歯の刑事はせかせかと向かいの席についた。「そうじゃなくて、10年前の事故の捜査資料を持ってきたんです。このバインダーが播磨社長の事故死の捜査資料、こっちのバインダーが三辺製作所の放火事件の捜査資料です」

分厚い水色のバインダーが二冊、テーブルの上に鎮座している。わざわざ持ってきたということは、警察も本格的に今回の事件との関連性を疑い始めたようだ。

「これ、一般人の僕が見てもいいものなんですか？」

「一応、これは一般向けにも公開されている資料です。本当は資料公開請求とか正規の手続きがあるんですが、今回は事情が事情です。固いことはいませんが、内緒ですよ」

過去の件が今回の事件と繋がっているかどうかは分からない。とにかく今はここを出る方が先決だ。正直、この資料の山に関わる時間は惜しい。でも、見てみたい気持ちもかなり大きかった。

「剣さんなら絶対気に入るのでしよう、と矢野警部が」

「……分かりました。ご厚意に甘えさせて頂きます」

下手に僕をうるちよるさせないための餌かもしれないな、と邪推しながらも好奇心に負けた僕はクラブサンドを完食し、バインダーに手を伸ばした。

\*確氷瑞穂 —— 徳島県三好市・国道32号線

黒い三菱・ディアマンテが霧島さんの愛車だった。釜田さんといひ霧島さんといひ、私の周りにはなぜか少し古臭い車を愛用している男の人が多い気がする。そんな霧島さんの愛車に揺られ、私は一路大步危駅に向かっていた。

「ごめんなさいに、無理に付き合わせてしまつて」

「かまんですよ。剣さんほどの頭脳はありませんが、確氷さんの足になるくらいやつたらできます。ちよつとしたドライブやと思えば、これくらい」

「この車、燃費とか悪くないんですか？」

「思い入れには勝てませんよ」

カーラジオから流れる曲に目を細めながら国交省の役人は笑ひ、ステアリングを切る。

♪傷つくことは恐くない だけどけして強くない

ただ、何もしないままで 悔んだりはしたくない

Here we go! go! 走り続ける

誰にも止められはしない

未来の自分へと

Give a Reason for Life 届けたい

「ギバリ懐かしいなあ。リアルタイムで見よつたんですよ、これ」

意味を掴みかねているうちに曲が終わり、ラジオからパーソナリティの音声流れ出した。

『……『新世紀エヴァンゲリオン』より高橋洋子『残酷な天使のテーゼ』、『スレイヤーズNEXT』より林原めぐみ『Give a Reason』』二曲続けてお聞き頂きました。

『ふゆふゆのアニソナーミナル』本日は90年代女性アーティスト特集をお送りしていますが、そろそろお別れの時間が近付いてまいりました。最後の一曲はラジオネーム・マツカン末期さんからのリクエスト、テレビアニメ『名探偵コナン』より小松未歩『謎』をお聴き頂きます。97年のリリースです……』

ドラムとギターのイントロが流れ始める。どうやらアニソンドレーだったようだ。私はアニメには詳しくないが、さすがに名前だけは知っているタイトルのアニメばかりだ。それこそエヴァは昨夜テレビでやってた。

礼士さんがいる館でも叶ちゃんと、客人の大学教授が観ていたらしい。

「さっきの謎解き、僕も少し引つかかるんです。自分で言うのもアレですけど」

霧島さんの推理を基に、高知県警は常盤さんを連行していつてしまった。それに違和感を覚えたのは私だけではないみたいだ。

「自分で言つておいてアレですけど、あの推理には証拠が無いがですよ。常盤さんにも犯行は可能であった、ということを示しただけで」

「証拠としては睡眠薬がありますけど、何だか怪しいですよね」

「あの睡眠薬について、実はせとつち……ああいや、瀬戸刑事からこつそり聞いたんですよ」

せとつち、か。あのお堅そうな風貌に似合わず可愛らしいあだ名だ。学生時代の名残なのかもしれない。

「デパス」って名前の睡眠薬らしいんですが、あの睡眠薬はかなり即効性のある強いやつらしいんです。一錠飲んだらそれでコロリ」

「……それがどうして四錠ぶんも無くなつていたんでしょうね？ 日頃から常盤さんが服薬していたんでしょうか？」

「本人は見覚えが無い、の一点張りだそうです。気弱そうな反面、案外強情みたいで」

いつの間にかカーラジオからは別の音楽番組が流れている。頭の中に事件の断片をぐるぐると思い描いていると、聞き覚えのある旋律が勢い良く流れ出した。

「あれ、この曲……？」

♪途切れた時間 沈黙に埋もれそうな光

ほんの僅かな その存在 凍えるエレジー

「確氷さん、知ってるんですか？」

「ええ、叶ちゃんが好きで良く聞いていたんです」

「へえ、何か意外な趣味ですね。あの人、アニメとか好きでしたっけ？」

「さあ……心当たりはありませんけど」

ノリノリな旋律に合わせるように、霧島さんはアクセルを踏み込んだ。エンジンの唼りが大きくなる。

♪それは無邪気な顔で 夢を語つた

眩しすぎたあのテンダンス 目を閉じれば浮かぶ

どうしようもないほど 強い気持ち

まだ胸の中で感じられるなら

今、風となれ

「これも何かのアニソンなんですか？」

「分かりません。ですが、歌いゆうのが声優さんやつたはず。愛媛の人やなかったかな？ 愛媛と高知って、

近いようで遠いんですね。直結ルートが無いので、どう頑張っても3〜4時間かかるんですよ。……徳島県に入りましたよ、碓氷さん。もうすぐ大歩危駅です」

十讚線ほどではないものの、国道32号線は右へ左へと曲がりくねる。曲はサビに突入する。

♪The treasure in a dream 未来は誰も止められない

ゆずれないその気持ち 両手に集めて

いくつもの日々を乗り越え そこにある自分が

笑顔で居られるなら 間違いじゃない

The tears of girls turn into courage.

Its being very necessary to live.

伝説の明日が始まる

『……ラジオネーム・タバスコは飲み物さんからのリクエスト、水樹奈々『Chronicle of sky』をお届けしました。『リュウちゃんハルちゃんのまつすぐ行かないラジオ』ニュースと道路情報を挟みまして次のコーナー、『今週の脱構築』……』

こんな山奥で知っている曲に偶然出会うなんて、少し変な気分だ。霧降荘に行く道中でも、東京駅に行く道中でも、叶ちゃんの選曲でこの曲が流れていた。思い返してみれば、随分と懐かしい。

『ニュースをお伝えします。昨日、東京都日野市で視覚障害のある男性がバックしてきたトラックにはねられて怪我をしました。警察は業務上過失傷害の疑いでトラックの運転手、尾田遊馬容疑者を現行犯逮捕しました。尾田容疑者は容疑を認めているとのこと。警察の調べに対して尾田容疑者は『近所迷惑と苦情があり、バックする時に警報音を出す装置のスイッチを切っていた』と

話しており、警察は詳しい経緯を調べています……』  
ニュースなど気にも留めず、霧島さんは快調に車を走らせる。

『ではここで、道路情報をお伝えします。県道113号線は大杉付近で昨夜11時頃に発生した土砂崩れの影響で通行止めとなっていました。今日午前9時頃より片側交互通行が開始されました。今夜7時頃に復旧作業が完了する見込みです……』

「着きましたよ、ここが大歩危駅です」

目的地はごちんまりとした駅だった。目当ての列車が来るまではあと10分ちよつとある。

「ほいたら、終わったら大杉駅に迎えに行きますんで」

「ええ、お願いします」

私は助手席から降り、傘を開く。雨は強まったり弱まったりを繰り返すばかりで、止む気配は皆無だ。

大歩危駅は無人駅だった。かつては駅員がいたのだから、事務室には分厚いカーテンがかけられていて昔の名残を留めていた。券売機できっぷを買う。踏切を渡りホームに出ても、人っ子一人いなかった。

大きく歩いても危ない、小さく歩いても危ない、そんな

言われようを由来として大歩危小歩危と名付けられた。

徳島県の山中、高知県との県境付近にある難所だ。

スピーカーから列車の接近を知らせる自動放送が流れた。程なくして、目当ての列車がやってきた。特急『南風11号』。ここから高知まで小一時間くらいの道程だ。

列車が到着すると、軽油と煤煙の匂いが私の鼻をくすぐった。水色のドアが開くのを待って、傘をすぼめて中に入る。僅か十数秒の停車を済ませ、列車はエンジンを高らかに回し始めた。出発だ。

私は進行方向右側、窓際の空席を陣取った。車内は閑散としている。

\* \* \*

私と霧島さんとのこの事件を洗い直すことにしたのはいいものの、問題はどこから手を付けるかだった。常盤さんが濡れ衣を着せられたと仮定するならば、犯人は他にいないことになる。霧島さんは両親を疑うことはさすがにしていなみたいで、ゼミ生の男性陣こと潮路君、白鷺君、有明君、そして料理人の津軽さんについて先に調べることにした。

じゃあ、その中で一番調べるのに時間がかかりそうなのは誰か。そう考えると、容疑者の中で唯一アリバイがある津軽さんが該当する。移動範囲が大きいからだ。そのため、あまり遅くならないうちに彼女のアリバイを確かめることにした。

列車は遠慮会釈のかけらも無く右へ左へと車体を、そして乗客を振り回す。カーブに差し掛かる度に、床がカーブの内側に大きく傾くのが分かった。これがさっきの推理で霧島さんが語っていた「振り子式気動車」の威力だ。電話の中で礼士さんにもレクチャーしてもらい、大まかな効果は理解できた。何でもこの2000系とかいう電車、振り子機能を搭載した世界初の車両らしい。

長いトンネルを抜け、雨粒が流れ星のように窓ガラスを伝う。私がおぼろげに『南風』に乗った目的が果たされるのもそろそろのはずだ。

ぺんぺん草が生い茂ったホームを駆け抜ける。旅館の最寄り駅、豊永駅だ。私は窓の外に目を凝らし、車体の動きに神経を研ぎ澄ませる。

視界が開ける。ごんごんと、と車輪の音が大きくなった。列車は吉野川の支流にかかる橋を渡る。右に急方



ープを描いていたあの橋だ。

車体は私が座っている側、つまり右側に大きく傾いた。そのまま速度を緩めることなく、あっという間に橋を渡り終えて雑木林に突っ込む。その間、僅か数秒。でも、私が情報を得るには十分な時間だった。

霧島さんの考えたトリックには、どうやら妥当性がありそうだ。今の通過で、私はその結論に至った。

霧島さんの推理を頭の中でおさらいしてみる。常盤さんが島風教授に睡眠薬を盛り、眠らせる。常盤さんは眠って抵抗できなくなった彼女をベランダから下り『南風』の屋根に落とす。後は『南風』が橋の上で車体を右に傾け、島風教授を川に落とす。この検証がしたくて私は大歩危に出て『南風』に乗ることにしたのだ。

まず、『南風』は橋の上で車体を右側に傾けるのか。これは間違いない、右カーブに沿って右に車体を傾けた。

次に、その傾きは人を振り落とすくらいか。……正直、微妙なところだ。カーブを突っ切るのは僅か数秒、傾きは立っているとよろけるくらい。構造上は5度以上傾いているみたいだ。正直、これだけで人を振り落とせるかどうかは分からない。でも、振り落とすには有利な条件がもう一つある。雨だ。

昨夜から雨が降り続けている。当然、この『南風』の屋根もびしょ濡れだったはずだ。するとどうなるか。滑りやすくなる。私だって昨夜、床にまけた焼酎で足を滑らせた。同じことだ。

そう考えると、『南風』の屋根から振り落としたという説にも説得力があるように思える。

最後に屋根から川までの高さ。窓から橋の下を覗き込むと、結構な高さがあった。客室から見てこれなのだか

ら、屋根から落ちたらひとたまりも無いだろう。

つまり、私がわざわざ『南風』に乗った結果、霧島さんの推理を裏付けるデータが取れたことになる。

しかし、ここで列車が突如私を現実に戻した。がつくん、と前につんのめるような衝撃が走り、鋭い金属音の後に列車は立往生してしまった。集中力が途切れて初めて、私は自分の世界に埋没していたことに気が付いた。

何事だろうか？ 立往生したのは森の中、辺りには駅はおるか、民家の一つも見当たらない。

『お客様にご案内致します。異音の確認のため、列車は緊急停車しました。現在、乗務員が確認を行っておりますのでしばらくお待ち下さい』

異音の確認、ねえ。鉄道員は耳が良くないと務まらないのだろうか？

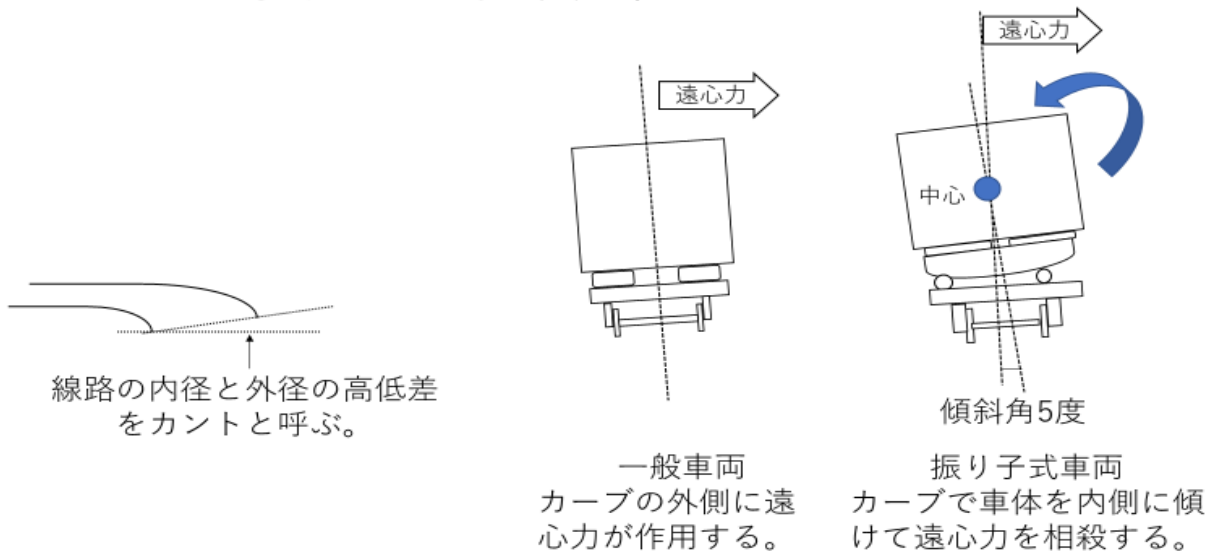
私はハツとした。

島風教授が『南風』の屋根に落とされたのなら、その時に何か音がしてもおかしくないのではないだろうか？ その音が確認されたのなら、今みたいに異音に気付いて急停車するのではないだろうか？

この気付きを言語化し、咀嚼している間に電車はまた走り出した。甲高いエンジンの音が車内に響き渡る。

『お客様にご案内致します。先程、異音の確認を行いました。異常は発見されませんでしたので運行を再開致します。次の土佐山田には2分程遅れて到着する予定です。お急ぎのところ、ご迷惑をおかけしますことをお詫び申し上げます』

## 振り子式気動車とカント





昨夜、何か異音があったかどうかを確認するにはどうしようか？ 私は少し考えて、車掌さんに聞いてみることにした。

列車はようやく四国山地を踏破し、高知平野に入った。土佐山田を過ぎると畑や民家が車窓に立ち現れては消えていく。車掌さんは程なくしてやってきた。

「あの、車掌さん」

「はい、どうかありませんか？」

色の黒い車掌さん呼び止める。筋肉質な礼士さんは少し違つて太り気味な大男で、ネームプレートには宮田と刻印されている。

「高知駅には何時くらいに到着予定ですか？」

いきなり本題に入るのもアレだったから、まずは当たり障りのない質問で間合いを取る。

「現在は遅れを取り戻しまして、高知には定刻の15時39分に到着予定です」

「そうですか。さっきみたいな異音の確認がよくあるんですか？」

車掌さんは目を瞬かせ、ずり落ちた眼鏡を戻した。

「いえ、ここしばらくありませんでした」

「あれ？ 昨夜、豊永の辺りであつたつて友人が言っていたんですけれど……」

口からでませを言い、かまをかける。車掌さんは首を捻るばかりだ。

「そのような事案があれば我々乗務員の方で共有されているはずですが。失礼ながら、何か勘違いをされているのではないかと……？」

つまり、異音の感知による急停車のようなトラブルは無かつたということだ。私は車掌さんにお礼を言い、考

え込む。

島風教授は小太りな体型だったから、それなりの体重があつたはずだ。屋根に落ちてきた時の音に気付かないなんてこと、あるだろうか？

もしかして、島風教授は、『南風』の屋根に落ちなかつた？

でも、それなら誰がどうやって彼女を川に……？

霧島さんの推理に対する疑念が頭をもたげると、『南風』は高知駅に滑り込んだ。

刃礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

どっちのバインダーから先に手を付けようか少し考えした後、僕は先に播磨社長の事故ファイルから目を通すことにした。

事故が起きたのは今から10年前の10月24日、この館が完成して間もない頃だ。少し古ぼけた色合いのカラー写真が載つていて、現場の惨状を今に伝えている。

現場は山鳩会長が亡くなつていた部屋だ。僕が案内された時には本棚がガチガチに壁に固定されていたが、この写真を見ると10年前は全く固定されていなかったみたいだ。

どつしりとした本棚が完全に横倒しになり、本が散乱している。その下の隙間から、僅かに薄くなった毛髪が生えた頭部が覗いている。播磨社長の最期の姿だ。

写真の横にある解説文に目を通す。死因は重い本棚が勢いよく倒れたことにより脳天が砕かれたことで、撲殺に近い。死体や死因に不審な点は無かつたようだ。

ページをめくると、警察関係者の手によって本棚や本

が撤去されている様子が写されていた。激しく血が飛び散っている。血濡れで少し分りにくいのが、山鳩会長が言っていたように本は多くが『エルム模型』の会社資料のようだった。何か書類を取り出そうとした拍子に本棚が倒れてしまったのだろうか？

そもそも、本棚が倒れるというのはどういう状況下だろうか？ 一番考えられるのは本棚の上の方にあるものを取るうとして、無理に本棚によじ登ろうちにバランスを崩すケースだ。部屋の中に脚立の類は見受けられないし、考えられそう。

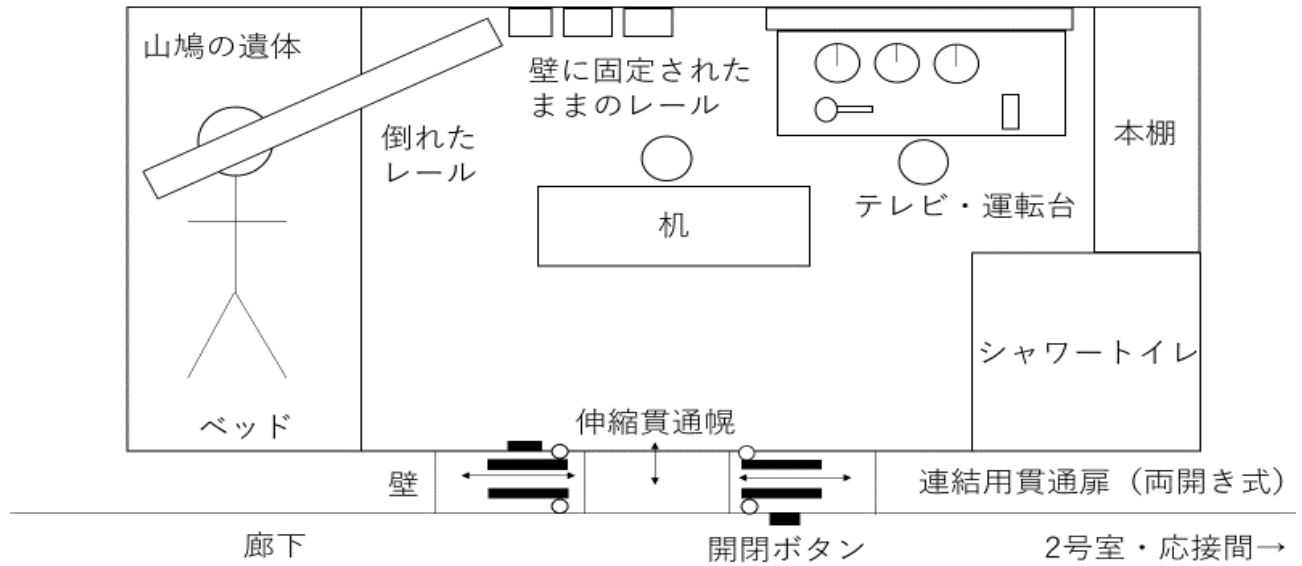
でも、本棚の上に何かあるのなら、別に脚立でなくてもいい。椅子を持ってくれば届くだろう。椅子ならあるし、脚立が無いことはそこまでおかしくない。

それ以前に、本棚の上に何かあつたのか？僕は倒れた本棚の周囲に散乱しているものに目を配つたが、特にこれといったものは無さそう。証言者の記述にも目を通したが、本棚の上に何かを置いていたという話は無さそう。

となると、本棚の中身を引っ張り出そうとして、誤つて倒してしまったのだろうか？でも、そんなにギチギチに物を詰め込むとも思えない。この館には大きな図書館もある。今でこそ図書館の本棚は満杯近いが、当時はそれでもなかつただろう。書籍ならそこに移せばいいはずだ。

残る可能性は、地震？でも、本棚が倒れるような大きな地震なんてあつたのだろうか？バインダーをさらにめくつて証言を読み漁つた結果、『気象庁の解析結果によると、事故発生時刻に秋田地方で有感地震は観測されていない』と明記されていた。つまり、地震は発生していない。

# 山鳩 死亡現場 (1号室)



→ 図⑥ (再掲)

本当に？

僕はその一文を凝視した。昨夜だって、地震があったように思えたけど、調べても何も無かった。その現象とよく似ている。

偶然なのか？

山鳩会長が殺害された事件は、10年前のこの事故とどこかで繋がっているのではないかと。どこかで、というのは人間関係というよりもトリックについてだ。

さらにページをめくると、事故当時にこの館にいた人間の証言がまとめられていた。播磨社長が死亡した日、この館には播磨社長を含め5人がいたようだ。播磨夫妻と山鳩夫妻、そして当時のお手伝いさん。昨日見た写真には4人が写っていたが、写真を撮った人が白根さんだったのだろう。それぞれの証言に目を通していく。

まずは山鳩会長。いや、当時は専務だったか。館の完成後に初めて来館し、酒盛りに興じたらしい。宴会に参加したのは山鳩専務の妻である鹿島さんや、播磨社長の妻である真理さんも含まれる。現在の彼女は旧姓に戻り妙高真理と名乗っている、矢野警部がそう補足したことを思い出す。

宴会は日付が変わる頃まで続き、山鳩専務は2号室で就寝。寝る直前に播磨社長に携帯で電話を済ませ、そのまま就寝したという。

携帯電話？ 不思議だ。山鳩専務と播磨社長の部屋は隣り合っている。なぜわざわざ携帯電話でやり取りをしたのだろうか？ とはいえ、そこまでおかしくないかもしれない。宴会を終えた後ということは、だいぶ酒が入っていたはずだ。いくら隣室とはいえ、わざわざ播磨社長の部屋に移動するのは億劫だったのかもしれない。

二人の通話時間は午前0時21分14秒から23分46秒にかけて、内容は明日のスケジュールの確認だったと山鳩専務は語っている。

そういえば、播磨社長の死亡推定時刻はいつ頃なのだろうか？ 目次から該当項目を探し当てる。午前0時から1時にかけての間で、死体に何か細工をされた痕跡は無かったという。……瑞穂さんの父親のように、死亡推定時刻をずらすトリックは用いらなかったのだろう。

電話の時間から推察して、播磨社長が死亡したのは0時23分46秒より後になる。場合によっては電話を終えた直後の可能性もある。電話中だったということは無いだろう。それなら山鳩専務が異変に気付くはずだ。遺体が身に着けていた遺留品の写真を見ると、時代を感じさせる銀色の携帯電話は本棚に押し潰され、壊れていた。形状からして閉じた状態で圧迫されて砕けたようだ。閉じているということは、本棚が倒れたのは電話中ではなかったということになる。

でも、山鳩専務は隣室だ。本棚が倒れる音に気付かなかったのだろうか？ 少し考えても結論は出なかった。この館はどれくらい防音がしっかりしているのかは分からないが、山鳩会長の部屋でレールがなぎ倒された音には隣室にいた僕、釜田さん、鳥海先生のいずれも気付かなかった。……でも、本棚の方が倒れる時にずっと大きな物音がしそうだ。どこまで比較参考になるのか分からない。

考えが空回りしそうになるのを必死に我慢しながら、僕は調書に目を走らせる。播磨社長の遺留品に目を通すと、一つ気になるものがあった。

「マスコンキー……？」

播磨社長の右手にはマスコンキーが握られていたらしく

い。写真の横にある説明書きに目を通すと、103系電車のマスコンキーのようだ。

「播磨社長が亡くなった部屋の運転台って、もしかして室内設備のページを開くと、やはり運転台についての言及もあった。103系電車の運転台で間違いないようだ。つまり、播磨社長が握っていたマスコンキーと播磨社長の部屋にあった運転台はセットになっているということだ。

「運転台を起動させようとした？ ……はは、まさか」あまりにも突拍子のない考えが浮かび、思わず自嘲めいた笑い声を上げた。運転台は列車の運転に使うもので、部屋の中に鎮座している運転台は動かす列車が存在しない以上、ただの置物に過ぎない。

でも、マスコンキーの使い道は運転台の起動くらいしかない。播磨社長は何を思っ、マスコンキーを握ったまま絶命したのだろうか？

そもそも、このマスコンキーはどこから持ってきたものなのか？ 疑問に思ったが、それはあっさり解決した。調査書の中に『マスコンキーは専用のケースに保管された上で本棚にしまわれていた』と明記されていた。警察はそこから『播磨氏は酔った状態で本棚からマスコンキーを取り出そうとし、その際に誤って本棚を転倒させた』と結論付けている。

この結論は一理あるように思える。マスコンキーを取り出した理由には触れていないが、そもそもコレクターは何の理由も無しに物を収集し、それを気分任せてたまに取り出しては眺めたり愛でたりする。事故当時、播磨社長のお眼鏡にかなったのがたまたまマスコンキーだった、というのも決しておかしい話ではない。

僕は一度ここで播磨社長の遺留品から頭を切り替え、館にいた人の証言の続きを読むことにした。でも、どの人もあまり大差ない証言に終始していた。みんな遅くとも0時半には自室に戻り、夜中のことは何も知らないという。……播磨社長も山鳩専務もそれぞれ夫婦で来館しているのに、部屋が別々なのが少し気になる。

お手伝いとして来館していた白根さんも、山鳩専務に言われて早めに部屋に引き上げたそう。宴会の片付けは翌朝にやるつもりだったが、播磨社長が遺体で発見されるところではなくなったという。彼女が起床しない播磨社長を起こしに行ったら惨状に遭遇したということらしく、つまり第一発見者はこの女性だ。

白根さんの証言を辿っていくと、もう一つ気になる点があった。朝の日課である館内清掃で図書室を掃除している時、本が何冊か床に落ちていたという。落ちていたのは図書室の中でも一番奥まった本棚に置いてあった本で、それこそ綾辻行人の『館シリーズ』や、鮎川哲也の著作が何冊か落下していたという。

ここで一つ疑問が解決した。綾辻行人の本はどうやら山鳩会長の趣味ではなく、播磨社長の趣味だったようだ。播磨社長が生前にこの館に置いたものと考えるのが妥当だろう。

事件そのものや、その前後の行動についての証言はこれくらいだった。人間関係についても証言が取られているが、可もなく不可もなしといった感じだ。播磨社長の妻である真理さんが後妻であることくらいしか目を引く要素は無い。

それにしても、この真理さんって名前、どこかで見たような…。

僕は少し考えこんだが、思い出せなかった。考えれば

考えるほど思い違いのような気がするほどあやふやなものだ。一旦ここでバインダーを閉じ、もう一つの事件…三辺製作所の放火事件についてまとめられたバインダーを開くことにした。

\*碓氷瑞穂 —— 高知市はりまや橋・簡易宿泊所「元親」

高知市内も小雨が降り続いていた。私は先日のように土電とでんに乗り、はりまや橋を目指す。高知駅から三つ目の電停まで、やかましいモーターの音にごとごとと揺られる。

目当ての簡易宿泊所へは電停から歩いて5分ちよつとで到着した。繁華街から少し離れ、風俗店のようないかがわしい店の隣に建っている。薄汚れたモルタル造りの建物に私は入っていった。

フロント…と呼ぶには少しみすぼらしい木造りのカウンターには、中年の女将がいた。少し胡乱な視線を私に投げ、気怠そうに「いらっしやいませ」と言った。

「すみません。私、昨夜こちらに宿泊した津軽さんの友人なのですが、彼女が部屋に忘れ物をしていましたみたく、ついでに取りに寄ってほしいと頼まれたんです」

女将の鼻を牛耳る吹き出物から目を逸らしつつ、口から出まかせを言う。

「忘れ物？ そんなん、部屋に無かったと思えますけんどねえ」

この口ぶりから察するに、津軽さんが昨夜ここに泊まったのは少なくとも事実のようだ。

「忘れ物って何ながですか？」

私のことが胡散臭く思えたのか、敬語も投げ捨てて女

将は尋ねる。

「ホームセンターで買ったものみたいですよ」

「ええ？ 確かにあの人は荷物を持ちよったけれど、そんなに残って無かったと思うで」

荷物を持っていった、ということは彼女がホームセンターで資材を買ったのは本当なのだろう。

「じゃあ、部屋を見せて貰えますか？」

女将は渋ったが、粘った私に根負けして部屋に通してくれた。一階の奥まった角部屋だが、黄色くなった畳が六畳間を覆っているだけで、後は押し入れと小さいブラウン管テレビしか無い殺風景な部屋だ。

私は押し入れの中やらコンセント回りやらを探すふりしながら、部屋の内外に視線を走らせる。大きめの窓の外に駐車場が見えた。

「津軽さんって昨夜はどこに出かけましたか？」

私は何気ないふうを装って女将に問う。

「いや、全然。フロントにずっとおったけれど、彼女は早朝のチェックアウトまで一度も出入りせんかったね」  
女将は特に疑問を感じなかったのか、鼻の大きな吹き出物をいじりながら答えてくれた。

「この部屋には無さそうですね、ごめんなさい。あの、津軽さんって車はあの駐車場に停めたんですか？」

「さあ、よう知らん。監視カメラも無いからね。探し物が無いがやったら出てや」

女将はうんざりような口ぶりで私を急かした。くたびれた鉄製の引き戸を開け、私は雨の中に戻った。風俗の建物の脇を抜けて駐車場に向かう。

何の変哲もない、数台しか駐車スペースが無い小さな駐車場だった。立地的にコインパーキングにでもすれば儲かりそうなものだけど、この簡易宿泊所の専用駐車場

のようだ。ちょうど建物の裏手に位置している。津軽さんが泊まった部屋もよく見える。

津軽さんが夜間に宿泊所を出入りしていないのなら、彼女のアリバイは完璧だ。少なくとも、女将の証言では彼女はどこにも行っていない。どうやらここは空振りみたいだ。

腐らず頑張るしかない。彼女が犯人かどうかはまだ分からないし、無実ならそれはそれで構わない。霧島さんも何か情報を掴んでいるかもしれない。

私は次の目的地に向かうべく、大通りに出てタクシーを拾った。

「高知市中央卸売市場までお願いします」

「ええけど、あそこはもう閉まっちゃうぜ？」

禿頭のドライバーは少し怪訝な反応を示した。

「ええ、構いません」

変な顔をしながらドライバーはタクシーを車道に戻した。高知市街を東西南北に貫く路面電車の平面交差を横目に、雨の国道を飛ばした。

\*霧島翼 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

碓氷さんを駅に送り届けた後、僕の方でも聞き込みを開始した。最初は誰からやろうか考えたけど、意外にも向こうから僕の所にやってきた。

「あの、突然すみません」

食堂の一角で朝食の残りだという和定食のお昼を過している、男子大学生トリオが声をかけてきた。

「どうしました？」

「その……もし宜しければお話を伺いたいんですが、国土交通省の方だと伺いまして」

勉強熱心な学生だ。少し感心しながら僕は快諾した。事件が頭から離れなくて気を紛らわそうとしているのかもしれないが、それでも学生相手に邪険にする理由は無い。どうせ僕もそのうち話を聞こうと思っていた。

学生トリオはまだお昼を済ませていなかった。めいめに定食を運んで席につくのを待って、僕は自己紹介をした。

「改めまして、運輸安全委員会の霧島です。正確には国土交通省とは無関係の機関ですけど、国交省との繋がりも大きいのであまり違いは無いかな」

「よろしくお願いします。俺は潮路大介、島風ゼミでゼミ長を務めています」

毛先を茶色く染めた利発そうな学生だ。イケメンの部類に入るだろう。

「あー、白鷺快二です。よろしくお願いします」

柑橘類の皮のようにぼこぼこした頬をした学生で、きつちりした七三分けの髪とぱりつとしたワイシャツはサラリーマンと見違える。僕と同じくらいの体つきで、かなり小柄だ。

「有明浩成つす。どうもつす」

縮れ毛に三段腹をした少し暑苦しい学生だ。この三人、何かに似ていると思ったら『ズッコケ三人組』だ。

最初は少しおずおずと、当たり障りのない質問が繰り出された。業務内容とか大変だったエピソードとか、その辺だ。

「大変なエピソードねえ……JR北海道で起きた一連の不祥事は知っちゃうでね？ 僕も何回も渡道させられて、あの時は大変やったね。叩けども叩けども埃が出てくる。全部をJRのせいにするのはあまりにも酷で、責任は国や国交省にも大きいけどね。地元マスコミはろくに理

を問わないで、全部をJRのせいにするのはあまりにも酷で、責任は国や国交省にも大きいけどね。地元マスコミはろくに理

解していないみたいやけど」

三人は口を挟まずふんふんと頷いて先を促す。

「後は去年起きた秋田新幹線での脱線事故やね。ちょうど今頃やったかな、列車が雪に乗り上げて線路から外れたんやけど、あれは寒くて大変やった。荒れた吹雪の中、延々と現場検証するんやから」

今思い返せば、あれが剣さんとの出会いやった。あの事故の聞き取りで剣さんに出会い、意気投合し、今や事件を解いてもらう奇妙な交友関係が続いている。

「霧島さんって、去年の新幹線が乗っ取られた事件にも振り回されたんですか？」

「うーん……秘密」

あの事件はテロ性も帯びているため、やすやすと口外はできない。少し苦笑いしながらはぐらかした。

「北海道の件については、島風教授にも随分お世話になったね。それで昨日一緒に飲んだがよ。久しぶりに会えて驚いたなあ。何か、焼酎を飲んですぐに眠くなつて部屋に戻ったけど、普段からあんな感じやったっけ？」

この辺で軌道修正して、話を昨夜のアリバイに移すことにした。

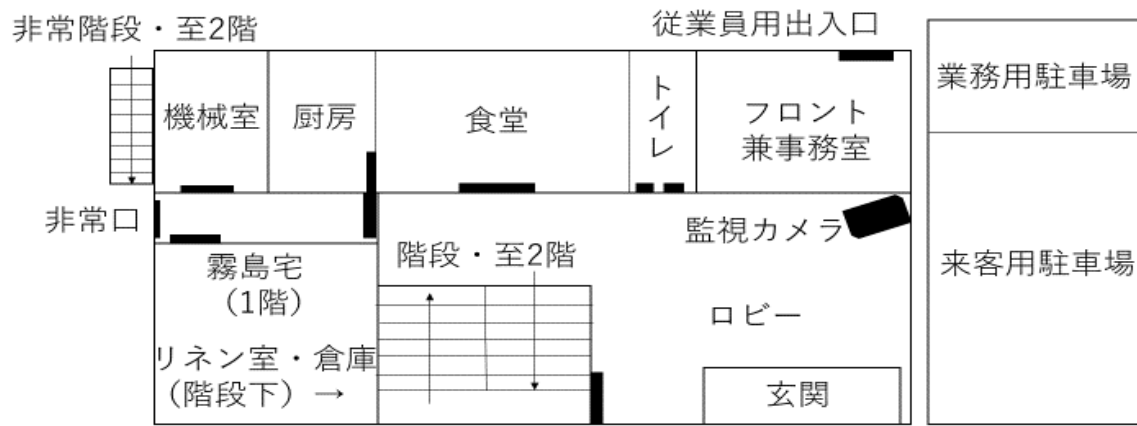
「いや、島風教授は何度かゼミの飲み会でご馳走してもらいましたけど、お酒に弱かったような記憶はありません。むしろ強かったと思います」

「あー、やつばそうだよな？ 焼酎を普段から飲んでいたらけども、たった一杯で眠くなる様子なんて見たことない」

## 旅館『吉野川』1階

← 豊永駅 JR土讃線 豊永橋梁 →

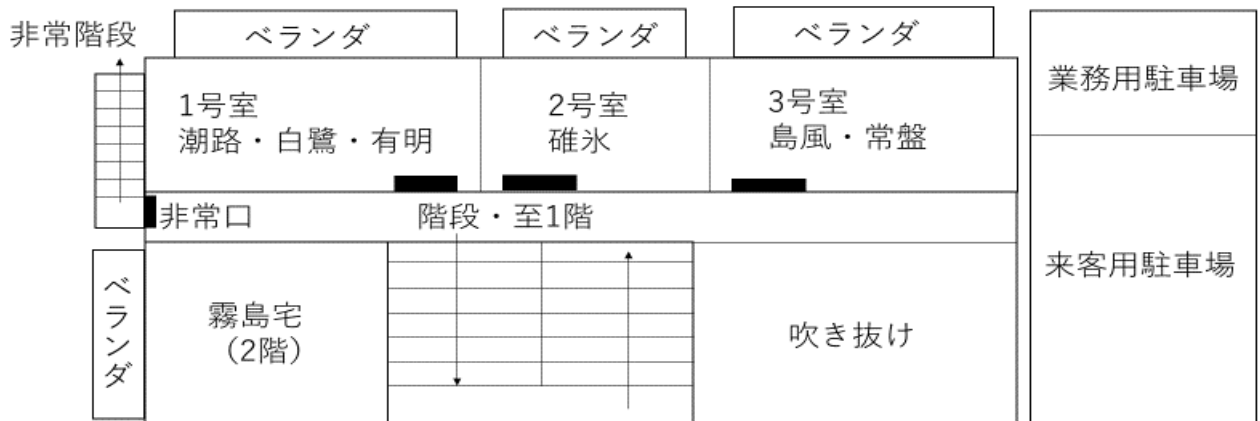
→ 図⑦ (再掲)



国道32号線 豊永橋梁 →

## 旅館『吉野川』2階

→ 図⑧ (再掲)



「そうっすね……むしろアルコールが入るとエンジンがかかって、話が止まらなくなるタイプだったように思います」

三人揃って否定するところによると、どうも島風教授は決してアルコールに弱かったわけではないようだ。そうなると思います。昨夜の反応は不可解だ。

「みんなはお酒に強い方なが？」

三人の反応はまちまちだった。

「あー、俺と常盤さんは割とイケた口ですね。潮路は下戸で、ビールくらいしか飲みませんけれども」

白鷺君がボコボコした頬を掻きながら答えてくれた。

常盤さんもアルコールに耐性があったのか、でも彼女も昨夜は眠気を訴えていたと思う。

「それにしても、常盤さん……まさか島風教授を殺すためにこの宿を選んだなんて……」

「おい、悪い冗談はよせよ。彼女がそんなことできるわけないだろ」

有明君を潮路ゼミ長が諫める。

「常盤さんが島風教授に何か恨みを持っていたとか、そんな感じのことに心当たりはあったりする？」

いつの間にか質問する側とされる側が完全に逆転しているが、ゼミ生たちはそれに気付いていないみたいだ。

「あー……いやあ、特にそんなことは無かったと思えます。ただ、普段から彼女は先生に遠慮しているような節はありません」

「成績が振るわなかったからじゃないかな？」

「成績の良し悪しで先生に対する態度を変えられる甲斐性があれば、成績を上げることも簡単にできるだろ」

僕は三人の話に割って入った。

「成績が悪かったって、どのくらい？」

「ちゃんと聞いたことはありませんけど、ちゃんと授業にも出ているのに落単が多いらしくて……よく安政に入れたな、っていうのが正直なところっす。ゼミ内での議論でもあまりぱっとしませんし。ただ、島風先生はあまり意に介していなかったみたいです」

「おい、有明」

有明君を再度潮路ゼミ長が諫める。ただ、潮路君も白鷺君も彼の発言を積極的に否定しないところを踏まえると、ある程度事実なのだろう。安政大は東京の私大だが、最近はかなり偏差値を上げていると聞いたことがある。「そういや昨日の夕食の席でも、彼女が合宿の行先を提案したことに驚いちよったね」

「ええ、俺たちも島風教授も行先がここであることに異論は無かったですけど、……失礼ながら、かなり田舎の地である豊永がいきなり彼女の口からでたのは驚きでした」

まあ、そうだろうな。僕もなぜわざわざこんな辺境の宿に合宿に来たのかよく分からない。

「様々な案が出たんすけど、彼女がどうしてもここがいいって譲らなくて……押し切られるかたちでここに決まったんすよね」

有明君が三段腹を揺すりながら座り直す。

「島風教授ってどんな人やった？ クセが強かったり、人によって好みが分かれるような人やった？」

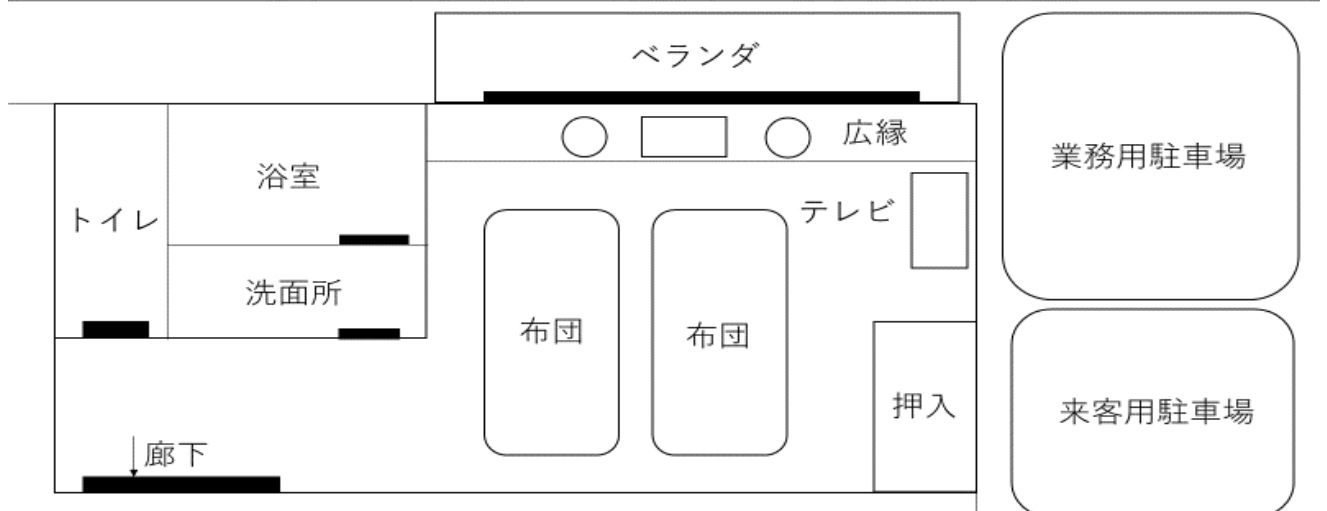
僕なりにオブラートに包んだ言い方をしたが、要は嫌われ者だったかどうかだ。二人はめいめいに首を傾げた。

「いや……特にそんな話は聞きませぬね」

「あ、でも先輩が言ってたな、数年前に当時在籍していた他の教員の論文データ捏造を明るみにして揉めたって」

## 島風・常盤の部屋 (1号室)

←豊永駅・岡山方面 JR土讃線 豊永橋梁・高知方面→



「え、何やって?」

僕は思わず白鷺君に聞き返した。

「あー、俺が入学する前の話なので、2009年か2010年の頃の話なんですが……ええと、当時の交通経済学の先生が島風先生の他にもう一人いて、その人が論文のデータを捏造したのがばれて安政を辞めたんだっただけ追い出されたんだっただけ、とにかくそんなことがあったらしいです。名前までは憶えていません。何せ、俺たちが入る前の話なので」

「学内の一部界限では有名な話っすね。島風先生はその一件で学内の教授陣からも信頼が厚いとか。再婚した時も結構盛大に祝われたみたいで」

あの人、バツイチだったのか。それは知らなかった。

有明君が白鷺君の説明に補足する最中に、僕はある人物を思い出した。

「もしかしてその辞めた先生って、島海って名前やなかった?」

三人は少しきよとんとした表情を浮かべ、食堂を雨の音が支配する。

「そう……だったような違ったような」

少しの沈黙の後、煮え切らない答えが返ってきた。無理もない、入学前の話だから分からなくても当然だろう。ただ、島海先生と島風教授の仲があまり良くなさそうだったのは、数年前の国交省の会議で見かけた時に印象に残っている。どの道、ここでの事件には関係無いことだ。

僕は三人のアリバイを確認することにした。

「大体ずっと一緒でした。明日の予定……全部狂ってしまいました……を確認したり、昨日の調査内容をレポートにまとめたり。後はテレビで映画を観たりしていました」

「なるほどね。レポートか、良かったら添削でもしようか?」

添削というのは嘘の方便で、本当は編集履歴や時間を見てみたい。でも学生トリオはふくれっ面をして首を横に振った。

「警察が持つて行ってしまったんすよ。解析するとかで」

「ひっくり返して調べたところで、何も出てこないのになあ」

警察も僕と同じことを考えたのだろう。有明君と潮路君をなだめながら、僕は後でせとつちに聞く算段をつけようと目論んでいた。

「一応、証拠になるかどうかは微妙ですが……俺はエヴァのリアアツイットをしていたので、それを見れば多少は証拠になるかもしれません。それも警察に解析されているみたいですけど」

白鷺君の申し出はありがたかったが、警察が解析しているのら後でせとつちに聞いた方が早い。さすがにツイッターの中身を見ず知らずの人に見せるのは抵抗が大きいだろうし、遠慮しておいた。

「エヴァねえ、あんまりよく知らんがやけど、どんな話なが?」

ずつと事件のことを聞いても息が詰まる。僕が話題を変えようと白鷺君と有明君が熱心に教えてくれた。

「こいつら、昨夜の放送も楽しみにしてたんですよ。俺もついつい一緒に見入ってしまいました」

潮路ゼミ長が少し苦笑いしたが、そこから話を戻してきた。

「それにしても、常盤さんが言ってた『脅された』ってのは何だったんでしょう? 霧島さん、何か分かります?」

「そういえば、警察に連行される時にそう言ってたな」僕も引つかかっていたが、それについては何のこともまるで見当がつかない。学生トリオも同様のようだ。これもせとつちに聞くしかなさそうだ。

「そういや、霧島さんってこの宿のコックさんと知り合いだったりしますか?」

潮路君が茶色い毛先を揺らしながら聞いた。

「いや、最近雇った人らしくてね。僕もよく知らんがよ。どうかしたか?」

「いや……昨日、島風先生が焼酎を取り落としたじゃないですか。その時、運んできた人を見てやけに驚いていたような気がして」

そういえば確氷さんも似たようなことを言っていたような気がする。

「常盤さんもその時に驚きよった?」

僕は三人に逆質問した。三人は考えこみ、めいめいに首を横に振った。

「分かりません。こぼれた焼酎の方に気を取られて、彼女のことにはあまり見ていなかったの……」

こぼれた焼酎か。標準語だとは分かっているけど、「まける」を使わないことにどうしても違和感を覚えてしま

う。これについては後で津軽さん本人に聞いてみよう。お礼もそこに、僕は聞き込みを終えた。お盆を厨房に返却し、次は誰に聞き込みを行おうか考えた。

\* 刃札士 —— 秋田県横手市・「電車館」

放火事件のバインダーを開くと、凄惨な現場写真が目

に飛び込んできた。真っ黒焦げになった建物。中は燃え尽きた梁や柱から



水滴がぼたぼたと垂れ、心なしかまだ燻っているように見える。

写真は何枚もあったが、ほとんどが発火元となった事務室と三辺取締役が亡くなった寝室のものであった。見ていてかなり痛々しい気持ちになる。

僕は写真から目を逸らしつつ、説明書きを読む。敷島取締役の話では、火元は事務室のストーブだったはずだ。でも、そのストーブの灯油は空であり、そこから放火と断定した、という顛末だったと語っていた。

説明書きの内容もほぼその通りだった。ただ、放火と判定された理由は、ストーブの失火にしては火の回りが速かったと焼け跡の状態から考えられることも指摘されていた。ストーブの失火と、誰かが灯油を撒いて火を放ったのでは延焼速度も桁違いだろう。焼け跡に違いが出てもおかしくない。

じゃあ、放火だとすれば誰が？ 警察の調査によると、外部犯の可能性が高いとされている。熱に耐えきれずぐにやりとねじ曲がった窓枠の残骸の写真があり、その横に説明書きがあった。

「窓ガラスの破片が部屋の内部にあった……そうか」  
高熱により溶けてしまっていたものの、部屋の中からガラスの成分が検出されたという。つまり、犯人は外から窓ガラスを割って室内に侵入し、灯油を撒いて放火した……警察はそう考えているみたいだ。残念ながら窓そのものには割られた痕跡は確認できなかったという。窓枠から何から高熱で変形し、とても原型をとどめていなかったのだ。

外部犯だとすれば怪しいのは誰か。警察は被害者の三辺治作氏の交友関係を洗い、意外な人物との接点を暴き出した。三辺取締役はこの放火事件の数日前に『電車館』

で発生した事故により死亡した播磨社長と懇意にしていたらしく、双方の事象に関与する共通の人間として山鳩会長が捜査線上に浮かんだそうだ。

出火は10月6日の午後9時半くらい。現場は仁賀保で、ここから行って戻るには車でどんなに飛ばしても軽く3〜4時間はかかるだろう。

僕は先を急ぐようにページをめくった。ずっと気になっていたことがそこには書かれていた。

「アリバイ……」

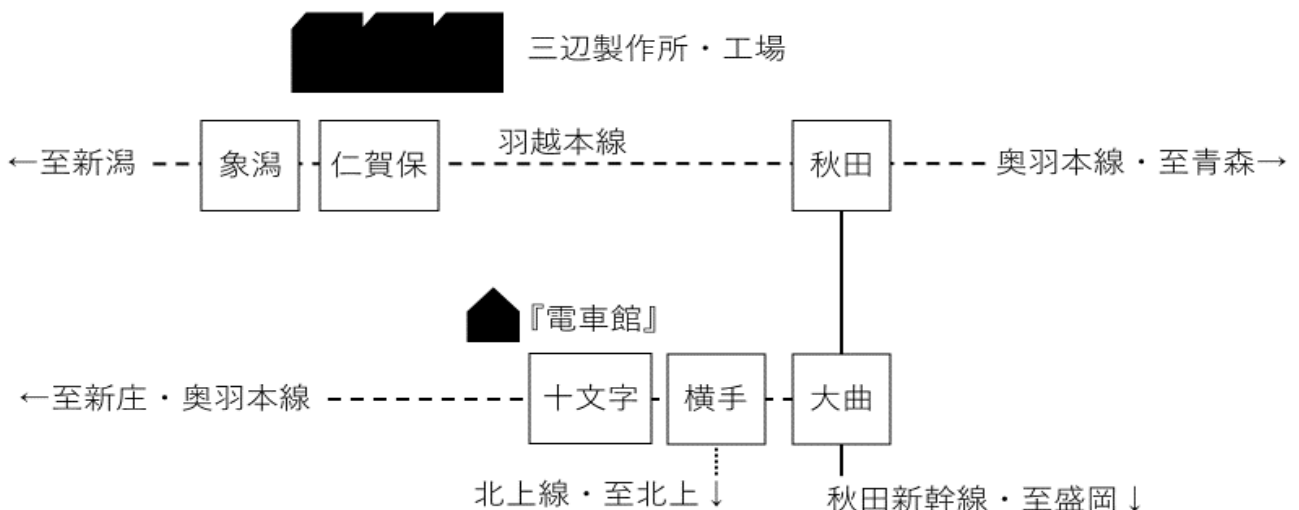
山鳩会長にはアリバイがあった。

\* \* \*

2004年10月7日、日本鉄道模型サミットが高知県高知市の共済会館で開催された。山鳩会長は鹿島さんと共にそれに出席するべく、名古屋に前泊していたという。名古屋のビジネスホテル『サクラパレス名古屋』に夫婦揃ってチェックインしたのは日付が変わる前、とても秋田に引き返して放火をする暇は無い。二人は翌日、名古屋から新幹線で岡山に出て、そこから『南風3号』で高知に向かい、駅から会館に直行してそのままセレモニーに参加したという。もともと、三辺氏の報を受けて会を急遽早抜けし、その日の晩には夫婦で秋田に戻ったそうだ。

セレモニーで撮ったと思われる写真も掲載されていた。僕が部屋で見せて貰ったリニア新幹線の模型を抱えた二人は、今と比較すると二人とも若くて姿形がだいぶ異なるが、間違いなく本人だった。

## 路線図



警察もこのアリバイを精査したものの、最終的には山鳩会長やその周囲の人物を容疑者から外している。アリバイを崩せなかったこと、そもそも会長たちに確たる動機が存在しなかったことが要因に挙げられている。ちなみに、播磨社長が死亡した日に『電車館』にいた人物でアリバイが無かったのはお手伝いの白根さんだけだったようだ。妙高さんは夫の葬儀を終え、東京の実家に戻っていたという。

動機が無い、と書かれているがこれは山鳩会長だけにとどまらなかった。放火されて殺されるほどの恨みを買うような行いを生前の三辺取締役はしていなかったという。だが、警察には山鳩会長を疑うもう一つの根拠があった。三辺氏の生活スケジュールを知っていた可能性がある、というものだ。

報告書によると、三辺氏は数日前に死亡した播磨社長の葬儀に参列した際に山鳩会長と話し込んでいたという。これは葬儀に出席した人が多数証言したとされている。だとすれば、その時に三辺氏の普段の行動を把握することが可能なのではないかと警察は考えたようだ。

三辺取締役は晩酌が好きな人だったが、酒にあまり強くなく、毎晩9時頃には床に就いていたと家族は証言している。それを把握していたのなら、放火推定時刻が9時半というのは絶妙のタイミングだ。

報告書を読み進めるうちに、僕は少し精神的にしんどくなってきた。焼き殺される苦しみ、残された家族の苦しみを避けて読み進めることはできなかった。一度バインダーを閉じ、天井を見上げる。583系食堂車に特有の高い天井を、四隅が少しくすんだカバーの内側から蛍光灯が照らしている。

とりあえず、必要な物を洗い出すことにした。まずは

播磨社長が死に際に握っていたマスコンキー。これは鹿島さんに頼んで見せて貰おう。次に、2004年10月の時刻表。山鳩会長のアリバイを実際に確認してみたい。図書室にあるだろう。さらに、播磨社長の妻だった妙高さんと当時のお手伝いの白根さんについての情報。これは矢野警部が犬塚刑事に聞いてみよう。

一度立ち上がって、大きく伸びをする。20代も後半戦に入り、少しずつ体が硬くなってきている。これが老いなのだとしたら、一人で老いるのは少し怖い。

座り直して再度バインダーに食らいつく。生前の三辺取締役とその家族が写った写真があった。じつとりとした目が特徴的な、雪焼けで色黒になった角刈りの男性だ。家族は妻と娘が一人、娘は父親似なのだろう、目つきと肌の色がよく似ている。名前は妻が美寿子、娘が洋子。

その名前を見た時、僕は何か引つかかった。何か……いや、誰か？ 喉の奥に小骨が引つかかったかのような、僅かな違和感が脳髓を覆う。

しばらく考えても、違和感の正体は分からなかった。警察はこの家族も疑ったようだが、そもそも通報したのがこの家族だったということや、わざわざ自分の身を危険に晒して放火現場に留まるとは考えにくいとして、最終的に容疑者から外している。確かに容疑者として扱うには行動が不合理だ。夫を殺すなら、放火よりもっと穏便な方法がある。

僕はそこで、ある重大な問題に気が付いた。なぜ三辺氏の殺害方法は放火だったのだろうか？

外部から侵入して三辺氏を殺害するのなら、放火などという派手でリスキーな手段を取る必要はない。侵入して殺すだけなら、刺殺や絞殺などやり方はたくさんある。

自分も焼け死ぬかもしれない手段をわざわざ取るのは非合理だ。

じゃあ、何のために放火という手段を選んだのか？僕は考えた。自分が放火するとしたら、何のために？そう考えると、一つの可能性が見えてきた。犯人が消そうとした対象は三辺氏というよりも、火元となった事務室にあったものではないのか？

迂闊だった。外部から侵入して三辺氏を殺害するのなら、そもそも三辺氏の寝室に侵入すればいい。なぜ事務室に侵入したのか？事務室の中に犯人にとって都合が悪く、悪いものが存在したのだとしたら？放火したのは、それを事務室から探し出して処分する手間や時間を惜しんだためだったら？

じゃあ、犯人にとって都合の悪いものとは何か？……

ここで行き止まりだ。資料をめくってもそれらしき記述は無い。これは後で敷島取締役に聞いてみるでもいいかもしれない。それが駄目なら、三辺取締役の遺族に聞いてみるしかないかもしれない。それこそ、妻や娘に。

僕はバインダーを閉じた。まずはこれを犬塚刑事に返して、当時の人々が今はどうなっているのか聞いてみることにしよう。

食堂車を出て、犬塚刑事を探しに行こうとしたら応接室の方から誰かの声が聞こえた。向かっていると、声の主は応接室よりもさらに向こう側、玄関で犬塚刑事と押し問答をしていた。

「だから、困るんですよ。こっちは山鳩さんに頼まれて汚水回収に伺ったんですから、こうやってストップされちゃあ」

「そう言われなくても、現在は我々警察が捜査を行っておりまして、むやみやたらと敷地内に立ち入られるのはそれこそ困るんですよ」

汚水回収？ 厚手のつなぎを着た中年の男の後ろには、バキュームカーが止まっている。昨日ここに来る時にもすれ違ったけれど、この館に下水回収に来たみたいだ。

あれ？ でも、この館って普通に上下水道が付いているはずだ。下水回収は不要な建物だとばかり思っていたけれど、そうではないのか？

考えているうちに、業者を追い返した大塚刑事が僕に気付いた。

「あ、剣さん。矢野警部が探していましたよ」

僕はそのまま出っ歯の刑事に連れられ、矢野警部がいるという事件現場に向かった。

\*確氷瑞穂 —— 高知市弘化台・高知市中央卸売市場

はりまや橋から車で15分くらいで目的地に着いた。料金を支払い、また雨の中を歩く。競りの時間はとつくと終わっており、敷地内は閑散としていた。コンクリ造りの大きな建物をぐるりと回ってみるが、観光客向けの食堂も軒並みシャッターを下ろしていた。時間が過ぎすぎたのだろう。

ただ、はりまや橋からの所要時間は分かった。今は15分くらいかかったけど、交通量の少ない夜間ならもう少し早いかもしれない。逆に、それくらいしか収穫が無かったと言っべきかもしれない。

津軽さんが本当にここに来たのかを確かめようと来たけれど、それについては完全に空振りに終わった。少しがっかりしながら私は通りすがりのタクシーを拾い、高

知駅に向かった。

\* \* \*

高知駅に戻ったのは17時過ぎで、あと10分ちよつとで特急が出る時間だった。駅員さんに聞いたところ大杉にも停まるという。きつぷを買って一番線に向かった。せわしないとんぼ返りだ。

高架ホームに出る。てつきり普通の電車が止まっていると思つたら、とても普通の電車ではなかった。何というか、その……なんぞ？

「……アンパンマン？」

私を待っていたのは、緑色の車体の至る所にアンパンマンのキャラクターが描かれた『南風』だった。後で知つたのだが、アンパンマンの生みの親であるやなせたかし氏は高知県の出身だという。昨年没したものの、作品と共に非常に愛された方だったそうだ。

アンパンマンは私も幼い頃にテレビで観ていた記憶がある。少し懐かしい気持ちになりながら、スマホのカメラを起動させた。後で礼士さんに送ってあげよう。

突如、駅にメロディが響いた。発車までまだ時間があるはずなのに慌てたけど、列車の到着メロディだった。なんと『アンパンマンのマーチ』だ。

『一番のりばに特急』『しまんと6号』高松行きが参ります。この列車は特急『南風24号』岡山行きとの連結作業を行います……』

連結？ ……私は特に興味はないけど、礼士さんなら食いつきそうだ。あの人も事件に巻き込まれてしんどいかもしれないし、気晴らしに写真でも撮って送ってあげよう。私はそう思つて列車の先頭に向かった。既に作業員を乗せた電車が接近しており、ゆっくりと連結した。勝手に分からない私にはまともな写真を撮ることも困難

だったけど、まあマニアなら喜ぶだろう。

発車まで2分くらいになったけど、飲み物が欲しくなつて売店に向かった。すると、そこである物に目が留まった。時刻表だ。

思えば、礼士さんと一緒に様々な事件に巻き込まれてきた。トワイライトエクスプレスの事件、新幹線が乗っ取られた事件、居酒屋で解き明かした事件もいくつかあった。偶然だろうけど、どの事件を解く時も礼士さんは時刻表から答えを導き出した。

……まさか、今回も？ いやいや、まさか。

発車ベルが鳴り始めた。私は逡巡する間も無く、ペットボトルの紅茶と時刻表を手に取り、おばちゃんに千円札を二枚手渡した。お釣りをひっ掴んで『南風』に飛び乗った。ドアが閉まり、動き出したのは10秒後だった。

私は適当に自由席の一角を陣取る。車内にもアンパンマンのキャラクターが壁や天井に描かれていた。車内の自動放送までアンパンマンがやっている。戸田恵子の音声聞き流しながら、私はスマホをつついた。まずは霧島さんに迎えを頼もう。

## 第八章 血筋

\*霧島翼 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

学生トリオへの聞き込みを終え、僕は次に津軽さん話を聞くことにした。でも、どこにいるのだろうか。あちこち捜し歩いた結果、彼女は階段下の倉庫にいた。「昨日買ってきた資材を片付けているんです」

「手伝いますよ。暇ですし」

「あら、ありがとうございます」

買ってきたのは白いペンキに太い釘、大小の木材がいくつか。トータルでは大き目のレジ袋一枚に収まりそうな分量だ。碓氷さんが泊まっている2号室のベランダを修理するための物だったはずだ。

「それにしても、大変なことになりましたね。お客様が殺害されるなんて」

話の切り出し方に迷ったが、話し始めたなら意外なくらいすんなりとペースを掌握できた。

「ええ。でも、犯人が捕まって良かったですね。殺人犯がうろついていたら夜も眠れません」

「どうやら津軽さんは常盤さんが犯人だと信じて疑っていないようだ。」

「そういや、昨夜は津軽さんに怪我はありませんでしたか？」

「怪我？ ……あの、何の話でしょう？」

「ほら、昨夜焼酎をまいた時に陶器を割ったでしょう？ その時に怪我せんかったのかな、って思っています」

碓氷さんには怪我こそ無かったけど、彼女には災難だった。

「ああ、あれですか。大丈夫でしたよ、お騒がせしました。掃除も処分も、女将さんに頼んでやってもらいましたから」

「ホームセンターへ買い出しに行くとなれば、早めにごを出ないといけませんしね。すみませんね、ウチの母は人使いが荒くて」

津軽さんは薄暗い倉庫の照明の下、愛想笑いを浮かべた。資材の片付けは済み、そのまま倉庫の整理をするみたいだ。

「いえいえ、私は今の職場が気に入っているの」

「それはありがたい話です。しかし、どうしてまたこんな辺鄙な宿で働くことにしたんですか？」

話の流れが当初の思惑とは少しずれてきたけど、後で軌道修正すればいい。

「暖かい場所で働くのが憧れだったんです。実家は北国で寒かったの。そういう霧島さんはなぜ官僚に？」

「官僚とは少し違うのですが、まあ似たようなものですかね。成り行きです」

そろそろ島風教授との関係について問いたさそう。

「そういえば、昨日の夕食で島風教授と相席した時に、彼女はあなたを見てえらく驚いていたんですよ。知り合いないんですか？」

津軽さんはリネンを棚にしまう手を止め、少し考えこんだ。

「そんなに驚いていましたか？ 私は島風様とは初対面でしたが」

「そうですね…：知り合いに似ていたのかもしれないね。それこそ津軽さんは北国の出身らしいですが、その時代に知り合ったりしていませんか？ 忘れているだけで」

彼女はじつとりした目を僕の方に向けた。少し深入りしすぎたかな、と思ったが、どうやら元々そんな形目をしているだけのようだ。

「さあ…：もしかしたら親が知り合いだったのかもしれない。私は色々あって親を早くに亡くしたので、今となっては分かりませんが」

考えてくれはしたものの、確たる結論は出なかった。

「津軽さん、ご家族は？」

「いえ、今は独身です」

話を途切れさせまいと家族の話をつらしたが、呆気なく会話が途切れてしまった。離婚の話をも根掘り葉掘り聞くのもアレだ。

「この資材、どこで買ったんですか？」

「高知駅前のホームセンターで昨日買ったんですけど…：どうかしましたか？」

「ああ、いや。最近日曜大工にはまっていますね、僕もよくホームセンターに行くんですよ。嫁にはガラクタばかり作るなって怒られるんですが、娘たちには好評で」話題が尽きたからさりげなくアリバイを確認しようとしたが、さすがに警戒されてしまった。口からでまかせを言って誤魔化したのが、これ以上話を続けるのは難しいかもしれない。片付けも終わったし、この辺が潮時かもしれない。

「そろそろトラックに燃料を入れに行かないといけないので、ここで失礼します。手伝ってくれてありがとうございます。ありがとうございました」

「いえいえ、こちらこそ。すみませんね、変な事を聞いてしまつて」

僕たちは倉庫を後にし、僕はロビーに戻ることにした。すると、母さんがせとつちに話を聞かれていた。

「…：ええ、新聞紙にくるんで不燃物のごみとして処分しました。回収は明日なので、朝になったら出しに行くつもりです」

「なるほど、ありがとうございます。また何かお伺いするかもしれませんが、その時もよろしくお願いします」せとつちはお団子ヘアの頭を一つ下げ、僕の方に近寄ってきた。

「どう？」

「捜査の方は」

「津軽さんのアリバイを洗っていたところですよ」

あまり詳しくは話せませんが、と瀬戸刑事は前置きした。立ち話もアレなため、僕は彼女をソファに案内した。

「結論から言うと、彼女のアリバイは成立しました。まず、高知駅前のホームセンター『コナーン』、簡易宿泊所『元親』、高知市中央卸売市場での目撃証言とレシート、購入履歴がそれぞれ見つかりました」

彼女は小脇に抱えていたバインダーを開き、領収書などを見せてくれた。

「彼女が話した通り、ホームセンターでの資材に宿の領収書、それに食品の領収書です。市場には魚を買いに行きたかったようですが、この雨でほとんど良い水揚げが無く、僅かな野菜だけ買って帰ってきたようですが」

市場のレシートに記載されている食品はトマト一箱だけだ。購入時刻は午前4時20分。資材といい食品といい、トラックを出したのならもっとたくさん買えば良さそうなものではある。でも、こんな辺鄙な宿では人の出入りもたかが知れている。食材もやたらと買い込む必要に欠けるのかもしれない。

「宿をチェックアウトしたのが午前3時半頃、そこから市場の競りを済ませ、ここに戻ったのが6時20分くらいでした」

なるほど、どうやら津軽さんのアリバイは確固たるものようだ。彼女はシロやろう。

「他に何か進展はあった？ それこそ、常盤の取り調べとか」

「それが、妙な事になってきているんです」  
後輩刑事は困惑したように麻呂眉をひそめた。

「常盤さんに取り調べをしたのですが、彼女が言っていた『脅し』がどうやら本当の事らしくて……」  
大きな収穫があったようだ。僕は気合を入れる意味も

かねて、ソファに座り直した。

\*八雲克子 —— 東京都武蔵野市・安政大学

井の頭線を井の頭公園駅で降り、少し歩くと安政大学のキャンパスが見えてくる。

「それで、高知県警の黒潮警部は何て言っていたの？」

改札を抜けながら横を歩く沖君に確認する。

「昨日、高知県の山奥で発生した殺人事件の被害者は安政大教授の島風真理さんでした。警察は島風氏殺害に關与したとして、彼女の教え子である常盤涼香を連行しました」

沖君はスマホをつついて詳細な資料を読み込む。警部としても上司としても歩きスマホは容認できないが、今はそれどころではない。

「常盤を犯人とした理由は？」

「ええと、常盤の荷物の中から犯行に使われたと思われる睡眠薬が発見されたこと、また現場の立地から彼女に犯行が可能だったと考えられるためです。他にも、常盤が殺害現場となった旅館を手配したことも理由に挙げられるそうです」

聞くところによると、列車の屋根を使ったトリックを弄した可能性が高いという。

「ところが、彼女は殺人の容疑を真っ向から否認しています」

「ええ？ でも、彼女が宿を手配して、物証も出ているんでしょ？」

私と沖君は信号で立ち止まった。西の方から黒い雲が流れてきているが、帰りに折り畳み傘の出番があるかもしれない。

「それが、彼女の弁によると宿は何者かに脅されて手配したそうなんです。島風教授を殺害した犯人は他にいると主張しています」

「脅して何？ 何かまずいことでもやっていたの？」  
信号が青に変わり、左右を少し確認してから横断歩道を渡る。

「どうやら、常盤は島風教授の幹旋で裏口入学をしたらしいんです」

「裏口入学って、安政大に？」

「ええ。我々はその確認をしに、安政大にある島風教授のデスクを見せて貰うことになっています」

常盤の主張を全面的に信じるなら、彼女は裏口入学の事実をタネに、何者かに宿の手配を命じられたことになる。そしてその宿で教授が何者かに殺害され、常盤は眞犯人に濡れ衣を着せられた。

「睡眠薬はどうなるの？ 常盤の荷物から見つかったんでしょ？」

「それについては知らぬ存ぜぬの一点張りらしいです」  
緩いカーブの先に安政大の建物が見えてきた。都心に程近いキャンパスらしく、狭い敷地に建物が密集して林立している。春休み期間中ということもあり、閑散と立っていた。

「脅されていたって、誰から？」

「それが分かれば苦労しないんですが、なかなかどうして。内容は全て肉筆の手紙でしたためられていたそうです。ここでの調査を終えたらそのまま常盤の自宅に向かいます。そこで寮長立ち合いのもとで室内の捜索を行います」

彼女が住まう寮は高井戸にあるという。ここからだ

井の頭線一本だ。通学には便利だろう。

「常盤の話だと手紙は妙に角ばった筆跡で、筆跡に心当たりは無し。差出人の名前も無し。消印は東十条だった。椽上水だった、いつもバラバラでした。最初は無視していたようですが、段々と彼女の個人情報も含まれた文面になってきて、それで要求を呑んだそうです。手紙の内容は口外しないように文面で指示されていたらしく、誰にも相談しなかったとか」

警察に相談は……するわけがない。裏口入学なんてとても警察に打ち明けられるはずがないだろう。

「手紙は捨てずに保管してあるそうなので、それを鑑識に回しましょう」

「僥倖ね。そうしましょう」

安政大の正門をくぐり、守衛所で警察手帳を見せて事情を説明する。守衛が電話で担当者呼び出し、5分後には島風ゼミの部屋の前にいた。

「こちらが島風教授の研究室です」

島風教授の同僚だという大沼教授が鍵を開けて案内してくれた。豊かな口髭と顎鬚を蓄えた壮年の教授だ。

大学の研究室といえば乱雑に散らかっているイメージだが、島風教授の研究室も例に漏れず乱雑な部屋だった。ただ、乱雑に散らかっているのは書類がほとんどだ。

「大学の中で裏口入学は恒常的に行われていたのですか？」

「まさか。そんなはずはありません」

大沼教授は少しむっとした物言いので私の質問を否定した。しかし、その言葉の影には不安の色が見え隠れしている。

「大学全体で裏口入学の実態について緊急調査を行うことになると思うので、それによって追って判明すると思

います」

「表沙汰にはなっていないかったとはいえ、噂になったりはしていませんでしたのか？」

私はさらに突っ込んだ質問を行う。

「さあ……私はそういう噂話には疎くて、それについては何とも。事務員さんはどう思いますか？」

大沼教授と一緒に案内してくれた事務員にも聞いてみた。色白でひよろひよろの眼鏡が似合う青年だ。

「事務員の間で噂になったこと……まあ、根も葉もない噂なら聞いたことがあります。ですが、所詮はただの噂です。みんなネタにして軽口を叩くくらいで、僕を含め誰も相手にしていませんでした。島風教授の名前が出たことはあるにはありましたが、これも同じように本気にした人はいないと思います」

でも、その噂は現実のものになった。どこから情報が漏れていたことになる。

「そうですね。大沼教授、ついでののでいくつか島風教授について伺ってもいいでしょうか？」

私は有無を言わさぬ気迫を滲ませながらお願いした。

「まあ、私で良ければ」

大沼教授は少し躊躇うように了承した。不安げに灰色の口髭を撫でている。パソコン内の捜索は沖君に任せて、私は島風教授についての人となりや認識、エピソードなどを質問していった。

「島風教授は決して古株というわけではありませんでしたが、人望がありました。ここで教え始めたのは10年くらい前の事かな、入った当時は播磨姓でしたがその年に夫を亡くして苗字が妙高になりました。やがて再婚して島風姓を名乗るようになりました。生徒からの評判も悪くなく、多くの教授からも慕われていました。専門は

交通経済学です」

そこから交通経済学についての簡潔な説明を挟み、大沼教授は島風教授が人望を得たきっかけとなるエピソードを教えてくださいました。

「確か、あれは5年くらい前の話だったと思います。この大学には当時、島海先生という方がいらつしやいました。彼もまた交通経済学の教員でしたが、ある日事件が起こります。彼が発表した論文にデータの改竄や捏造などが見受けられたのです」

私はメモを取る。沖君は他の大学担当者と一緒に教員IDカードでデスクトップを起動させ、メールボックスを漁っているところだった。

「私としてもショックでした。島海先生はとても真面目な人で、決してそんな真似はしないと思っていました。島海先生はまるで身に覚えがないようで、当初こそ反論していましたが、結局はこの大学を辞めることになりました。確か今は宝永大学で教えているんじゃないかな……すっかり疎遠になってしまいました」

島海先生、ね。後でコンタクトを取ってみよう。

「あの、島海先生がどうかしたんですか？」

声に釣られて振り向くと、沖君と一緒にパソコンの中を引つ掻き回していた大学担当者が私を見ていた。

「あ、申し遅れました。当大学で事務をやっている磯風と申します。かつてこの大学で島海先生に教わり、この大学への就職も後押ししてくれたので……」

「ああ、なるほど。いえ、島海先生は話の流れで名前が出ただけです。特に気にしないで下さい。沖君、どう？」

「まだ時間がかかりそうです」

窓の外、陽が傾いて部屋を朱色に染める。大沼教授は話を再開した。

「その論文データ改竄を指摘したのが島風教授でした。見方によっては、彼女が島海先生をこの大学から追い出したとも言えるでしょう。島海先生が自主退職した後、島風教授が発表した論文が好評を博して彼女は大学内で一定の地位を得ました。ただ……」

大沼教授は口ごもる。

「ただ、何ですか？」

私は静かに先を促す。

「島風教授が発表した論文の内容は、一部が島海先生が発表して撤回した論文と内容が類似しているんです。もちろん、剽窃などの不正は確認されませんでした。そもそも、撤回した論文を剽窃する物好きはあまりいないでしょうし、当然と言えば当然でしょうが」

大沼教授は本棚に歩み寄り、論文のファイルを探す。

本棚はいくつかお順に整理されていて空白も目立ったが、一部の本が横向きに詰められていたり乱雑な印象も与えていた。

「ああ、ありました。『輸送力増強が与える収益性への影響』、これが例の論文です」

タイトルからして何を言っているのかよく分からないけど、とりあえず後でデータを渡してもらえらることになった。

「その後、島風教授と島海先生については何か？」

「いえ……国交省の会議でお互いに顔を合わせてもあまり雰囲気は良くなかったと聞いたくらいです」

それはさぞかし修羅場だっただろう。

「大沼教授は個人的に島風教授をどのように思っていましたか？」

壮年の教授は少し黙った。言葉を選ぶのに時間がかかったようだ。

「一応信頼はしていましたが、どこか抜け目ない印象を覚える人物でもありました。計算高いとか何となくか、腹の読めない人物でしたね。どの大学にもレポート課題やリアペ課題で他人の文章を丸写しする不届き者はいるのですが、それを問い詰められてもしらを切るような生徒もいます。そんな生徒に少し近いものを感じる時がありました。ただ、さすがに裏口入学に手を出していたというのは想定外です」

大沼教授は顎鬚を撫でて、疲れたような声で言った。

「沖君、どう？ 進捗は？」

七三分けの黒髪をした後輩刑事は首を横に振った。

「少なくとも大学の共用サーバーの中から裏口入学に関するデータは出てきそうにありません。ご丁寧に全部消去されているか、ロックがかかっている個人用のスペースにあるのか、いずれにせよこれ以上調べるには鑑識に頼むしかないでしょうね」

まあ、少なくとも常盤の方を叩けば何か証拠が出てくるだろう。彼女の主張が本当なら、島風教授が裏口入学に関わっていた証拠が出てくるのも時間の問題だ。

私は改めて本棚を見た。天井まである金属製の本棚には様々な本やファイルが収められているが、基本的にあいまいお順に並んでいる。空白も多い。……でも、その割に横向きに置かれた本もある。

私はふと気になって横倒しにされたある本を手にとった。『不合理な緩急分離・中央線杉並三駅問題』という新書だが、気になったのはタイトルではない。背表紙の四隅が丸くなったりして、妙に使い込まれた感じの本なのだ。は行のコーナーはまだ空きがあるのに、なぜ横倒しにしまつてあるのだろう……？

私は本を手に取り、開いてみた。四つ折りにされた紙

が本の間から床に落ちた。開いてみると、果たして。

「沖君、ちよつと来て」

後輩刑事はデスクトップから離れ、私の右隣にきた。

「この名簿、もしかして」

「……調べましょう」

常盤源香の名前も含まれた名簿がなぜこのように意味ありげに隠されていたのか。考えるまでも無さそうなことだった。

\*霧島翼 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

せとつちの話に僕は少なからず驚いていた。常盤さんの裏にそんな事情があったというのは、事件の様相を大きく変えかねない。

「せとつちはどう思う？ これでも常盤さんが犯人かどうか」

雨空が暗くなってきた。夜が近付いている。

「裏口入学が常盤さんを脅す手段として有効なのは分かります。ただ、それで殺人までやらせることはないでしょう。その点でも、彼女が言う通り宿の選択だけ脅され、他は何も知らないというのは納得できます」

「そうやね。それに、裏口入学をした常盤さんにとつて島風教授は後ろ盾となる存在のはず。殺す動機とは簡単には結び付かないように思える」

「そうですか？ 例えば、裏口入学を斡旋した見返りに対価を要求して、それに応えられなくなって切羽詰ま……ということはありませんか？」

「それはつまり、脅迫そのものが嘘やったってこと？」

「脅迫の手紙についてはまだ警視庁の担当者、確か八雲



さんやつたかな、とにかくまだ連絡が来ていないので何とも……」

「え、八雲警部？」

知った名前が出てきて少し驚いた。彼女が捜査に一枚噛んでいいるなら好都合だ、直接聞いてみよう。

「あら、知り合いですか？」

「いや、うん、まあ……ちよつとね」

話すと長いため説明を端折った。せとつちは聞いてはまずい事情でもあると勘違いしたのか、それ以上は突っ込まなかった。外からトラックの音がした。津軽さんが給油を済ませて戻ってきたようだ。

「警察としては常盤さんを疑いつつ、他の可能性も検討することになりそうです」

とりあえず新発見は以上のようなようだ。ポケットの中で僕のスマホが短く振動した。見ると確水さんからのメッセージだ。

「とりあえず話は分かった。どうもありがとう」

僕は軽く挨拶して傘を持ち、駐車場の愛車に向かう。

ダイヤモンドは雨に打たれ、艶めいた黒い輝きを放っていた。横にはついさつき帰ってきたトラックが停まっている。

ふとトラックの方を見ると、妙な物に気が付いた。

「何やこれ？ ……凹みと、砂？」

トラックの荷台の真ん中辺りに凹みがあった。大きさは握り拳くらいだろうか、雨が溜まって水溜まりを作っている。傷は錆や汚れも見受けられず、かなり新しそうに傷だ。というかトラックそのものもつい数か月前に買った替えた新品だ。

凹みとは別に、荷台の左側を中心に細かい砂粒がついている。砂粒というか、土汚れという方が正確かもしれ

ない。土砂を運んだわけでもないのにどうしたんやろう？ 凹みといい土くれといい、こんな状態になる心当たりが無い。

「使い方が乱暴やなあ……せつかく買い替えたんやたら、もうちよい大事に使えばええのに」

僕は少し呆れた独り言を呟いて、改めて車に乗り込んだ。今から行けばゆっくりでも十分間に合う。軽いドライブで頭を整理したかった。

\* 釧路士 —— 秋田県横手市・『電車館』

大塚刑事に連れられて事件現場に到着した。遺体は既に運び出され、遺体の形状を縁取った白テープと血痕が凄惨さを訴えている。遺体のや血の臭気が抜けていないように感じるのは気のせいだろうか？

「ああ、釧さん。ちよつと呼びに行こうとしていた所です」

小柄で剛毛な警部は何やら手にしていた。

「どうしたのですか？」

「今から実験してみようと思いましたが」

そう言っ、手にしているものを見せてくれた。

「これ、鉄道模型の無線型コントローラーじゃないですか」

昨夜、山鳩会長のご厚意で鳥海先生と共に鉄道模型を走らせた時に使ったものだ。

「実験って、何をするつもりですか？」

「もしかししたら、山鳩会長を殺害した密室トリックが分かったかもしれないのです」

予想外の爆弾発言に僕は度肝を抜かれた。「本当ですか！？」

「それを今から確かめるのです。大塚刑事、準備はいいですか？」

「もう少しです」

大塚刑事は足元にしゃがみ込んで何やらごそごそといじっている。

「どんなトリックなのか、良かったら教えてもらえるとありがたいのですが」

僕は矢野警部に頼むと、意外にあつさりを受け入れてくれた。元々僕を呼びに行くつもりだったらしいから、当然と言えば当然かもしれない。

「山鳩会長は、壁に固定されていたレールが倒れ、それで頭部を砕かれて死亡しました。そのため、問題はどのようにレールを倒したか、という部分にあります」

矢野警部は黙々と準備を進める大塚刑事を後目に話を続ける。

「レールはかなりの重量がありますから、倒すにはかなりの力が必要です。普通に考えたら人力で一杯押し倒すのが定石でしょう。しかし、監視カメラの映像に人の姿は無かった」

その通りだ。映像は一部飛んでいたが、あの時間だけで人が移動するのは不可能だと判明しているから同じことだ。

「つまり、犯人はこの部屋に立ち入らずにレールを倒したことになる、ます」

「なるほど、だから密室だったんですね。ですが、どうやってレールを……」

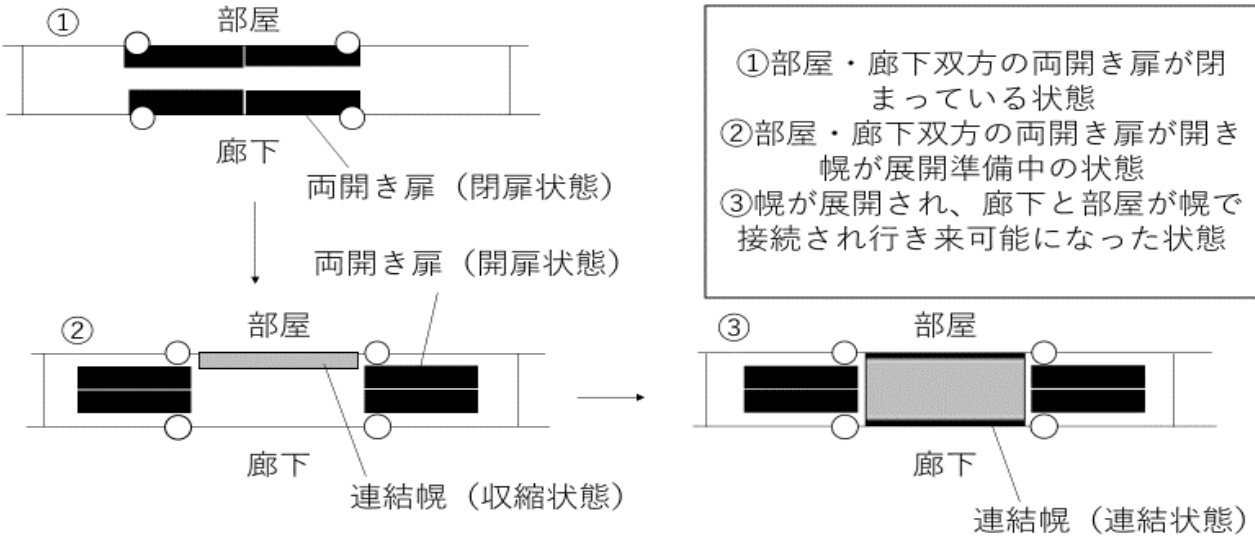
僕はそこまで聞いて、矢野警部が解いたトリックの全容を悟った。

「鉄道模型、ですか？」

# ドア開閉システム

## 『電車館』一階

→ 図①② (再掲)



矢野警部は小さく笑みを浮かべた。

「この館には床下にたくさんの鉄道模型が走っています。それはこの部屋でも同様です。犯人は恐らく、事前にレールのボルトを外し、鉄道模型とレールとをピアノ線のような頑丈な糸で結びつけ、そしてこのリモコンで室外から遠隔操作した。そうすれば、鉄道模型に引っ張られてレールが倒され、山鳩会長の頭部を直撃する」

僕は声も出なかった。いや、出す気にならなかったというべきだろう。

「疑っていますな、剣さん？ 顔に出ていますよ」

「いや、その……ええ、正直なところ」

色々ツツコミどころはあるが、そもそも鉄道模型の出力などたかが知れている。いくらたくさん鉄道模型があるとはいえ、レールをなぎ倒せる程の力があるとは思えない。

「確かに、鉄道模型は非力です。ですが剣さん、この部屋にある特殊な鉄道模型の存在を忘れていませんか？」

僕は少し考え、足元を見降ろした。透明なアクリル床板の真下に走るその模型は……。

「リニア、新幹線の模型ですか？」

矢野警部は満足げに頷いた。

「本物同様に磁力で浮いて走るこの模型、ネオジム磁石を搭載しているとのこと。鹿島さんから伺いました。ネオジム磁石は非常に強力な磁石であり、それ故に速度と牽引力を發揮できる……そう考えたのです」

「矢野警部、準備できました」

「ご苦労様です、犬塚刑事。では、皆さん下がって下さい。これから実験に移ります」

気が付くと、僕の背後に鹿島さんがいた。実験を見守

りに来たのだろう。

矢野警部と犬塚刑事がレールから離れたことで、実験の全容が見えた。アクリル床は取り払われ、何十両もの鉄道模型とレールがピアノ線で結ばれている。

「では、スイッチを入れます」

模型が何十両もあるため、遠隔操作でスイッチを一つずつ入れるのに数分かった。どの模型も車輪をギョルギョルと空回りさせ、甲高いモーター音を響かせている。段々焼け焦げたような匂いが漂ってくる頃になって、ようやく最後の模型のスイッチを入れる番が来た。目玉となるリニアだ。

「スイッチ、オン！」

瞬間、リニアの白と青の車体が陸に揚げられた魚のように激しく振動を始めた。……しかし、というべきかは、というべきかレールは微動だにしないかった。

鹿島さんが呆れたように溜息をつき、レールに電力を供給するプラグをコンセントから引き抜いた。鉄道模型への給電が止まり、室内が一気に静かになった。

「模型の修理代は、後日警察に請求しますのでそのおつもりで」

鹿島さんの冷やかな通告に矢野警部は押し黙ったまままだだった。僕はいつも以上に小さく見える矢野警部の背中に向かって、一つ質問した。

「矢野警部、一つ聞きたいんですが……仮にこの実験が成功したとして、犯人はどうやって密室に入らずにレールのボルトを外し、こんなに大量の鉄道模型とレールとをピアノ線で結んだんですか？」

矢野警部は弱々しく笑い、答えた。

「申し訳ない。10年前の件がどうしても頭から離れなくて、非現実的と分かっても試してみたくなくてし

まったんです」

僕はかける言葉に迷い、結局ノーコメントで済ませた。

片付けを始める二人に、資料バインダーの中にあつた妙高さんと白根さんについて聞いてみた。

「妙高さんについてはまだ調べがついていません。そこまで手を回す余裕が無くて。白根さんは震災で亡くなったそうです。陸前高田で津波に巻き込まれたらしく……生前の写真なら手配できますが」

写真の手配だけお願いして、僕は鹿島さんにマスコンキーを見せてくれるかどうか聞いてみた。

「マスコンキー……ああ、播磨社長が死に際に握っていたものですか。いいでしょう、こちらです」

鹿島さんの丸っこい体の後に続くと、応接室に通された。ガラスケースの中にマスコンキーが何本もある。

「この左端のマスコンキーが播磨社長が持っていたものです」

「手に取って見てもいいですか？」

特に渋られることもなくガラスケースを開けて見せてくれた。ケースに鍵は無く、誰でも取り出せる状態だった。他の鉄道グッズに視界を遮られて、監視カメラからは死角になっているように思える。

「どうぞ」

見せて貰ったはいいいものの、何の変哲もないマスコンキーだった。僕はお礼を言つて鹿島さんに返却した。

「あ、そうだ。敷島さんってどこにいるか知っていますか？」

「敷島様ですか？ 先程は図書室におりましたよ」

僕は未亡人にお礼を言い、階段に向かった。図書室には時刻表を取りに行く用事もある。好都合だ。

\* 碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町中村天王・JR大杉駅

大杉駅に着いた頃には、陽がほぼ落ちて薄暗くなっていた。降車客は私しかおらず、『南風』は薄暗闇の中に車体を溶かすように消えていった。吐き出されたディーゼルの煤煙が私の鼻を突いた。

駅舎の前で霧島さんが待つてくれた。

「遅くなりました」

「ああ、いえいえ。宿に着いたら夕食にしましょうか。

碓氷さん、お昼を食べないで出かけたでしょう？」

そういうええそうだった。事件でそれどころではなかったのが正直なところで、思い出したように私のお腹が空腹を訴えた。幸いにして、雨の音で霧島さんには聞こえなかったみたいだ。

「色々と収穫がありました。とりあえず乗って下さい」

私を待つ間に飲み干したと思いきイチゴミルクの空き缶をごみ箱に捨て、国交省の役人は車の鍵を開けた。

\* \* \*

車は降りしきる雨の中、大杉駅の駅前から橋を渡つて川の対岸に渡り、そのまま県道を北上する。山の間にある僅かな平地に片側一車線の道路、その脇にトタン造りの民家や商店が何軒かぼつぼつと建っている。しかし、すぐに交通整理に引っかけかかってしまった。「工事中」と書かれた立て看板の向こうには土砂崩れの現場が見える。

「どうかしたのですか？」

霧島さんがパワーウィンドウを開け、身を乗り出して雨合羽を着た係員に聞いた。

「昨夜の11時くらいに通りがかった車から通報がありました。この雨で土砂崩れが起きたみたいですが、ハイ。夜間のうちにだいたい作業を進めまして、今朝の9

時ばあから交互通行で通れるようになりました」

「お疲れ様です」

そういうええ、大歩危駅に送ってもらう時にラジオの道路情報で言っていた気がする。係員が緑色の旗を振り、霧島さんは再度アクセルを踏んだ。三角コーンで仕切られた土砂を避けるように、右側の対向車線にはみ出して走り出す。

「この辺は山奥な上に土が脆いんで、少し雨が降るとすぐに崩れるんですよ。40年くらい前に繁藤災害っていう悲惨な土砂災害もありましたからね……」

交差点で赤信号に引っかけかかっている間、繁藤災害について話してくれた。ここから少し南に行った繁藤で土砂崩れによる被害者捜索に当たっていた消防団員らが、後続の大規模な土石流に巻き込まれた二次災害だという。

消防団員のみならず民家や停車中の列車も巻き込んだ二度目の土石流では最終的に60名が命を落とし、現在は現場近くに慰霊碑が建てられているそうだ。

信号が青に変わった。左折する車がのろくて少し待たされた。看板を見ると高速に乗るようだ。私たちは高速への入口を素通りして直進する。

「それで、調査の結果はどうでした？」

曲がりくねった山道を行く車の中、私から報告が始まった。簡易宿泊所の件、卸売市場の件、話に抜け漏れが無いように気を付けながら、時系列順に話した。

「なるほど。僕が瀬戸刑事から聞いた話と矛盾しませんね。つまり、その簡易宿泊所のおばちゃんの話やと、津軽さんはチェックアウトするまでどこにも出かけなかったんですね？」

「みたいです」

今度は霧島さんが瀬戸刑事から聞いた津軽さんのアリ

バイを話してくれた。これらを合算すると、津軽さんには堅固なアリバイが成立したことになる。彼女に犯行は不可能だ。

「津軽さんのアリバイ以上に大きなニュースもあるがですよ。食べながら話しましょうかね」

土讃線の橋梁を右に見ながら橋を渡る。フロントガラスの向こうに、雨でぼうつと濡れそぼる柔らかな宿の灯が見えた。

\* \*

宿に入ると津軽さんと支配人が話をしていた。

「……ですから、トラックを使う場合には事前に申告して下さい。昨夜は給油しようにも手持ちのお金が足りなくて大変だったんですよ」

「いや、すまなかった。気を付ける」

「どうも津軽さんが支配人に文句を言っているみたいだ。ただいま。父さん、どうしたか？」

津軽さんが厨房に引つ込むのを見届けて、霧島さんが支配人に聞いた。こうして親子で並んでみると、どこか……とは具体的には言えなくてもよく似ている。支配人は私に挨拶を済ませ、事の顛末を教えてくださいました。

「いや、昨日泊まつちよったお客さんが汽車に乗り遅れたがよ。仕方ないきトラックで阿波池田駅まで送り届けたんやけど、その時に給油するのをうっかり忘れちよつてね。夜になって津軽さんがトラックでお街まで下りたらここに戻る帰りにガス欠になりかけたらしいんやけど、手持ちのお金では給油するにも厳しくて大変やったそうながよ」

「しつかりしいや、父さん。あのトラックはよく使うんやろ？ どれくらいの頻度で給油するが？」

支配人は少し考えた。オールバックの髪が親子でお揃

いだ。

「ここから高知まで3往復すれば空になるきねえ。最後に給油したんが……いつやったがやる？ 帳簿を見れば分かると思うき、後で教えるわ」

トラックで宿泊客を送り届けるって、なかなか無いのでは？ 私は少し物珍しさを感じながら食堂に向かうことにした。

夕食の時間だ。昼食を抜きにしてあちこち歩き回ったために空腹が凄まじく、私は一番分量のありそうなハンバーグセットに大盛りごはん、さらに色々と付け合わせを注文した。

「よく食べますねえ」

「霧島さんも食べますか？ フライドポテト」

「ご相伴にあずからせてもらいますね」

先に冷えた瓶ビールが運ばれた。私が霧島さんのグラスにビールを注ぎ、霧島さんはそれを飲み干す。そして今度は反対に私のグラスにビールが注がれ、私が飲み干す番だ。これを返杯、献杯と呼び、高知の宴席における親交の証とされる。

料理が運ばれてくるまでそう時間はかからなかった。

霧島さんはカツカレーを食べる合間にフライドポテトをつまみながら、私がいけない間に聞いたことについて説明してくれた。津軽さんに接触したこと、常盤さんが言っていた『脅し』の正体。

「裏口入学、ですか……」

私には想像できるはずもない事情だった。

「殺人の動機にまでしますかね？ 裏口入学と言えば外聞は悪いですが、常盤さんの場合は外聞を気にする程の立場かと考えると微妙ですし」

「そこなんですよ、確氷さん。常盤さんは何者かには

められた、という考えもできません。恐らく、常盤さんを脅迫した人物が島風教授を殺害した犯人じゃないかと思っ

うんです」

「ただ、常盤さんを脅迫した人物がこの旅館にいるんでしょうか？」

私はハンバーグを口に運びながら言った。トマトソースと熱い肉汁が合わさっていい塩梅だ。

「どういう意味ですか？」

霧島さんはカツを口に運ぶ手を止め、怪訝な表情をした。

「裏口入学って、本来は秘密のことじゃないですか。その事実を掴めるのって、普段から島風教授に同等に接近できる人物だと思っんですよ」

「一理ありますね」

霧島さんはカツを口に放り込んだ。

「じゃあ、そんな秘密を島風教授の教え子が把握できると思えますか？」

「まず無理でしょうね」

霧島さんの同意に頷き、私は付け合わせの人参を口に入れた。

「なら、この宿の中で常盤さんを脅迫する理由があった人は誰もいないことになり、ます」

目の前に座る役人は脳内を整理するかのよう俯いて黙り込み、ビールを一口飲んだ。

「確かに確氷さんの言う通りですね。この宿で常盤さんと面識があったとすれば、ゼミの参加者です。ですが、その中で常盤さんを脅迫できた人物は裏口入学の事実を知っていた島風教授のみ。でも、島風教授には彼女を脅

迫する理由がありません」

「ええ、そうなんです」

私も霧島さんに釣られるようにしてビールを飲んだ。

その時、津軽さんが何やら手にしながら近寄ってきた。

「霧島さん、あの」

「どうしました？」

オールバックの役人は料理人を見上げた。どんぐりの

ように丸い目とじつとりした目が交錯する。

「ごめんさい、カツカレーにがっこを入れ忘れてしま

つて」

そう言つて、手にしていたものをテーブルに置いた。

福神漬だけだ。

「ああ、これはすみませんね」

霧島さんは会釈をして、ひとつまみの漬物をカレー皿

の端っこに置いた。

「ひろちゃん、ちよつと手伝うてや！」

「はい、今行きます」

津軽さんは小さくお辞儀をして、彼女を呼んだ女将さ

んが待つ厨房へと足早に戻っていった。

「常盤さんは脅迫の手紙を受けて、何を対価に要求され

たんですか？」

私は話を再開させた。

「それについてはまだ報告が来ていないんですよ。東京

の方で八雲警部と沖刑事が捜査を担当しているらしいの

で、僕の方から事情を話して情報を回すように頼みまし

た。報告も時間の問題やとは思いますがね」

意外な所で意外な名前が出てきた。霧島さんはフライ

ドポテトに付け合わせのケチャップを付けながら話を続

けた。

「少なくとも常盤さんの話によると、『裏口入学の事実を

ばらされたくなければ、今度のゼミ合宿の行先を旅館『吉野川』にしろ』と要求されたそうです」

「他のゼミ生も言っていましたけれど、彼女が強硬にこ

の旅館を行先にしようと主張した理由が分かりましたね」

謎は一つ解けたが、それ以上に謎が増えてしまった。

「そういえば碓氷さん、剣さんの方は大丈夫なんです

か？」

私は最後のフライドポテトを箸で掴みながら答える。

「あつちもあつちで大変みたいです。密室殺人と行方不

明者が同時に出たみたいで」

「それならその行方不明者が犯人でしょう」

「それくらい簡単ならいいんでしょうけれどね……」

食堂の窓の横をまた『南風』が駆け抜けていく。音と

振動がグラスの底に残ったビールに波紋を起こした。

\* 剣礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

図書室に入ると敷島取締役はソファに座り、ぼんやり

とテレビを観ていた。

『スイスのピラトゥス山を上る登山鉄道、ピラトゥス鉄

道。最大傾斜は480%で、角度にすると約25度にも

なります。この鉄道では、歯車型の車輪に動力を伝えて

急な坂に対応したアプト式鉄道を採用、その中でも特に

坂に強いロッヒャー式を採用した世界で唯一の鉄道です』

向こうが僕に気付けて立ち上がった。

「ああ、剣さん」

人恋しく、話し相手が欲しかったようだ。僕は促され

るがままに向かい側の席に腰を下ろした。

「敷島さん、少し聞きたい事があるんです」

「え？」

胡麻塩頭の社長はひよつこりお面のように驚いたよう

な顔をした。

「そんなに驚かなくても……大した事ではないので」

僕は少し苦笑を浮かべながら本題に入った。

「三辺取締役が亡くなった時、火元は事務室でしたよ

ね？ 何か事務室で見られたらまずいものとかはありま

せんでしたか？」

敷島さんは当惑したように考えこんだ。

「エロ本の類は無かったと思いますが、ハイ」

「そんなんじゃないかと、もつと他に何かありませんか？」

しかし、社長は首を捻るばかりだ。

「うーん……ウチは当時、経営が厳しかったのは事実で

すが、悪いことはやっていませんでしたよ。見られて困

るようなものも、企業秘密の物くらいです、ハイ」

この調子では埒が明かない。質問を変えよう。

「じゃあ、火災で焼失した資料はどんな内容でしたか？」

犯人の目的が資料の抹消だったとしたら、消えた資料

の中にヒントがあるはずだ。

「えー……そうですね、決算書に明細書、証書、色々燃

えてしまつて後が大変でした、ハイ。あの放火で我が社

の書類の大部分が消失し、特に親方が手掛けていた鉄道

車両事業の書類は全滅していました。なので、親方が晩

年に誰からどのような仕事を受け持っていたのかは分か

らないままです、ハイ」

「そういえば、昨夜の夕食の席で仰っていましたね。鉄

道車両の中でも比較的簡単なトロッコや遊園地向けの車

両を作っていたんですって？」

「ええ、そんなところです。ハイ。元々業績が振るわな

かったので事業を畳むことにしたんですが、それでも取

引先には一報を入れないといけないじゃないですか。で

すが、親方が晩年に受け持った仕事の発注先はどこなのかとうとう分からずじまいです。えー、最も、発注先から特に連絡も無いのをいいことに今ではほったらかしです、ハイ」

かなり苦勞したであろう話を事も無げに聞かせてくれる。懐の深い人だけど、それだけに放火犯を決して許していないだろう。

「他の事業、それこそ鉄道模型部品の納入とかはどうにか手持ちの資料や銀行に預けていた書類で継続できたんですが、どうも鉄道車両製造事業だけは銀行とかにも書類が無くて……」

考えてみれば妙な話だ。経営に関わる大事な書類なのに、スペアも保管されていなかったとは。

「変な話ですね」

「ですねえ、もしかしたら親方は最後の仕事を終わらせたら事業を畳むつもりだったのかもしれない。経営の重荷になっていたことは親方自身よく理解していたはずですし、ハイ」

敷島取締役の話の聞いているうちに、僕はある事に気が付いた。もしかしたら、犯人は事務室の資料と、それを管理していた三辺取締役の両方を消すつもりだったのではないだろうか？

だとすれば、犯人が三辺取締役を消した理由は口封じだと想像できる。でも、三辺取締役が何を知っていたというのだろうか？

「敷島さん、火災の後に何か変な事は起きませんでしたか？ どんな些細なことでもいいんです。微妙に部屋の中の物の配置が変わっていたとか、何かありませんでしたか？」

タコ社長は困惑したように胡麻塩頭をぼりぼりと掻いた。

た。

「何も無かったと思いますよ？ 最も、あの頃は火災の事後処理と事業廃止とを同時にやっていたので目が回るくらい忙しくて、覚えていないだけかもしれません」

あまり表りの無さそうな返答だけど、逆にこの言葉が全て本当なら犯人が消じたかったのは鉄道車両製造事業の内実だったのかもしれない。

つまり……放火犯は鉄道車両製造事業を発注した人物の中にいる。

「敷島さん」

僕は自分でも声色が鋭くなるのが分かった。

「ど、どうしました？ そんな怖い顔をして」

「大事なことなので、よく思い出して下さい。鉄道車両製造事業を発注した人や団体の中で、分かっている発注主はどれくらいいるんですか？」

「どれくらい、って……ええと……少し考えさせて下さい」

敷島取締役も釣られるようにして真剣な眼差しになって考える。

『……地面と水平に歯車を噛み合わせることで、急勾配を克服したピラトウス鉄道。しかし、このレールは通常の鉄道で使われる分岐ができません。そこでピラトウス鉄道では、通常のポイント式の分岐ではなく、トラバースタイプに分岐器が使用されています。線路がそのまま真横にスライドして、別の線路に接続するのです』

テレビに流されている映像は録画された番組のようだが、考えこむ敷島取締役と詰め寄る僕の間、重い沈黙などまるで無視するようにテレビは音声を吐き出し続ける。

「……ウチの記憶が正しければ、最後に発注した人物、

もしくは団体だけが分かっています。ただ、恐らく個人発注だと思えます。生前、三辺取締役が『知り合いに頼まれた』みたいなことを言っていたので。それに、真つ当な企業が団体なら、お悔やみの弔電一本くらい寄越すはずですし、ウチが把握している取引先はみな弔電を寄越すか、親方の葬儀に参加しました、ハイ」

記憶を整理した敷島取締役が話を再開させた。放火犯の人物像が少しずつ掴めてきた。鉄道車両製造事業を最後に発注した人物で、生前の三辺取締役と親しかった人物だ。

でも、ここで大きな疑問が残る。仮に放火犯をXとした場合、Xはなぜ鉄道車両製造事業を発注したことを知られたくなかったのだろうか？ そして、Xの存在は、山鳩会長が殺害された今回の事件にどのように関わっているのだろうか？

これ以上は考えても分かりそうにない。僕は敷島取締役に敬礼を言って、お目当ての時刻表を探しに行こうとソファから立ち上がった。

『……山頂駅では、トラバースタイプの分岐器を設置するだけの場所が確保できませんでした。そのため、世にも珍しいリバーシタイプの分岐器が設置されました。線路が土台ごとひっくり返り、裏側から別の方向を向いた線路が現れ、別方向に向かう線路と接続するのです』ソファから立ち上がったはいもの、つつい見入ってしまった。景色の良さそうな山で、いつか瑞穂さんで行けたら楽しそうだ。

本棚の中を縫うように見て回る。時刻表なんてたくさんありそうなものなのに、不思議と見つからない。そのうち、僕は新聞記事の切り抜きがいっぱい保管されている棚に出た。棚には年月順にテプラシールが貼りつけら

れたクリアファイルが何十冊も保管されている。

その中で一冊だけ異彩を放っている緑色のファイルがあった。タイトルは『日本経済新聞 私の履歴書』となっている。開いてみると、山鳩会長の生い立ちや来歴が書かれていた。

ざっと斜め読みした感じでは、昨日のインタビューで語っていたことを詳細に述べている感じだった。業界人との付き合いや取引先とのエピソードに言及されている場面が多いのは日経新聞らしい。温泉好きのプラスチック製品メーカーと意気投合し、温泉好きになったエピソードは初耳だ。

新聞の棚から離れると、時刻表の棚はすぐに見つかった。2004年10月の時刻表も何冊もあった。一口に時刻表といっても色々あり、交通新聞社のもの、JTBBのもの、大型のもの、小型のもの、地方版、等々多岐に渡る。『コンパス時刻表』を手にとると、何の縁か紅葉の仙岩峠を走る『こまち』が表紙写真だった。これを借りていこう。

誰かが階段を上がってくる足音が聞こえた。そのまま本棚の間から足音が近付き、やがて通路から顔を覗かせたのは大和さんだった。

「あ、ここにいたんですね、剣さん。夕食ができましたよ。今夜は鍋です」

\*八雲克子 —— 東京都杉並区高井戸・常盤の部屋

高井戸駅から環八沿いに5分くらい歩くと、茶色いマンションが見えてきた。

「ここが常盤の暮らす学生寮？」

「はい。313号室だそうです」

恰幅のいい中年の管理人が部屋に案内してくれた。

「しかし、警察の方がいらっしやるなんて。常盤さんに何かあったんですか？」

「遠方で事件に巻き込まれました。詳しくは話せないのですが、とりあえず無事なので安心して下さい」

管理人は心底驚いたように目をぎよろつかせ、合鍵で313号室のドアを開けた。

「手紙はどこに保管してあるって言ってた？」

「机の引き出しの中です」

室内には一人暮らしをするには事足りる一通りの家具が揃っていた。机の引き出しを開けると、何枚か紙が入っていた。

「これね」

私は手袋を嵌め、引き出しから手紙を持ち上げる。手紙は全て定規に当てたような角張った直線で構成された文字が刻まれていた。これではとても筆跡鑑定は不可能だ。指紋の検出も望み薄だろう。

「どこにでも売っていると思われるコピー用紙ですね。インクもどこにでも売っているような黒ボールペンみたくです」

手紙の内容はほぼ常盤が語っていた通りだった。「ぼつちりと旅館『吉野川』って明記されていますね」

「手の込んだ真似をするわね」

私はいささか呆れながら文面を確認していった。一言でまとめると、裏口入学の事実をばらされたくなければゼミ合宿で旅館『吉野川』に宿泊しろ、というものだった。ご丁寧な部屋割りまで指定されているが、高知県警から教えてもらった島風ゼミの部屋割りと一致していた。

「これ、返信はどうしていたのかしらね」

「いつも京王線新宿駅のロッカーに入れていたそうです」

差出人がロッカー番号を指定していたらしくて」

古典的な手だ。でも、大ターミナル駅のロッカーなら人の出入りも激しく、かえって誰にも怪しまれずに済むだろう。

ふと、私のスマホがメールを受信した。開いてみると同僚からだった。

「嘘でしょ……そんな偶然、あるわけが……!?!」

私は文面をあらため、思わず声を上げた。

「警部、どうしました？」

沖君が私を見る。

「さっき、大沼教授に教えてもらった島海先生の情報を暇している同僚に調べてもらったんだけど……秋田県で別の殺人事件に巻き込まれ、調査を受けているみたいで」

沖君も目を丸くした。

「そんな馬鹿な！ 緊張関係にある二人が片方は殺害され、もう片方は容疑者、しかもそれぞれ全く別の事件……偶然なんでしょうか？」

私に聞かれても分からない。黙って頭を振り、返信を打とうとした。しかし別の人からメッセージが届いた。

「……何てことかしら。沖君、霧島さんって覚えてる？」

「え？ ええ、前にタオルメーカーの社員が瀬戸内海と鹿児島で起こした連続殺人の事件でもお世話になりましたね。あれ、霧島さんには話してないはずなのに先方から連絡が来て解決に導かれた時は驚きました」

「そんなこともあったわね。で、今回島風教授が殺害された現場の旅館なんだけど、どうも霧島さんの実家らしいのよ」

「えっ？」

後輩刑事は私のスマホを覗き込んで、聞いた。

「……それで、どうするんですか？」



霧島さんからのメッセージは簡潔で、『常盤が受け取った脅迫状について分かっていることを全部教えて下さい』とだけ書かれていた。

「まあ、黙っているわけにもいかないでしょうね」

私は大きく溜息をつき、脅迫状を鑑識に回す手配をした。

＊劔札士 — 秋田県横手市・『電車站』

夕食は食堂車だった。階段を降り、相変わらず模型だらけのカーブした廊下を歩く。図書館から借りた時刻表を部屋に置こうと、一度自室に寄ることにした。

ドアボタンを押し、連結幌が接続されるのを待つ。部屋に入ると、僕は疲れからかそのまま寝台に座り込んでしまった。

改めて部屋を見渡す。長方形の部屋だ。鉄道グッズに埋め尽くされ、鉄オタには夢のような部屋だ。

でも、今の僕には全く響かなかった。ただでさえ疑問だらけで頭が爆発しそうなのに、右を見ても左を見ても鉄道ばかり。うんざりだ。いい加減にしてほしい。

「瑞穂さんさえいてくれたらな……」

僕は一つ溜息をつき、時刻表を寝台に投げたままトイレで用を足すことにした。トイレも本物の鉄道車両そっくりに、流れる水の量や動き、音まで完全に再現している。床下に貯留式のタンクでもありそうだ。

食堂車に向かった。大和さんが言っていた鍋はもつ鍋で、厨房で作ったものを各自の席に運ぶべく鹿島さんと大和さんが忙しく働いていた。

「あ、劔さんも手伝って下さいよ！」

大和さんは居酒屋にいる時と同じように、小さな体で

ちよこまかと食器や飲み物を配膳していく。僕は言われた通りに食器を運ぼうと厨房に向かった。

厨房では釜田さんと羽黒さんが一緒に料理をしていた。

「お前、筋が良いな。俺の店で働かねえか？」

「い、いえ、その、あの……」

褒められた羽黒さんは顔を真っ赤にしているが、それでも手は休めずに熱した油から野菜のかき揚げを引き揚げている。

「あの、羽黒さん」

「ひや、はい！……あ、劔さん。どうしたんですか？」

彼女は驚いたように肩を震わせ、相手が僕だと分かる少し安心したようだ。

「一つ聞きたいことがあるんです。いえ、大した事ではありません」

女子大生は少し首を傾げ、僕の質問を待った。僕がした質問に羽黒さんは少し記憶を引っ張り出そうと考えこみ、そして答えてくれた。

「なるほど、やはりそういう意味ですよ。どうも。さすが、大学で方言を勉強したがついていただけのことはありますね」

「おい、劔。そんな事を聞いてどうすんだ？」

僕はどう答えようか迷った。

「ちよつと、鎌をかけてみようと思ひまして」

「鎌をかけるって、誰にだよ？」

「秘密です。まだ確証が持てないので」

釜田さんはそれ以上追及せず、僕の分のもつ鍋を取り分けてくれた。

「鹿島と鳥海、それに比叡の分も盆に載せてある。ついでに持って行ってくれ。冷めるとまずいから先に食べててくれ」

そう言われて厨房を出て席についた。都合のいいことに、今夜は鹿島さんと鳥海先生、それに比叡さんと相席だ。

「もつ鍋なんて久しぶりだなあ……」

「私も年末に学生にご馳走して以来です」

比叡さんと鳥海先生とは対照的に、鹿島さんは特に反応を示さずに黙って箸をつけた。いきなり何者かに夫を殺されたのだ、無理もないだろう。

「気分はどうですか、鹿島さん？」

僕の問いかけには辛うじて愛想笑いを浮かべた。

「まあ、何とか大丈夫です」

そう言う割に、太めの体はどことなくしょぼく見えた。

「マスコンキーは役に立ちましたか？」

「え？ ああ、まあ。もしかしたらまた見せてもらうかもしれませんが、構いませんか？」

快く……というか、割とどうでもよさげに了承してくれた。だいぶ心労が出ているように見える。

「あ、そうだ。鹿島さん、一つ聞きたいことがあるんです。鹿島さんって10年前に高知で鉄道模型の品評会みたいなものに出ませんでしたか？ 山鳩会長と一緒に」

鹿島さんはもつを口に運ぶ手を止めた。

「え、ええ。播磨社長の葬儀の直後でしたが、あの会は年に一度開かれる模型メーカーにとって大事な集まりなので、よほどの事が無い限り欠席はできませんでした。」

『エルム模型』の場合、先に山鳩会長の部屋でご覧に入れたリニア新幹線の模型を展示する予定でしたので、猶更。最も、よほどの事が起こってしまい、夫と一緒に秋田にとんぼ返りすることになりましたが……」

鹿島さんは隣のテーブルでもつ鍋に舌鼓を打つ敷島取

締役の方を少し見た。よほどの事、というのは三辺製作所の放火で警察に呼び出されたことを指すのだろう。

「どうやって高知まで行ったんですか？ やっぱり土讃線ですか？」

鉄オタらしい質問をするが、本題はここからだ。山鳩会長のアリバイがどのようなものなのか、妻の口から改めて語ってもらおう。

「ええ。あの時は私も山鳩会長も葬儀をこの館の近くの火葬場で終えて、そのまま高知に向かうというタイトなスケジュールでした。秋田から羽田に最終便で出たのですが、あいにく羽田に着いた時間には高知への最終便に間に合わないことが分かりました。高知での会は正午開始だったので、私たちは最終の新幹線で名古屋に向かいそこで一泊、翌日に土讃線で高知に向かうことにしたんです」

「わざわざ名古屋で一泊せずとも、東京で一泊すればよかったですじゃないですか？ そうすれば翌朝に高知に行く始発便が使えますし」

比叡さんが話に割り込み、湯気の立つ豆腐を熱そうに口に運ぶ。

「夫が土讃線に乗ってみたいって言いまして。何というか、鉄道模型メーカーを担う者の性とでも言うんでしょうかね」

そして翌朝、岡山を9時前に出る『南風』で高知に向かい、そのまま会の人に出迎えられてまっすぐ会場まで向かったという。土讃線に乗るなら別に往路である必要はなく復路でも良さそうなものだけど、とりあえず黙って先を促した。

「担当者がホームまで迎えに来てくれました。私も夫も車を運転しないからタクシーで行くと話したら、わ

ざわざと迎えをしてくれたんです。会場に着いた時にはサミットの開始時刻まであまり時間が無く、そのまま登壇しました。葬儀明けで疲れている所にしんどかったのを覚えていきます」

「道中では山鳩会長とずっと一緒だったんですか？」

「ええ、もちろんです。風呂も部屋のものを使ったので、大浴場で別れたりということもありませんでした」

つまり、山鳩会長と鹿島さんには強固なアリバイがあるということだ。

「話は変わりますが、白根さんって覚えていますか？ 播磨社長が亡くなった時にこの館でお手伝いをしていた方ですが」

「ああ、彼女ですか。覚えていますよ。料理の手際が良かったのですが、葬儀が終わってしばらく後に辞めてしまいました。やはり、播磨社長の死に方が不可解だったのが不気味だったのでしよう。今までの仕事ぶりを考慮して、退職金にも色を付けました。その後も賀状のやり取りなどで親交はあったのですが、震災の津波で亡くなったらしく……惜しい人を亡くしました」

初めて聞く話も多いが、事前に入手した情報と特に矛盾する点はない。

「白根さんはこの館の手伝いだけしていたんですか？ 羽黒さんみたいに」

「ええ。ただ、葬儀やその直後の高知出張など、多忙を極める時には色々と事務的な手伝いをしてもらったことがあります。岡山の宿の手配なども彼女に。私は葬儀のあれこれでそこまで手が回らなかったのです」

白根さんについてはこれ以上聞く内容が思い浮かばなかった。僕は少しゆるくなったかき揚げを一つ食べ、鳥海先生に話を振った。

「鳥海先生は明日の仕事は大丈夫なんですか？ 今日のうちに戻ると聞いていましたが」

「事情が事情ですから、大学に了承を得て明後日辺りまでここに留まることにしました。事件が解決したら戻りますが」

「お疲れ様です。さ、まあまあ一杯」

「いえ、剣さん。私はアルコールは……」

「これはノンアルコールビールですよ、先生」

僕もこの事件を目の前にして酒を飲むほど豪胆ではない。鳥海先生もそういうことなら、とグラスを差し出した。

「おおっと、まけるまける」

手元に乱れを生じさせ、ビールをこぼしそうな勢いでグラスを満たす。

「ちよっと、勢いよく入れすぎですよ、剣さん」

鳥海先生は少し笑いながらグラスを一息に空ける。僕の手からビール瓶を取り、僕にも注ぎ返してくれた。光の加減で濃厚にポマードを塗られた頭髮が光る。

「これはどうも」

僕もグラスの中身を一気に飲み干した。

「鳥海先生は交際経済字の中でも、特にどのような分野を研究していらっしゃるんですか？」

僕は以前から疑問に思っていたことを聞いてみた。

「私は、そうですね……主な研究テーマは大都市の通勤ラッシュとその対応についてです」

「なるほど、昔の通勤五方面作戦とかについても調べたりしているんですか？」

僕はそう聞いて、もつ鍋の器を空にした。

「ええ。SM分離やグリーン車サービスの展開、ホームライナーの拡充から衰退、多扉車の導入とホームドアの

関係、複々線化工事……近年の例だとそんなところでしょうか」

「多摩線とホームドアといえば、東急田園都市線が有名ですよ」

「あそこは沿線開発をやりすぎましたからね。通勤ラッシュ問題は沿線開発や街づくりとも密接に関わる問題なので、田園都市線の例は興味深いです」

「逆に路面電車、とでんとかはどうですか？」

「さあ、島海先生はどう答えるか。」

「土電ですか。あれは市の中心部を担う基幹交通ですし、頑張つてほしいですね。高知市の場合は山と海に囲まれた僅かな平地に人口が密集しているので、バスよりも大量に輸送できる交通手段ある路面電車は有利だと思います。ただ、マイカーや自転車との競争を考えると、官民一体となって街づくりと抱き合わせで支援しないと先行きは不透明でしょう」

なるほど、そつちか。前置きはこれくらいにして、僕はそろそろ本題に入ることにした。

「街づくり問題も絡めた内容で論文も書いていらつしやるんですか？」

「ええ。論文の話を出したということは、もしかして私が安政大を辞職した時の話を聞きたいのですか？」

島海先生は肥虫類のような冷やかな視線を僕にぶつける。お見通しなら仕方ない。僕はあっさり肯定して、そのまま話を引き出すことにした。

「ええ。ただ、僕は島海先生が捏造とかそんなあくどいことをしたかどうかは判断しかねます。指摘したのが、えーと、誰でしたっけ？」

わざとすつとぼける。

「安政大の島風教授ですね。そういうえば、高知の山奥で

殺害されたとか警部さんが言っていましたか？」

「らしいですね。物騒な世の中になりました」

一瞬、島風教授を殺害したのは島海先生ではないのか？ という疑問が頭をよぎった。しかしそれはあり得ない。この人は昨夜この館から出ていないし、仮に出たとしても一晩で高知と秋田を往復できるはずもない。

「安政大の方とは今はもう親交は無いんですか？ かつての教え子とか」

「教え子くらいなら今でもたまに飲んだりしますが、それくらいですね。就職の世話をした生徒には、幸いにも今でも慕われているので。まさかその生徒が就職した先に追い出されるとは思いませんでしたか……ああ、こっちの話です。教授陣とは学会とかでお会いするくらいでしょうか。仕事柄、お役所会議に出席したりテレビ対談に出たりすることはありますが、そんなところですよ」

全体的にはあまり親しいお付き合いをしているわけではなさそうだ。教え子の話は少し気になったけど、今は置いておこう。

「安政大を退職されたのとはほぼ同じ時期に離婚も経験されたそうで……大変でしたね」

島海先生は僕の発言に眉をしかめた。

「ええ。色々ありましたので……そういうえば比叡さん、カメラマンの方はまだ見つからないのですか？」

離婚の話は禁忌のようで、島海先生は話題を変えた。話を振られた比叡さんは表情を曇らせた。

「それが、全然なんです。携帯もパソコンも部屋に置きっぱなしだったとはいえ、何かしら連絡があっても良さそうなものなのに……」

「心配ですね」

僕の隣で比叡さんも心労を隠しきれていない。

「それで、剣さん。今回の事件は解けそうですか？」

「へ？」

比叡さんの間に僕は素つ頓狂な声を上げた。鹿島さんと島海先生も変な顔で僕と比叡さんを見比べている。

「妹から聞いたんです。剣さんはかなり頭が切れる人で、今までも事件を解決してきたって」

僕はそつと横目で隣のテーブルに座った大和さんを睨んだ。でも、遅かれ早かれ明るみに出た事だろう。

「買い被りすぎです。僕は今まで巻き込まれただけで、事件そのものは全て警察が解き明かしました」

「またまた、探偵が警察に手柄を譲るのはミステリではお馴染みじゃないですか」

島海先生や鹿島さんも興味を持ったようだ。僕と比叡さんをちらちらと見比べている。

「それで、どうですか？ 水郷さんの行方は分かりそうですか？」

比叡さんが茶化したような口調で聞く。でも、眼差しは真剣そのものでギラギラと僕を射抜いていた。

「それなんです、全く分からないんです。僕なりに考えてみたんですが、彼女が消えた方法も消える理由も彼女の居場所も、まるで見当がつかみません」

雑誌記者は少し落胆したようだ。

「すみませんね」

「いやいや、私も全然当たりが無くて……」

正直なところ、彼女がこの館から出ていないとすれば生きていくかどうかは五分五分な気がする。しかし、そんなことを比叡さんに言えるはずも無かった。

そもそも、なぜ彼女は消えたのだろうか？ まず、彼女の意思で消えたかどうかを考えてみる。正直、この線は無いだろう。着の身着のまま荷物を全部放り出して逃げ

出すとは思えないし、彼女が部屋から出た様子は監視カメラにも確認されていない。つまり、彼女は犯人にとつて都合の悪い物を見てしまい、消された可能性がある。でも、彼女しか見ていない都合の悪い物とは何なのか？ 彼女以外には見ていない可能性が高いと思うけれど……。

……駄目だ、さっぱり分からない。

では、彼女はどうかやって部屋から消えたのか？ ……分からない。警察が入念に調べたものの、部屋の中に隠し扉の類は無かった。つまり、彼女はドアから部屋を出たことになる。でも、廊下の監視カメラにはそのような映像は残っていなかった。

……駄目だ、さっぱり分からない。

一度、誰もいないところでゆっくりと情報を整理したかった。いや、瑞穂さんを助けに行くことを考えると悠長に考えている場合ではないが、焦っても妙案は浮かばない。

「お先に失礼しますね。ご馳走様でした」

僕は一足先に食堂車を後にしようとしたが、ちょうど矢野警部が入ってきた。僕を見つけ、まっすぐ近寄ってきた。

「剣さん、ちょっと」

有無を言わさぬ雰囲気僕を食堂車から連れ出し、廊下の踏切の辺りで立ち止まった。

「まずはこれ、白根さんの写真です」

お礼を言って受け取る。ベリーショートな黒髪をした線の細い女性だ。スレンダーな体形は瑞穂さんとかなり似ているが、雰囲気はまるで違う。

「そして、播磨社長の妻だった妙高さんについても調べたのですが、それが……」

矢野警部は困惑した表情のまま、どう言えばいいのか迷っているようだった。

「妙高さんがどうしたんですか？」

「それが……殺されました。つい昨日」

少しの空白があつて、僕は思わず大声を上げそうになった。

「殺されたって、どういう事……」

ですか、とまで言いかけたところで僕は気付いた。妙高真理という名前の既視感の正体に。

「矢野警部、妙高さんってまさか」

「お気付きになりましたか」

矢野警部はごくりと唾を飲み込み、僕の考えが正しいことを告げた。

「妙高真理さん、彼女は……」

\*確水瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

夕食を終えて自室に戻ると、ちょうど7時のニュースが始まるころだった。国会の話、経済政策の話、スポーツニュースに混じって高知と秋田、それぞれで起きた殺人事件についても少しだけ触れられていた。

『次のニュースです。東日本大震災の発生から間もなく3年を迎えますが、被災地では祈りの準備が進められています……』

画面右下に『津波の映像が流れます』とのテロップが流れた。思わず鳥肌が立つ。

悲鳴。

泣き声。

それらを全て飲み尽くすような、どす黒く邪悪な絨毯

による蹂躪

私がただの人だったら、逃げてよかったと思う。テレビを消して、目と耳を塞いでうずくまり、愛する人の庇護に身を任せればよかったのだろう。

でも、私にはそれができない。いや、それが許されない。

あの黒い大波のどこかに、私が殺した男が巻き込まれている。

私はそれを見届けなければいけない。誰も私を裁くことができない以上、私は何度でもあの日の中で繰り返し、井上を生かし続けなければならない。だから私は、目を背けない。逃げない。

映像が消え、気が付くと次のニュースに移っていた。私の息は荒く、拍動は大きく、掌にはべつとりと冷や汗が滲んでいた。

これを死ぬまで続けるのか。

でも、私が決めた道だ。私が決めた生き方だ。弱音を吐いても、泣き言を言っても、後悔だけはしない。後悔するべきは、あの日に刃物を突き立てたことだ。あの日に何もせずにしたことだ。

天気予報のコナーになった。桜前線の予報が既に始まっている。

それにしても、ここにはお母さんの墓参りに来ただけのはずなのに、どうしてこんな大事になってしまったのだろう。

『……冬の寒さは収まり、明日は全国的に南風が強い春めいた天気になるでしょう。気象情報でした』

気象予報士がそう締めくくり、ニュースは終わった。

そのまま動物番組に移るが、私はテレビを消した。今日の動きについて振り返ると、広縁の椅子に座って目を

閉じる。しかし、誰かが部屋の扉をノックした。

「はい」

ドアを開けてみると、霧島さんが立っていた。スーツを脱ぎ、厚手のポロシャツにジーンズという軽装だ。

「碓氷さん、八雲警部から連絡が来ました。常盤さんの裏口入学について詳細な情報です」

それは無視するわけにはいかない。私は官僚を部屋に通し、広縁の椅子に座らせた。

八雲警部と沖刑事が調べたところによると、島風教授の手引きで常盤が裏口入学したのは事実で、常盤さんが何者かからそれをネタに脅迫されていたことも事実だった。

「ですが、誰が常盤さんを脅迫してここに泊ませたのかは不明だそうです。筆跡鑑定、指紋鑑定、監視カメラの映像解析、色々やったそうですが決め手に欠けるらしくて」

「でも、それを知り得るとしたら大学関係者ですよね？」

霧島さんは頷いた。

「ただ、その大学関係者がこの宿にいるかと考えると……」

その可能性はかなり低いと思う。殺害された島風教授と脅迫を受けた常盤さん以外には、この宿には男子大学生トリオしかない。でも、その三人が裏口入学の事実を感じできるのかはかなり疑問だ。

「黒潮警部や瀬戸刑事も色々調べてくれたんですが、この宿にいる人物で動機を持ちうる人間は常盤さんしかいなさそうですね」

話はここで振り出しに戻ってしまう。常盤さんが何者かに脅迫されていた事実が今回の殺人事件と無関係なはずはない。この宿に泊まるように強制されたのだから。

でも、脅迫主が殺人に直接関与していないのもまた事実である可能性が高い。

「どうなってるのよ……」

頭がぐらくらくしてきた。霧島さんも似たような感じらしく、頭を抱えて黙り込んでしまった。

「碓氷さん、剣さんと連絡取れますか？」

「ええ、取るには取れます。でも、あの人も今は自分のことで手一杯なんじゃないかと」

「ですよええ」

霧島さんは考えるのを諦めたのか、天を仰いだ。

「碓氷さんはどう思いますか？ 常盤さんが犯人だと思いますか？」

私は答えに窮した。まるで分からないはずなのに、私の直感には別の答えを言わせた。

「正直、常盤さんとは別に真犯人がいると思うんです。誰かは分かりませんが」

「そういう時は勘ですよ。僕の嫁もそうですが、女の勘って怖いんですよ。誰が真犯人だと思いますか？」

私はまた答えに詰まった。

誰が真犯人か？ あのゼミ生男子大学生トリオか？

料理人の津軽さんか？ 支配人さんか？ 女将さんか？

目の前にいる霧島さんか？

「あくまでも勘ですけど、その……強いて言うなら……」

\* 剣礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

繋がっている。

播磨社長の妻の正体を聞かされ、僕は確信した。

この『電車館』での事件と高知の旅館『吉野川』での事件は、絶対にどこかで繋がっている。

だったら猶更、今すぐにも瑞穂さんの所に行かないと。

でも、警察が無条件に僕をこの館から出してくれるはずがない。

どうする。最低限、この館の謎だけは解かないと解放してもらえない。

考える。何が怪しい？ 何を調べたい？

湾曲した廊下の真ん中で僕は立ち尽くし、必死に頭を振り絞る。でも、考えれば考えるほど思考が空回りし、ますますどかしい。

廊下で立ちっぱなしなのが良くないのかもしれない。部屋に戻ってじっくり考えることにした。湾曲した廊下を曲がった先に部屋の入口があり、ドアボタンを押す。中に入るまでの30秒、僕はあることに気が付いた。

どうして部屋は四角いのに、廊下はカーブしているんだ？

僕は部屋に入り、手帳にボールペンで館の見取り図を描いてみた。玄関、階段、応接室、客室、廊下、食堂車、踏切……。

「まさか……そんな、まさかそんな事が……!？」

僕の頭に走った光景は、にわかには信じられないものだった。でも、確かめてみる価値はある。

僕は部屋を飛び出して、応接室のガラス柵に向かった。マスコンキーをひっ掴み、部屋に引き返す。

運転台の前に座った。本物の鉄道車両なら目の前には長く伸びる線路が見えるはずだが、今はテレビ画面が鎮座している。

僕はマスコンキーを運転台の鍵穴に差し込み、回した。

まずは、本作をここまで読み進めてくれた読者諸賢に心からの感謝を申し上げる。ここまで提示された様々な謎に挑み、確氷と劔の苦闘を楽しんで頂けたのであれば、作者としてそれに勝る喜びは無い。

次章よりこの作品に散りばめられた謎が集約され、全体像が暴かれ始める。そして、最後には全ての謎が解き明かされる。

山鳩宗吾を殺害したのは誰か？

犯人はどのように密室殺人を遂行したのか？

島風真理を殺害したのは誰か？

水郷真矢はどこに消えたのか？

播磨敦史の死亡は本当に事故だったのか？

三辺治作が殺害された理由とは何か？

犯人が放火で消したかったものとは何か？

常盤を脅迫した人物は誰なのか？

『電車館』に隠された秘密とは？

これらの事件はどのように絡み合うのか？

残念ながら、手がかりはまだ完全に出揃ってはいない。

しかし、偽りの推理が役目を終え、探偵たちによる真の推理が始まるまでには、全ての手がかりが提示されることを約束しよう。

どうか賢明なる読者諸氏には、一度ここでページをめくる手を止めて推理して頂きたい。全ての謎と伏線を吟味し、ほんの少しの想像力を加えたら、確氷と劔に先んじて真相を明らかにすることができるはずだ。

私は読者に挑戦する。

\* 劔礼士 —— 秋田県横手市・『電車館』

暗闇の中、僕は自分の推理を反芻する。

トリックが分かった。

僕の推理が正しかったら、山鳩会長を殺害した犯人はあの人だ。

でも、あの人を犯人とするには致命的な弱点がある。

動機が分からない。あの人に山鳩会長を殺害する理由が全く思い当たらない。

でも、あの人が犯人だとすれば……瑞穂さんが巻き込まれた事件にも光が差すかもしれない。

僕はある機械を見つめながら、今後の身の振り方を考えた。どうやって犯人を追い詰め、瑞穂さんを助け出すか。

犯人を追い詰めるには、いささか危険な橋を渡るしかないのかもしれない。

僕は意を決して、再び機械を操作した。まずはこの館を脱出するのが先決だ。本当に申し訳ないけれど、彼女には身代わりになってもらおう。

\* \* \*

僕ははやる心を抑えながら、まずは釜田さんと大和さん、それに比叡さんを探した。この二人には、現時点で分かっている事を全て話しておかないといけないだろう。

幸いにして、大和さんはすぐに見つかった。羽黒さんと揃って食堂車の厨房で食器の片付けをしていた。

「大和さん、釜田さんと比叡さんを見かけませんでしたか？」

彼女はくりくりした目を瞬かせ、少し記憶を辿る。

「お姉ちゃんはまだご飯を食べています。釜田さんは確か、トイレに行くって言って出ていきましたよ」

仕方ない。とりあえず大和さんに先に話してしまおう。そう思っただけで彼女を厨房から連れ出そうとしたら、当然の釜田さんが駆け足で帰ってきた。

「おい、劔！ まだだ！ また踏切が動きやがった！」

息を切らしながら報告したその内容は、僕の推理を裏付けるものだった。

「……何だ、あまり驚かぬえな？」

「僕が動かしませんでしたからね」

釜田さんはきよとんとした表情をし、そのまま脱力したように大きな溜息をついた。

「んだよ……お前の仕業か」

僕は苦笑いをしようとしたが、そんな事をしている場合ではない。ちょうど比叡さんも食器を下げにこつちに来た。羽黒さんに厨房を任せ、僕は強引に釜田さんと比叡・大和姉妹を部屋に連れ込んだ。

「劔さん、一体何なんですか!？」

「ちよつと、どうしたんですかあ!？」

「おい劔、えらく手荒だな? どうした?」

三人は口々に文句を言うが、僕の一言で黙り込んだ。

「犯人が分かりました」

\* \* \*

そのまま僕は手短かに犯人とトリックを説明した。

「……本当か? 疑うようですまねえが、いくら何でも一口で飲み込めるような話じゃねえな。まあいい。仮に

そいつが犯人だとすると、どうするんだ?」

釜田さんが糸のように細い目を鋭く僕に向けた。半信半疑のようだが、無理もない。

「犯人は分かっていたのですが、一つ重大な問題があります。動機が全く分からないんです」

僕はそのまま話を続ける。

「ここでの事件と、瑞穂さんが巻き込まれた高知での事件は確実に繋がっています。なので、この館にいる人物の中で高知との繋がりが見出せたあの人が犯人である可能性が極めて高いです。あの人にこの館での犯行は可能ですが、動機を明らかにするには……そして、高知で起きた事件の犯人を明らかにするには、どうにかしてあの人を高知に連れて行かないといけません」

「あの人を囚に高知の犯人をおびき出すつもりですか!？」

大和さんが声を張った。

「ええ。犯人の動機を見破るために、ここでは偽の推理を展開して油断させます。その上であの人を連れて瑞穂さんの所に行きます」

「行くって、今からですか!？」

「事態は一刻を争うんですよ、比叡さん」

雑誌記者の素っ頓狂な声をなだめつつ、内心で僕はじりじりしていた。瑞穂さんに今すぐ危険が及ぶとは考えにくいけど、それでも不安に駆られていた。

「確氷の所に行けば、犯人もぼろを出すんだな?」

「ええ。高知の方の事件の犯人が明らかになるはずですよ」

釜田さんは腕組みを解き、両手を腰に当てた。

「それなら決まりだな。俺も一緒に行く。劔にだけ美味しい思いをさせるわけにはいかねえからな。ただ、あいつ



が高知に行くなんて、そんな簡単に飲むか？」

「策はあります。あの人がこの館で起きた事件の犯人なら必ず承諾するはずですよ」

僕は強調した。釜田さんは大和さんの方を見た。

「大和、お前は どうする？」

「どうするって、行くしかないじゃないですか！ 私だって先輩のことが心配なんですよ！ お姉ちゃんも行くでしょ？」

「ここまで来たら今更引き返さないでしょ」

三人は歯を見せて笑い、僕は頭を下げた。

「……ありがとうございます」

5分後。僕は館の全員を部屋に集めた。

\* \* \*

全員が一部屋に集まると、さすがに狭い。比叡・大和姉妹は二段ベッドの上段に座ってスペースを開けてくれたが、それでも狭い。

「我々を集めてどうしたのですか、剣さん？」

矢野警部が不審げに言った。

「犯人やトリックでも分かったのですか？」

「その通りです」

僕の放った一言に、部屋の空気がどよめいた。

「本当ですか、剣さん？」

鳥海先生が驚きと訝しみを混ぜこぜにした表情で確かめた。僕ははっきりと頷き、この場にいる全員を見渡した。

「……誰なんですか、犯人は？」

鹿島さんが口火を切った。僕は心の中で謝罪をし、そして推理を語り出す。

「山鳩会長を殺害した犯人は水郷さんです」

寝台の上段で、比叡さんが小さな悲鳴を上げた。僕は

無視して進める。今は時間が無い。

「残念ですが、彼女はもう亡くなっています」

\* \* \*

再度放たれた比叡さんの悲鳴を無視する。今は亡き水郷さんが犯人だと前置きして、僕はそのまま推理を続けることにした。誰かに口を挟ませる時間は無い。早くしないと列車に乗り遅れてしまう。

「論より証拠です。今から皆さんには水郷さんに対面してもらいます。少し揺れるので、座るなり何かに掴まるなりして下さい」

僕はそのまま部屋の隅にある運転台に歩み寄った。

「鹿島さん、申し訳ありませんがマスコンキーを拝借させて頂きました」

マスコンキーを運転台の鍵穴に差し込み、回した。数秒の沈黙、そして。

ジリリリリリリリ！

「きゃっ！？」

「ひゃっ！？」

羽黒さんと大和さんが同時に悲鳴を上げた。

「ATS、よし」

僕は操作を開始する。ベルの鳴動はキンコンキンコンという持続音に代わり、計器類のメーターが動き、ランプ類に灯が点く。そして、運転台前のテレビが起動する。

「皆さん、この館に来て疑問に思ったことはありませんか？ なぜ廊下に踏切があるのか？ なぜ廊下は曲がっているのに部屋はみな四角いのか？ なぜ一回客室のドアは幌で接続される形式なのか？ なぜ上下水道が完備されているのにバキュームカーが下水回収に来るのか？」

なぜ綾辻行人の『館シリーズ』が図書室で場違いに置かれているのか？ なぜ館中に鉄道模型が敷き詰められているのか？ なぜこの建物は山にめり込んだように建てられたのか？ なぜこの館は『電車館』という名前なのか？」

機関銃のようにまくしたてる疑問点は、既に僕が通り過ぎた道筋だ。

「播磨社長は晩年にこう語っていたそうです。『自分だけの本物の鉄道を持つことができた』と。山鳩会長はそれを、この館に敷き詰められた鉄道模型のことだろうと教えてくれました。しかし、結論から言ううそれは間違いです。播磨社長は本当に鉄道を持っていたんです」

進路が開通し、運転台のATS装置が作動する。テレビ画面の奥に青信号が灯り、制限速度が表示される。僕はいつものように運転前の各種試験と視差喚呼を行い、そしてマスコンレバーを操作する。

「戸じめ、よし。進行信号点灯、よし。進路、よし。出発進行！」

マスコンを動かした数秒後、室内にどよめきが走った。

「何ですか、揺れますよ！？」

「やだ、地震！？」

「いえ、これは地震ではありません」

敷島取締役と羽黒さんの悲鳴を遮り、そして僕はこの『電車館』の秘密を明かす。

「この館の一階客室は、それぞれが個室した電車なんです。この館には本物の鉄道が隠されていたんですよ」

運転台前方のテレビカメラには、部屋からは直接見え

ない本物の線路が映し出されていた。

\* \*

「……な、何を馬鹿げたことを言い出すんですか」

大塚刑事が声を上ずらせて反論した。にわかには信じられないようだ。無理もない。

「ええ、最初は僕もまさかと思いましたよ。ですが、この部屋が鉄道車両だとすると、先程列挙した疑問点にはほぼ全て解答が与えられるんですよ」

僕はテレビ画面から目を離さずに返事をする。

「皆さん、少し静かにして耳をすませて下さい。面白いものが聞こえるはずですよ」

全員が黙り込み、部屋の中には僕が運転台を操作するガチャガチャという音と、車輪がレールの継ぎ目を渡るガタンゴトンという音だけが響いた。しかし、少し待つと別の音も聞こえ始めた。

「……踏切の音、ですか？」

大和さんが寝台の上段から正答を言い当てる。僕が答えるまでの一瞬の静寂を、僅かにカンカンという警報音が包み込む。

「ええ。今、僕たちが乗っている電車は廊下に設置された踏切を通過しています」

「馬鹿な、あそこには電車が通るような空間も、線路もありませんでしたよ？」

矢野警部が反論する。

「ええ。隠されていたんですよ。木を隠すなら森の中に、死体を隠すなら戦争の中に、床を隠すなら床の中に、線路を隠すなら線路の中に」

「G・K・チェスタトンの『折れた剣』ですね」

「折れた剣？ 何だそりゃ？」

羽黒さんは一人だけ先に話が飲み込めたようだ。釜田さんはよく分からないらしく、女子大生に説明を求めた。

「イギリスの作家、チェスタトンが書いた名作ミステリ短編集『ブラウン神父』シリーズの中でも特に傑作と名高い短編が『折れた剣』です。剣さんが今言ったようなことを犯人はやつてのけるんですよ」

筋金入りのミステリマニアであることを改めて思い知らされた。

「羽黒さん、ついなので綾辻行人の『館シリーズ』についても皆さんにざっくりと説明してもらえますか？」

「は、はい」

そのまま彼女は図書館に置かれていた本について簡潔に説明した。その間に僕はテレビ画面に表示された停止位置に合わせるようにブレーキハンドルを操作した。

「へえ、それは変な話ですね。鉄道に関係無い本がこの館に置かれているなんて。普通なら場違いですよ、ハイ」

羽黒さんの説明を聞き、敷島取締役が首を捻った。

「ですが、この館の秘密を知ると決して場違いな本ではないことが分かります。この館もまた、『館シリーズ』のようにからくりを抱えた館なんですから。……停止位置、よし。駐車ブレーキ、よし」

ぎい、と錆びついた音を上げて僕は電車を停車させた。運転台の前から立ち上がる。

「これで二つの疑問が解消されました。『館シリーズ』の存在は、恐らくこの館の正体を告げる播磨社長遊びの心でしょう。踏切の存在は、文字通り電車が通るからです」

そのまま僕は人の間を縫うように進み、ドアの前に入る。

「さて、部屋の外に出ましようか。水郷さんが待っています」

『あける』のドアボタンを押した。今回は待ち時間などなく、すんなりと開いた。

\* \*

明かりは天井の照明がいくつかあるくらいで、室内は薄暗い。僕はいの一番に部屋から降りた。鉄格子で組まれたホームが設置されているため、足場には困らない。

「ここは電車の修理工場みたいですね。皆さん、降りてみて下さい」

ぞろぞろと人が降りてきて、少し怯えたように周囲を見回す。ほぼ立方体の空間で、壁も天井も全て無機質な打ちっぱなしのコンクリートで覆われている。線路はホームが終わった所で途切れているが、その先のコンクリートの壁には古い傷跡が残っている。何か重たいものがぶつかり、壁を砕いたようだ。僕はそれを見て自分の推理に確信を深めた。

しんがりを務めた大和さんがあることに気が付いた。

「何だかここ、暖房も無さそうな割に暖かくないですか？」

「よく気付きましたね、大和さん。僕も同感です。恐らく、ここは山の中を掘って建てられたスペースなんですよ。この館が山の中にめり込むようにして建てられているのは、このスペースを隠すためだったんじゃないでしょうか」

「山の中ですか、トンネルを考えれば暖かいのも納得できますね。トンネルの中は温度変化が小さいため、夏場

は涼しく冬場は暖かい」

鳥海先生の補足もあって、生暖かい室内はさらに暖かく感じられた。

突然、比叡さんが叫び声を上げた。

「水郷さん！」

彼女は部屋の隅の方に倒れていた。赤く染められた髪が生氣を失って乱れ、床に波打っている。

「触るな！」

矢野警部が鋭く静止したが、比叡さんは構わず倒れた彼女に駆け寄ろうとした。犬塚刑事が羽交い絞めにして比叡さんを取り押さえる。

「矢野警部、まだ下手にホームから降りないで下さい！死にますよ！」

僕は鋭く怒鳴った。矢野警部はそれを聞き、階段の所で立ち止まった。

「安全に降りるにはまだいくつかの操作が必要です」

そのまま僕はホームの壁に近寄り、レバーを操作する。電車への送電を止めた。

「皆さん、このレバーには絶対に近寄らないようにして下さい。矢野警部、犬塚刑事、誰かがこのレバーに近寄ろうとしたら何があっても止めて下さい。さもないと高圧電流でみんな感電死します。言うことを聞かない場合、射殺してもいいでしょう」

「射殺ですか！？」

一同、特に警察コンビは啞然とした表情をした。でも、これくらい強く言っておかないと危ない。

「今、電車に送電される高圧電流を止めました。もう地面に降りても大丈夫です」

僕はそれを証明するように、階段を下りて地面に着地した。それを見て、他の人もわらわらと後に続く。

「送電を止めたので大丈夫なはずですが、一応電車や線路からは離れていて下さい」

僕はそう念押しし、矢野警部と犬塚刑事を水郷さんの所に案内した。彼女は線路から数メートル離れた所に横たわっており、床には線路から這ったような痕跡がある。

矢野警部が首筋で脈を取り、スマホライトで瞳孔の開きを調べる。そして首を横に振った。

「駄目ですな。剣さんがおっしゃった通り、既に死亡しています」

「そんな……」

比叡さんはへなへなと座り込みかけ、大和さんと鹿島さんが慌てて両脇から支えた。

「死因は恐らく感電死でしょう」

「その可能性は高いですな、剣さん。ほら、耳のピアスをご覧下さい。金属に通電したせいか、耳の皮膚が焼け焦げています」

「金属製のアクセサリを付けたままAEDを作動させた時にも似たような現象が起きますね……死亡から1日近く経っているんじゃないですか？床の跡を見ると、どうにかして電車から逃げようと這いまわったものの力尽きた……というところでしょうか」

矢野警部と犬塚刑事の簡単な遺体見分が済むまで僕は黙っていた。見るものを見たのか、やがて警察コンビは立ち上がった。

「えー、しかし剣さん、どうしてそこまで感電のリスクを恐れるのですか？」

敷島取締役が胡麻塩頭を捻りながら尋ねた。

「この部屋が電車だということは、電気で動くからで

す。電車は基本的に外部から常時給電しながら走行します。この電車を見る限り、大容量バッテリーは積んでいないように思われます。つまり、どこかに電気の供給源があるはずですよ」

僕は釜田さんの方を見た。

「釜田先生、給電システムについての講義をお願いします」

「だからその呼び名はやめろって……講義、か。懐かしいな。いーぜ、特別授業だ。よく聞けよお前ら、ここニテストに出るぞ」

僕が養成所で授業を受けていた時と寸分も変わらない口調で釜田さんは解説を始めた。

「電車ってのは車輪をモーターで回して走る。電気の種類には色々あるが、電圧だけで種類分けすると、直流1500ボルトか交流20000ボルト、新幹線だとパワーアップして交流25000ボルトだ。直流だと600ボルトって例外もあるが、いずれにせよ1500ボルトくらいなら架線に触らねえ限りは感電のリスクはねえ。だが交流の場合、あまりに近寄りすぎると空気を介しても感電しちゃうことがある。……剣、ここは何ボルトだ？」

「近くの奥羽本線と同じ電力を使っているのなら交流20000ボルトでしょうけど、さすがにこんな小さな電車ですれは無いでしょう。かと言って、家電製品とはまるで違いますからね。直流600ボルトくらいじゃないでしょうか？」

釜田先生の特別講義は続く。

「そうだな……羽黒、電車はどこから電気を取り込むとスう？」

「え、えっ。私ですか!？」  
まるで電車で詳しくない女子大生は困惑したように首を捻り、一緒に銀の髪飾りが揺れた。

「えー……分かります。電線とかあるんですか？」  
「一般人にしちゃ出来た。鳥海先生、教えてやってくれ」

「架線、もしくは第三軌条を介した給電ですね」  
「ああ。架線つてのは電車の屋根の上に渡した電線のことで、電車はそこからパンタグラフを介して電気を取り込む。第三軌条つてのは、線路の真横に給電用に専用のレールを置く。三本目のレールだな。そこから電車の台車に取り付けた集電靴つていう専用の機械を介して電気を取り込む。電気鉄道の給電方式はほぼ全てがこの二択だ。この電車は……」

釜田さんは後ろに停まっている電車を見て、思わず言葉を切った。

「おい、剣。この鉄道、架線も第三軌条もねえぞ？」  
「そうなんです。さて皆さん、ここで少し考えてみて下さい。鉄道模型はどこから給電しますか？」

「どこって……それこそ架線じゃないんですか？」  
大和さんがあまり考えずに言う。僕は首を横に振った。

「この電車は人が乗るにはかなり珍しい構造をしています。車輪が乗っかっているレールから給電をするんですよ、鉄道模型のように」

「なるほどな。鉄道模型、メーカだから、そこできてる構造ってわけか」

僕は線路の行き止まりの標識の横を抜け、ホームとは反対側に歩く。電車の足回りがよく見えた。

「やっぱり。この館の建築する様子を写した写真集にあつた台車です」

「写真集つて、図書室にあるあれですか？」

少し大きな声で鹿島さんが聞く。僕との距離が離れているから声を張ったものの、広い空間に何重にも声が反響した。

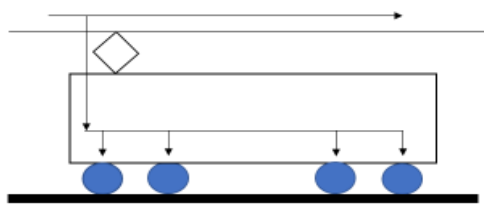
「ええ。あれを見てずっと気になっていたんですよ。あの写真集の中のあるページに、トラックが何台も鉄道車両用の台車を運んでいる写真があつたんです。ですが、この館にある保存車両は食堂車だけ。台車単体で保存展示しているのかとも思いましたが、この館のどこにも台車を置いてある場所はありませんでした。この部屋に履かせる台車だつたんです」

僕は電車とは反対側の壁を見た。バスケットボール大の穴がいくつかあり、それぞれに頑丈な蓋がされた上で『汚水』『水道水』などと表記されている。

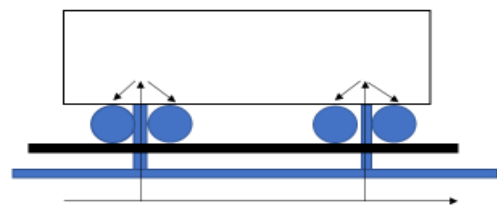
「この部屋は移動可能な電車ですから、館と水のパイプなどを直結することができません。なので、ここから各車両とをホースか何かで繋いで給水や汚物の抜き取りなどをやっていたんでしょね。汚物の抜き取りはそのままだバキュームカーに接続していたんでしょう。部屋のトイレも実際の列車をモチーフにしたというよりも、実際の列車で使われているものをそのまま使うしかなかったんだと思います」

「なるほど。それでバキュームカーが来ていたんですか。上下水道が完備されている建物なのに、おかしいと思つたんですよ」

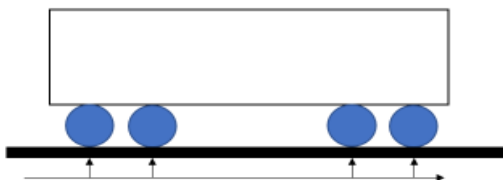
## 鉄道車両 構造



架線集電式  
架線からパンタグラフを介して電気を取り入れる。



第三軌条方式  
車輪を回すレールの横に敷設された第三の給電用レールから電気を取り入れる。



鉄道模型  
線路そのものに電気が流れ、そこから取り入れる。

\* 矢印は電気の流れを表す。

犬塚刑事が納得したような声を上げた。

僕は説明を続けながらも電車の観察を続けた。前照灯、カメラ、それに連結器が線路のある二方向にそれぞれ設置されており、ドアの下には何かの検知装置が搭載されている。恐らくホームドアとの位置合わせをするための機械を応用したのだろう。

ドアがあるのと反対側には、エアコンの室外機他に製造銘板が取り付けられている。読んでみると、やはり思った通りだ。『2004年 三辺製作所』と銘打たれている。

「あの、劔さん。その壁にあるものは何ですか？」

敷島取締役が僕の背後を指した。振り返ると、薄緑色に塗られた金属製の小さな扉がある。

「ええと……配電盤、と書かれていますね。この館のブレーカーでしょう。恐らく、この配電盤をいじって監視カメラの映像を落とすなりしたのではないでしょうか？」

「な、なるほど……」

ここでの解説はこれくらいにして、そろそろトリックを明かすことにした方が良さそうだ。僕は腕時計に少し目をやり、他の人を元々部屋があった所に案内することにした。

「こっちですよ、皆さん」

\* \* \*

念のために館全体のブレーカーを落とし、線路に流れる電気を完全に遮断する。線路に沿って歩くと、足元を照らすのは非常灯と各自のスマホライト、部屋から持ち出した懐中電灯だけだった。

「皆さん、絶対に一人で行動しないで下さい」

誰かが線路に電気を流したら、僕たちは揃ってあの世行きた。犯人にそんな事をするメリットは無いはずだから、あまり心配はしていないが。

「なるほど、ここに分岐点があるのか」

僕は足元で二手に別れるレールを見て立ち止まった。

「と、いうことは……」

分岐の少し手前にある壁や線路にライトを当てる。

「劔さん、どうしたんですか？」

「どうやらここが踏切のようですよ、大和さん」

僕は線路にしゃがみ込む。レールとその下のコンクリート製の床には切れ込みが入っている。

「敷島さん、図書室で観ていたテレビの内容を覚えていますか？」

「え？ えーと、確かスイスの登山電車の話だったと思います、ハイ」

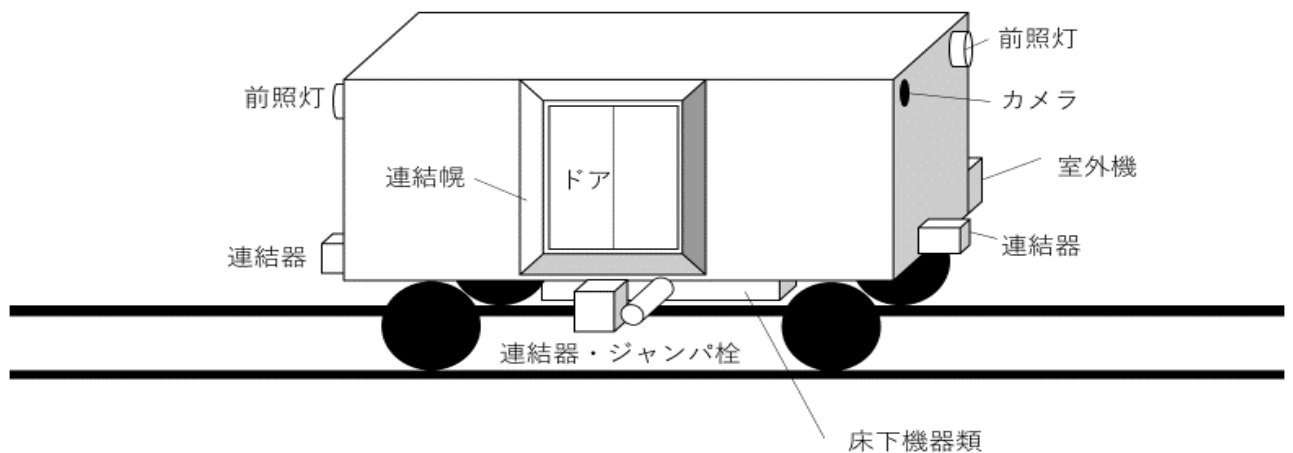
かなり濃い暗闇の中、敷島取締役の胡麻塩頭が少ない光源を鈍く反射している。

「ピラトゥス鉄道の特集番組ですね。実はあの番組から僕はヒントを得たんです。あの鉄道の山頂駅にある分岐点は、急勾配と用地不足のために世界的にも珍しい特殊な構造をしています。どのようなものだったか覚えていますか？」

覚えているはずが無かった。あの時、敷島取締役は僕が振った話に答えるので手一杯だった。

「あの場では、レールそのものが土台ごと裏返るんですよ。裏返ると別の方向に接続するレールが現れます。この踏切も同じこと。普段は床に鉄道模型が敷き詰められています、部屋が走る時になると床が裏返って本物の線路が現れる」

## 『電車館』 部屋 構造



僕は一息ついて、また話を続ける。

「壁も可動式になっていたようですね。みんな、壁に設置された棚の中身、古今東西の鉄道模型に目を奪われ、誰も壁そのものには注意を払わない。ましてや壁が開いて電車が通るスペースを捻出するなど、想像することも無いでしょう。まさに羽黒さんが言った通りです。線路の下に本物の線路が隠れているとは誰も思わない、壁についても同じことです」

「では、剣さん。夜中に踏切が作動していたのは……」

「ええ。あの時間に、ここを電車が通ったということでしょうね。監視カメラの映像が少しだけ途切れていたのは、映像を残したくなかったためでしょう。ですが、ブレーカーを落としてしまえばそもそも電車を動かせない。やむを得ずブレーカーを戻し、監視カメラに踏切の映像が残るのを覚悟で電車を元の位置に戻したんだと思います」

僕は踏切についての説明を切り上げ、そのまま奥に進む。矢野警部は質問の矛先を僕から鹿島さんに向けた。

「鹿島さん、あなたはここからくりの存在を知らなかったのですか？」

「はい、全く……全く知りませんでした」

未亡人は館の真実に圧倒されたのか、細かい声で知らないと言葉を繰り返すばかりだった。

「鹿島さんが知らなかったのは無理もないでしょう。どうやらこの線路や電車、かなり長い間使われていなかったみたいですからね」

暗くて表情はよくわからなかったが、一同の当惑した雰囲気背後から感じられた。

「どういう意味ですか、剣さん？」

鳥海先生が訝しむ。

「さつき、電車を動かした時を思い出して下さい。ブレーキをかけた時に顕著でしたが、時折錆びついたような音がしていました。あまりメンテナンスもされず、油が切れていたのでしょうか。運転台にマスコンキーを差し込んだり、電車を走らせる時も全体的に反応が鈍いです。スペースを考えると、整備をするにはさつき降りた広い空間が必要です。整備がされていないことは、あのスペースに電車が出入りすることが無かったということです。つまり、電車として部屋が動かされることほとんど無かったことを示します。播磨社長が存命だったら事情は変わっていたのでしょうか……」

僕は分岐点の線路をスマホライトで照らす。

「見て下さい、このレール。長い間使われていなかったのでしょう、錆で表面が真っ茶色です。廢線になって放置された線路もよくこうなりますね。ここは屋内ですから錆の進行具合は遅いはずですが、それでもここまで錆びているということは相当長い間使われていなかった可能性があります」

分岐点から先のレールは二手に別れ、急曲線を描いている。

「このカーブした線路に沿った形状で廊下の壁は建てられているようです。電車は直角には曲がれませんから、このような形になったのでしょうか」

とりあえず、僕は分岐点を左に進むことにした。しばらく空白区間があるが、ここにはさつき運転した4号室があった場所だ。

「奥と右側にも車両が見えますね。目の前の線路を直進した所に停まっているのが水郷さんがいた3号室、今僕らが立っている場所の右隣に停まっているのが山鳩会長

がいた1号室、斜め右奥に停まっている部屋が鳥海先生の2号室です」

2号室と3号室の間は1.5メートルくらい間隔が空いている。僕の推理を裏付けるにはちよつと長い気もするけれど、後で考えよう。

それよりも、僕は1号室に目をやった。分岐点側の壁に、古いながらもこの暗闇でもはっきり見えるくらいの傷跡がある。補修はされているが、何かにぶつかったみたい痕跡だ。

「あの、剣さん？ じゃあここが4号室の前の廊下に出るドアなんですか？」

羽黒さんが壁の方を指差す。暗くて分かりにくい、そこには確かに両開きの扉があった。

「そうです。そのドアを開けたら廊下に出られるはずですよ」

「どれ、やってみるか」

釜田さんがつかつかと歩み寄り、ドアの隙間に手をかける。鳥海先生も駆け寄って互い違いに引張ると、ものの十数秒でドアが開いた。

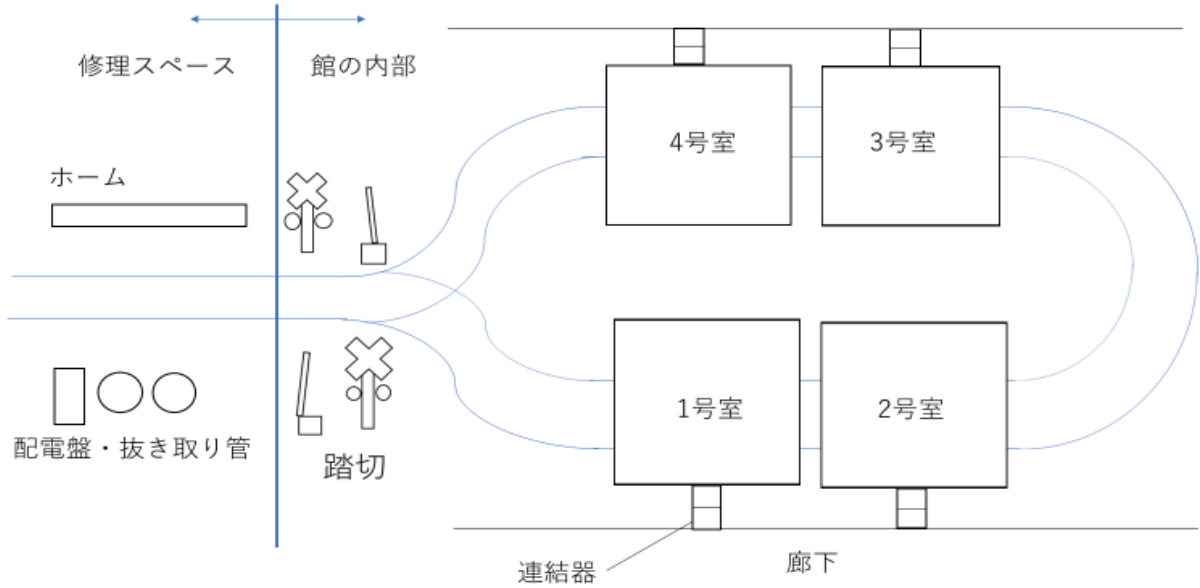
「なるほどな、確かに廊下に出るみてえだ……ん、何だこれ？」

釜田さんがドアの真下の壁に取り付けられている装置に気付いた。

「連結器……どうしてまたこんなもんがここに？」



# 『電車館』内部図



「車両を固定するためのものでしょうね。車輪がレールの上にある以上、何の拍子で部屋が動き出すか分かりません。連結器で車両を固定した上で、ジャンパ栓を館と繋いで各部屋のブレーキを作動させる圧縮空気を送っていたんだと思います。似たような例だと、青函連絡船において船内で列車が固定されていた際の方式によく似ています。わざわざ幌で部屋と廊下を接続したのは、幌の下にあるこれらの装置を隠すためじゃないんでしょうか？」

昼前に幌で見えない部分を確認した時、左右にばかり気を取られて下を確認しなかったのは汗闊だった。真下にこんなヒントがあったなんて……。

僕は説明を再開する。

「食堂車から一階の各部屋まで、全く段差の無いようにできています。食堂車の車両には現役時代そのままに台車が装着されていますが、この各部屋にも台車が装着されています。床面高さが揃うようにしたんでしょうね」

3号室と2号室の間を進むと、また線路に出た。今度は分岐点などはなく、急カーブでUターンできるようなっている。これもまた、僕の推理を裏付けるものだ。「このカーブしている壁の向こう側に応接室があるはずですよ」

しかしここで、矢野警部が焦れたような声を上げた。「剣さん、この館の秘密は分かりました。しかし、肝心の山鳩会長の殺害トリック、密室殺人のトリックが分からないままです。それはどう説明するのですか？」

「ちようど今から説明しようと思っていた所です。皆さん、これを見て下さい」

僕は1号室と2号室の間にある隙間を指差した。

「これは……連結器、ですか？」  
敷島取締役が近寄ってライトをかざした。頭にヘルメットを被せたくなるけれど、探しても人数分のものが見つからなかった。

「ええ。あ、説明し遅れましたが、ジャンパ栓というのは車両同士の配線を繋ぎ合わせ、先頭の運転台などから乗務員が全ての車両を一括操作することを可能にするものです。これは重要なポイントなので押さえておいて下さい」

僕は敷島取締役に場所を代わってもらおう。1号室と2号室のそれぞれの連結器を見ると、互いに似たような形の古傷が残っていた。

「つまり、僕が普段運転している電車でも、運転台からボタン一つでアクセルやブレーキ、ドア開閉などの操作ができるのは、このジャンパ栓のおかげと言えます。本当はもっと複雑なシステムがあったりもしますが、今回は無関係なので省略しますね」

釜田さんがパンと手を叩いた。

「どうやら釜田さんにはトリックが分かったみたいですね」

「ああ。答え合わせといこうじゃねえか」

僕は振り返り、ライトにぼんやりと照らされる全員を見回した。

「手順はこうです。まず、水郷さんは僕と釜田さんが眠る4号室をさっきの修理スペースまで押し込みます。彼女はこの時、3号室を運転しています。次に、4号室を修理スペースに置き去りにして、分岐点のポイントを切り替えます。そこから3号室をバックさせて、山鳩会長がいる1号室と連結します」

僕はまた腕時計を見た。あまり時間に余裕が無い。巻

きで行くことにした。

「ここで、電車の連結手順を確認しましょう。連結する時は、まず第一に連結器を繋ぎます。しかし、それだけでは電車は物理的に繋がっているだけで、システムとしてはまだそれぞれ独立した状態です。つまり、一括制御ができないんですね。そこで、第二にさっき話したジャンパ栓を繋ぎます。これで操作系統が統一されて、一括制御が可能となります。水郷さんはそれを3号室と1号室でやりました。この時、メインの操作系統は水郷さんが動かしている3号室の運転台にあります。あとは簡単です。3号室の運転台からドアロックを解除すれば、同時に1号室のドアロックも解除されます」

幸い、誰も口を挟まなかった。僕はそのまま機関銃のように推理を展開する。

「ただ、この電車にはドア下を除いて連結器の横にジャンパ栓が見当たりません。恐らく、連結器の内部にジャンパ栓と同様の機能が内蔵されているでしょう。時間が無いので実演は省きますが、これで1号室には自由出入りできるようにしました。後はドアを開ける操作を運転台から行い、1号室の室内側のドアを開けます。そしてレールのボルトを外し、山鳩会長の頭部に向かって倒せばいい」

「ではなぜ、部屋に鍵をかけたのですか？」

矢野警部が疑問を呈した。

「ドアがちゃんと閉まっていけない状態では、列車は基本的に走りません。走行中にドアが開いた場合、運転士は直ちに非常ブレーキをかけます。お客様が車内から転落する恐れがありますからね。今回の事件では状況が異な

りますが、車でも電車でも走らせる時にはドアを閉めるのは当然のことと言えるでしょう」

矢野警部は納得したのか、そのまま口を噤んで僕に先を促した。

「後はさっきの手順を逆に行えばいいだけです。3号室と4号室の位置を元に戻した彼女は、何を思ったか修理スペースに向かい、そこで命を落とした」

沈黙が重たくなる。

「自殺だったのか、それとも事故だったのかは分かりません。僕も、彼女がどうして犯行に及んだのかは分かりません。なので、それについては警察の捜査結果を待とうと思います」

僕は改めて、内心で水郷さんに詫言った。今はこれしか手段が無いのだ。

「僕の推理は以上です。ここで退場させてもらいましょう……」

\* \* \*

4号室の廊下側出口から外に出て、館のブレイカーを起動させる。異形を露わにした館の姿に、そしてそんな館を建てた播磨社長に対して改めて僕は呆れる思いだった。

警察も僕の推理に納得したのか、僕たちはすぐに解放してもらえることになった。後日、捜査のために何度か警察署に向かうことにはなりそうだが、それくらいは構わない。今はとにかく瑞穂さんの所に急行しなくてはならない。今からここを出れば、秋田駅から『あけぼの』に乗れるはずだ。

でもその前に、僕はある人物に声をかけた。

「あの、すみません」

その人物は廊下で立ち止まり、訝しむような表情で僕

を見た。

「一つ、どうしても頼みたい事があるんです」

僕はその人に事情を話した。高知の事件のこと、そこに僕が一番大切な人がいること。いまはまだ無事だが、これからどうなるかは分からないこと。

「あなたも分かるでしょう？ 愛する人を失うかもしれないという恐怖が。あなたがいれば百人力です。僕はあの辺に土地勘がありませんし、どうか一緒に来てほしいんです、お願いします！ この通りです！」

僕は深々と頭を下げた。でも、確信はあった。この人は必ず同行してくれるはずだ。

果たして、その人は逡巡の末に了承した。

計画通りだ。だが、僕の心の中にはもくもくと暗雲が立ち込めていた。

この人を連れていくことで、高知の事件での犯人はきつと尻尾を出す。でも……それが瑞穂さんを危険な目に遭わせることになるのではないか？

彼女にだけは、先に僕が分かっている範囲で真相を伝えておくべきなのかもしれない。

せめて、誰に対しては気を付けるべきか。それだけは伝えておこう。まだ確証は無い。証拠は無い。でも、僕の中には既に高知の事件の犯人が誰なのか分かりかけていた。

高知の犯人と、目の前にいるこの人とを対面させたら、必ず証拠が掴める。この人がたった今からの高知行きを了承したからには、必ず。

5分後、僕たち4人と比叡さんに乗せて釜田さんの愛車、白いトヨタ・マークIIに乗り込んだ。暗闇の中、冬の最後の置き土産が荒れ狂う。暗い車窓を白く染め上げる。この雪が終われば、秋田にも春が来る。



「狭いが勘弁してくれよ。シートベルトはつけたか？」  
釜田さんがエンジンをかけ、車は雪夜に飛び出した。  
バックミラーの中の『電車館』が遠のく中、カーステレ  
オからブルーハーツ『TRAIN TRAIN』が勢い良く流れ始  
めた。

## 第十章 汽車

\*碓氷瑞穂 ——高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

「犯人は津軽さんだと思っんです」

私は霧島さんに言った。

「……よりもよってあの人ですか。今回の事件では唯  
一アリバイがあるのに」

どんぐりのように丸い目をさらに丸くしながら、霧島  
さんは考えこんだ。

「勘、ですか？」

認めざるを得ない。

「私も霧島さんも、今まで色々な事件に巻き込まれてき  
たじゃないですか。そして、その度に礼士さんが謎を解  
いて、私たちを助けてくれた。あの人は謎解きにいつも  
時刻表を使っています。なので、もしかしたら今回も  
……そう考えると、時刻表が一番使えそうなのが津軽さ  
んだっつんです」

霧島さんは何か口を挟みたそうにしていたが、私は続  
けた。

「それに、あの人の行動には色々変な所があるように  
思えるんです。具体的に事件に結び付くかどうかは分か

りませんけど……」

話していくうちに段々自信が無くなっていくのが分か  
った。

「変な所って、どんな？」

霧島さんに先を促されて私は話してみることにした。

「まず、島風教授が津軽さんを見た時の反応です。やつ  
ぱり、あそこ何かヒントがあるんじゃないかな、つ  
て。次に旅館を出入りした人の問題。島風教授が殺害さ  
れた時、この旅館を出入りした人間はいないとされてい  
ます。でも、この旅館の従業員である彼女なら何か方法  
があるんじゃないかって。それに、アリバイも変な気が  
するんです。ペランダの補修資材なんて、何もこのタイ  
ミングで買いに行く必要も無いと思っんです。劣化が進  
んでいたのは前からでしょうし、事前に資材調達をす  
ることもできたはずですよ」

「なるほど。じゃあとりあえず、彼女の行動と疑うには  
不利な点を洗い出してみましょうか」

どうせ素人推理、駄目元でも一考の価値はある。霧島  
さんはそう言っつて、私と一緒に津軽さんのアリバイをふ  
り返っつていった。その結果、このようになっつた。

「このアリバイを破らないことには、いくら碓氷さんの  
勘が鋭くても捕まえられませんですよ」

そんなことは分かっつている。私はいそいそと椅子から  
立ち上がり、高知駅で買っつた時刻表を手取る。黄色い  
トロツコ列車が表紙を飾っつている。高知県西部の予土線  
を走る『しまんトロツコ』だと霧島さんが教えてくれ  
た。

「碓氷さんっつて形から入るタイプなんですね」

「えっ？」

向かいの椅子に座っつたまま役人は笑っつた。

「劔さんと似たようなプロセスを踏めば謎に挑むことが  
できる、と考へているみたいに見えますよ」

私は小さく笑っつた。それにしても、礼士さんは大丈夫  
だっつたのだろうか？ あの人のことだからあまり心配は  
してないけれど、連絡が無いのが少し気にかかる。

気を取り直して時刻表を開く。十讀線のページを探し  
て開くが、私は目が点になっつた。数字とレ線の羅列ばか  
りで視点が迷子になりそうだ。

「あの……霧島さん、これっつてどうやって読むん  
ですか？」

霧島さんは椅子からずり落ちそうになっつた。

「あーそっか、碓氷さんはいつも劔さんに読んでもらっ  
てたんですね」

「し、仕方ないじゃないですか。時刻表を読むのっつて随  
分久しぶりか、もしかしたら初めてかもしれないまし  
ん……それに今は乗換案内アプリとかありますから」

「まあ、碓氷さんのような一般人には無理もない話でし  
ょうね。しかし、僕よりも劔さんに教えてもらっつたらど  
うですか？ ついでにあっつちの事件の進捗も教えてもら  
いましょうよ」

私はスマホを手に取り、そこでふと不安になっつた。今  
このタイミングで礼士さんに電話しても大丈夫なのだろ  
うか？ こっちはまだしも、礼士さんの現場は犯人が逮  
捕されたという知らせも届いていない。現時点で殺人犯  
がうろつているかもしれないのだ。

考へた末に、電話ではなくメッセージを送ることにし  
た。時刻表の読み方は目の前に座っつている人に教えても  
らおう。

## 津軽 アリバイ (2014.3)

- 18：40頃   トラックで旅館を出発
- 20：00頃   高知駅前のホームセンター『コナーン』で買い出し
- 20：30頃   簡易宿泊所『元親』チェックイン
- 3：30頃    簡易宿泊所『元親』チェックアウト
- 4：20頃    高知市中央卸売市場にて食材を購入
- 6：20頃    旅館へ戻る

\* 島風教授の死亡推定時刻は21：30頃～23：30頃と推定される。

「時刻表は縦に列車、横に駅名というかたちで表示されます。列車と駅名が交差する所に書かれている数字が、その列車が駅を発車する時間です」

「言われてしまえば簡単な仕組みだ。でも、こんな細かい数字の羅列から目的の列車や駅を見つけ出すのは慣れないと骨が折れそうだ。」

「レ点は何なんですか？」

「駅を通過する、正確には駅でお客さんの乗り降りができないって意味です。ちなみに、 $\parallel$ マークはその区間を通らずに別の区間を走って意味です」

さらに読み進めると、列車によっては複数のページに分割して掲載されていたり、列車だけでなく航空機や高速バスの時刻も載っていたり、知らないことばかりだった。

「初歩的な質問かもしれませんが、上りと下りってどういう意味なんですか？」

「ああ、それはですね、東京に向かう方を上り、東京から離れる方を下りって言うんです。その土讃線の場合、高知よりも岡山の方が東京に近いので岡山の方に行く列車は上り列車になります」

大体理解した。私は霧島さんと一緒に時刻表を読み進めることにした。

「この辺から列車に乗るとすれば、豊永駅か大步危駅、それか大杉駅になりますか？」

「でしょうね。僕も確氷さんを送りましたし。ただ、そもそも津軽さんはトラックを持っています。彼女が列車を使うということは、彼女がトラックを使えない何かしらの理由があるはずですよ」

いきなり行き詰まってしまった。ここから高知市街ま

で往復するとなれば、トラックで一往復するのが一番手っ取り早い。本数が少なく不便な列車をわざわざ使う理由が思いつかない。私は時刻表をテーブルの上に放り出した。

「トラックといえば、彼女のトラックに妙なところがあったんですよ」

「え？」

霧島さんはふと思いついたように話してくれた。

「あのトラック、かなり新しいものはずなんです。やから大事に使えばえいのに荷台に凹みと、それに土くれがついていました」

「凹み？ あのトラックって荷台が凹むほど重い物を運ぶんですか？」

霧島さんは首を捻った。

「いや……あのトラックが普段運ぶのは宿で出す食材や、クリーニングしたりネン類やと思います。そりゃ、家具だとかそういう重たいものを運ぶこともあるでしょうが、荷台が凹むような荷物に心当たりはありませんね」

確かに、そんな荷物では引つ掻き傷ならまだしも凹みができるとは考えにくい。

「その凹み、荷台のどの辺にあっただんですか？」

「ちょうど真ん中辺りです。なので、荷物の積み込みでついたとも思えないんですよ」

凹みについては脇に置いて、私は土について聞いてみた。

「土汚れは荷台の左半分には散らばるように付着していました。もちろん、あのトラックは土を運ぶために使われたことは無いはずですよ」

妙な話だ。

「トラックと言えば、支配人が給油の件で津軽さんに文句を言われていましたね」

「そっぴやそっぴやでしたね。詳細を聞いてきましょうか？ 推理するにもデータは多い方がえいでしょう」

「どのように推理に絡むのかは全く分からないけれど、お言葉に甘えることにした。私は霧島さんが戻ってくるまでの間、礼士さんに連絡を取ることにした。そっぴやえ、高知駅で撮った写真もまだ送っていなかった。この際ついでに送ってしまおう。」

\*大和叶 —— 秋田県大仙市・JR大曲駅

「どたどたと階段を駆け下り、どうにか発車寸前の『まぢ96号』に乗り込むことができた。」

「はあ……はあ……鉄道員が駆け込み乗車をしてどうすんだよ……」

「仕方ないじゃないですか……これに乗れば瑞穂さんの所に一番早く着くんですから……」

釜田さんと剣さんが息を切らしながら問答する。閉まるドアを横目に私たちは席を陣取る。仙台止まりの最終列車はがら空きだった。

「それにしても、E6も増えたなあ」

「E6？」

釜田が聞き慣れない言葉を放った。お姉ちゃんはデッキで事の推移を会社に電話している。大丈夫かな？

「この新幹線の形式名ですよ。剣さんも普段運転しているんですよね？」

私の隣に座る発言者を見る。当たり前と言えば当たり前だけど、鉄道知識を持ち合わせている。剣さんに拝み

倒されて高知まで同行してくれることになったけど、胡散臭く見てしまいそうになるのを我慢するのは少し大変だった。

「ええ。去年の夏に新幹線が乗っ取られた時も運転してました。癖が無くて良く走る扱いやすい列車ですよ。先代のE3と比べると編成が長いので最初は少し戸惑いました」

剣さんは黄色い座席を回し、向かい合わせにして固定する。この座席はたわわに実った稲穂をイメージしたカラーリングなんだとか。

「剣はE3に憧れて運転士になったんだろ？ やっぱり寂しいか、あと数日で引退するとなれば？」

釜田さんが進行方向に背を向けて腰を下ろしながら聞く。剣さんも座りながら答える。

「ええ、当然です。仕方ないとは思いますがね、彼女は今までよく走りましたから。ただ……僕が物心ついた頃にはまだ秋田新幹線が開業していませんでした。だから、開業間近の頃から見守っているんです。僕にとって、E3は憧れ……いや、それ以上の存在なんです。昔も今も、これからも。だからこそ、次のダイヤ改正が来たら僕の手の届かない所に行ってしまう……正直、たまらないですよ」

本当は次のダイヤ改正後も定期回送でたまに秋田に戻ってくるのだが、運転する機会は年に一度あるかないかくらいでしょう、と補足する辺りが鉄オタらしい。いく

らお似合いとはいえ、先輩も物好きだ。

「初恋の相手、って感じですね」

私の言葉に運転士は少し笑った。垂れ目の目尻に少し皺が寄る。

「ええ、それが一番近いかもしれませんね。初めて彼女

に会えた日の事は今でも忘れられません。父にねだつて大曲駅に連れて行ってもらい、まだ開業前の試運転を重ねていたE3をようやく見る事ができました。降りしきる雪の中、白と銀のボディにビビッドピンクの細帯を巻いた彼女の姿は……すごく凛々しいんですよ。それでいて段々と見かける回数が増えるうちに、色んな表情を見せてくれるんです。吊り上がったライトといい、引き締まったブラックフェイスといい。それでいて塗装はシンプルながら華やかで、マークはカラフルな平仮名で。完全に虜になりました。秋田美人を鉄道車両に落とし込んだらこうなるのか、って」

秋田美人、か。私はどんなデザイナーなのかあまりちゃんと知らないから何とも言えないけど。剣さんは続ける。

「JRに入り、秋田支社への転勤を命じられ、そして『まぢ』の運転を任された時には飛び上がりそうになりましたよ。あの憧れの列車を運転できる日が来るなんて。それ以来、この手で彼女と共に最高の走りをした。僕の仕事の根底にはいつもその思いがあります。その思いは彼女がいなくなっても決して変わることはないでしょうね、僕の性です」

「こういうのを天職と呼ぶのだろう。……そういえば、先輩は剣さんが運転する列車に乗ったことがあるのかな？ 私は無いけど。」

「この事件が終わったら僕も復職する予定ですが……引退前にせめてもう一度だけ、せめてもう一度だけE3を運転したいですね」

「……剣さんが先輩を好きになった理由が少し分かった気がします」

私はポロリと言い、剣さんは首を傾げた。照明の反射

で左頬の傷跡が光った。

「だって、先輩も似ていませんか？ あの人、凛々しいとかクールとか、そういう感じがデフォルトだと思っんですよ。それでも実際に近寄ってみると、色んな顔を見せるんですよ」

「後は、ひたむきな所があるよな。秘めたものを感じる時もある」

釜田さんも付け加える。剣さんは穏やかに微笑んだ。

「そう言われると似ているかもしれないね。秘めたものを感じる、というのは特に」

秘めたもの、か。先輩は店をいきなり辞めてしまったけど、結局その辺の事情はほとんど聞いていない。聞くのが怖いものもあるし、聞かなくてもいいやという思いもある。でも、剣さんのことだからその辺の事情は全てお見通しに違いないし、その上で先輩に思いを寄せているはずだ。

「ひたむきなのは剣さんも同じですね」

私の呟きは小さくて届かなかったと思ったのに、剣さんはまた微笑んだ。

「それはそうと、これからどう乗り継ぐんだ？」

「ああ、それはですね」

釜田さんの質問に急かされるように探偵は鞆から時刻表を取り出した。タイミング良くお姉ちゃんも戻ってきた。

「鹿島さんに頼んで借りてきたんです。とりあえず、この列車で仙台まで行きます。そこから夜行バスで東京に出て、飛行機で神戸に出ます」

「神戸！？」

お姉ちゃんが素つ頓狂な声を上げた。

「ええ。最初はそのまま高知に飛ぶか、岡山に飛んで特

急で高知入りするか考えたんですが、それだとどう頑張っても現地に着くのが昼過ぎになってしまうんですよ。神戸空港から新神戸に出て、新幹線と特急を乗り継いだら1時間は早く現地入りできます」

かなりハードな旅程だ。釜田さんは面白そうに時刻表を覗き込んでいるけど、私は思わずじつとりした視線を投げた。

「繰り返しますが、事態は一刻を争います。今は列車に揺られることしかできないので大人しくしています……本当は、今すぐにでもこの列車を乗っ取って、少しでも早く彼女の所に行きたいんですよ」

私は悟った。この人にとつて、先輩は鉄道以上にひたむきになれる存在なんだろう。

「それなら、その確水さんに電話してみたらどうですか？ 向こうの事件の進捗も知りたいですし」

「そうですね、私も気になります」

「私も聞きたいです、剣さん」

「女房を待たすんじゃないかねえ、とつとと電話してこい」

私たちに口々に急かされ、剣さんはスマホを手にデツキへと消えた。

「もしかして、赤い糸の伝説ってものかもしれないですね」

私はぼつりと言う。

「叶、どういう意味？」

「剣さんと先輩をくっつけたのが『こまち』なのと、その『こまち』が赤い……偶然なのかな、赤い糸って『こまち』のことじゃないかなって」

やや言葉足らずな説明だったみたいで、お姉ちゃんは大変な顔をして黙り込んでしまった。

「お前らしい考え方だな、大和。甘ちゃんな考えにも聞

こえるが、俺は嫌いじゃねえぜ。場所と場所を繋ぐ鉄道が、『こまち』がだ、人と人を繋いだってんなら……」

『こまち』にしてみりゃ本望だろ」

釜田さんは少し笑い、窓の外を見た。

「剣さんと確水さんを繋ぐのは赤い糸ってよりも、枕木かもしれないわね。二本のレールみたくつかず離れず、どこまでも寄り添っていく」

「ははっ、そりゃ傑作だ」

お姉ちゃんの言葉に釜田さんがまた笑う。大喜利じみた会話になってきた私たちを横目に、赤い糸は角館駅を発車した。終点まではまだ先が長い。

\*確水瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

私が礼土さんにメッセージを送り終えて少しした後には霧島さんが戻ってきた。

「お待たせしました、確水さん。父さんから聞いてきましたよ」

手には何やら黒革のバインダーを持っている。見せて貰うと、金銭管理の書類のようだった。

「家計簿みたいなものです。これによると、トラックに給油したのは三日前ですね。三日前と二日前に高知の卸売市場へ食材を買いに行き、昨日父さんが阿波池田駅まで往復した」

「つまり、昨夜津軽さんが高知まで往復するまでに、あのトラックは無給油の状態が高知まで二往復、阿波池田駅まで一往復していたということになりますね」

高知まで三往復したら燃料切れになるのなら、昨夜の高知往復はかなり燃料が危うい状態でのドライブだったに違いない。

「まあこの他にもこの宿の近くのスーパーに急遽買い出しに行ったりと、細々と使われていたみたいです。それこそ、そのスーパーの帰りに碓氷さんを拾った、みたいな話を津軽さんはしていましたね」

ふと、私はある事を疑問に思い時刻表のページをめくった。路線図を見る。

「阿波池田つて特急も停まるんですよ？ だったら何も阿波池田まで送らなくても、大歩危や大杉まで送ればいいんじゃないですか？ ここから阿波池田駅まではそれなりに距離がありますし……」

「ああ、それも父さんに聞いたんですよ。聞いたところやと、大歩危辺りで特急に乗せるつもりだったが、それやと阿波池田から乗る列車に間に合わんとかで急遽そこまで飛ばしたそうです」

厄介な客もあったものだ。

でも私は、ここでまた疑問にぶつかつた。今度はもつと津軽さんのアリバイを揺るがすような疑問だった。

「そんな状態で津軽さんは高知まで往復できたんですしうか？」

「え？」

霧島さんも私の疑問を考えてみると、不思議そうに考えこんだ。

「いや、どこかで給油しないと厳しいと思いますよ」

「じゃあ、その帳簿に給油した明細はありますか？」

霧島さんは改めて詳細に帳簿を読み込んだ。私も椅子から立ち上がり、後ろから覗き込む。

「いえ、三日前の次に給油したのは今日の午後です。値段からして、燃料がほぼ空の状態まで満タンまで給油したと考えると間違い shouldn't でしょう」

変だ。昨夜給油しないと高知まで往復できない。それ

なのに帳簿には給油した事実が記載されていない。

「となると……津軽さんが自費で給油したか、それとも」

「そもそもトラックで高知まで往復していないか」

霧島さんの発言を遮る私の独り言が、部屋をしんと静まらせた。

「でも、トラックで往復していないと証明するのってかなり難しくありませんか？」

「そうですね……そもそも、彼女は高知に行っていることは確かですもんね」

そうになると、自費で給油した可能性が高いのか？

「霧島さん、この辺にガソリンスタンドはありますか？」

「え？ こんな山奥ですしね……あまりありませんよ？ 大歩危駅の近くに一軒ありますけど。あ、でも高速に出

てしまえばサービスエリアに併設されていたりします」

この辺から高速道路に乗るとすればどこだろう？ そして途中で給油するとすれば？ 私はスマホをついて

ネクスコ西日本のページに飛ぶ。

「この近辺だと大豊インターチェンジから高速に乗って、高知で降りることになりますね」

霧島さんの説明を頼りに情報を打ち込む。該当したのは一件だけだった。

「下り方面は南国サービスエリアが一軒あるだけです

ね。しかも、そこにガソリンスタンドは併設されていません」

となれば、給油するには大歩危に出てから高速に乗るか、先に高速で頑張つて高知に出てから給油するか、二択だ。そう考えた時、高速の地図を見ていた私はあるこ

とに気が付いた。

「高知自動車道つて徳島県を通っていないんですね」

「ええ、そうですね。よく勘違いされるんですよ、土讃線ががつつり徳島県内を經由するので」

そうになると、大歩危に寄るのはそれだけでかなりの口スタイムになる。

「そもそも、夜中にちよつとだけ給油する二トントラックつてかなり悪目立ちしませんか？」

「えっ？」

考え事をしていた私は聞き返した。霧島さんは続け

る。

「ガソリンスタンドがいくつもあるのはお街の話で、こんな山奥ではそもそも深夜営業なんてやってないですし、やっていたとしてもちよつとしか給油しないト

ラックなんて、スタンドの従業員が覚えていてと思うんですよ。仮に津軽さんがお街で給油したとしても、警察の機動力を使えばそんなのすぐに調べがきます」

「給油したらそれだけで足がつく、と言いたいんですか？ ……言われてみればそうですね」

ということとは。

私はテーブルの上に置いた時刻表を改めて手に取つた。

「津軽さんは列車で往復した可能性が高くなってきましてたね」

「同感です」

霧島さんの言葉に同意し、いざ土讃線のページに挑もうとした時だった。私のスマホが音を立てて鳴動を始めた。画面を見ると、見慣れた名前。通話ボタンを押す。

「もしもし、礼士さん？」

\* 釧路士 —— 秋田県仙北市・『こまち96号』車中

5 回くらいのコールで彼女は電話に出た。

『もしもし、礼士さん?』

「あ、瑞穂さん。こんばんは、今いいかな?」

彼女の声を聴いて、自然と口調が柔らくなるのが分かった。

『何か、そっち雑音が酷いけど。今どこにいるの?』

『こまち96号』は角館駅を出て、これから奥羽山脈に挑む。山間部だから圏外になったりするかもしれない。

「え? ああ、今は東京に向かってるんだよ。『こまち』の中から電話しててね。同じ列車に釜田さんと大和さんも乗ってるよ」

電話の向こうで少し驚いたように声のトーンが上がった。

『あ、そうなの?』

「うん。明日の昼前にはそっちに着くからね」

『そう……分かった。ありがとう』

電話の向こうで瑞穂さんの声が緩んだ。

「それよりも、瑞穂さん?」

『あのさ、礼士さん?』

問いかけが被ってしまった。僕は先を譲った。

『悪いわね。今、『こまち』に乗ってるってことは、事件は解決したの?』

やっぱり気になる所だろう。

「今、山越えをしているからトンネルに入ったりすると電波が切れるかもしれない。結論から言うね……今、真犯人と一緒にいる」

『えっ?』

車内にくぐもった轟音が響き、車窓が夜闇とは異なる無機質な闇に閉ざされた。トンネルだ。電波が切れてしまった。

「そういうや、トンネル内で電波が届かない事から解いた事件もあったっけなあ……確か、瑞穂さんの部屋が爆破された日の事だっけ」

ここから先は大小のトンネルが連続するし、トンネルを抜けても山が険しくてどうせ圏外だ。僕は早々に電話を諦め、彼女にメッセージを送ることにした。文字なら電話と違って何度でも読み返せるから、瑞穂さんにとっても都合だろう。

\* 碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

真犯人と一緒にいる?

不可解な一言で電話が切れてしまった。礼士さんの事だから何か考えがあるに違いないけれど、それにしても心配だ。

それにしても、私たちの所に真犯人を連れてくるって、どうして……?

「どうでしたか、釧路さんの様子は?」

霧島さんが少し心配そうに私を見た。

「それが……礼士さん、列車の中から電話をかけてきました。事件を解いたからそんなことができると思うんですけど、それなのに、その……真犯人と一緒にいる、って……」

「ええ? どういう意味ですか、それ?」

私にもさっぱり分からない。

「電話、切れてもうたんですか?」

「トンネルに入ってしまったみたいですね」

国交省の役人は難しい顔をした。

「礼士さんたちは、明日の昼前にここに着くみたいですよ」

「えっ、ここに来るんですか? 何だ、それなら安心だ。あの人なら百人力ですよ」

霧島さんは椅子から立ち上がり、大きく伸びをした。

「さて、そうと決まれば僕の役目も変わってきますね」

「え?」

そのまま霧島さんはドアの方に向かった。

「ちよつと、どこ行くんですか?」

「根回しですよ、根回し」

霧島さんはお猪口を傾ける手真似をした。

「僕が代理で碓氷さんの相棒になるのはここまです。

ここからはいつものように、釧路さんと仲良くやって下さい。僕は釧路さんのためにお膳立てをしておきます」

ドアを開け、そして付け加える。

「いくら探偵が優秀でも、最後に事件を片付けるのは警察ですからね。ああいう石頭な組織にいきなり探偵をぶつけるのは悪手です。大丈夫ですよ、霞が関の連中と比べるとちよろい相手ですから」

そう言って手をひらひらさせながら部屋を後にし、私だけ取り残されてしまった。

スマホは沈黙を守っている。でも、そのうち礼士さんから連絡が来るはずだ。私は意を決して、津軽さんのアライバイに挑むべく時刻表と組み合うことにした。

\* \* \*

きりのいい500ページから土讃線の時刻表が掲載されている。私の頭脳で津軽さんのアライバイを見破ることができるとかどうかは分からないが、ただ何もしないまままで悔やんだりはいしたくない。

まずは津軽さんの行動を時系列順に整理する。この宿を出たのが6時40分頃。戻ったのがほぼ半日後、翌朝の6時20分頃だ。ということは、時刻表を全部読まなくてもいい。夜と始発の時間帯だけで十分なはずだ。

時刻表の中身は二色刷りだった。特急列車は赤い太字で、それ以外は黒い細字で時刻などが印刷されている。

案の定と言わなければならない。こんな山奥で何十本も列車が走っているはずがなかった。利用客数が少ないとはいえず、こんな貧弱な本数で本当にアリバイトリックを見破ることができるのだろうか？ 少し不安になりながらも、私は時刻表で列車の時間を一つ一つ確認していく。

まず、津軽さんが列車に乗るとすればどこからだろうか？ 霧島さんに車で送り迎えしてもらった大杉駅、大歩危駅は特急が停まるから外せない。後は私が最初にここに来た時に普通列車で降りた豊永駅。時刻表を見ると、ここは全ての特急列車が通過する。候補としてはこの三つの駅だろうか。

津軽さんが宿を出たのは6時40分頃。その時間だと、豊永を18時33分に出る普通列車には間に合わない。となると、トラックを走らせて大歩危駅か大杉駅に向かい、特急『南風19号』に乗ることになる。大杉駅に行く方が時間的に余裕もあるだろう。大杉駅19時09分発だ。

『南風19号』に乗ると高知には19時45分に着く。ホームセンターでの目撃情報は20時頃だからちようどだ。そこから簡易宿泊所に向かい、チェックインを済ませる。

→ 図 ①⑥

## 土讃線高知～大歩危 時刻表 (始発～7:00)

高知方面下り列車

種別	普通 (始発)	普通
列車名	4213D	217D
大歩危	6:02	6:32
豊永	6:15	6:49
大杉	6:33	7:06
高知		8:25

豊永・大歩危方面上り列車

種別	特急 (始発)	普通
列車名	しまんと2号	216D
高知	5:00	5:28
大杉	5:31	6:48
豊永	レ	7:02
大歩危	5:46	7:24

出典：交通新聞社『JR時刻表2014年3月号』

→ 図 ①⑦

## 土讃線高知～大歩危 時刻表 (18:00～最終)

高知方面下り列車

種別	普通	特急	特急	普通	特急	特急	特急
列車名	4261D	南風19号	南風21号	4273D	南風23号	南風25号・しまんと9号	南風27号
大歩危	18:19	18:52	19:57	20:03	20:52	21:56	23:15
豊永	18:33	レ	レ	20:23	レ	レ	レ
大杉	18:54	19:09	20:18	20:38	21:10	22:16	23:22
高知	20:27	19:45	20:49	21:37	21:45	22:48	0:03

豊永・大歩危方面上り列車

種別	特急	普通	特急
列車名	南風28号・しまんと8号	4266D	しまんと10号
高知	19:34	20:31	21:20
大杉	20:05	22:00	21:51
豊永	レ	22:16	レ
大歩危	20:23	22:28	22:09

\* 斜字は最終列車

出典：交通新聞社『JR時刻表2014年3月号』

これで津軽さんがJRで高知に行くことができたことは分かった。でも、彼女がトラックを使わなかったという証拠が無い。

証拠を先に探すか、それともこのまま時刻表とにらめっこするか。私は少し考えて、証拠は後回しにすることにした。この勢いのまま時刻表トリックを見破ってしまう。

「じゃあ、次は……」

私はページをめくり、上り列車の項目を参照する。今度は大杉駅に帰らないといけない。

一番可能性が高いのは高知駅を21時20分に出発する特急『しまんと10号』だろう。この辺まで足を延ばす最終の特急だ。宿にチェックインして、何らかの方法で抜け出して高知駅に戻るとすれば、20時31分に出る普通列車ではギリギリだ。それに、特急の方が大杉に早く到着する。どこかで追い抜くのだろう。

大杉に着くのが21時51分。宿までは車で20分弱だから、そこから島風教授を殺害したとしても死亡推定時刻に合致する。彼女の死亡推定時刻は21時30分から23時30分だ。

じゃあ、次はどの列車の屋根に島風教授を突き落とすか。霧島さんが解いた振り子式車両の屋根に落とすトリック、あれは常盤さんがやったことになっているけれど、時間さえ一緒なら津軽さんにもできたに違いない。

「……あれ？」

でも私は、ここで詰まってしまった。

大杉駅に特急『しまんと10号』が到着するのが21時51分、そこからトラックでここに移動したら22時15分くらいだ。でも、その時間には島風教授を川に振

り落とすことができる下りの特急列車は最終の『南風27号』しか残っていない。一本前の下り特急『南風25号・しまんと9号』は22時16分に大杉駅に着く。つまり、津軽さんがここに戻る頃には通過してしまっている。

それだけならまだいいとして、問題はここからだ。仮に津軽さんが特急『南風25号・しまんと9号』を見送ってその後の特急『南風27号』で殺人を執行したとしたら、彼女がそこから高知に戻る手段が無くなってしまう。『南風27号』は高知に向かう最終列車であり、その屋根に島風教授を突き落としていたら乗り遅れてしまう。

トラックで高知まで戻った？ まさか。燃料が持たない。給油したとしてもそこで足がついてしまう。

袋小路だ。いや、どこかで前提を間違えたのかもしれない。私は今まで辿った思考を再構成する。

高知に出るまでは問題無い。そこから帰りの列車も他に選択肢は無い。つまり、間違いがあるのは残りの部分。宿での殺人だ。

ということは、霧島さんの推理は間違っていたことになる。島風教授は『南風』の屋根に投げ捨てられたのではなく、別の方法で殺害されたことになる。

改めて島風教授の死因を振り返る。確か、警察関係者の話だと転落死のはずだ。それはつまり、ベランダから落とされたか川に落とされたか、そのどちらかで死亡したということだ。

ベランダから落とされたことについてはあまり疑わなくてもいいだろう。島風教授の体内からは睡眠薬が検出された。睡眠中に殺害されたというのなら、犯人が彼女

を動かす必要がある。そうしたら一番楽なのはベランダから落とすことだ。

ベランダから落としたり、打ちどころによっては即死だろう。どのみち無傷ではない。つまり、犯人は島風教授を引きずるなり何なりして彼女を川に捨てたということになる。

「でも、重くない？」

私は思わず独り言を呟いた。亡くなった島風教授には失礼だけど、彼女は割と太っていた。動けない状態の彼女を川まで担いだり引きずったりするのは、それだけでかなりの時間と体力を使うはずだ。犯人も必死で火事場の馬鹿力が出た、と言い切ることはできなくもないと思うけど、普通に考えて他の方法を選びそうなものだ。

じゃあ、他の方法って？

それを考えようとした時、私のスマホが鳴った。

\* 剣札士 —— 岩手県花巻市・『こまち96号』車中

東北新幹線に入ってもトンネルやら何やらで電波のつながりが悪い。僕は事件のあらましを説明した文章を送り、公衆電話で瑞穂さんに電話することにした。幸いにして彼女はすぐに出た。

「もしもし、瑞穂さん？ ごめん、山奥を走っていたら電波が切れてしまっただけ」

『大丈夫よ。それより、事件の方はどうなの？』

誰かが聞き耳を立てていないかと、そっと周囲に目を走らせる。デッキは僕以外無人だった。

「うん、解決したよ。……表向きはね」

電話の向こうで瑞穂さんは少し沈黙した。

『真犯人と一緒にいる、って言っていたけどどうい



と？』

「話すと長くなるんだ。メッセージを送ったから、それを読んでくれる？」

『……うん、分かった』

僕は彼女を落ち着かせるように、努めて穏やかな声で言った。

「心配なくていいよ。策はある。こっこの事件の真犯人をそっこの事件の犯人に会わせたら、きつとお互いに尻尾を出すはずだよ。そうすればこっこのものだ」

列車は夜の闇を突っ走る。カードの残量を示す赤いデジタル数字が段々と小さくなっていく。

『今、電話しながらざっと礼士さんの推理を読んだけど……真犯人の動機が分からないから連れてきたの？』

「うん。あの人だけでなく、瑞穂さんが巻き込まれた事件の犯人の動機も分からない。だから連れてきたんだ」

『そうなのよね……今、私もこっこの事件の犯人のアリバイを解こうとしている所なんだけど、動機はさっぱり分からないから後回しにしているのよ』

僕はかなり驚いた。

「アリバイを解こうとしているの、瑞穂さん？」

『ごめんなさい、礼士さん。大人しくしていられなかったのよ。……ただでさえ人を殺しておいて、そしてその罪を他人になすりつけるような真似がされているかもしれないと思うと、どうしても我慢できなくて』

僕は瑞穂さんに聞かない程度に溜息をついた。彼女の過去を、彼女が今も苦しんでいることを考えると気持ちにはよく分かる。でも、それで自ら渦中に飛び込んでいくのにはブレーキをかけたい。

「お願いだから、危険な真似だけはしないようにね。相手は人を殺しているんだ。瑞穂さんと違って明確な殺意

を、明らかな悪意を持っている。だから、犯人に迫るのは僕が着くまで待つてほしい。どうしても事情があつて待てないなら、逃げ道だけは確保して」

少しの沈黙があつた。

「自分を大事にね、瑞穂さん」

『……ええ、分かった』

列車は北上駅に到着した。ドアが開き、デッキに冷たい夜の空気が流れ込む。

「それで、そっこの犯人……津軽さんのアリバイはどんな感じ？」

『それが、行き話っちゃったのよ』

瑞穂さんは事の経緯を話してくれた。トラックの燃料のこと、土讃線での移動のこと、霧島さんの推理が間違っている可能性が高いこと。

「霧島さんの推理つてあれだよな？ 『南風』の屋根上『礼士さんには津軽さんのアリバイトリックつて分かったりする？』

今度は僕が沈黙する番だった。瑞穂さんに知恵を貸したい気持ちは強い。でも、ここで安易に手助けをしたら

瑞穂さんはそのまま犯人に挑むかもしれない。いつかの東京駅のように、瑞穂さんは無鉄砲な真似をする時がある。だから正直警戒していた。

「ごめん、今すぐには僕にも分からないよ。僕の方でもまだ解けていない謎がいくつかあるんだ。過去の件は特に。だから、ちよつと今は手を貸すことができない。ごめん」

『いいのよ。でも、礼士さんもあまり根を詰めすぎないでね？ 真犯人と一緒にいるんだし』

「お互いに気を付けるしかないね」

電話越しに互いに笑いあつた。瑞穂さんの笑い声は不

思議なもので、聞くと疲れが取れる気がする。僕だけが知っている、僕にしか通じないまじないみたいなものだ。に島風を落とすつてやつ」

『ええ、そう。電車の屋根に落とすやつ』

電車、か。

「……瑞穂さん、事件に絡んでいるかもしれないから一応訂正しておくよ。『南風』は正確には電車じゃないんだ」

『えっ？』

電話口から戸惑ったような声が聞こえた。ドアが閉まり、列車はまた走り出す。

『南風』は気動車つて言つて、軽油で床下のディーゼルエンジンを回して走るんだよ。電車つていうのは電気でモーターを回して走るから、『南風』は正確には電車ではないんだ」

「え、じゃあ車みたいに排気ガスを出して走るの？」

「そうだよ。屋根上に繋がる排気管があることがほとんどだね。乗るときに注意してみると、排ガスの匂いがする時があるはずだよ。ディーゼル車だから窒素化合物や

粒子状物質とかも出すんだ。粒子状物質つていうのは、排ガスに含まれる黒い粒子のことだよ、近年だと大気汚染の原因になったりしているやつ。PM<sub>2.5</sub>とかつて聞いたことない？」

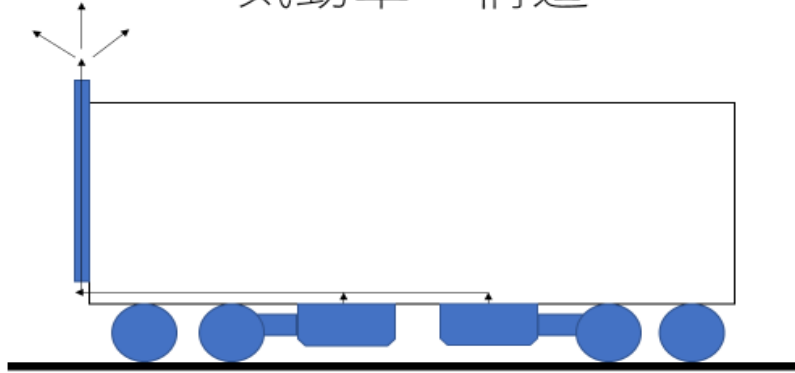
瑞穂さんは黙ってしまった。

「まあ、普通に生きていけば電車も気動車も同じようなものだから、そんなに気にしなくてもいいよ」

困惑されてしまったのかもしれないと、少し慌ててフオローに走る。

『……ありがとう、礼士さん。良い事を聞いたわ』

# 気動車 構造



気動車は床下に搭載したディーゼルエンジンを回転させて走行する。排気ガスは排気筒を通じて主に屋根上から放出される。

\* 矢印は排気ガスの動きを表す。

意外にもポジティブな返事が返ってきた。

『礼士さんには津軽さんのアライトリックって分かったりする？』

今度は僕が沈黙する番だった。瑞穂さんに知恵を貸したい気持ちは強い。でも、ここで安易に手助けをしたら瑞穂さんはそのまま犯人に挑むかもしれない。いつかの東京駅のように、瑞穂さんは無鉄砲な真似をする時がある。だから正直警戒していた。

「ごめん、今すぐには僕にも分からないよ。僕の方でもまだ解けていない謎がいくつかあるんだ。過去の件は特に。だから、ちよつと今は手を貸すことができない。ごめん」

『いいのよ。でも、礼士さんもあまり根を詰めすぎないでね？ 真犯人と一緒にいるんだし』

「お互いに気を付けるしかないね」

電話越しに互いに笑いあった。瑞穂さんの笑い声は不思議なもので、聞くに疲れが取れる気がする。僕だけが知っている、僕にしか通じないまじないみたいなものだ。

そこからは事件のことを忘れ、他愛もない話に終始した。笠原に襲われたのが昨年末、そこから生死を彷徨い、長期入院を経た。退院してすぐに瑞穂さんは秋田を旅立ち、僕は取り残されてしまった。その失われた日々を取り戻すように。ぽつかりと空いた空白を埋めるように。僕は瑞穂さんと笑いあい、そして励ましあった。

「……じゃあ、そろそろテレカの残量が無くなるから」

『あつ、礼士さん』

「ん？」

遠く離れているはずなのに、まるで隣にいるかのよう。瑞穂さんははつきりと言った。

『愛してる。だから、あなたを待ってる』

「……そうか。ありがとう」

おやすみを言い合って、受話器を置く。テレカの残量は僅かだった。

\*霧島翼 — 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

階下の食堂に入ると、黒潮警部とせとつちが僕を待っていた。

「こんばんは、お疲れ様です」

「ああ、どうも。昼間の推理は見事でしたなあ」

黒潮警部は突き出た腹を揺すりながら立ち上がり、手で向かいの椅子を示した。一応ここは僕の実家なんやけど、細かいことは気にしない。

「いえいえ、それほどでも。それより、常盤の様子はどうですか？」

「いえそれが、まだ強情を張つちゆうがですよ。まあ時間の問題でしょうなあ」

津軽さんが人数分のビールを運んできた。僕はせとつちに話を振ってやり過ごすことにした。

「明日には宿泊客も返して貰える感じ？」

「ええ、そうですね。常盤さんが殺人容疑で立件されるのも時間の問題やと思いますし、あまり皆さんを留めておくこともできないので」

まずいな。タイムリミットは明日ということか。

「さ、警部。乾杯しましょうよ」

「ですなあ。今日もお疲れ様でした！」

せとつちだけはノンアルコールビールで乾杯する。三つのジョッキが威勢のいい音を立てた。

「そういや、明日は碓氷さんの彼氏が来るんですよ」

「確氷……ああ、彼女ですか」

黒潮警部の脂が浮いた額に皺が寄る。

「秋田の人でしてね、僕も何度か飲んだんですが、まあ酒に強いんですよ。日本酒一升瓶を軽く飲み干すような人で。黒潮警部は酒豪だと瀬戸刑事から伺っています」

「わざわざ秋田から駆けつけてくれるんですか、確氷さんも随分と熱心な恋人を持ちましたなあ」

警部はジョッキを半分くらい空にし、重い音をたててジョッキをテーブルに置いた。

「その彼氏さんは幸せと同時に大変でしょうなあ。確氷さんが相手となれば」

「そんなもんですかね？」

津軽さんがつまみを運んできてくれた。時間が遅いから大したものを用意できず、冷凍のオニオンリングとイカフライが運ばれてきた。

「何せ、彼女は真面目な人らしいですね。しっかりと男やないと相手は務まりませんよ、ありゃあ」

僕は少し意外に感じた。確氷さんから得た触感はまだ良くなかったのに、黒潮警部はそこまで悪印象を抱いていないみたいだ。

「まあ、剣さんなら心配いりませんよ」

「剣、というがですね。珍しい苗字ですなあ」

黒潮警部はまたビールを一口飲み、そしてオニオンリングを口に運んだ。ザクザクと噛み砕く音がはっきりと聞こえた。

「ええ。去年の夏やったかな、新幹線が爆弾犯に乗っ取られた事件があったやないですか。あの時に新幹線を運転しよった人ですよ。どうもあの人、頭脳は切れるんですが悪運強くて、去年のゴールデンウィークに寝台列車の中で変死体が発見された事件でも確氷さんと一緒に乗

り合わせていたんです」

「死神か何かですか？」

せとつちが口を挟んだ。言ってるやるな。

「頭が切れる、とは？」

「ええ。どっちの事件も剣さんの機転で警察が事件を解決したらしいがですよ」

黒潮警部は少し目を丸くした。アルコールで頬に赤みが差したこともあり、達磨にそっくりだ。

「もしかしらたら、この事件でも力になってくれるかもしれませんね」

僕は冗談めかして言い、ジョッキを空ける。

「霧島さんも人が悪いですなあ、もう犯人は捕まっていますよ。常盤涼香、彼女ですよ。剣さんの頭の良さには興味がありますけど、もう出る幕はありませんなあ」

やといいですけどね……僕は内心ではそう思いつつ、それをおくびにも出さずに警部にイカフライを勧めた。警部は笑い上戸のようで、豪快に笑いながらガツガツと食べ始めた。

まあ、これ以上の根回しは不要だろう。警察も常盤さんが犯人と信じ切っているみたいで、むしろこれ以上の深入りはできそうにない。剣さんが……探偵が来るとだけは伝えた。この調子なら大丈夫だ。

\* 確氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

礼士さんとの電話を終えた。まるで目の前に座っていたかのようにお互いの話には淀みがなく、体の芯から暖かい血が巡るのを感じていた。

礼士さんは私のことが心配なのだろう。私が礼士さんを心配しているように。

あの人が着いたら、元気いっぱいに出迎えてあげたい。お互いが無事であるのなら、それに勝るものはない。

私は改めて礼士さんから送られてきた推理の内容に目を通した。『電車館』に隠されたからくり、そして真犯人の正体。あの場では偽の犯人を打ち立てて脱出したらしいけれど、少しでも早く私に会いたいという思いも一緒に綴られていた。

その想いを無下にはできない。

だからこそ、津軽さんを追い詰めるには慎重にならなといけない。推理に抜けが無いように、しっかりと証拠を見抜かないといけない。

礼士さんは大きなヒントをくれた。自動車の話だ。あの人の話だと、エンジンの排気は排気管を伝って屋根から排出されるらしい。屋根上に排気ガスを流すのであれば、『南風』の屋根に振り落とされた島風教授の全身に排気ガスの成分が付着しているはずだ。でも、そのようならせは入っていない。いくら川の中に沈んでいたとしても、鑑識の手腕を以てして全く見つからないとは考えにくい。

つまり、島風教授は『南風』の屋根に落とされなかったことになる。

これで津軽さんが高知に戻る『南風』の問題は解決した。島風教授をベランダから突き落とすのに『南風』が無関係なのだから、津軽さんは自分の好きなタイミングで島風教授をベランダから落とし、川に捨てて殺害すればいい。

ただ、これでまだ全ての問題が解決したわけではない。そもそも、津軽さんには島風教授を襲うことができ

たのだろうか？

まず、監視カメラの問題がある。この旅館には玄関に一機の監視カメラがある。あのカメラの映像はさすがに見せてもらってはいないけれど、正面玄関を避けてこの館に入ることはできるのか？

いや、二階の廊下に通じる非常口がある。霧島さんはあそこにご開けられたような痕跡は無いって言っていたけど、それはそうだろう。津軽さんは従業員なのだから鍵は持っている、当然だ。

鍵を持っているのなら客室に入ることも容易い。他の人に気付かれないようにする必要はあるけれど、支配人と女将さんの行動パターンはある程度事前に把握できる。3か月も一緒に働いていたのならそれくらい簡単だ。

他の宿泊客は？ 私は足を怪我していて部屋に引きこもったまま。霧島さんは居酒屋で飲んでる。学生トリオの動きが心配だけど、彼ら三人を釘付けにするようなイベントがあった。テレビでエヴァをやっていたら、ついつい見入ってしまうだろう。いささか綱渡りだけど、私ですら名前を知っている人気作だ。通路を通るだけならほぼ問題ないように思える。

でも、一番の問題はここからだ。どうやって島風教授を襲うのか？

島風教授の部屋には教授の他に常盤さんもいる。常盤さんは警察に連行されたけど、津軽さんによって濡れ衣を着せられた可能性が高い。

いや、島風教授を襲うことそのものは簡単はずだ。彼女の遺体からは睡眠薬の成分が検出された。津軽さんがそれを仕込んだとすれば筋は通る。常盤さんも食事中

に眠気を訴えていたから、邪魔にならないように一服盛られたのだろう。

でも、どうやって？ 焼酎を運んできたのは津軽さんだ。彼女にチャンスはいくらでもある。

でもここで、私はまた壁にぶつかつた。睡眠薬を盛ることはできても、それなら一人に一錠で十分なはずだ。霧島さんが警察関係者に聞いた話だと、かなり強い成分を含んだ睡眠薬が常盤さんの荷物の中から発見されている。でも、発見された時には既に四錠分が空になっていた。

自分でも効果を試すなどして、元々使いかけだつたのだろうか？ でも、それなら一錠飲むだけで十分に実験できるように思える。二錠も余計に消えるというのは解せない。

何かトラブルがあつて二錠分が使えなくなつてしまつたのだろうか？ 食事時に起きたトラブルといえば、あれだ。島風教授が驚いて焼酎を受け取り損ね、床にまいた。あのトラブルで津軽さんはやたら平謝りだつた。ズボンと靴下だけがびしょ濡れになつた私の服を、上に着ている物も含めて全部洗うと言つて聞かなかつた。あれは、睡眠薬の成分が焼酎に含まれていると露見するのを恐れたのではないだろうか？

でも、何か証拠はあるのだろうか？ 私の服は綺麗に洗われてしまい、睡眠薬の成分は残っていないだろう。でも、焼酎という液体をまいたのなら私以外の誰かの服にも飛び散っている可能性はある。私の近くに座つていた人物といえば、霧島さん。彼はあの時にスーツを着ていた。スーツはそのまま洗うことはできないから、クリ

、リングに出されない限りはスーツに飛び散つた焼酎の染みは残っているはずだ。

「後で見せてもらうしかなさそうね……」

これは半ば賭けみたいなものだけど、試してみる価値はある。染みから睡眠薬の成分が検出されたら、津軽さんを追い詰める物証になる。

物証になりそうなもの……：そういえば、あの時に割つた陶器はどうしたんだろう？ 不燃ごみとして回収されていないければ、そこからも睡眠薬の成分が出てくるのではないだろうか？ いや、もう川に捨ててしまつたかも知れない。望み薄みたいだけど、調べてみる価値はある。

とにかく、あの時に既に仕込んでおいた睡眠薬がパーになつたとすれば、四錠分も使われていることに納得できる理屈が与えられる。

これで、島風教授と常盤さんはぐっすり眠つていたはずだ。そうなれば部屋の鍵を開けて寝込みを襲うことは簡単だ。島風教授をベランダから落とす、川に捨てればいい。この時に常盤さんの荷物に睡眠薬を紛れ込ませておいたのだとすれば、辻褄は合う。

でも、それだけでも一苦労だ。津軽さんはそこまで大柄な方ではないし、一方で島風教授は太めだ。『南風』まで時間はあるものの、あまりもたもたしていると誰かに見つかつてしまうかもしれない。もっと迅速にできる方法は……？

思いつくまでにそんなに時間はかからなかつた。ベランダからトラックの荷台に落とせばいいのだ。島風教授の部屋は業務用駐車場に隣接している。ベランダから荷台に投げ捨てることは十分に可能だ。トラックの荷台に

あった凹み、あれは島風教授が落ちてきた時にできたものなのだろう。

トラックの荷台と言えば、土くれは？ ……分からない。後で考えよう。とにかく、彼女を荷台に積んでしまえば後は楽だ。橋までトラックを走らせ、そこで捨てればいい。土讃線の橋梁の右隣に国道32号線の橋が架かっているから、川の上流側に捨てればあたかも、『南風』の屋根から振り落とされたように偽装できる。

後はトラックでそのまま大杉駅に向かえばいい。最終の『南風27号』は大杉駅を23時22分に出る。高知には0時03分に到着だ。

で、翌朝。高知市中央卸売市場では4時20分にトマト一箱を買ったことが記録されている。その直後に市場を出れば、4時50分には高知駅に着いている。早朝で交通量も少ないため、よほどの事が起きない限りは間に合うはずだ。

5時ちょうどに高知駅を出る『しまんと2号』なら大杉駅に5時31分着。そこからトラックを走らせれば宿には6時前には到着する。

私は大きく息を吐き、時刻表を閉じた。これで津軽さんのアリバイは崩せた……ん？

何か引つかかる。何か大事なことを忘れているよう

な。あ、そうだ。夕方に撮ったアンパンマン列車の写真をまだ札士さんに送っていなかった。あの人もずっと推理ばかりでは息が詰まるだろう。少しでも気分転換になつてもらえたらと思い、画像フォルダから手あたり次第に送り付ける。

ちゃんと送信されたのを確認して、スマホをポケットにしまう。とりあえず、ここまでの推理を霧島さんに話

してみよう。もうかなり遅い時間だけど、飛び散った焼酎とかは早めに確認しておきたい。部屋を出ると、ちょうど霧島さんが黒潮警部と瀬戸刑事を送り出すのが見えた。

「あ、碓氷さん」

階上を見上げた霧島さんが私に気付き、のったりした足取りで階段を上がってきた。頬に赤みが差しているのを見ると、あの二人を相手にアルコールで「根回し」を行ったようだ。

「霧島さん、ちょっと」

推理の進捗と、札士さんから送られてきた推理を手短かに話した。『電車館』という奇怪な館のトリックを聞いて酔いが吹っ飛んだみたいだ。

「じゃあ、真犯人がこつちに来るっていうのは」

「ええ。ただ……その人と津軽さんの関係が分からないんです。津軽さんもその人も、それぞれの事件に動機が無いという点では一緒なんですけれど」

『電車館』のことはいい。今は証拠固めが先だ。私は霧島さんに頼んでスーツのズボンを見せてもらうことにした。

「焼酎の染みなんて分かりますかね？ 油染みやないんですから」

「駄目で元々です」

持ってきてくれたズボンを広縁のテーブルに広げ、くまなく調べる。

「霧島さん、足短いんですね」

「うるさいですよ、これでも気にしてるんですからね」

短足の役人が見せるふくれっ面には目もくれず、ズボンの裾の辺りに顔を近付ける。

「あった！」

右足の裾に数滴、元々の布地よりも黒っぽくなっている箇所がある。

「これ、クリーニングとかはしていませんよね？」

「ええ。参ったな、このスーツ高かったのに……」

とりあえず、明日の朝イチでこれを警察に持って行って調べてもらおう。私の推理が正しければ睡眠薬の成分が検出されるはずだ。

「それより碓氷さん、アリバイも崩れたって言っていましたね。どんな感じですか？」

そういえば、津軽さんが弄したアリバイトリックの中身はまだ説明していなかった。私は時刻表をめくり、該当する列車を指で追いながら説明する。

「……なるほど」

霧島さんは大あくびをした。私の短足発言への意趣返しなのか、それとも根本から間違っているのか。

「残念ですが碓氷さん、その時刻表トリックは無理ですよ」

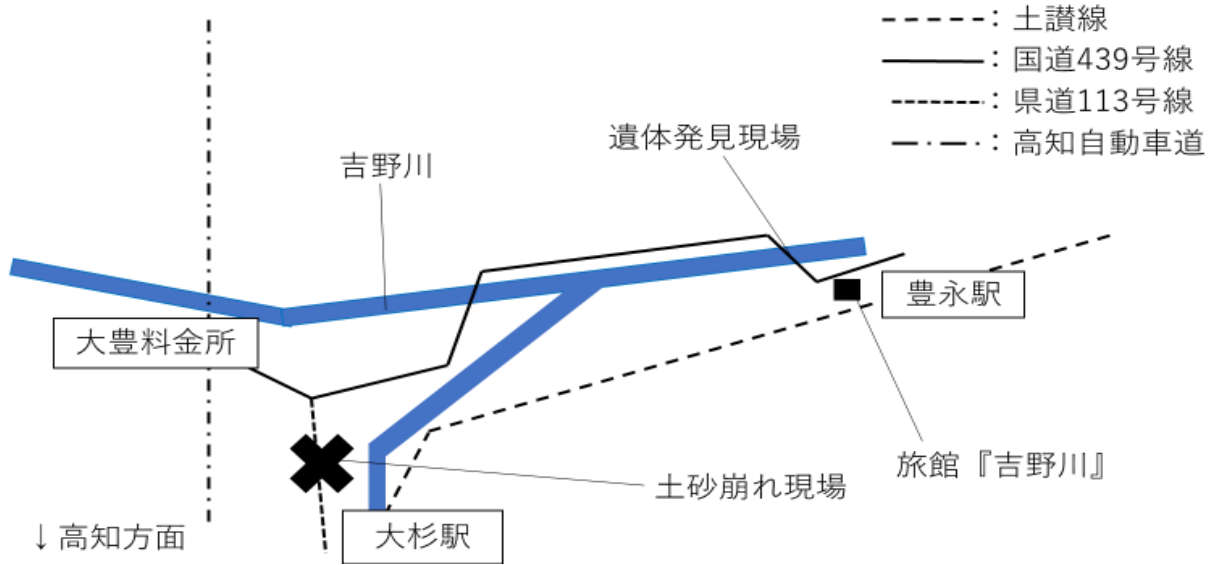
「えっ？」

不安が暗雲のように立ち込める。霧島さんは少し気の毒そうに続けた。

「まず、トラックを駐車場に停めることについて。駐車場は事務室の真横にあるんですよ。その時間、父さんがブログの更新をやっていました。雨が降っていたとはいえ、トラックの音がしたら聞こえる可能性が高いです」

……。

# 土砂崩れ 現場地図



「もう一つ。大杉駅からこの宿に戻る道中、覚えていますか？ 途中で土砂崩れによる工事が行われていましたよね。あの時に係員が『昨夜11時頃に土砂崩れが発生したという通報を受けた』って言っていたんですよ。で、対面通行にこぎつけたのが翌朝の9時。ということ

は、5時半に大杉駅からこの宿にトラックで向かおうとしても、通行止めになつていたはずなんです」

「そ、それなら彼女がトラックで高知まで往復した、という証言にも矛盾するじゃないですか」

私の精一杯の反論を霧島さんは打ち砕く。

「それがそうでもないがですよ、碓氷さん。高知自動車道の大豊インターで降りたら、土砂崩れがあった道を通らないでこの宿に着くことができます。なんで、彼女の証言を完全にひっくり返すものでもないがですよね」

一気に冷や水を浴びせられた気分だ。そういえば、霧島さんが繁藤災害について語ってくれた交差点は土砂崩れ現場を通り過ぎた後に位置する。

「ただ、碓氷さんの推理の方向性は間違っていないと思います。睡眠薬の話なんて筋が通っていますし」

「どうも……問題点を整理してみますね。まず、津軽さんがトラックで高知に行かなかった証拠はあるのか。次に、トラックの音と事務室の関係。さらに、土砂崩れと時刻表トリックの関係。他に何かありますか？」

「トラックの荷台に付着していた土くれの問題もありますね。あれ、どうにも引かかるとは思いませんよ」

広縁の真下を『南風』がけたたましく駆け抜けていった。もう23時を回っている。最終の『南風27号』だったのだろう。霧島さんはまた大あくびをした。アルコールが入ると眠くなる体質なのかもしれない。

「もういい時間ですし、そろそろお開きにしませんか？ ちゃんと寝ておかないと明日に響きますよ。明日は剣さんも真犯人を連れてきて、津軽さんを追い詰めるんですから」

どうやら津軽さん犯人説は完全に否定されたわけではないみたいだ。私は幾分ほっとしながら、寢床に戻る霧島さんを見送った。私はもうしばらく時刻表と格闘しようかと思っただけで、霧島さんに釣られてあくびが出た。今夜は潔く諦めて、床に就く用意をすることにした。

## 第十一章 看破

\* 剣札士 —— 宮城県栗駒市・『こまち96号』車中

瑞穂さんとの長電話を終え、僕は自分の席に戻った。「間もなくくりこま高原です。くりこま高原の次は古川に停車致します……」

こんな夜に東北新幹線に乗ると、どうしても去年の夏を思い出す。忘れたくても忘れられない、あの命懸けの疾走を。

釜田さんたちは思い思いに過ごしている。席を最大限に倒し、裾の長いダウンコートを頭からすっぽり被って仮眠をとる大和さん。どこで買ったのやらビールと子持ちシシヤモで晩酌をする釜田さんに比叡さん。そして……真犯人は黙ってスマホをついている。

僕は鞆の中から2004年10月のコンパス時刻表を取り出した。10年前に『電車館』で死亡した播磨社



長、工場への放火で死亡した三辺取締役、……僕なりに考えても、当時の山鳩専務が一番怪しいように思える。

でも、あの人にはアリバイがあった。ならば徹底的に調べてみよう。僕は鹿島さんから聞いた話を頼りに時刻表をめくり、当時の旅程を再現してみる。

最終便で秋田を発ち、名古屋に一泊することは可能だ。そこから始発の新幹線に乗れば、高知で正午から開催される鉄道模型サミットにも間に合う。この乗り換えの合間を縫って仁賀保に行き、三辺製作所に放火することはできるのだろうか？

調べるまでも無い。この乗り換えの間に仁賀保に向かうことは不可能だ。三辺製作所から出火したのが21時30頃だが、このアリバイが真実なら山鳩さんと鹿島さんは京急線に乗って羽田から品川に向かっていた頃だろう。

山鳩専務が犯人だとした場合、このアリバイは部分的もしくは全面的に偽物であるに違いない。じゃあ、どの辺が怪しいだろう？

一番怪しいのは飛行機に乗ったかどうかだ。『電車館』から仁賀保に向かい、そこから何かしらの手段で高知に向かったとすれば割と筋は通りそうだ。

山鳩会長は車を運転しないと書いていたから、移動手段は電車がメインになるだろう。あの『電車館』を引き継ぐ人間だ。時刻表トリックを組むにしても、鉄道がメインになる可能性は高い。

→  
図  
⑳

## 山鳩専務 アリバイ (2004.10.6~10.7)

日本航空1268便 秋田19:55→羽田21:00

東海道新幹線『ひかり293号』品川22:07→名古屋23:46

ホテル『サクラパレス名古屋』に宿泊

東海道・山陽新幹線『のぞみ39号』名古屋6:40→岡山8:19

土讃線特急『南風3号』岡山8:50→高知11:31

\* 仁賀保にある三辺製作所での火災発生は21:30頃

\* 高知でのサミットは正午より開催

\* 特急『南風3号』は宇多津で特急『しまんと5号』（高松～高知）と併結

『しまんと5号』高松9:10→高知11:31

出典：交通新聞社『コンパス時刻表 2004年10月号』

日に焼けて少し茶色くなった時刻表のページをめくる。まずは、山鳩会長が出火時刻である21時30分までに仁賀保に行くことができるかを調べてみよう。ページをめくり、羽越線の上り時刻を調べる。秋田を20時23分に出る普通558M列車がある。これなら仁賀保には21時17分着だ。放火時刻と概ね一致する。

じゃあ、次に放火後に仁賀保を出る列車はあるのか？ 一目瞭然だった。普通558Mの右隣の欄に、上野向かう寝台特急『あけぼの』が記載されている。21時56分に仁賀保を出発する。これなら時間的にもちょうどいい。

後は上野まで出て、飛行機を乗り継ぐと高知に先回りすればいい……いや、そうでもなさそうだ。僕は鹿島さんの弁を思い返した。

あの時、サミット担当者は高知駅のホームまで出迎えてくれたと言っていた。それは、担当者は山鳩専務と鹿島さんが『南風3号』から降りてくるところを直に出迎えたということの意味する。ということは、山鳩専務は間違いなく、『南風3号』に乗っていたことになる。

つまり、山鳩会長が高知に先回りをするだけでな駄目だ。高知に先回りするか否かに関わらず、『南風3号』にどこからか乗車する必要があるのだ。

『南風』は基本的に高知と岡山を結ぶ。沿線にある空港は高知空港と岡山空港だ。じゃあ、『あけぼの』から羽田空港に向かい、そこからうまい具合に乗り継ぎができるかどうかにかかってくる。巻末の飛行機時刻表を開いてみた。

まず、高知空港に行く便から調べてみる。始発は羽田を8時35分に出発し、高知には9時50分着だ。この

便なら『あけぼの』からの乗り換えで上野から羽田空港に向かうことを加味しても、十分に乗り換え時間はある。高知に出て『南風3号』に乗り継げるかどうかだ。

時刻表にはさすがに高知龍馬空港と各地を結ぶバスの時間までは載っていないかった。タクシーでどこか土讃線の特急停車駅に行けないだろうか？

スマホで地図を開く。高知龍馬空港は南国市に位置する。地図を縮小してみると土讃線の路線図が見えてきた。空港から一番近い駅は後免駅。謝っているような変わった名前だ。

『南風3号』のページに戻る。当該列車は後免駅を1時23分に出発する。地図上で見た感じの距離だと、空港から後免駅までは車で15分もあれば着きそうだが、余裕で間に合う。

思いの外あっさり山鳩専務のアリバイが崩れてしまった。でも、これはルートの使用が可能であることを示すただけに過ぎない。山鳩専務が名古屋で一泊するルートを使い、本当に放火とは無関係だという証拠は何一つ無い。

それに、解けてしまった割にはあまり納得がいかない。何というか、簡単すぎるのだ。たかだか数回時刻表のページをめくれば分かるようなアリバイトリックなど、山鳩専務のような筋金入りの鉄道愛好家が組むだろうか？

何か手掛かりは無いだろうか？ 僕は時刻表を一度開じ、鹿島さんの証言の中に矛盾を見出そうとした。何か引っかかるのだ。でも、それが何なのかはつきりしない。

それ以前に、2004年10月6日時点でこれらの交通機関が時刻通りに動いていたかどうかをはつきりさせ

ることが先かもしれない。僕は霧島さんにメッセージを送った。あの人の能力ならすぐに調べがつくはずだ。

車内放送のメロディが鳴った。

『ご乗車ありがとうございます。間もなく終点の仙台、仙台です。車内にお忘れ物や落とし物をなさいませんよう、お手回り品を今一度お確かめ下さい』

気が付くと『こまち96号』のはゆるゆると速度を落とし、車窓には仙台市街の灯がゆつくりと流れている。

「おい、降りるぞ」

アルコールで少し鼻先を赤くした釜田さんが僕に声をかけた。比叡さんは大和さんからコートをふんだくって起こしている。

「ええ。すみませんね、少し考え事をしています」

「熱心なのは構わねえけどよ、あんまり根詰めすぎんかよ？ お前の一番の役目は謎を解くことじゃねえんだからな」

列車にブレーキがかかり、窓の外に煌々と水銀灯に照らされた仙台駅のホームが映し出された。

「お前は確水を守るために高知に行くんだろ？ だった

ら次の夜行バスでしっかり寝て、英気を養っておけ。謎を解いて犯人を突き出すのはあくまでも確水を守るための手段だ。履き違えるなよ」

「分かっていますよ」

僕が素直に返事をして立ち上がると、釜田さんは少し歯を見せて笑った。

ドアが開き、ホームに出る。吐息は白く、先は長い。

\*

\*

東北本線の夜行列車が『カシオペア』や『北斗星』といったあまりビジネス向きでない列車しか残っていない現在、人々の夜間移動を支えるのは高速バスだ。仙台駅

から歩いて10分ぐらいのバス営業所は割と混んでいて、大荷物を抱えた客たちがひっきりなしに発着するバスに吸い込まれては消えていく。

僕たちが乗る『ニュースター号』は、ほぼ定期通りにバス停に到着した。バスターミナルの照明が白地にオレンジの塗装を施したバスを照らす。

「大和さん、荷物を」

「あ、どうも」

バスの運転手さんに手伝わってもらいながらキャリーケースを荷物スペースに放り込む。

「次、比叡さん」

「ありがとうございます」

そのまま僕の荷物も入れてもらう。どうせ夜間の消灯したバス車内では読めない、そう分かっているながらも時刻表は手放さなかった。

実は夜行バスに乗るのは初めてだ。いつも意図的に鉄道を選んであちこちに行ってきたから、自然とそれ以外の交通機関とは縁遠くなっていった。切符を渡してステップを上がる。

「大和さんと比叡さんは奥ですね。僕らは真ん中の方なので。それでは、おやすみなさい」

「おやすみなさい、剣さん」

座席は3列で、既に多くの席がカーテンで仕切られていた。カーテンの下からは革靴やスニーカーが顔を出している。ブザーの鳴動と共にドアが閉まり、低いエンジン音を立ててバスは夜の中に走り出した。

釜田さんらにも就寝の挨拶を済ませ、僕は自分の席に陣取る。あまり残席が無く、カーテンも無い真ん中の列の席だ。左隣のサラリーマンのいびきが少し耳障りだった。



コンセントにスマホの充電を繋ぎ、目を閉じてゆつたりしたシートに身を預ける。分かっていたことではあるけれど、なかなか眠りにつけなかった。

暗闇の中、いつしかバスは高速に入ったみたいだ。そつと前方を覗く。たくさんの大型トラックに交じり、一路南下する。車内では誰一人喋らず、いびきや寝息の合間にエンジン音が聞こえるくらいだ。

眠れない。いや、眠りたくない。怖いのだ。今眠ってしまったら、真犯人が僕の息の根を止めにかかるかもしれない……。

釜田さんや大和さんについてきてもらったのは正解だった。ずっと僕と犯人だけにいるのは無理がある。真犯人は今、僕の目の前のシートにいる。起きているかどうかは分からない。

とりとめもなく考え事していると、どうしても事件の方に思考が進む。『電車站』の事件はやむを得ず水郷さんを犯人に仕立て上げて脱出したけど、どうして、『電車站』の事件でも旅館『吉野川』の事件でも犯人には動機が無いのだろう？

動機が無いのに人を計画的に殺すというのは、かなりおかしな話だ。少なくとも犯人二人には猟奇的な趣味は無さそうに思えるから、その時点で行き詰まってしまう。

山鳩専務が播磨社長と三辺取締役を殺害したというのなら、動機は割とはつきり想像できる。あの人のアリバイは霧島さんの返事を待たないと何とも言えない。

いや、自分で調べられるのではないか？ 当時はまだインターネットが今ほど発達していないとはいえ、運が良ければ当時のブログ記事やネット記事が引っかかるか

もしれない。試しに僕はスマホに『2004年10月6日 天気』と打ち込んでみた。悪天候で飛行機が飛ばなかったりしていたかもしれない。でも調べてみたら穏やかな天気だったみたいだ。欠航は無さそうだ。

次に『天気』を消して『羽越線』と打ち込んでみる。特に目ぼしいものは無かった。本当に山鳩専務は『あけぼの』を使っただろうか？

いや待てよ？ 警察も山鳩専務のアリバイを調べたはずだ。でもどこまで調べたのだろう？ それについては調書にも記載が無かった。僕は少し迷ったものの、矢野警部にメールしてみることにした。こんな深夜だ、返信は明日になるだろう。既に時間は1時を回っている。

どうしたものか。僕は少し考え、鹿島さんが言っていた名古屋のホテルについて調べてみることにした。『スクラパレス名古屋』と打ち込むと調べるとすぐに出てきた。どうでもいいけれどどこぞの文房具メーカーみたいな名前だ。

トップページには桜色の文字ででかかどと『名古屋駅直結！ 天然温泉の大浴場！』と出てきた。部屋の写真を適当に見てみると、ツインルームからは新幹線が見えるみたいだ。泊まってみたい。

色々と設備を見ているうちに、今自分が収まっているリクライニングシートが恨めしくなってきた。深夜バスの車内でベッドの画像なんて見るものではない。気を取り直そうと僕は腹にブランケットをかけ直した。

大浴場の写真もあった。24時間営業で、最上階から名古屋の景色を一望できるという。天然温泉と喧伝されているけれど、冷泉をくみ上げて温めているのだろう。でも、広々とした風呂とサウナは魅力的だった。

ふと僕は、ここで微かな違和感を覚えた。まただ。こ

の何か、もどかしくも気付くことができない矛盾の気配……。鹿島さんの証言か、それとも図書館で見かけた何かだろうか？

考えても分からないことは考えないに尽きる。他の事を考えよう。山鳩専務はずっと鹿島さんと一緒にいたと証言しているし、飛行機やホテルのチェックインなども当時の警察が証言として押さえているだろう。

では、山鳩専務はどうやって単独行動を取ったのか？ 方法に心当たりはあるのだが、可能性に疑問符が付く。

ふと、スマホが小さくバイブを起こした。メールだ、開いてみると、こんな夜遅くなのに矢野警部はまだ起きていたみたいだ。少し申し訳なく思いながら文面を読んでみる。

僕が考えた『あけぼの』を使う時刻表トリックは警察がとつづくに考案したものだった。でも当時の警察は持ち前の機動力でそれを検証したという。高知県警に捜査協力を依頼し、高知空港から後免駅まで山鳩専務を運んだタクシーが無いかを風漬しに調べて回ったという。結果、空振りだった。山鳩専務は空港から後免駅に直行しなかったのだ。

次に、高知空港から高知駅に向かったのではないかと調査した。高知空港から高知駅までは連絡バスで約30〜40分。順当に乗り継げば高知駅を11時01分に出る『南風12号』で後免駅に11時11分に着き、そこから後免駅を11時19分に出る『南風3号』でとんぼ返りできる。これは僕も気付かなかった。ただ、このルートも結局は否定されてしまう。バスやタクシーで山鳩専務が移動した証拠は得られず、さらにダメ押しに当日に高知〜後免のきつぷや乗り降り自由な各種フリーパス

を持って『南風12号』に乗車した乗客はいなかったのだ。

『南風3号』も駄目、『南風12号』も駄目、か……高知に先回りしなかったみたいだな」

メール文末には、事件の処理でまだしばらく起きていながら気にしなくていいという旨が書かれてあった。僕は丁寧なお礼を打ち込み、場合によってはまた協力を仰ぐかもしれないとメールした。

このメールで、高知に先回りするルートは不可能もしくは実行されていないと証明された。『電車館』の当主だけあって、簡単には見破れないみたいだ。

前の座席からぐおつ、といういびきが聞こえた。……彼は眠っているみたいだ、それなら襲われることも無いだろう。僕も諦めて眠ることにした。

リクライニングを最大に倒したシートに座り直し、毛布を肩までずり上げる。眼鏡を外し、今度こそ目を閉じる。瞼の裏に瑞穂さんの面影を思い出す。明日、ようやく彼女に会える。

夜のハイウェイをバスは駆ける。断続的に低く唸るエンジンを手守歌に、いつしか僕は眠りに落ちていた。

＊確氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

眠れないまま日付を跨いでしまった。スマホをつくと、ホーム画面に表示された時刻は午前1時。

今日、とうとう今日になってしまった。礼士さんに会える。みんなに会える。そう考えるとますます眠りが遠ざかっていく。

恐らく私は、今日のうちに高知を離れる。10年ぶりの高知がこんなかたちになるとは思わなかった。津軽さ

んと決着をつけるのなら、今日しかない。そう考えると少し武者震いした。

でも、何のために彼女に挑むのだろうか？ 考えたしたら止まらない、疑問が私の脳細胞を叩き起こしていく。なぜ私は謎を解く？ どうして危険な橋を渡ろうとする？

後ろめたいのだろうか、と思い当たった。私の過去を礼士さんは受け入れてくれた。でも、私自身が受け入れられないままだ。

それとも、羨ましいのかもしれない。津軽さんがこのまま常盤さんに罪を被せてまんまと逃げおかせたら、彼女は自分の罪も忘れて生きていくのだろうか。罪が暴かれたとしても、何年か刑務所に入ればやり直せる。形式上は罪を償うことができる。私は？ ……罪が明るみになっていない以上、赦すことができるのは私しかないのだ。

私は寝返りを打った。さすがにこの時間だと礼士さんも寝ているだろう。

礼士さんも良く分からない人だ。どうして私なんかここにまで必死になるのだろうか。嬉しいのは事実だけど、どうして私なんだろう。

「私なんか」という思考は頭から追い出した。こんな風に自分を卑下しても、あの人は絶対に喜ばない。

理由なんているの？ 誰かを愛するのに、誰かに愛されるのに、謎を解き明かすのに、私自身を変えろのに、私の人生を全うするのに、私の人生を燃やし尽くすのに。

礼士さんに褒めてほしいのか、認めてほしいのか。だから謎に挑むの？

それは否定できない。あの人に見合う私でありたい。

この謎を解いたら、胸を張って礼士さんに見合える人間になれるような気がする。

礼士さんはどうして謎を解くんだろうか？ 霧降荘の事件の時も、私から離れる時は釜田さんや叶ちゃんに私を任せた。でも、今回の事件では霧島さんと連絡を取っている様子は見受けられない。私を放任しているような気もする。

礼士さんが不安がつているのは分かっている。私とて単身で犯人に挑むことはほしくないけれど、彼が全力で止めるのなら素直に引き下がるくらいの判断力はある。礼士さんは忠告こそしたものの、決して止めなかった。

私を信じてくれてるんだろう。

どうして私は謎を解くんだろうか？

誰かの役に立ちたいから？ ……分からない。否定はしないけれど、具体的に貢献したい人間はこの旅館にはいない。常盤さんのことだって、犯人でないこと以外はどうだっていい。

じゃあ、理由が無かったら見過ごすの？ それはできない。それはしたくない。それは許されない。

どうして？ 私は人を殺したから。人を殺したからこそ、良く生きたいの？ そんなことはない。私が人である限り、捨てられない性だ。良く生きたところで罪滅ぼしにはならない。人を救ったくらいで私が私を赦せるのなら、こんなにうだうだと考えはしない。

私は抛り所が欲しいのかもしれない。礼士さんは私を愛し、信じ、支えてくれる。でも、ここ礼士さんはいない。私の心の中に、私の人生のピースに、この事件を解き明かしたことを抛り所にして、私のこれからを照らすランタンにしたいのかもしれない。

私もいつか死ぬ。できれば礼士さんとゆっくり年月を

重ねてから眠りたいけれど、どうなるかは分からない。

死んだら人はどうなるんだろう？ 天国だとか地獄だとか輪廻転生だとか、そういうスピリチュアルなもの信じていない。でも、もし信じるならば、私は地獄に行くだろう。地獄で井上と笠原に会うことになるだろう。私に殺されたと、閻魔様が誰かに証言するだろう。

「死にたくない……」

死にたくない。そう思ったのはあまりに久々のことだった。子供の頃、まだお母さんも生きていた頃の話だ。ふと、地獄に落ちたらどうしようと考えた怖くなつて、泣きながら別室のお母さんの布団に潜り込んだら、そのまま追い返されてしまった。

血の繋がっていない母は、私にあまり暖かくなかった。食べさせてくれたし、教育にもそれなりに力を入れてくれた。でも、決して私を娘としては見なさなかった。赤の他人のように接する彼女は、学校の先生とかに近いものだったかもしれない。

お父さんとの関係もあまり良くなかった。むしろよく捨てられなかったものだ。浮気相手と子供を作った、それが私。身勝手な父親だった。いつからこの事実を私に知ったのかはもう覚えていないけれど、いつしか察したのかもしれない。遠い記憶だ。

そんな身勝手な父親も、弟殺しで捕まった。そして最後は獄死した。一度だけ面会したことがある。やつれた顔で、私が叔父に食い物にされたかもしれないと教えてくれた。頭に血が上って、気が付いたら死んでいたという。

私を守ってくれた。それは分かるけど、分かりたくなかった。勝手に私に生を与え、勝手に私を一人にし、勝手に死んでいった。最後まで身勝手極まりない父親だと

呪ったことは数知れず。

そうか。津軽さんの姿は、私がなりたくない自分の姿写しなのか。私は今までなりたくない人物にばかり巡り合ってきた。親、親類、そして。

それに当てはまらない稀有な存在が礼士さんだった。最初は無関心だったけれど、近くで見知ってみるとあまりにも眩しい人だった。

眩しすぎるあの優しさに身を委ねるには、今の私では力不足だ。誰かにもたれるにも力がある。この謎を解いたら、私がなりたくない自分に、礼士さんに見合う自分になれる気がする。あの人の眩しさに目を細めなくてもいい自分になれる気がする。

でもそれは、礼士さんが好きな私の姿からかけ離れたりしないだろうか？

……。

その時はその時だ。そんな自分になる頃には、礼士さんがいなくても一人で歩いて行けるだろう。

私は、私の未来を守るために、私の過去を忘れないために、私自身と向き合うために謎を解く。

人生を諦めていたあの日々の私とは、ここでさよならだ。

私は私を赦さない。赦すよりもずっと厳しく、険しい人生になるだろう。いつまでも傷付いて、苦しみ、自分を呪うだろう。どうして井上を殺したのか。どうして笠原を殺したのか。どうして。どうして。どうして。

でも、生きた屍だったあの頃、井上と笠原にいいように弄ばれる玩具だった日々と比べると、ずっと息は楽だ。

私を赦さなくてもいい。愛と赦しは表裏一体ではない。幸せと赦しは表裏一体ではない。

病室で礼士さんは語っていた。『自分を幸せにしないと、自分と向き合うことはできない。幸せから逃げることは、自分から逃げることだ』って。

なら私は、堂々と幸せを受け入れられるような人になりたい。自分を信じていることができる人でありたい。そして、誰かを笑顔にできるような人になりたい。

礼士さんと一緒に幸せを掴める人でありたい。

そのためには、私の気付きを無視してここを去ることはできない。

『このまま何もしないでいるなんて……そんなの、嫌です！ そんなことしたら絶対後悔します！』

『後悔だけは……それだけはしたくないんです！ ……誰かを喪うのは、もう嫌。二度と……嫌……いや……』

礼士さんと『ごまち』が乗っ取られた日の記憶が蘇る。何もしないままここを去ったら、憧れの私自身は、私と向き合うことができる私自身は、喪われる。

『どうしても自分を赦すことができないのなら、尚更幸せにならないと駄目だよ。誰かを幸せにすることでは過去の埋め合わせはできないだろうし、そのためには自分で幸せを掴まないと。それくらいの力が無いと自分と向き合うことはできない』

また礼士さんの言葉が脳裏に蘇る。あの人の推理、私という謎を解き明かした時の推理だ。

「……少し間違っているみたいね、礼士さん」

暗闇の中、私はぼつりと呟く。

どうあがいても私の罪を贖うことはできない。誰かをどれだけ幸せにしても、罪の埋め合わせはできないのだ。

罪は、忘れないでいることしかできないのだ。過去を使って、未来を描くことしかできないのだ。

罪を使って未来を描くのは不可能に近い。罪は未来を否定するものだから。

だからこそ、私は幸せを掴まないといけない。幸せを作らないといけない。罪が生み出すものが罪や恨みであってはならないから。

私の罪は、私の恨みは、私が断ち切る。

だから、私は未来を諦めない。

だから、私は幸せを諦めない。

だから、私は私を諦めない。

諦めずに生き抜いた先に、本当になりたかった私がい

るはずだ。

幸せも罪も未来も、全て掴んでみせる。

誰にも私を止められない。

私は立ち止まらない。

絶対に。

暗闇に手を伸ばし、虚空を掴む。

私が歩むべき線路が見えた気がした。

\* 劔礼士 —— 浜松町駅・東京モノレール

『「ニュースター号」がまだ真つ暗な東京駅に着いたのは定刻よりも30分くらい早く、5時にすらなっていない。道中でかなり飛ばしたみたいだ。飛行機まであまり時間が無いことを考えると、幸先のいいスタートだ。

「眠れましたか？」

比叡さんがあくびをしながら僕を見る。

「まあ、ぼちぼちです」

僕も大あくびをした。結局4時間くらいしか眠っていない。

「あまり時間がありません、急ぎましょう」

京浜東北線で浜松町に出て、東京モノレールを乗り継いで羽田空港に向かう。さすがに始発に近い時間帯のせいか、車内で立ち客はまばらだった。モノレールも似たり寄ったりだ。

「劔、一応聞いておく。神戸牛は食べるか？」

「諦めて下さい」

釜田さんの提言をにべもなく却下する。神戸は乗り換えで使うだけだ。

「まあ、駅弁とか空弁とかでなら食べられると思いますけど」

「生憎、俺は岡山でたこめしを買って決めてんだよ」

「なら猶更神戸牛は要らないじゃないですか」

「せっかく行くんだぜ？ 楽しまねえと損じゃねえか」

僕は少し呆れ笑いを浮かべた。釜田さんなりに僕の緊張をほぐそうとしてくれているのだろう。

「それで、先輩を迎えに行ったらどうするんですか？」

「どうするって……秋田に帰りますよ？ 僕もそろそろ職務復帰しないとまずいですし。怪我からもこの通り、すっかり回復しましたからね」

高知からはとんぼ返りか、泊まっても一泊だろう。

『瑞穂さんを迎えに行くだけ』という建前を守っていることを内心で大和さんに感謝した。

真犯人は……彼は、黙ったまま白んでいく都会の空を見つめている。見晴らしのいいモノレールの車窓からは、都会の空も何だか広く感じられた。

ふと、車内に携帯の着メロが響いた。聞き覚えのある旋律だ。

「あつ、やば」

比叡さんが鞆の中からスマホを取り出し、操作をする。

『残酷な天使のテーゼ』の電子メロディは途中でぶつ切られた。

「ちよつと、お姉ちゃん。マナーモードにしといてよ！」

「ごめん、うっかりしてて」

着メロがアニソンとは、意外とアニメ好きなのかもしれない。釜田さんのスマホの着メロがゴダイゴの『銀河鉄道999』と知った時には思わず二度見した。

そういうえばあの人、確か図書館で……もう一昨日になるのか、僕は図書館で大和さんがエヴァの映画を観ていた時のことをふと思いついた。そういうえばあの時……その瞬間、僕は電撃に打たれたような錯覚に陥った。

動揺を悟られないように、そつと犯人を盗み見る。

まさか……この人と津軽さんとの関係って……。

そこで僕は更なる気付きを得た。

津軽さんの正体って、まさか！

そうか、この二つの事件って……そしてあの10年前の事件って、そういうことだったのか！

読めた。

この事件、読めた！

色々確認するべきことはあるけれど、とりあえず残された謎は山鳩専務のアリバイだけだ。

今すぐにも時刻表をめくりたい。僕はじりじりしながら空港に着くのを待った。

\* 碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

ぱつちりと目を覚ます。枕元のスマホを見ると、6時

を少し過ぎていた。昨夜はあれやこれやと考えて、結局あまり眠れなかつ

た。その割に頭の中はすっきりしている。ハイになっているのかもしれない。

布団から抜け出し、広縁のカーテンを開ける。空がだいぶ白んできている。ぼろっついベランダには大小の水溜まりができていた。

着替えを済ませる。南国土佐とはいえど、こんな早春の山奥の朝は寒い。部屋を出て階段を降りると、階下の食堂から料理の音がした。

「あ、おはようございます」

食堂に入ると女将さんが厨房から挨拶してくれた。

「眠れましたか？ ゆうべも結構な土砂降りでしたけど」

「まあまあです」

女将さんは料理の手をわざわざ止めて、私に温かい麦茶を入れてくれた。お礼を言っ受けて取り、そのままロビーのソファに向かう。

ロビーから見える国道のアスファルトも雨に濡れて真っ黒だ。時折思い出したように通り過ぎる車もみな、タイヤから水を跳ね散らしている。

スマホには特に何も連絡が来ていない。こんな朝早くだから当然と言えば当然だ。

礼士さんは今頃どこにいるんだろう？ 昨夜は新幹線に乗っていたけれど、東京からここまで来るには昼前になっても仕方ないだろう。こんな僻地に来るには『南風』に乗ってくるしかない。

窓の奥、山々を見上げる。少し朝霧がかかっている木々を風が揺さぶるのが見えた。方角からして南風だろうか。今日は暖かい一日になりそうだ。

ふと、事務室の方から微かにトラックの音が聞こえた。通り過ぎる音ではなく、停車してエンジンを切る音

だ。もしかして、と思っつてそのまま事務室の方を見てみると、食材を詰めた発泡スチロールの箱を抱えた津軽さんと支配人が出てきた。ロビーにいてもトラックの音が聞こえるのなら、事務室でははっきりと聞こえるだろう。

そうだ。津軽さんを追い詰めるにも、まだ彼女のアリバイを見破っていない。私は昨日洗い出した疑問点を整理する。

早めに食事にして、時刻表とにらめっこするか……私は小さくあくびをして、ソファから立ち上がった。

今日も和定食にした。今日はごはんには海苔の佃煮、厚焼き玉子、あさりの味噌汁、高野豆腐の煮物だ。

「あ、確氷さん。おはようございます」

霧島さんも起きてきたみたいだ。昨日と同じ洋定食のお盆、それに紙袋を手をしている。

「眠れましたか？」

「まずまずです」

私は厚焼き玉子に箸を伸ばしながら返事した。霧島さんは人参のバターソテーに箸をつける。

「その紙袋、どうしたんですか？」

「ああ、アレですよ。警察に見せた方がいいかと思っつて」

小声でこつそりと教えてくれる。アレ……ああ、焼酎の染みがついたスーツのズボンのことか。

「朝起きてスマホを確認したら、剣さんから連絡が来ていましたよ」

「えっ、礼士さんから？」

「ええ。10年前の列車や飛行機の運行状況を調べてほしい、ってね。同僚に頼めば1〜2時間で分かるでしょう」

礼士さんの方でも時刻表と首つ引きなのかもしれない。

「10年前って、礼士さんがちらつと言っていた放火事件とかについてですかね？」

「さあ、どうなんでしょうね。それよりも、剣さんが巻き込まれた事件のことをまだ聞いていませんでしたね。教えて下さいよ」

私はそつと首を横に振った。

「ここだとほら、聞かれるかもしれないので」

厨房では女将さんと津軽さんが忙しそうに立ち回っている。

「ひろちゃん、オープンお願い！」

「はい。女将さん、そろそろ牛乳が切れそうなので後で買いに行きますね」

霧島さんはロールパンにイチゴジャムを塗りながら二人を見ている。

「そういや津軽さんって、下の名前を洋子ひろこって言うんですよね。あまり見かけない読み方なので、初読だと間違えてしまいです」

「名前の読み方が分かりにくいと苦労しますよね。私も確氷うすいってたまに読んでもらえない時があります」

「確氷峠、ですよ。群馬と長野の県境にあるやつ。鉄道ファンや車好きには有名な所ですけんどもね」

そういうえば、霧降荘で出会った車好きの医学生コンビ二人も一発で私の苗字を正確に読んでいた。

そこからは他愛もない話しかせず、食事を終えた私と霧島さんはめいめい行動を開始した。

\* 釧札士 —— 羽田空港・全日空411便

高速バスが飛ばしてくれたおかげで、飛行機の乗り継ぎにも十分に余裕があった。

『6時20分発、ANA411便、神戸行きをご利用のお客様は62番搭乗口にお越し下さい……』

飛行機に乗る頃には空もだいぶ明るくなってきていた。

「おい、弁当買ってきたぞ」

「ありがとうございます、奢ってくれるんですね！」

「はあ？ ったく、しゃーねえなあ」

釜田さんと大和さんがいつものノリで楽しそうにしている。

「ほれ、釧も食つときな。腹が減つちや戦はできねえぜ」

そう言い、僕にも折詰を渡してくれた。三色鶏そぼろ弁当だ。

「あー、釜田さんずるいですよ！ 私たちは海苔弁なのに自分だけ崎陽軒のシウマイ弁当だなんて！」

「タダ飯食わしてもらう身分でゴタゴタうるせえよ」

そここうしているうちに搭乗の順番が回ってきた。ボーイングの単通路機は朝一番にも関わらず多くの利用客を詰め込み、葉加瀬太郎『Another Sky』が流れる機内は思いの外混雑していた。

僕は比叡、大和姉妹と相席になった。窓側を譲ってくれた。

「釧さんが飛行機に乗っているのって、何だか新鮮ですね」

「普段は新幹線ですからね」  
大和さんは肘掛の読書灯スイッチを入れて、機内誌を

めくり始める。僕は鞆から時刻表を取り出した。

「解けそうですか？」

大和さんが小声で聞く。

「どうでしょう、まだデータが出揃っていないので何とも。ですが、あまり快調ではありませんね」

飛行機が動き始めた。滑走路を朱色の朝焼けが照らしている。

「釧さん、すみません。あの、ブラインドを下ろしてもえませんか？ 眩しくて」

「ああ、比叡さん。これくらいいいですか？」

通路席の比叡さんのために半分くらいシェードを下ろす。雑誌記者は軽くお礼を言って、そのまま目を閉じて

寝息を立て始めた。無理もない、奇怪な館で殺人事件に巻き込まれた直後に高知までの強行軍だ。しかも部下のカメラマンを亡くしている。

「比叡さん、大丈夫ですかね？」

「ああ、お姉ちゃんはタフなので大丈夫です。これくらい平気な顔して乗り切るような雑誌記者ですよ」

大和さんはまるで心配していない。長い付き合いだろうから、分かることもあるのだろう。

『皆様、離陸致します。シートベルトを緩みの無いよう、しっかりとお締め下さい』

窓からは銀翼が見える。エンジンが一気に雄叫びを上げ、僕たちは座席に押し付けられる。トリトンブルーの飛行機は一気に速度を上げ、そして地を蹴った。

\*

\*

飛行機は順調に高度を上げ、10分足らずでベルト着用サインが消えた。僕は先に腹ごしらえを済ませることにした。鶏そぼろ弁当を食べているうちに飲み物のサーブスが回ってきた。眠気覚ましにコーヒを注文する。

「熱くなっております、お気を付け下さい」

「どうも」

機内アナウンスによると神戸の天気は晴れ、定刻通りに着く見込みだ。

最後に残った肉団子といたけの煮しめを口に入れ、弁当の殻をごみ回収に任せる。そのまま僕は再度10年前の時刻表を開いた。

山鳩専務が高知に先回りしなかったということは、どこかの空港から列車を乗り継いで『南風3号』に間に合わせたということだ。『南風』が走る沿線にある空港

といえば、岡山空港をまだ調べていない。早速、該当するページを開いてみた。

でも、僕は思わずがっかりした。羽田から岡山に向かう始発便は日本航空1681便、羽田を7時25分に出

て岡山には8時40分に着く。上野に6時58分に着く『あけぼの』では間に合わないし、仮に間に合ったとしても岡山を8時50分に出る『南風3号』には間に合わない。岡山乗り換えの線は無さそうだ。

諦めるのはまだ早い。大阪ならどうだろう？ 羽田から伊丹に向かう始発便は日本航空1501便、羽田を6

時35分に出て伊丹に7時35分に着く。

僕が運転する新幹線が乗っ取られた時のアリバイトリックにも伊丹空港から新大阪に向かう場面があった。あの時、空港から駅まではバスで25分だったはずだ。ち

よっと乗り換えに無理があるけれど、新大阪駅に8時に着いたとしよう。そうすれば、新大阪を8時01分に発車する山陽新幹線『ひかり331号』に乗れる。岡山には8時53分着た。

思わず歯噛みした。3分差で『南風3号』に間に合わない。いや、瀬戸大橋線に『南風3号』に追いつける列

車はない。

車があるかもしれない。一応調べてみたけれど、そんな都合のいい列車があるはずも無かった。大阪経由のルートもはずれみたいだ。

そっだ、今僕が乗っている神戸に向かう便ならどうだろう？ また調べてみると……あれ？ 神戸空港の欄が無い。どこを探しても見当たらない。もしかして、2004年当時にはまだ神戸空港は無かったのか？ とにかく神戸経由も無しだ。

もしかして、秋田から出る時にミスがあるのかもしれない。そう思って手あたり次第に秋田を出る飛行機の間を調べてみたけれど、仁賀保で21時半に放火をしてから間に合うような飛行機なんてあるわけが無かった。

翌朝の始発便を使えばどうだろうと思っただけれど、正午までにサミットに参加するのがギリギリだ。とても『南風3号』には乗れない。

困った。このままではギリ貧だ。

『皆様、当機は最終の着陸態勢に入りました。シートベルトを緩みの無いよう、しっかりとお確かめ下さい』もうそんな時間か。僕は窓の外を見た。眼下の瀬戸内海が段々と近付いてきている。こんなに西の方に来るのも久しぶりだ。

10分くらいして、飛行機は神戸空港に着陸した。定刻より5分早いのはありがたい。

\*確氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

朝食と歯磨きを済ませ、改めて私は広縁の椅子に腰掛けて時刻表を開こうとした。でも、ふと津軽さんのトラックを見てみたいと思った。予定を変更し、部屋を後にする。

津軽さんに見つかるに面倒なので、彼女の動向を先に探ることにした。彼女はまだ食堂にいた。男子学生トリオに警察コンビが同時に食堂に入ってきたため、調理で忙しそう。今なら大丈夫だろう。

玄関から出て、水溜まりを避けながら駐車場に向かう。トラックは奥の方、それこそ1号室の真横辺りに停まっていた。バックで駐車したみたいで、これならペラペラから島風教授を落としても問題なく受け止められる。

さて、問題の荷台だ。霧島さんが言った通り、真ん中に握り拳大の凹み、そして所々に土くれが付いている。トラック全体を見ても、土くれがついているのは後ろの荷台が中心だ。

見るものを見たから部屋に戻ることにした。長居は無用だ。

ロビーに戻ると、ソファ席で霧島さんが紙袋を瀬戸刑事に手渡ししているのが見えた。話し込んでいるみたいだから邪魔しないでおこう。私はそっと部屋に戻った。

改めて時刻表を開く前に、疑問点を洗い出す。

- ・津軽さんがトラックで高知に行かなかった証拠。
- ・トラックの音と事務室の関係。
- ・土砂崩れと時刻表トリックの関係。
- ・トラックに付着していた土くれ。

どれから考えようか。今この場で思いつきそうなものは……最初の疑問点かもしれない。

トラックで高知に行かなかったとすれば、津軽さんの高知市内での移動はタクシーとかが中心になるだろう。となれば、警察の機動力を使えば彼女を乗せたタクシーが見つかるかもしれない。それこそ、朝の4時半に御売市場から駅まで資材とトマトの箱を持った女の人を乗せ

た、というのはなかなか個性的なケースだ。タクシーの運転手もそう簡単に忘れないだろう。

でも、もっと他に決定的な矛盾がありそうな気がする。一度ここは、彼女の行動を最初から辿ってみよう。

彼女は『南風19号』で高知入りし、駅前のホームセンターで資材を購入。そこから路面電車なりタクシーなりで宿に移動した。

宿から出るのとは不可能ではない。彼女の部屋は一階だった。でたためを言って部屋を見せてもらったけれど、あの大きな窓なら、駐車場を経由して外に出られる。駐車場には監視カメラも無かった。誰にも見咎められないだろう。

あれ？ そういえばあの時、津軽さんはどうして……？

ノックの音がした。

「確氷さん、霧島です」

私はそっとドアを開けた。

「どうですか、調子は」

「一つ証拠、というか矛盾を見つけました」

黒髪をオールバックにした役人は少し目を丸くして、勧められるがままに広縁の椅子を陣取る。

「津軽さんは資材をホームセンターで買って、その足で簡易宿泊所に行ったと考えられます。でも、その時彼女はトラックで行ったとしたらおかしい点が一つあるんです。どうして彼女は、資材をわざわざ宿に持ち込んだんです、どう？」

霧島さんは少し虚を突かれたような表情をした。

「トラックで来たなら、重いしかさばる資材をトラックの中に置いておけばいいはず。トラックにしつかり



と鍵をかけておけばいいですし」

「車上荒らしの被害に遭うことを恐れたんじゃないですか？」

霧島さんが反論する。

「でも、簡易宿泊所は3畳くらいしか無い狭い部屋です。小さいテレビとテーブルはありましたけれど、そこに布団を敷けば荷物はかなり邪魔になります」

「なるほど、言われてみれば妙ですね」

こんな簡単な事、どうしてもっと早く気付かなかったのだろう？ 女将さんもぼつちりとホームセンターの荷物を持っていたことを把握していたのに。

まあいい、分かっただけ良しとしよう。

「霧島さん、ホームセンターや卸売市場での津軽さんの目撃証言ってどんなものだったんですか？」

「ああ、それなんやけど、さつきせとつちから聞きましてね。みんなお会計の時の映像やレジ係員の記憶とかかなんですよ」

やっぱり。誰もトラックを見ていない。彼女はトラックで高知まで行かなかったのだ。

「あ、そうそう。せとつちに例のズボンを渡してきましたよ。午前中には鑑識結果が出るらしいです。それよりも、剣さんから何か連絡は来ていませんか？」

「え？ いえ、何も。どうかしたんですか？」

「頼まれていた調べものが済んだので電話したんですが、電源が入っていないみたいながですよ」

私は少し不安になった。

「移動中に圏外になったんじゃないですか？ ほら、トネルとか」

「そうかもしれませんね。まあ、不在着信は届いているでしょうし、じきに折り返しの電話が来るでしょう」

そのまま私たちは、改めて時刻表に向き合うことにした。

「とりあえず、残る疑問点は三つですね」

私は先に整理した論点を霧島さんと共有した。

「どの辺から攻めましようかねえ……あつ」

霧島さんは言葉を取り、瞬きをした。

「どうしました？」

「いや、その……何か、デジャヴを感じて」

既視感を覚えるようなものなんてあるだろうか？

「ほら、土砂崩れと土くれですよ。どっちも土やなあ、つて」

「あ、本当だ」

言われてみたらその通りだ。でも、それが何か関係あるのだろうか？

「……もしかして、津軽さんのトラックつて土砂崩れに

巻き込まれかけたんじゃないですか？」

霧島さんが興奮で少し語尾を震わせながら言った。

「なるほど！ だとすると、津軽さんがあの時間に大杉駅に向かっていたことはほぼ確実ですね」

あの土砂崩れは23時頃に通報があったという話だ。

最終の『南風27号』は大杉駅を23時22分に出るから、時間的にもそう矛盾は無い。

「でも確水さん、これでかえって面倒なことになりましたよ。大杉駅近くの土砂崩れが解消され、通行が可能になったのは朝7時頃です。でも、津軽さんは6時20分にはここに戻っています。つまり、大杉駅からトラックに

乗らなかったということですよ」

「トラックで別の道を通って宿に戻ったりはしなかったんでしょうか？ 仮に津軽さんが始発の特急『しまんと

2号』に乗ったら、大杉駅には5時31分に着きます。宿に戻った6時20分まで50分近くあります。遠回りする時間はあると思いますけれど」

私は時刻表を霧島さんに見せながら反論を試みる。

「言いたいことは分かりますけれど、あの辺には県道以外にはまともな道がありません。私有地を通る山道とかはあるでしょうけど、あの大きさのトラックではとても迂回路に使えませんよ。仮に使えたとしても、また時間的に真つ暗です。慣れない夜の山道を下手に通つても時間を浪費するだけやと思いますよ」

一応地図アプリで調べてみたけれど、土砂崩れがあった県道以外にほとんど道は無さそうだった。

「そんな感じなので、こんな山奥にも関わらず県道の土砂崩れの撤去を夜中にやったわけですよ」

「なるほど、そうですね……」

でも、そうなると妙な事になってしまう。『しまんと2号』に乗ったとすると、次に停まるのは大歩危駅だ。この宿の最寄りである豊永駅は通過する。かといって、後続の普通列車は豊永駅に7時02分に着く。津軽さんは6時20分にはここに戻っているから、とても間に合わない。

\* 剣礼士 —— 兵庫県神戸市・神戸空港

神戸空港からは僕と釜田さん、残り三人とでタクシーに分乗することにした。犯人の目が無い所で連絡ができる、この機会を逃す手は無い。

「新神戸駅まで。弾むから急いでくれ」

釜田さんが運ちゃんを急がす。タクシーは弾丸のように走り出した。

僕はスマホを見る。霧島さんから不在着信、瑞穂さんから何件かメッセージが入っている。でも、今は後回しだ。僕は昨日交換した電話番号を電話帳から発信する。

5回くらいコールして電話口の相手が出た。

『はい、敷島です』

「あ、おはようございます、剣です。昨日は大変お世話になりました」

『ああ、剣さん。いやあ、昨夜の推理は見事でしたね、ハイ』

「どうも。それより、一つお伺いしたいのですが。いえ、大したことはありません、すぐに済みます」

僕は敷島取締役に質問をぶつけた。

『え、親方の奥さんの旧姓ですか？ えーと、何だっけな……？』

思い出すのに少し時間がかかったけど、取締役は教えてくれた。思った通りだ。

「やっぱり……今、どちらに？」

『えー、昨夜は遅かったので『電車館』に泊めてもらいました。まだみんないますよ、警察の方も鹿島さんや羽黒さんも。どうしました？』

「それがですね……昨夜の推理に重大な誤りがありました。推理をやり直している所なんです」

僕は口から出まかせを言う。誤りを見つけたのではなく、最初から偽の推理を披露したのだ。

『えっ……えっ？』

「ご安心下さい、もう真犯人もトリックも分かっています。それに、あなた方に危害が与えられることはありません。ただ、皆さんに説明したいので午後までそこを離れないでほしいんです」

『え、は、はあ、分かりましたです、ハイ』

聞きたいことは聞けた。僕は手短かに電話を終え、次の番号をコールする。

「お前、いつの間に敷島のおやつさんと番号を交換してたんだよ？」

釜田さんの質問に答えるよりも先に、電話先の相手が出た。

『もしもし？』

「もしもし、霧島さん？ 剣です。すいません、不在着信が入っていたので」

『心配したんですよ、犯人にやられたのかと思って』

茶目つ気たっぷりに文句を言う。

「飛行機に乗っていたんですよ」

『飛行機？ じゃあ今、羽田かどこですか？』

「いえ、今は神戸から電話しています。これから新幹線に乗り換えて、11時前の『南風3号』で大杉に着くので迎えに来てもらえませんか？」

『ああ、何だそんなことですか。お安い御用です。でも、僕のディアマンテには全員は乗れませんね……まあ何とかします。それより、頼まれた調べものが終わりましたよ』

「忙しいのにありがとございます、どうでした？」

霧島さんはメモか何かを確認しているのか、少し沈黙があった。

『とりあえず新幹線と四国地方の主要鉄道路線・主要航空路線について一通り調べましたが、特に大きなダイヤの乱れは確認されませんでした。始発から最終まで通常運行でしたね』

なるほど。つまり、時刻表に書いてある通りに推理を進めればいいわけだ。

「念のため、秋田・山形から首都圏方面に向かう鉄道や

高速バスについても調べてもらえませんか？ 飛行機は使えそうにないのでいいです」

『分かりました。手配しておきます』

「すみませんね、手間を取らせてしまって」

『いえいえ。僕も実家でこんな事件を起こされて、かなり頭にきちゅうんですよ』

そのまま二言三言話をした所で、タクシーは新神戸駅の前に着いた。土地が無いのか、山の中腹に建てられている。

「釣りはいい、取つといてくれ」

時間は8時前。ちょうどいい時間だ。

「本当に山の中にあるんですね」

「だな。それにしても剣、国交省の役人を顎で使うとはお前も偉くなったな」

「からかわないで下さいよ。あ、他の人も来たみたいですよ」

大和さんたちを乗せたタクシーが停まった。

「じゃあ僕は切符を発券してくるので」

「おう」

僕は券売機に向かいながら考える。敷島取締役と霧島さんの話から、事件の全容がどんどん見えてきた。後は山鳩専務のアリバイと……瑞穂さんが解こうとしている津軽さんのアリバイ。

\*確氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

霧島さんは私に代わることなく礼士さんの電話を切ってしまった。

「神戸から電話をかけてきていました。これから新幹線に乗り換えるみたいです」

「それで、こつちには何時くらいに？」

「11時前に大杉駅に着くみたいです。一緒に迎えに行きましょうか」

私は腕時計を見た。あと3時間くらいか。それまでに津軽さんのアリバイは暴いておきたい。

「残る疑問は二つですね。津軽さんはどうやって大杉駅から宿に戻ったのか、どうやって音に気付かれずにトラックを移動させたのか」

私はそう言い、改めて時刻表を開く。

「本当にトラックの音って聞こえるものなんですか？」

「本当ですよ」

霧島さんは少しむっとした表情をした。私は軽くなだめて質問を続ける。

「でも、あの夜は雨が降っていました。何というか、雨の音に紛れてしまわないのかなって思ったんです」

そう言うと、霧島さんは少し自信を無くしたみたいに俯いた。

「確かにそれは考えられますね。ですが、そうでない可能性も十分にあるかと思えます」

食い下がる。まあ、音の問題も盛り込んでアリバイを崩した方が津軽さんを追い詰めることができるだろう。

私はそれ以上突っ込むのをやめ、時刻表のページを覗き込んだ。

「そーいや、朝食の時に津軽さんが牛乳を買いに行くとか言っていますんでしたっけ？」

霧島さんがふと思いついたように言う。そういえば、確かにそんなことを言っていたような気がする。

「トラックに乗って行くでしょうね」

雨は降っていないけれど、館内からだどどんな感じに音が聞こえるかを検証するいい機会だ。階下に向かうこ

とにした。

「剣さんの方はどうなんですかね？ 事件の進捗は来ていますか？」

階段を下りながら私はスマホを確認する。昨日送ったアンパンマン列車の写真にはまだ既読がついていない。

「何も連絡が来ていませんね。私たちも少しずつ進捗はありますけれど、いちいち連絡していませんから同じ事じゃないでしょうか？」

一階に降りると、ちょうど津軽さんが事務室に向かう所だった。

「それにしても碓氷さん、彼女を追い詰めるってどうやるがですか？」

「どうって、直接話をしようと思っています」

役人は思わず私を二度見した。

「直接話すって……碓氷さん、あなた正気ですか!？」

「ええ。ただ警察に話をして簡単にも信じてもらえろとは思えません。それに、……それに、あの人には怪我している所を助けてもらったので、せめて自首という形にしたいんです」

霧島さんは額を押さえて頭を振った。

「やめておいた方がいいと思いますよ、悪いことは言わないんで」

「もちろん、私なりに保険はかけるつもりです」

私の推理をリアルタイムで警察にも聞かせればいい。私の推理が正しければ、津軽さんは必ず動きを起すはずだ。自首すればそれでよし、自首しないで逃亡なり反

抗なりすれば、すぐさま警察を呼べばいい。

「まあ、碓氷さんがそこまで言うなら止めませんよ」

諦めたように霧島さんは苦笑いした。

た。数秒後、津軽さんがトラックを走らせて国道に出ていくのが窓から見えた。

「ロビーでこれなら、業務用駐車場の真横にある事務室ならもつとはつきり聞こえますよ」

「確かに、普通の雨でもはつきりと聞こえそうですね」

でも、もう一度確認してみたい。私はそう思って、トラックが戻るまでここで粘ることにした。

\* 剣礼士 —— 岡山県相生市・『のぞみ97号』車内

新神戸から乗った『のぞみ97号』は、新大阪から岡山にかけては山鳩夫妻が10年前に乗ったと主張している『ひかり331号』と似たようなダイヤで走る。岡山

でこれまた山鳩夫妻が10年前に乗ったと主張している『南風3号』に接続するのだ。秋田からここまで来るの

にもアリバイ工作してみたアクロバティックな乗り換えをしてきたけど、ここに及んであの二人のアリバイを再現

することになるとは思わなかった。

朝の『のぞみ』なだけあってその席のほとんどはビジネスマンで埋まっていた。僕たちみたいに私服でラフな

格好をしている人は少数派だ。

僕は改めて時刻表を開いた。山鳩専務が秋田から脱出

する時に使える手段はつきり鉄道か飛行機くらいだろうと思っただけ、よく考えてみればもう一つあった。夜行バスだ。

僕もさつきまで乗っていたのにどうして気付かなかったんだ、と自分でも思わなくもない。いい感じの便はあるのか、高速バスの欄を調べる。

秋田を発着する『フローラ号』、大館・能代を発着す

る『ジュピター号』がまずは目に入る。どうでもいいけ

れど、高速バスの名前は列車の名前よりも自由な気がする。いや、鉄道が硬派なだけかもしれない。

脱線した考えを元に戻し、時刻を見る。仁賀保からは遠すぎる『ジュピター号』にははなから期待していなかったけど、秋田発着の『フローラ号』もとても乗れそうにない。秋田を出るのが21時10分、却下だ。

諦めずに他のバスを調べると、羽後本荘を発着する

『ドリーム鳥海2号』を見つけた。このバスは羽後本荘を出た後に日本海沿いに南下し、金浦、象潟に寄る。象潟といえは、トワイライトエクスプレスの事件の時にこの辺で遺体を発見し、臨時停車した駅だ。仁賀保もこの辺だ。僕は淡い期待を抱きながら時刻を目で追う。

「金浦22時05分発……象潟22時20分発、東京駅八重洲口6時15分着」

時間的にもちようどだ。東京に着くのも『あけぼの』より早く、乗り換えの幅は広がりそうに思える。でも、このバスは仁賀保に停まらない。仁賀保から他の手段で

金浦や象潟に向かう必要がある。足が付きやすいタクシーは避けるだろう。でも、こんな時間にそうまい具合に列車なんてあるのだろうか？

半信半疑で羽越線のページに戻る。そして、僕は少なからず驚くことになった。

「寝台特急『あけぼの』……仁賀保21時56分発、象潟22時07分着……!?!」

うまい具合の列車も何も、夜行バスの最大のライバルがほぼ同じ時間に走っている。ブルートレインは高速バスの趨勢に押されて凋落の一途を辿ってきたが、まさにその時代の片鱗を見せつけられた気分だ。

車内にTOOKIOの『AMBITIOUS JAPAN』のメロディが流れた。岡山が近いみたいだ。降りる準備をした。

\* \* \*

岡山駅の新幹線ホームは白を基調とした明るい空間だった。エスカレーターでコンコースに降り、乗り換え改札を通ってさらに下へ降りる。瀬戸大橋線のホームには、既に『南風3号』が発車準備を済ませて僕たちを待っていた。

「アンパンマンの電車……?」

比叡さんが声を上ずらせた。確かに、目の前に停まっている『南風3号』は緑色を基調に車体のあちこちにアンパンマンとその仲間たちが描かれている。

「あれ、釜田さんは？」

大和さんがきよるきよると辺りを見回した。すると、当の本人は何やら手にしながら、一人遅れてエスカレーターを駆け下りてきた。

「悪い悪い、たこめしを買ってた」

レジ袋の中には茶色く丸い陶器が入っている。

「もー、驚かせないで下さいよ。はぐれたかと思っただじやないですか」

「すまん。お前の分も買ってきたぜ」

「本当ですか！ 朝ごはんが早くて小腹が空いていた頃だったんですよ」

大和さんは堂々と賄賂を受け取り、コロリと機嫌を直した。現金な人だ。

間もなく発車ベルが鳴り始める。僕たちはグリーン車を選んだ。さすがにグリーン車区画にまでアンパンマンたちは入り込んでいないみたいだ。豊永の鉄橋付近を先頭で確かめてみたくて、わざわざ最前列のグリーン席を押さえた。

笛が鳴り、ドアが閉まる。『南風3号』は高らかなエンジン音と共に走り出した。

もうすぐ着くよ、瑞穂さん。

\* \* \*

アンパンマンが自ら行う車内放送をBGMに、僕は再度時刻表を開く。この調子だと借り物なのに開き癖がつきそうだ。

山鳩専務のアリバイ崩しも、残るポイントはどうやって『南風3号』に乗ったか、という点だ。どう考えても秋田からは陸路で上京するしかなく、そうなると時間的に東京から先は空路での移動が必須になる。でも、高知、岡山、伊丹、神戸、全部外れだ。

かといって、他に思い当たるような空港も無い。……もしかして、僕の推理は根底から誤っているのではないだろうか？ 少し不安になったのと、頭を整理するのにメモを読み返すことにした。瑞穂さんへのメッセージ欄を開く。すると、そこには彼女から何枚か写真が送られてきていた。

『今日、高知駅で見かけました』

そう書かれたメッセージは昨夜に送られてきたものだ。新幹線を降り、仙台で高速バスに乗り換えようとしていた頃だ。写真を見ると、ちょうど今乗っているアンパンマン列車が他の列車と連結する所だった。どうやら瑞穂さんも僕の好みを熟知してきているみたいだ。

写真の隅に、駅の案内表示がある。拡大してみると

『しまんと6号 高松行き』と辛うじて読むことができた。途中まで『南風』と連結して走るみたいだ。そうか、土讃線の特急は『南風』だけではないのか。

……もしかして？ と思ひ、僕は2004年の時刻表をめくる。ひょっとして、『南風3号』に追いつけなくとも途中で接続できる列車があるのではないか？

はやる気持ちを抑え込みながら『南風3号』の時刻を指で辿る。すると、土讃線の時刻が掲載されている52ページにはこんな但し書きがあった。

『宇多津・高知間 2005D 『しまんと5号』を併結・高知まで運転・高松9時10分発』

接続どころの話ではない。『南風3号』と連結すると書かれている。時刻表の表記に従い、僕は501ページに飛んだ。『しおかせ』、『いしづち』、『うずしお』など四国各地に向かう特急の中に『しまんと5号』の時刻も明記されている。

高松を発車する『しまんと5号』に乗るにはどうすればいい？ 一番の早道は羽田から高松まで飛行機で飛ぶことだろう。該当する便はあるのか？ 興奮で荒れた手つきになりながらページをめくる。果たして、それは見つかった。

『日本航空1401便 羽田7時発、高松8時10分着』

『あけぼの』を使ったらまず間に合わないが、象潟からの『ドリーム鳥海2号』は東京駅に6時15分に着く。定刻通りに着いたとして、羽田までタクシーを飛ばせばギリギリ間に合うだろう。高松空港から高松駅はバスで途中停車を何度か挟みつつ45分かかる。車ならもう少し早いと違わないから、9時10分に高松を出る『しまんと5号』には間に合う。このルート、行ける！ 山鳩専務のアリバイが崩れた。

\*碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

津軽さんは30分もしないうちに帰ってきた。やっぱ

り、トラックのエンジン音ははっきりと聞こえる。ただでさえエンジン音が聞こえるのに、バックする時の警報音まで耳に届いた。

「警報音まであったら誤魔化しようが無くないですか？」

霧島さんはそうやって天を仰いだ。エンジン音だけならまだ何とかなるかもしれないけれど、警報音みたいに嫌でも人に聞かせる音は隠しようがない。

「……いや」  
私は呟っていた。

「霧島さん、昨日私を大歩危駅まで送る時に聞いたラジオのニュース、覚えていますか？」

「え？ そんなのありましたっけ？」  
まるで覚えていないみたいだ。私はスマホをついて該当するニュースを探し当てる。

「視覚障害者がトラックにはねられて怪我 日野市」？ これがどうかし……」

「たんですか、と言いかけた言葉を飲み込んで霧島さんは記事を読み進める。私が言わんとすることが理解できたみたいだ。

「書いてある通りです。尾田容疑者は『近所迷惑との苦情を受けて、バックする時に警報音を出す装置のスイッチを切っていた』って言っています。これって、あの警報音は任意で出さないようにできるといことですか？」

霧島さんはまじまじと私を見た。

「津軽さんも警報音スイッチを切っていたならそもそも問題になりませんよ」

「碓氷さん、あなた天才ですか？」

「偶然です」

警報音の問題はこれでいいとして、エンジン音は消せるはずがない。問題が解決したわけではないのだ。

突然、私のスマホが鳴り始めた。画面を見てみると、意外な人物から電話がかかってきていた。

「もしもし？」

「よう、碓氷。元気にしてるか？」

少し懐かしいだみ声が私の鼓膜に届いた。

「お久しぶりです、釜田さん……」

霧島さんも意外そうに私を見た。釜田さんとうやうやう話をするのは、退職届を出して以来だ。

『どうした、水臭えな』

電話の向こうで釜田さんは屈託なく笑った。列車の音が聞こえる。車内からかけているみたいだ。

「いや、その、釜田さんから電話が来るのが意外だったの……どうしたんですか？」

『お前に一つ忠告をしようと思ってるな』

釜田さんの口調ががらりと変わる。陽気さは影を潜め、一気に差し迫ったものになった。

「忠告？」

「ああ。お前、津軽って奴を犯人にしてどうするつもりだ？ 黙って警察に告げ口するか？ そんな女じゃねえだろ、お前は？」

釜田さんもそこまで把握しているのか。私にはむしろそっちの方が驚きだった。

「……ええ、直接話そうと思っています」

『そうか。まあそうだろうな』

驚くほどあっさりを受け流してくれた。

「止めないんですか？」

『それは俺の役目じゃねえからな。それに、俺が止めた

所で今更耳を貸すわけがねえだろ?』

私は思わず苦笑した。

『ただ、俺にだって老婆心つてもんがある。津軽を追い詰めるのは止めねえが、せめてこれだけは聞いておけ』

私は無言のまま先を待った。

『いいか碓氷、撃たれる前に撃て! 殺られる前に殺れ! 相手が襲い掛かってきてからじゃ手遅れだ、どんな手段を使っても相手の急所を狙え! 絶対に相手から目を離すんじゃないぞ! 相手がどんなに命乞いしても、心を鬼にして確実息の根を止めろ! それで、犯罪者と向き合って生き残る唯一の道だ』

あまりの剣幕に何も言い返せなかった。

『相手は人を一人殺ったんだ。今更お前を殺すことなんぞ屁でもねえ。だから、相手を殺すつもりで追い詰めろ。情けは無用だ、いいな?』

殺す……。

相手を殺す……。

『返事は?』

「え、あ、はい!」

釜田さんは僅かに笑い、口調が柔らかくなった。

『いい返事だ。大丈夫だ、お前なら。東京駅で剣を人質に取った舞鶴とかいうデカブツをぶっ飛ばした女だ、簡単にくたばるわけがねえ。安心して腹括れ』

まるで私が今でも従業員であるかのように真剣に、それでいてどこか楽しむように私の背中を強烈に押した。

『じゃ、切るぜ。上手くやれよ』

「あ、あの、釜田さん!」

『ん?』

私は一瞬躊躇い、それでも意を決して聞いた。

「その……釜田さんの店、人手は足りていますか?」

釜田さんは少し沈黙し、そして笑いながらこう返した。

『ちようど二人二人雇おうと思っていた所だ。ま、考えな。じゃな』

それつきり電話は切れてしまった。

\* 剣札士 —— 瀬戸大橋・『南風3号』車中

山鳩専務のアリバイを崩せたお札を言おうと、僕はデッキに移動した。しかし釜田さんが先客として、よりによって瑞穂さんと話している。僕は改めて瑞穂さんから送られてきた『南風24号・しまんと6号』の写真をしながら、釜田さんが電話を終えるのを待つことにした。列車は児島を出て長いトンネルに入った。

「随分と物騒ですね。殺す、だなんて」

僕は少し冷たい視線で電話を終えた釜田さんを見た。

「まあな。ただ、碓氷は優しいとか甘いからな。お前が危険な目に遭わねえ限り、自分が危険な目に遭って死ぬくらいは諦めて受け入れるような節がある。だから釘を刺しておいた」

「瑞穂さんはそんな人ではありませんよ」

「同感だ。だがな、それはこれからの話だ。これからお前と生きていけば、あいつだって自分の価値に否応なしに気付き、受け止めていく。現にお前が何度も気付かせているからな。ただ、今のあいつがそれを素直に受け入れていと思うか?」

僕は黙り込んだ。デッキの薄暗闇の中、釜田さんの細かい目が僕を鋭く見つめる。

「大事なのはこれからじゃねえ。今だ。今生き残らねえ

と未来もへつたくれもねえんだからな。だからこそお前もこうして碓氷の元に少しでも早く行くこうしてるんだろ?」

釜田さんは前方を見た。小さく光が見える。

「殺されるくらいなら殺せ。それくらい心意気を持たせねえとあいつは死ぬぞ。あいつが笠原とかいう男を殺して、それを後ろめたく思っているんなら猶更だ」

「……やっぱり知っていたんですね」

「ああ、退職届に書かれてあった。大和は知らねえみたいが、察しが良い奴だから時間の問題だろ」

さすがに震災直前の井上の件までは知らないみたいだ。それでいいと思う。罪はひけらかすものではないのだから。正直、僕だって知らなくてもよかったんじゃないかと思うこともある。

「ただ、お前の口からそれを言わせるのは酷だろ? 碓氷にとつて殺したのは禁忌だ。それはお前が一番良く知っているからな。だから代わりに俺から言っちゃった。憎まれ役も上の務めだ」

本当に、とんでもない上司だ。

「ありがとうございます……」

僕は深々と頭を下げた。デッキが光に包まれた。トンネルを抜けると、そこは海上だった。朝の底が青くなった。

\* \* \*

「それで、山鳩の爺さんのアリバイは崩せたのか?」

僕は頷いた。

「ええ。瑞穂さんのおかげです」

「ほう、ファインプレーじゃねえか。さすがのコンビだな」

釜田さんはにやりと笑い、デッキを後にした。一人デ

ツキに残された僕の耳に、瀬戸大橋の観光案内放送が届いた。

『今日も、JRをご利用下さいましてありがとうございます。これから渡って参ります瀬戸大橋のご案内を致します。瀬戸大橋は瀬戸内海の五つの島を、三つの吊り橋、二つの斜張橋、一つのトラス橋の六つの橋で結び、香川県坂出市とを結んでおります。列車は瀬戸内海国立公園の美しい景観を眺めながら、海峽部9.4キロを颯爽と走り抜けて参ります。しばらくの間、瀬戸大橋からの眺めをご覧ください』

少しひび割れた音質の自動放送がスピーカーから流れ終わる。穏やかに朝の陽光を反射する瀬戸内海を眺めながら、僕は瑞穂さんに電話をかけた。数コールで電話が繋がる。

『もしもし、礼士さん？』

「ああ、もしもし？ おはよう、今ちよつといいかな？」

『ええ、どうしたの？』

僕は山鳩専務のアリバイが崩れたことを告げ、お礼を言った。

「昨日、瑞穂さんが送ってくれた写真がヒントになったよ。助かった、どうもありがとう」

『そうなの？ よく分からないけれど、役に立てたのなら良かった』

列車は小島に建てられた橋脚を通り抜ける。窓下の鮮やかな海には何本も白い航跡が描かれている。

『今、どこなの？』

「瀬戸大橋を渡っている所だよ。……それで、瑞穂さん。津軽さんのアリバイはどう？」

『だいぶ揺らいできているけれど、まだ完全に崩せては

いないわね』

内心ほつとした。津軽さんを追い詰めるまでは至っていないみたいだ。このまま真相に辿り着かないままの方が安全だけど、瑞穂さんのことだ。意地でも解き明かそうとするだろう。

『礼士さんは私を止めないの？』

「えっ？」

僕は思わず聞き返した。

『私ね、津軽さんに一つ借があるのよ。だから、警察に告げ口するんじゃないくて、実際に話して自首してほしいと思ってるのよ。でも……礼士さんがやめろって言うなら、考え直す』

僕は考えた。考えるまでもなく止めるべきなのは分かっている。でも、ここで止めたらどうなる？

あの日、秋田駅で。僕は何のために瑞穂さんを送り出したのか？

あの日、秋田駅で。僕は何のために瑞穂さんを引き留めなかったのか？

彼女が自らの意思だけで僕を選んでくれる、その日を待たためじゃなかったのか？

「……止めることなんてできないよ」

今度は瑞穂さんが沈黙した。

「そりゃ、凄く心配だよ。相手は殺人犯だし、どんな行動に出るか分からない」

眼下に工場群や石油化学コンビナートが見え始めた。この列車もそろそろ対岸に到達しそうだ。

「でも、僕の意思で瑞穂さんを歪めたくない。瑞穂さんは素直で優しいから、僕のお願ひも聞いてくれると思う。でも、今ここでお願いしたら……これから一緒に生きるのに、僕はあなたを信じていられなくなってしまう」

まいそうなんだよ」

彼女は黙っている。

「僕はまっすぐな瑞穂さんと生きたいんだ。僕の意思に言いなりな瑞穂さんと生きたいわけじゃない。僕は瑞穂さんと一緒に変わっていきたくないんだ。瑞穂さんを僕の力で何から何まで変えたいわけじゃない。……だから」

そ、止めないでくださいよ」

少し熱のこもった言い方になってしまった。深く息を吸って、吐く。

『そう……分かった』

「大丈夫。何かあったら僕が助けに行く。どんな手を使っても、瑞穂さんを守る。だから安心して」

列車はついに瀬戸大橋を渡り終え、四国に上陸した。

「でも、やっぱりこれだけは言わせてほしい。くれぐれも気を付けて。そして、忘れないで。僕だけはあなたの味方だから」

『……ええ。ありがとう』

「今、四国に入ったよ。もうすぐそちに着くから、頑張ってるね」

『うん。じゃ、後で』

電話が切れた。

これで良かったんだろうか？

僕は小さく首を振り、考え直す。これで良かったんだ、絶対にそう思うようにしないといけない。

「間もなく宇多津に着きます。高松方面はお乗り換えです……」

大杉に着くまで1時間を切った。

\*確水瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』



礼士さんとの電話を終え、私は部屋に戻った。霧島さんは黒潮警部に呼ばれ、食堂で話し込んでいた。何かと邪魔が入ったりして、結局今日初めて時刻表を読む。残っている論点は二つだ。大杉駅からの移動手段、それとトラックの音をどう誤魔化したか。

まずは大杉駅からの移動手段を先に考える事にした。といっても、津軽さんが『しまんと2号』で大杉あるいは大歩危まで戻ってきたことは確かだ。後続の普通列車では時間的に間に合わないのだから。

大杉駅からここに来るまでの県道113号線は、朝の5時半過ぎにはまだ通行止めだったはずだ。迂回路はトラックで通れない。ということは、タクシーか何かで迂回路を通ってきたのか？

でも、そんな客がいたらすぐに警察に見つかってしまう。却下だ。この考えを却下するということは、大杉駅からこの宿に向かう手段が無くなることを意味する。つまり、津軽さんは大杉駅で降りなかつたことになる。

時刻表を見ると、『しまんと2号』は5時46分に大歩危駅を発車する。この宿に降り着いたのが6時20分くらいだから、車で引き返すことは可能だ。タクシーを呼べば問題ない。

だけど、これも大杉駅と同じ理由でかなり疑い深いように思える。こんな田舎で朝早くにタクシーを呼ぶなんて、そんな目立つような事ができるだろうか？ 大歩危は徳島県だから、高知県警からすれば管轄外なぶんまだマシかもしれない。でも、いずれは証言が取れそうないように思える。

かといって、大歩危駅からここに引き返すのに他に手段があるのだろうか？ 私は駄目元でスマホの乗換案内

アプリを調べたりもしたけれど、時間的に間に合わない普通列車しか選択肢に出てこない。

タクシーが駄目なら路線バスとかは無いだろうか？

調べたけれど空振りだった。じゃあどうしろって言うのよ。いくら上り土讃線のページを探しても、都合のいい時間に走る列車は見つけられない。

窓下の線路から列車が走り抜ける轟音が響いた。思わず目で追うと、1両だけの普通列車が橋を渡って山の中に消えていった。高知方面に下っていくみたいだ。

……。

まさか、と思い私は眼鏡をかけ直し、再び時刻表のページをめくる。さっきまで『しまんと2号』が載っていた上り土讃線のページではなく、下り土讃線のページを開く。

「あつた！」

私は思わず叫んでいた。大杉駅からの移動方法を見破ることができた！

こうなれば、後はトラックの音だけだ。大体、この宿はトラックの音がもろに聞こえるような安普請の造りがない。内心そう八つ当たりしながらも、私は知恵を巡らせる。

音を誤魔化すにはどうすればいいだろうか？ いや、要は音を聞こえない状態にすればいいのだから、別に誤魔化す以外の方法でもいいはずだ。

一番簡単なのは、聞こえてしまうであろう人の注意を他に逸らすことだ。この場合、事務室で仕事をしていてという支配人が該当するだろう。支配人の注意を他に逸らすとすれば、電話？ メール？ それとも何か宿のトラブル？

確かに、これは支配人には有効だろう。でも、その時に宿にいたのは支配人だけではない。私や女将さん、学生たちもいた。誰かがトラックに気付いたら即アウトだ。そもそも、支配人も夜遅くに電話やメールが来た、みたいなことは言っていない。この手段は間違いみたいだ。

じゃあ、他の方法は何だろうか？ もっと抜本的な方法は、他にもっと大きな音を出して誤魔化すものだ。お祭りや花火大会、ロックフェスのような大音量が鳴り響くようなイベントでは多少うるさいトラックが出入りしても簡単には分らない。

でも、これはもっと非現実的な手段かもしれない。何せ時間は夜遅く、場所もこんな山奥だ。そんな時間、場所にトラックの音を誤魔化せるくらいの音を出すようなイベントや機会なんてなかなか思いつかない。

他の手段は、そもそも音を出さなかつたかだ。トラックを宿から少し離れた所に停めておいて、島風教授を殺害する一連の動きを全て徒歩でやったのであればこの問題は解決する。でも、体格的、それに時間的にもかなりハードになる。結局、これもあまり現実的ではないという結論に落ち着いてしまう。

最後の最後に行き詰まってしまった。駐車場を出入りするのに10秒とか15秒くらいかかると思うけど、そんな短時間だけをピンポイントで打ち消すような音を出せるものがあるとは思えない。

誰かが部屋をノックした。

「確氷さん、霧島です」

すぐに鍵を開け、中に通した。広縁の椅子に陣取るのはもはやお馴染みの光景だ。

「さっき黒潮警部とお話をしていたんですが、新たな情

報が入ってきました」

「睡眠薬の成分が検出されたんですか？」

私はすかさず聞く。霧島さんは曖昧な表情を浮かべた。

「そうとも言えます。ですが、確氷さんが思っているものではないと思いますよ。僕が貸したズボンの染みはまだ調査中らしいです」

「え？ でも、睡眠薬って言いましたよね？」

「ええ。常盤さんの体内から睡眠薬の成分が検出されたんです」

「何ですって？」

私は思わず椅子から立ち上がった。

「警察が常盤さんに対して尿検査を実施したらいいんです。大部分はもう体外に排出されてしまったみたいで微量しか検出されませんが、彼女が睡眠薬を飲んだ、もしくは飲まされたことは確実にになりました」

「それで、本人は何て言っているんですか？」

私は椅子に座り直した。

「自分で飲んだ覚えはまるで無いそうです。警察としても、彼女が睡眠薬を飲む理由が思い当たらずにいます」

「まあ、そうでしょうね。やっぱり津軽さんに飲まされたと考えるべきなんじゃないですか？」

霧島さんは黙って頷いた。

「黒潮警部からの情報はもう一つあります。確氷さんが話していたディーゼルエンジンの排気ガスの成分ですが、やはり島風教授の体や服には付着していませんでした」

礼士さんの言葉からヒントをもらったあれだ。

『南風』は日頃から高速で走るので、屋根上に排出された排気ガスは屋根の上全体になびいて、成分が割と満

遍なく屋根上に付着するがですよ。煤みたいなもんです。島風教授が『南風』の屋根上に落とされたとする

ば、屋根にこびりついちよつた煤も付着しているはずですよ。いくら川の中に沈んじよつたとはいえ、何も痕跡が出てこないというのは変です」

私は警察が指摘していない時点で無いだろうと判断していたけれど、その考えに警察から直々にお墨付きをもたえたことになる。

「残るはアリバイだけです。何か進捗はありませんか？」

「ええ。大杉駅からの移動手段が分かりました」

「え、本当ですか？」

霧島さんは興味津々のようで、私の方に身を乗り出した。

「分かってしまえば簡単でした。彼女は……」

私は時刻表を霧島さんに貸して説明を始めたけれど、ちよんど走ってきた特急列車の轟音に声がかき消されてしまった。

「……確氷さん、悪いんですがもう一度言うてくれませんか？ 汽車の音がやかましくてよく聞こえませんでした」

「いいです……え？」

私の快諾は一気に尻すぼみになった。

「霧島さん。今、何て言いました？」

「え？ やから、汽車の音がうるさくてよく聞こえなかつたって。つてちよつと、何するんですか！」

私は霧島さんの手から時刻表をひったくった。あるいはずだ。あれが、どこかに！

あった。

「……確氷さん？」

「霧島さん。津軽さんと呼んで下さい」

私は時刻表を凝視しながら言った。

「アリバイが崩れました」

## 第十二章 真相

\* 剣礼士 —— 徳島県三好市・特急『南風3号』車中

『南風3号』は金毘羅さんで有名な琴平を列車は定刻通りに後にし、やがて徳島県に入った。急峻な四国山地を攻略すべくぐいぐいと急な坂道を登っていく。

「しかしまあ、すげえ所に線路を引いたな」

「本当ですね。先人たちの苦勞が偲ばれます」

釜田さんが犯人と話をしている。坂道だけならまだしも、琴平を出て少ししてから右に左に急カーブが連続する。『南風』は僕たちを右へ左へと振り回し、ラリーカー

ーのようなじゃじゃ馬つぶりを発揮する。もしかして、坂本龍馬もこの山を越えて脱藩したのかもしれない。

「ちよつとお姉ちゃん、大丈夫？」

「うー……きぼぢわるい……」

大和さんがたこめしを食べる真横で比叡さんが顔を真っ青にしている。振り子式車両で乗り物酔いを起こす人は多い。僕も振り子式車両に乗るのは久しぶりだけど、前に乗った時は全く酔わなかった。今も酔いそうな気配は皆無だ。

杉林を右へ左へと揺られ続ける。こんな急カーブに80キロくらいで突っ込んで、脱線したりしないかと少し

ハラハラさせられる。こんな運転を四国全土で1時間に上下1本ずつ繰り広げるJR四国も、色々と必死なのだろう。大都市圏も無ければ新幹線も無いというのはかなりの難易度だ。

『南風3号』は甲高いエンジンの咆哮を轟かせながら、必死の韋駄天走り続ける。

『間もなく阿波池田に着きます。徳島線穴吹、徳島方面はお乗り換えです。阿波池田を出ますと、次は大歩危に停まります……』

\*碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

「本当に同席しないでいいんですか？」

霧島さんは渋い顔をして尋ねた。

「霧島さんが瀬戸刑事と親しげに話している場面を彼女は見ているかもしれません。いたらかえって警戒されるす」

「どの道碓氷さんが推理を始めたら警戒するでしょうに」

そう言い返されて言葉に詰まった。

「いくら何でも一対一でやり合うのは危険すぎます。大體、相手が刃物とかを持っていたらどうするんですか？」

「そ、それは……」

「それに、ここは僕の実家です。僕の家でこんな事件を起こした犯人には、直接言っただけでいいから殺してあげようか？」

結局、私は霧島さんに言い負かされた。二人で推理を聞かせた方がまだ安全なのは事実だ。

「で、警察はどうするんですか？ 碓氷さんとしては自

首して罪を軽くしてほしいとのことですけど」

「いつでも突入できるように、部屋の前で待たせておくことってできませんか？ 警察もいる前で推理を披露したら自首になりませんし」

霧島さんはますます渋い顔をした。

「えー……あの二人を納得させるのは骨ですよ？」

「そこを何とかお願いできませんか？」

私は食い下がる。霧島さんは諦めたように立ち上がった。

「全く、剣さんと一緒に人使いが荒いですね。分かりました、話だけはしてみます。ただ、あまり期待はせんといて下さい」

私は静かに頭を下げた。霧島さんはあまり軽いとは言えない足取りで部屋を後にした。

思えば、津軽さんにとつて怪我をした私をトラックで拾ったことは最大の誤算になる。でも、いくらあの人が殺人犯だとしても、私を助けてくれたあの人の親切には報いたい。だからこそ、自首を選択肢として用意することだけは決して譲れない。

5分くらいして、霧島さんからメッセージが入った。

幸いにも警察を説き伏せることができたみたいだ。そして、それ以上に重要な事が記されていた。

『僕のズボンにあった焼酎の染みですが、鑑識の調べで微量の睡眠薬の成分が検出されたそうです』

これで証拠は出揃った。メールの文には、これから津軽さんを呼ぶと書かれている。

私は窓の外、四国山地を見上げた。今頃礼士さんはあの山を越えているに違いない。

もうすぐ、あの人に会える。

そう思うと、自然と血の巡りが良くなった。自然と勇

気が湧いてきた。

私は立ち向かわなければならぬ。

津軽さんの中に垣間見える過去の私に。

私は乗り越えなければならぬ。

私の周りに散乱し、私を翻弄し続けてきた謎たちに。

誰かがドアをノックした。

「碓氷様、津軽です」

私は立ち上がり、武者震いをする。

「どうぞ、鍵は開いています」

ドアが開き、真犯人が姿を現す。

決戦だ。

\*剣礼士 —— 徳島県三好市・特急『南風3号』車中

阿波池田は山間のターミナル駅だった。土讃線と徳島線が連絡する駅で、ここで乗り換えたら徳島に行くことができる。

比叡さんはさつきからトイレに籠っている。釜田さんと大和さんはたこめしを空にしてしまった。まだ10時半にもなっていないのに、食欲旺盛だ。

列車はまた走り出す。駅の構内を抜けると、相変わらずの急勾配と急曲線、大小のトンネルや落石避けのシールドターが次々と列車に襲い掛かる。さつきよりも苛烈になっっている印象を受ける。

僕は通路を挟んで隣に座る犯人を見た。恐らくこの人のことだ、どこかのタイミングで高知側の犯人と連絡を取っているはずだ。それを証拠に地元警察を動かすことができれば。

仮にそれができなくても、この人の過去を辿ればいい。必ずあの人の名前が出てくる。

『電車館』でのトリックは看破している。過去の事件も恐らく見破ることができた。動機も見抜けている。後は、瑞穂さんが高知の事件をどうやって解くかだ。

瑞穂さんを信じて僕は止めなかった。瑞穂さんを信じて僕は送り出した。

でも、祈らずにはいられない。

どうか、どうか無事でいてくれ、と。

悪路を強行突破する『南風』の車内で、僕はじりじりしながら時が経つのを待った。旅人が一番食べさせられて消化に困るものは、間違いなく「時間」だろう。

＊確氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

津軽さんは相変わらずじっとりした目をしている。最初に会った時もそう思った。その目には訝しむような色が浮かんでいる。

「どうぞ、座ってください」

私は広縁の席を進めた。津軽さんは大人しく背を丸めて着席した。霧島さんはそっとドアの前に立ち、退路を断つ。

「あの……お話って何でしょうか？」

私は深呼吸し、眼鏡をずり上げた。

「この旅館で起きた島風教授の殺人事件。警察は常盤さんを犯人として連行しました」

反応を窺いながら話を続ける。特に口を挟んだりすることもなく、津軽さんは私の話を聞いている。

「でも、いくつかおかしな点があるように思えるんです。島風教授はあなたを見てひどく取り乱して、焼酎を取り落とししました。今度はそれに付随してあなたがひどく慌てていました」

表情にほとんど変化は見られない。

「常盤さんの部屋には睡眠薬がありました。本人は知らないと言っています。4錠分が空になった睡眠薬ですが、あれはかなり強い効果を持つものらしいですね？」

島風教授の体内からも睡眠薬の成分が検出されましたが、成人女性が使うには適量だったそうです。残りの3錠はどこに行ったんでしょう？」

相変わらず津軽さんは口を閉ざしたままだ。

「警察の捜査で、常盤さんの体内からも睡眠薬の成分が検出されました。ですが、彼女は睡眠薬を飲む理由がありません。睡眠薬を飲んでしまえば、島風教授を夜間に殺害することが不可能になります。そうなれば、こう考えるのが妥当なではありませんか？ あなたが二人に睡眠薬を混ぜた焼酎を飲ませた」

ここで初めて津軽さんの表情に変化が起きた。といっても、それは眉間に小さく皺寄せただけの、あまり大きくない変化だった。

「前置きはこれくらいにして、本題に入りましょう。津軽洋子さん、あなたが島風教授を殺害した犯人ですね？」

言い切った。

もう、引き返すことはできない。

＊ ＊

津軽さんは少し困ったように小さく笑った。

「お客様、私には発言の意味が分かりかねます」

顔は笑っているが、目は射抜くように私を見ている。私は射抜き返し、話を再開させた。

「確かに、あなたが犯人だと指摘するのは不可解な点が多数あります。意味が分からない、とおっしゃるのも仕方ないことでしょう。まずはあなたに話を聞いてもらうために、証拠をお見せします」

津軽さんの顔から笑みが消えた。

「昨日の晩、島風教授が取り落とした焼酎がありましたよね？ あの時、床にまけた焼酎は私のズボンや靴下を中心にあちこちに飛び散りました。津軽さんは私の服を全て洗濯すると言い、私が遠慮するのを押し切りました。あれは、焼酎の中に睡眠薬が含まれていることが露見しないように、証拠隠滅のための動きですね？」

私は少し顔を俯けた。

「ですが残念です、あの時私の横に座っていた霧島さんのズボンにも微量の焼酎が飛び散っていました。警察が鑑識に回した結果、その染みから見つかったそうですよ。睡眠薬の成分が」

一瞬、津軽さんの表情に動揺が走ったのを私は見逃さない。

「常盤さんの荷物に睡眠薬を仕込んだのはあなたですね？ あなたはこの宿の従業員であり、合鍵を使えば部屋に入ることができます。睡眠薬の数が異常に減っていたのは、島風教授が取り落として、2錠分が無駄になったためです」

ここで津軽さんはまた口を開いた。

「興味深い仮説です。ですが、私には犯行は不可能です。島風教授がお亡くなりになった時間帯、私は高知市内で宿泊していました」

「ええ。私もそのアリバイを崩すのに苦心しました」

津軽さんが少し目を見開いた。

「ここからは時系列順に、あなたの行動を再現しようと思います。ですがその前に前提を一つ。あなたが運転す

るトラックは日中に支配人が阿波池田までの往復に使用し、通常よりも燃料の残りが減っていました。トラックが最後に給油した日と走行距離から、高知まで一往復するのがやっとか、もしくはそれすらもままならない状態だったと考えられるでしょう」

霧島さんが支配人に帳簿を見せてもらって判明した事実だ。

「私の想像ですけど、津軽さん。あなたは当初こそ素直にトラックで高知とここを二往復するつもりだったんじゃないかもしれません？ ですが、軽油の残量が足りないし、かといって下手に給油すれば足がつかないままです。そこであなたは、汽車で高知まで行くことで問題の解決を狙いました」

私はテーブルの上に時刻表を出した。何度もめくったそれは、表紙の端が折れたり所々ページに傷や折り目がついてしまっている。

「あなたはまず、トラックで大杉駅に向かいます。6時40分頃にこの宿を出たので、大杉を19時09分に出る『南風19号』がちょうどでしょう。高知には19時45分に着きます。駅前のホームセンターでの買い物は20時くらいですから、時間的にも合致します」

津軽さんは素早く視線を左右に巡らせた。霧島さんが彼女の視線を跳ね返した。

「そこから簡易宿泊所『元親』に向かい、チェックインします。実は、私はどうしても気になって現地に行ってみました。あなたの部屋は一階でしたね？ あの部屋の窓の大きさなら、フロントを経由せず、つまり誰にも見咎められずに脱出することは可能です」

「わざわざ見に行ったんですか？ それはまあ、ご苦労様でした」

津軽さんが少し皮肉っぽく言った。

「いいえ。あなたの組んだアリバイトリックに比べたら大したことは無いので」

皮肉の応酬を繰り返してはいつまでも先に進まない。私は多少強引に話を戻した。

「簡易宿泊所の女将さんの話だと、あなたはホームセンターで購入した資材を手に宿入りしたそうですね。部屋は三畳くらいしか無い狭い所なのに、どうしてトラックの中に荷物を置いておかなかったんですか？」

私はここであえて返事を待ってみることにした。彼女は口を開いて何か言いかけようとしたけれど、結局は口を閉ざしてしまっただけ。

「反論できませんか？ トラックで高知まで行っていないかったのなら当然ですね」

少し挑発するように言葉を紡ぐ。

「あなたは高知駅に引き返し、21時20分に高知駅を出る特急『しまんと10号』で大杉に引き返しました。この列車は途中で先を走る普通列車を追い抜いて、大杉駅には21時51分に着きます。そこからトラックでこの宿に戻りました」

津軽さんは口を開いた。今度は反論が飛んできた。

「トラックでこの宿に戻った、と言いましたね？ ですが、この宿の人間の誰かがトラックの音に気付くと思いませんけど。誰か証言しましたか？」

「いいえ、誰もトラックについては証言していません。誰もトラックの音に気付かなかったので、仕方ないでしょうね」

私の反応が冷淡だったのか、津軽さんの表情に不安の色が浮かぶ。私は追撃の手を緩めない。

「トラックの音に気付かせないようにするには、どうするか？ 方法はいくつもあります。人の注意を他に逸らす、そもそもトラックを宿から離れた場所に停める、とか。ですが、いずれも非現実的です。前者は宿にいない津軽さんに宿の人間全員の手を逸らすことができるような手段が無いこと。後者は後で説明します。なので、私はこう考えました。津軽さんは何か他の音でトラックの音を誤魔化したのではないかと」

私はまた時刻表のページをめくった。ドアの前から霧島さんも視線を投げていることを悟った。

「時間も遅く、車通りも少ない夜の山道。トラックの音を誤魔化すような大きな音があるのか？ と疑問に思っかもしれません。ですが、あります。列車の音です」

霧島さんは驚いたのか、少し顔を赤くした。津軽さんの顔色は心なしが悪くなってきたように思える。

「大杉駅からここまでは車で20分弱です。夜間で車通りも少ないので、もっと飛ばして切り詰めることもできるでしょうね」

私は時刻表のページに指を走らせる。

「『南風25号・しまんと9号』は大歩危駅を21時56分に発車します。私も大歩危駅から『南風』に乗りましたが、豊永を通過するまで8分くらいかかりました。これをこの列車にも当てはめると、豊永駅の通過時刻は22時04分くらいになります。あなたは急ぎ気味にトラックを走らせ、特急『南風25号・しまんと9号』がこの線路を通るタイミングに合わせて駐車場にトラックを停めました」

「確水さん、少しいいですか？」

霧島さんがここで口を挟んだ。

『南風25号・しまんと9号』は、豊永から一つ上り方面に行った土佐岩原駅で先に津軽さんが乗車した『しまんと10号』の通過待ちをするんです。それで3分くらいロスタイムが生じるので、豊永の通過時刻は22時07分頃ですね。つまり、大杉駅から16分でここに着けばいいことになります。飛ばせば十分に可能な時間です」

私は霧島さんの訂正に感謝した。大杉駅から少し時間的には厳しいかもしれない、とは感じていたけれどこれなら行けるだろう。

礼士さんはいいつもこんな感じで時刻表を読み解き、犯人を指摘してきたのだろうか。ひりひりするような気持ちを感じながら、ふと頭の片隅で考える。

「ここから島風教授殺害の犯行に移ります。あなたは合鍵を持って非常階段を上り、二階から侵入します。玄関は監視カメラがありますし、事務室では支配人が業務をしていますからね。そのまま島風教授の部屋に入ります。睡眠薬が作用して島風教授も常盤さんも眠っていたでしょう。あなたは、眠っている島風教授をベランダに運び出し、駐車したトラックの荷台に落としたいんです」

段々と津軽さんの表情が狼狽に染まっていく。能面のような無表情は、もはや欠片も残されていない。

「あなたのトラックも調べさせてもらいました。荷台の真ん中辺りに凹みがありましたけれど、あれは島風教授を落とす時にできたものではない。彼女を落下させた時にも音がするかもしれませんが、断続的に続くエンジン音とは違い、ほんの一瞬です。雨も降っていません

し、あまり問題にはならなかったと思います。トラックを使わずに津軽さんを負ぶって川に捨てる方法も考えましたが、あなたと島風教授とは結構な体格差があります。あまり現実的とは言えないでしょう」

私はまた時刻表のページをめくった。

「さっき『しまんと10号』のダイヤを見せた時にも少し話しましたが、この列車は普通列車を追い抜きます。普通列車4266D、この列車は豊永を22時16分に発車する上り最終列車です。この列車のエンジン音、走る音に紛れてあなたはトラックを駐車場から出したんです」

私は言葉を切り、津軽さんの反応を窺う。明らかに顔色が青ざめていた。

「犯行時間は10分弱くらいしか取れません。なので予め睡眠薬を飲ませておいたんでしょね。抵抗され、余計な時間を取られないように」

ここから推理は第二ラウンドに入る。

「あなたはトラックの荷台に島風教授を落とし、列車が走る音に紛れて旅館の敷地から脱出しました。そして橋に向かい、上流側に彼女を突き落とす。『南風』の振り子による傾きを計算した位置に落とし、常盤さんが犯人であるかのように見せかけたんです。まんまと引っこかりましたよ」

昨日の今頃、霧島さんが披露した推理だ。私たちは一杯食わされたのだ。

「そしてあなたはトラックで大杉駅に引き返します。高知に向かう最終の特急『南風27号』は大杉駅を23時22分に出ます。1時間くらいありますから、急ぐこともなかったでしょう。ですが、ここで思わぬ誤算が生じ

ます。大杉駅直前の県道で発生した土砂崩れです」

私は『南風27号』の時刻を津軽さんに指し示し、話を続ける。

「あなたのトラックの荷台には、あちこちに土くれが付着していました。あなたは土砂崩れに巻き込まれかけたんじゃないですか？ 間一髪で助かったものの、退路が断たれてしまいました。トラックの燃料も少なく、このタイミングで給油したらアリバイ工作が水の泡です。あなたは翌朝には通行が可能になっていることを祈り、『南風27号』に乗った。違いますか？」

否定の返事は無かった。私はそれをゴーサインと捉えて推理を展開する。

「高知には0時03分に着きます。そこから宿に戻ります。誰にも見咎められないようにしなければいけません。窓から自分の部屋に入ればいいでしょう。そして卸売市場に行きます。トラックが無いので大きなものは買えず、トマト一箱が関の山でした。そして高知駅に向かい、駅を5時ちょうどに出る特急『しまんと2号』に乗車します。ですが、この時の行先は大杉駅ではありませんでした」

津軽さんのまとう雰囲気が変わっていくのを私は感じていた。あまり何を考えているか分からない人だったけれど、今ははっきりと焦りの色を放っている。

「大杉駅付近の土砂崩れがある程度撤去され、片側交互通行が可能になったのは朝の7時くらいです。津軽さんが宿に戻ってきた6時20分頃には間に合いません。つまり、あなたはトラックで帰ってきたではありません。あなたが降りたのは大杉駅ではなく、大歩危駅でした」

私はまた時刻表をめくる。これで最後だ。津軽さんの視線を確かめながら、推理は最後の仕上げに入る。

「大歩危駅には5時46分に着きます。タクシーを使えば宿に帰れますが、こんな朝早くに宿の近くまでタクシーを使い、足がつくことをあなたは恐れたのでしょうか。気付いてしまえば簡単でした。大歩危駅から豊永駅まで対向の普通列車に乗ったんです」

該当する列車欄を指差す。

「普通列車4213D、阿波池田から土佐山田に走る上り始発の普通列車です。大歩危を出るのは6時02分、豊永には6時15分に着きます。これに乗ったとすれば、あなたがこの宿に戻ってきた時間とも合致します」

私は時刻表を閉じた。

「通過駅に向かうのに、時間をかけて普通列車に乗るのではなく、特急で先の駅まで回り道して反対方向の列車に乗る。正直、盲点でした」

私は椅子に座り直す。

「これであなたにも犯行が可能であることが証明されました、津軽さん。最後に証拠をもう一つ。あなたのトラックを調べると、事件があった夜に高速道路を使っていないことが判明するはずですよ。今はETCとかがありませんからね。私の推理はこれで終わりですが、何か反論はありますか？」

私は身構えた。実は、結局動機は分からずじまいのまま推理をぶつけたのだ。それを指摘されたら劣勢に立たされる。でも、津軽さんは力なく笑った。

## 津軽 アリバイトリック (2014.3)

- 18:40頃 旅館『吉野川』をトラックで出発  
19:09 特急『南風21号』に乗車 大杉19:09→高知19:45  
20:00頃 高知駅前のホームセンター『コナーン』で買い出し  
20:30頃 簡易宿泊所『元親』にチェックイン 部屋の窓より脱出  
21:20 特急『しまんと10号』に乗車 高知21:20→大杉21:51  
22:05頃 トラックで旅館に戻る 島風教授をトラックの荷台に落とす  
22:10頃 島風教授を川に捨て転落死させる トラックで大杉駅へ  
23:15 特急『南風27号』に乗車 大杉23:22→高知0:03  
0:20頃 簡易宿泊所『元親』自室に侵入  
3:30頃 簡易宿泊所『元親』チェックアウト 高知市中央卸売市場へ  
4:30頃 高知市中央卸売市場を出発 高知駅へ  
5:00 特急『しまんと2号』に乗車 高知5:00→大歩危5:48着  
6:02 普通4273Dに乗車 大歩危6:02→豊永6:15 宿に戻る

「すごい、まるで全部見ていたみたいじゃないの」  
私は小さく溜息をついた。

「犯人なんですね？」

「ええ。もう申し開きはできないわね」

津軽さんは少し顔を赤くして笑っていた。

「でも、どうして私に話してくれたの？ 警察に告げ口するんじゃない？」

「津軽さんには怪我していた所を助けてもらいました。なので、その恩にはせめて報いようと思ったんです」

私は津軽さんの方に少し身を乗り出して、頭を下げた。

「津軽さん、どうか自首して下さい！」

返事は無い。私は頭を下げたまま続ける。

「私は、一人の人間としてあなたの罪を看過することはできません。でも、あなたには恩があります。なので、

せめて罪が軽くなる自首をしてほしくて、わざと警察を呼ばなかったんです。……どうか、折れて下さい」

思いの丈をぶつけ、頭を上げる。津軽さんは苦笑をこらえきれず、けらけらと笑い出した。

「まさか、助けた人に真相を見破られるなんて。あなたが一番の誤算ね、確氷さん」

それから真犯人は首を振った。

「残念だけど、私に自首はできない。私にも約束があるのよ」

約束？ 何の事だろうか？ でも、拒否されてしまったものは仕方ない。私は霧島さんに目配せした。

「残念です、津軽さん」  
私の視線に気づいたのか、津軽さんは霧島さんの方を見て、そして思わず立ち上がった。

「悪いけれど、津軽さん。この家で生まれ育った人間と



して、あなたの行いは許すわけにはいかんがよ。今の話、ゼーんぶ警察に流させてもらったで」

霧島さんはポケットの中から通話中になっているスマホを取り出した。津軽さんは驚愕の表情を浮かべ、そして思わずそれを奪おうとした。しかし、その動きは制された。

「動くな！ 警察や！」

ドアが勢いよく開け放たれ、黒潮警部と瀬戸刑事が警察手帳と手錠を手に飛び込んできた。

「津軽洋子、お前を島風真理殺害の容疑で逮捕する！」

\* \* \*

津軽さんの動きは素早かった。即座に踵を返し、走り出した。私の横を駆け抜け、広縁の椅子やテーブルをなぎ倒し、窓を割ってベランダに出た。

「追え！」

黒潮警部の野太い声もスローモーションに聞こえた。それくらい、私の体も即座に動いていた。割れた窓を突っ切り、晴天の下に出る。津軽さんの背を追いかける。

彼女の体が宙を舞った。柵に手をかけ、そして重力に従い向こう側に消えようとした。

「危ない！」

私は叫び、間髪で彼女の首根っこを掴んだ。瞬間、右腕に猛烈な重さが働く。

「動かないで！」

私は怒鳴る。津軽さんの真下には線路が見える。そして、何ということだろう、列車の音が聞こえてきた！

どうにかして彼女を引き上げようと、私は両手で彼女を掴んだ。柵を支点にして、全体重を後ろに倒す。背後から霧島さんも駆け寄っていた。列車の音は段々大きく

なってくる。

でも、ここで私はある事を忘れていた。

津軽さんがホームセンターで購入したものは、壊れかけた柵を直すための資材だったということを、

ばきり、と大きな音がした。次の瞬間、私の体は根元から折れた柵ごと宙に投げ出された。

\* 釧路士 —— 高知県大豊町豊永・特急『南風3号』車中

『南風3号』は定刻通り大歩危駅を発車した。どうしても気が急いで、僕は早くも降りる準備を始めた。今から準備したところで列車が大杉駅に到着するわけではない。そうは分かっているけど、ただ黙って座っている気にはなれなかった。

瑞穂さんに会えるという期待。瑞穂さんが無事なのかどうかという不安。どうしてもそれらが入り混じって落ち着かない。釜田さんや大和さんもあまり落ち着いていないみたいで、早くも降り支度をしている。

列車の先頭部分、俗に言う「顔」は斜めに傾斜している。運転席の真後ろの席からだ、空がよく見える。でも、せっかくの前面展望もトンネルばかりだ。

トンネルも右に左にうねうねと曲がっている。カーブに差し掛かる度に車輪が軋み、車体が大きく傾く。

右側の車窓に谷が見えてきた。吉野川だ。列車は土讃線の中でも一番過酷な地帯に突入する。川には時折橋が架かり、対岸には国道が見える。

土佐岩原駅を通過し、またトンネルを抜ける。踏切が増えてきたということは、豊永の町が近いのだろう。瑞穂さんは今、この町にいる。そう思うだけで鼓動が速く

なる。

木々や草が生い茂るカーブを抜け、前方に駅が見えた。豊永駅だ。来た。とうとうここまで来た。『南風3号』は速度を緩めずに駅を通過する……そう思っていた。

運転士が大きく警笛を鳴らし、非常ブレーキをかけた。僕たちは思わず前につんのめる。

前方を見る僕の目に、信じられない光景が飛び込んできた。

宙を舞い、線路に落ちてくる女性の姿だった。彼女の姿はすぐに窓の上に消え、次の瞬間、どしんがしやがしやと屋根に何か重たいものが落ちる音がした。

「な、何だ!?!」

釜田さんをはじめ他の乗客も天井を見上げる。僕は顔から血の気が引くのが分かった。

「今の人って……まさか……!」

\* 碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・土讃線豊永橋梁

迫りくる列車に死を覚悟した。

だけど、どうやら私は九死に一生を得たようだ。私を出迎えたのは砂利の上に引かれた線路でも、列車の鋭い車輪でもなく、ボコボコと凹凸のついた列車の屋根だった。

どすん、と体中に衝撃と痛みが走る。眼鏡がずれて視界がぼやける。そのまま列車の振動が私を揺さぶり、振り落とそうとする。私は無我夢中で屋根の出っ張りにつながり、流れる視界がみるみるうちに遅くなり、やがて完全に

停止した。右に傾いた屋根の上で私はそろそろと起き上がり、眼鏡を直す。視界が鮮明になり、列車は橋の上で停止していることが分かった。

突然、背後から何かに殴られた。ひっくり返され、視界が反転する。

「な、何すん」

津軽さんが再度、私を足蹴にする。脇腹に鈍痛が走る。私は屋根の淵に追い詰められた。

「確氷って言ったわね。悪いけど、あなたには今ここで死んでもらう」

屋根の下には橋に備え付けられた狭い通路、その下には吉野川に注ぐ濁流が見えた。落ちたらまず助からない。

「私を殺してどうすんのよ！」

「あなたが死んでくれた方が都合がいいのよ。私にとっても、彼にとっても」

彼が誰だか知らないけれど、冗談じゃない！ 私は津軽の方に転がり、間一髪で蹴とばそうとする彼女の足を避けた。そのままがばりと体を起こし、股座に顔を突っ込む。

「きゃ、きゃあ!？」

「あなたに殺される筋合いは無い！」

そのまま太もを抑え込み、彼女をなぎ倒す。でも、腕の力が脚の力に勝てるはずも無かった。そのまま馬乗りになれ、逆に抑え込まれてしまう。

「いい加減、大人しく死ね！」

津軽は私の髪をぐいと掴み、蹴り飛ばす。屋根の傾斜も手伝って私はごろごろと転がり、屋根から落ちた。

\* \* \*

どうにか両手で屋根の出っ張りを掴み、しがみついた。

体が車輛側面に叩きつけられる。しかし数秒後、右手に激痛が走った。叫ぶ。

「うぐつ……私を殺してどうすんのよ！」

屋根の上で仁王立ちをする津軽を見上げ、何か策は無いかと必死に知恵を巡らせる。

「そうね、冥途の土産に教えてあげる。あなたが死んで、ついでに刃とかって言う人も死ねば、私たちの罪をなすりつけられる。私はあの人と人生をやり直すのよ。

今度こそあの人を愛するのよ。島風とかいう女に騙されてあの人に幻滅し、随分遠回りしてしまっただけ。だからあなたも、大人しく私たちのために死んで」

礼士さん？ どうしてここで礼士さんの名前が出てくるの!？ 津軽は私の右手をめりめりと踏み潰し、私はたまたま右手を離すしかなかった。

「さようなら」

津軽は何の躊躇いも無く、唯一私を支える左手をも踏み潰した。

重力が私を引きずり落とす。

ふざけるな。

こんな死に方をするなんて。

私は身構えた。体に走るのは水の冷たさか、奪われていく酸素か、硬い川底か、それらを感じするよりも前に死ぬか。

\* 刃礼士 —— 高知県大豊町豊永・土讃線豊永橋梁

天井からどすん、ばたんと断続的に音が聞こえた。

『お客様にご案内致します。只今、トラブルのため列車は豊永駅付近で緊急停止致しました。安全の確認が取れ次第発車致します。お客様は車内でしばらくお待ち下さい』

い

車掌がアナウンスをする。その時、何かが側面窓ガラスにぶち当たった。

「わっ、何だこれ!？」

釜田さんが叫ぶ。窓ガラスにへばりついたのは、女性の顔体だった。

「瑞穂さん……!？」

最も恐れていたことが起きてしまった。このままだと、瑞穂さんが殺されてしまう!

躊躇うこともしなかった。僕はデッキに駆け込み、非常用のドアコックを引っ張った。ドアのロックが外れ、そのまま外に飛び出す。橋の上だった。狭い通路を走る。

僕の目の前で瑞穂さんの体が飛んだ。

「瑞穂さん!?!?!」

僕は声の限りに叫び、両手を伸ばした。

\* 確氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・土讃線豊永橋梁

落ちていく。

走馬灯のように、数々の記憶が蘇る。

せめてもう一度、あの人に会いたかった。

礼士さん。

あなたに会いたかった。

あなたにお礼を言いたかった。

あなたと一緒に生きたかった。

\* \* \*

私を襲うのは衝撃か、死か。

しかし、出迎えたのはそのどちらでもなく、二本の太く暖かい腕だった。

落下が止まり、誰かの体温が私の背中に伝わる。

「瑞穂さん！」

聞き慣れた声が耳に届き、見慣れた垂れ目が私の顔を覗き込む。

「礼士さん……!?!」

私は最愛の人に抱き留められていた。

「早くここから逃げよう、さあ！」

礼士さんは私を抱えたまま、列車から離れようと橋を渡り始めた。でも、私は礼士さんの背後に迫る影に気が付いた。

「礼士さん、伏せて!!」

遅かった。津軽は屋根から飛び降りて、そのまま礼士さんにドロップキックを食らわせた。礼士さんは私を瞬時に手放し、そのままバランスを崩し、川の上に飛び出した。

\* \* \*

私は両手で礼士さんを掴んだ。間一髪、礼士さんは川に落ちていない。

「私の手を離さないで、礼士さん！」

互いの手汗で礼士さんの体がずるずると下がっていく。

「瑞穂さん、後ろ！」

礼士さんが叫ぶ。私は握る手に渾身の力を込めながら、そっと後ろを振り返った。

「津軽……あなた！」

「手間かけさせてくれるじゃない。終わりよ」

津軽は私の背中を押そうとしたが、

「おっと、そこまでだ」

誰かの声があった。津軽さんは思わず私から目を離し、声の主を探す。

「どこを見てんだよ、このマヌケ。上だ、上！」

私も声の正体に気付いた。

「釜田さん！」

「俺の店の従業員に手え出すとは、いい度胸してんじやねえか！ このあばずれ！」

釜田さんは『南風』の屋根で仁王立ちをし、津軽を睥睨する。

「さあ、歯あ食いしばれ！」

釜田さんは屋根を蹴り、津軽の顔面めがけて蹴りを入れた。

「さあ、誰かが間に割って入った。その男は両腕を交差させ、津軽の直前で釜田さんの蹴りを受け止めた。」

「けつ、やつと本性を現したか。鳥海先生」

ポマードで頭髮を固めた男が、そのまま釜田さんの蹴りを跳ね返した。

\* \* \*

「あなた!?!」

津軽が現れた男に気付き、驚愕する。

「先輩！」

「叶ちゃん！」

津軽が気を取られているうちに後輩が私に駆け寄り、礼士さんの腕を掴む。

「ふんっ……ぬううううううううううっ！」

「ぐっ……おりやあああああああつっ！」

全力で礼士さんの巨体を引き上げる。

「ほーう、『あなた』ときたか。なるほど、そういうことだな？ まあいい、確氷！ 鳥海は俺たちが引き受ける、お前は津軽をぶっ殺せ！」

私はどうにか礼士さんを橋の上に引き上げた。

「礼士さん！」

私は落ちていた錆びた鉄パイプを拾い上げる。ベランダ柵の残骸だ。

「私を止めて、信じてるわよ」

「えっ?」

私は返事を待たず、立ち上がる。鉄パイプを折れそうに握りしめ、津軽に視線を固定する。

「津軽洋子、あんたは私を怒らせた！」

まずは視線で焼き尽くす。

「今からあんたをぶっ飛ばす！ 逃げんじやないわよ！」

宣戦布告し、疾走り出す。

「死ぬのはあなたよ、確氷！」

津軽も私に向かい、疾走り出す。

「死ねえ！」

目の前に津軽が迫り、殺意を剥き出しにしながら蹴りを入れようと仕掛けてくる。

「断る!!!!」

津軽の突進を軽くないなし、背後に回り込む。

「遅い！」

津軽の動きは亀のように遅く、私は背中に照準を定めた。鉄パイプを振り上げ、叩きつける。鈍い音と共に、確かな手応えが両手に走る。

「よせ！ やめ」

聞き慣れない男の声が途切れた。

「先輩の邪魔をするな！」

私の視界の隅で叶ちゃんが男の頭にコートを被せ、視界を奪うのがスローモーションのように見えた。

背中を叩きつけられた津軽が、顔から線路に突っ込

む。その目の前には柵の残骸が残っていた。津軽は手を伸ばしたが、直前に誰かが残骸を川に蹴り落とした。

「霧島さん！」

「いけませんね、津軽さん。宿泊客に乱暴をはたらくなんて」

そのまま彼女の顔面に蹴りを入れる。

「きゃあつ！」

叶ちゃんの悲鳴が響く。私は思わず歩みを止め、振り返る。ポマード男が私の眼前に迫っていたが、誰かが立ちほだかった。

「あなたには失望しましたよ、島海先生」

「礼士さん！」

「振り向かないで、瑞穂さん！ 行け！」

その時、腹に衝撃が走った。津軽の拳が私の細い腹にめり込む。

「がはっ……！ つ、このお！」

鉄パイプを振り下ろす。津軽は即座に奪おうと手を伸ばした。かかった！

「あなたの相手は私だ……！」

パイプをぐるりと回し、フェイントをかける。そのままパイプの尻で津軽の顎を跳ね上げる。津軽は線路に倒れ込み、私の視界には彼女しか映っていない。

「確氷、今だ！」

「先輩、やっちゃって！」

「確氷さん、行け！」

「瑞穂さん……！」

四人の声が、熱い南風のように私の背中を押す。私は真犯人を見定める。あんなだけは許さない！ 何が何でも許さない……！

「私を殺そうとしたこと……！」

立ち上がりかけた津軽の脇腹に一撃。

「礼士さんを殺そうとしたこと……！」

よろけた所を、足に一撃。尻餅をつく。

「死ぬまで……！」

額めがけて突き立てる。後ずさりして躲かれた。

「死ぬほど……！」

犯人は『南風』に行き場を遮られる。追い詰めた！

私は鉄パイプを振り上げる。

「後悔しろ……！」

ありったけの力を込めて、私はパイプを真犯人の頭めがけて振り下ろした。

\*

\*

誰かが私と津軽の間に割って入り、鉄パイプを掴み止めた。行き場を失った凶器は、津軽の頭の数ミリ手前で停止した。

「そこまでだ、瑞穂さん」

礼士さんは荒い息をしながら、私の殺意を止めた。

「……ありがとう。あなたを信じて良かった」

私は鉄パイプから手を離れた。

「わあつ！」

「ぎゃつ！ せ、先輩！ 危ない！」

背後から霧島さんと叶ちゃんの叫びが聞こえた。

「洋子を離せ！」

島海と呼ばれた男が私たちがけて突進してきた。

が、しかし。

礼士さんが私から取り上げた鉄パイプで一閃を放った。パイプが真つ二つに折れ、男は吹き飛ばされる。

「てめえ、いい加減にくたばりやがれ！」

すかさず、釜田さんが島海の顔面めがけて殴りかかる。拳がめり込む音がして、ポマード男は大の字になっ

て倒れた。そして、それっきり動かなくなった。

\*

\*

「あなた……！」

津軽が息も絶え絶えに、もう一人の犯人を呼ぶ。

「見下げ果てたものね」

私は津軽の前に立ち、見下ろす。

「あなたが何のために島風教授を殺したのかは知らないけど、島風教授に騙されて島海と別れた、みたいなことを言ってたわよね？」

『南風』の連結器の前で座り込む犯人は弱々しく頷いた。

「くだらない。あなたは、島海よりも島風教授を信じて別れたわけでしょう？ それで今更何よ？ よりを戻して騙した人を殺したわけ？ ばっかじゃないの？ 所詮、あなたが言う取り戻したい生活とか、今度こそあの人を愛するだとか、そんなもの赤の他人に騙されて簡単に捨ててしまうようなちやちなものでしかないわ」

鉄パイプは捨てても、憤怒までは捨てていない。私は容赦なく次々に言葉を撃ち込む。

「誰かを愛するのなら、どうして島海を信じてあげなかったのよ？ あなたは誰も愛していない。あなたが取り戻そうとしているのは、ただのエゴよ。醜い自己満足でしかない。そんなしょうもないもののために殺されるなんて、たまったもんじゃないわよ」

「うるさい……！」

「うるさい？ 私を殺そうとしておいて、何様のつもりよ？ 無様ね。惨めでしかない」

「黙れ！」

「黙るのはあなたよ、この大馬鹿者！」

私は津軽の胸ぐらを掴んだ。

「いい？ 誰かを愛するってことは、信じ合って、支え合って、守り合って、それでいて傷付け合うことよ！

それでも一緒にいたいって、そばにいたいって、そう思うことよ！ あんた、自分の事しか見ていないんじゃないの？ あんたが言う愛ってのは、人を殺して復讐するための言い訳でしかない！」

私は手を離れた。

「私にも分かるわ。私も、愛つてものを自分を責める手段に使った事があるから。あなたの考えは分からなくもない。分かりたくないけれどね」

礼士さんがそっと私を見ていることに気付く。私は話を切り上げることにした。

「冥途の土産に、一つだけいいことを教えてあげる。あんたはこれから刑務所に入ることになる。でもね、誰かから赦してもらえらるつてのは、罪を償えるつてのは……それは、とても幸せな事よ」

津軽は何か呟いた。でも、それは『南風』のエンジンの音で掻き消されて聞こえなかった。私もこれ以上、この女の言葉を聞きたくも無かった。彼女を……私が辿っていたかもしれない世界を視界から消し、一度と会わないようにするべく、私は踵を返した。

「終わったわ、礼士さん」

垂れ目の探偵は息を切らしながら、小さく微笑んだ。

\* 劔礼士 —— 高知県大豊町豊永・土讃線豊永橋梁

二人は完全に沈黙した。息はある。僕は荒い呼吸のまま、パイプを投げ捨てた。

「瑞穂さん……やっと会えた」

「礼士さん、え、ちょ」

『南風』の目の前、僕はきつく瑞穂さんを抱きしめる。

「心配したんだぞ！ どうなるかと思って……助けてくれてありがとう」

最愛の女性は僕の腕の中で何一つ抵抗せず、そっと僕の背中に両腕を回した。

「私こそ助かったわ、……ごめんさい、心配をかけてしまつて」

「いいんだよ。もう、いいんだ」  
互いに腕に込める力を強める。

「瑞穂さん。その……僕と秋田に戻ってくれる？」

瑞穂さんは赤い顔で僕を見上げた。体中が煤で汚れ、あちこちから血を流している。

「……はい」

血と煤にまみれた顔に、満面の笑みを浮かべてくれた。

「ありがとう……ありがとう……！」

僕は、いつまでも瑞穂さんを離さなかった。

\* \* \*

少しして、高知県警と思しき二人が駆け付けた。達磨みたいに太った警部と、お団子ヘアに麻呂眉の女性刑事だ。

津軽と鳥海は手錠をかけられ、パトカーに押し込められた。僕たちはこのまま豊永で列車から降りてもらえることになり、『南風3号』は30分くらい遅れて豊永を後にした。

「碓氷さん」

肥えた体の警部が近寄ってきた。いつまでも線路の中にいることはできず、踏切から線路の外に出た。

「黒潮警部」

瑞穂さんは僕の隣で警戒心をあらわにした。

「津軽の件は見ていました、お手柄でしたね。しかし、あのように鉄パイプを振り回していたのはさすがに見逃ごせません。一応、署までご同行を」

「それには及びませんよ、黒潮警部」  
背後から誰かが近付いてくる。

「霧島さん。しかし、この女は」

「別に殺そうとしたわけでもないやないですか」

「鉄パイプを頭に振り下ろそうとしてそう言われましてもねえ」

二人は押し問答を始めた。僕は霧島さんに助け舟を出すことにした。

「瑞穂さんには殺意はありませんでしたよ」

黒潮警部は僕の方に向き直る。

「あなたは……？」

「警部さん、あなたもご覧になったはずですよ。瑞穂さんがパイプを振り下ろした時、僕が寸前で止めたことを。あれは僕と彼女の間で最初からあのようにするつもりだったんです」

警部は目を丸くし、そして疑うようにじっと僕を見

た。

「しかしですなあ、あんな短時間でそんな打ち合わせができますか？」

「ええ、簡単な事です」

僕は瑞穂さんの腕を取り、抱き寄せた。

「夫婦ですから」

\* 碓氷瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

旅館に戻ると、初日にお世話になった日向先生が来て

くれていた。めいめいに治療を受けるも、概ね軽傷だった。

煤と血をシャワーで洗い流して一階に戻ると、みんな食堂に集まっていた。

「霧島さん、できそうですか？」

「もちよつとです」

霧島さんが何やらパソコンで作業をしているのを礼士さんが後ろから覗き込んでいる。

「お、繋がった！ もしもし、聞こえますか？」

『はい、もしもし？』

テレビ会議でも始まったのだろうか？ 私も近寄って画面を覗いてみると、矢野警部の顔がどアップで映し出されている。

「ああ、瑞穂さん。戻ったんだね、待ってたよ」

礼士さんが私に気付いた。

「これ、秋田と繋いでいるの？」

「うん。昨日まで僕がいた『電車館』だよ」

部屋そのものが電車だったという、冗談みたいな奇怪な館だと聞いている。

「そちらは全員揃っていますか？」

『ええ。いつでも始めて頂いて構いません』

霧島さんがセッティングの完了を告げ、礼士さんに席を譲る。役人はそのまま食堂の隅にあるテレビの方にケーブルを引っ張っていく。

「皆さん、お時間を取って頂きましてありがとうございます。僕は今、高知県の山奥から通話しています」

少し言葉を選ぶように黙り、そして話を再開させる。

「まずは皆さんに一点お知らせがあります。先程、我々に同行していた鳥海先生が『電車館』での殺人容疑で逮捕されました。追々そちらに護送されることになると思

います。ですよね、瀬戸刑事？」

「ええ、はい。こちらでもある程度の捜査は行いますが、やがてはそちらに身柄を引き渡すことになると思います」

パソコンの向こうにいる人たちは、それぞれに動揺したような表情を浮かべた。

『剣さん、鳥海先生が逮捕されたとはどういうことですか？ 犯人は水郷さんではなかったのですか？』

矢野警部が少し早口で質問を投げる。私も疑問だった。礼士さんは犯人を連れてどうして、それにどうやってここまで来たのだろうか？

「申し訳ありません、あれは偽の推理です。多少危険ではありますが、この事件の全容を明らかにするために必要だと考えました」

霧島さんがテレビの前で立ち上がった。

「繋がりましたよ、見えますか？」

テレビにはパソコンと全く同じ画面が映っている。これならみんなパソコンの周りに集まることなく、相手の事がよく見える。

「では、全員揃ったようですね。始めましょうか」

礼士さんはパソコンの前の椅子に座り直した。

「謎解きの時間です」

\* \*

「さて、今回の事件は実に様々な要因が絡み合っています。『電車館』での殺人、ここ高知での殺人、そして10年前に起きた『電車館』での死亡事故、そして仁賀保での放火殺人。これらの事件は全て繋がっています。皆さんに事件の全容を理解してもらうためにも、時系列順で話を進めていきます。まずは10年前の事件についてです」

10年前の事件。私も詳しくは知らないけれど、『電車館』で当時の社長が本棚の下敷きになって死亡した事件とメーカー建物への放火により当時の取締役が焼死した事件だと聞いている。

「10年前の10月、『電車館』で当時の『エルム模型』社長の播磨氏が死亡しました。死因は倒れてきた本棚の下敷きになったことによる出血死、彼は死に際に携帯電話とマスキーパーを持っていました。復習がてら説明しますが、マスキーパーとは列車の運転台を起動させるのに必要な鍵です」

礼士さんはちらりと私の方を見た。詳しくは後でゆっくり教えてあげるよ、と言われたような気がした。

「あの時、どうして播磨社長はマスキーパーを持っていたのでしょうか？ 簡単な話です。播磨社長もまた、部屋を動かそうとしていたんですよ」

テレビの中にある『電車館』の人々は怪訝な顔をした。

「動かそうとした、というのはなぜですか？」

「それについて語るには、まずは播磨社長がどのように殺害されたのかを知る必要があります。あの人は本棚の下敷きになっていました。部屋は全体的に何だか違和感がある、という証言がありました。そうでしたね、矢野警部？」

「ええ、そうでした」

「その違和感とは何なのか、なぜ生じたのか？ それには『電車館』のからくりが密接に関わっています。まずは結論から言います。播磨社長を殺害したのは山鳩専務で、殺害方法は遠隔殺人です」

テレビ画面の中で少し太った中年女性がショックを受

けていた。

「鹿島さん、まだ驚くのは早いですよ。それに、追々あなたにも聞くべき事があります」

礼士さんは釘を刺し、彼女を退席させない。

『遠隔殺人、と言いましたな。どのように行ったのですか？』

「播磨社長は死の直前に山鳩専務と電話をしていました。通話記録から山鳩専務が電話をかけた事が分かっています。あの時、山鳩専務は何か言って播磨社長を本棚の前に誘導したのでしょうか。本棚が固定されていなかったことそのものは館を建てた播磨社長の不手際ですが、それを使えば播磨社長を亡き者にできると考えたんです」

礼士さんは話し続けて舌が回らなくなってきたのか、ここで一口お茶を飲んだ。

「準備は簡単です。まず、山鳩専務は1号室の部屋と廊下を繋ぐ連結器を予め切り離しておきます。次に、自分がある2号室の電車機能をオンにします。後は電話を使って播磨社長を本棚の前に誘導すればいい。播磨社長の誘導が済んだら、山鳩専務は自分の部屋、2号室を修理スペースに向かって走らせます。なるだけ勢いをつけてね」

『そ、そんな事したら1号室とぶつかってしまいますよ』

「それが山鳩専務の狙いです。1号室は廊下に固定されていないため、2号室に押されても抵抗できません。抵抗できるとすれば、室内にいる播磨社長自身が1号室の運転台を起動させ、ブレーキをかけるしか方法はありません。播磨社長はそれを実行しようとして本棚の中からマスキューを取り出したんです。しかし、間に合いま

せんでした」

犬塚刑事がメモを取り終えるのを待って、礼士さんは話を再開させる。

「1号室と2号室の車体、それに修理スペースの行き止まりの部分の思い出して下さい。僕が案内した通り、1号室の車体と修理スペースの壁にはぶつかったような痕、補修の痕跡が残っていました。1号室はブレーキが間に合わないまま修理スペースに入り、行き止まりの壁に衝突してしまっただけです」

『その時の衝撃で本棚が倒れた、って言いたいんですか？』

また画面の向こうで誰かが言った。胡麻塩頭の中年男性だ。『男はつらいよ』に出てくるタコ社長にどこか似た似ている。

「その通りです、敷島さん。1号室に走った衝撃はかなり大きく、本棚を倒すのみならず室内の固定されていないものをほぼ全て動かしてしまうほどの威力だったでしょう。ある意味、地震を起こしたと言えれば想像しやすいかもしれません」

『だから部屋全体に違和感があつたわけですね』

矢野警部の言葉に礼士さんは頷いて、話を続ける。

「この時の衝撃は館の建物そのものにも伝わりました。調書の中で図書室の奥の本棚にある本が何冊か床に落ちていた、という記述がありました。図書室の奥の方は山の中にめり込んで建設されたスペースです。修理スペースも山の中に建てられていました。つまり、図書室の中でもあの場所は修理スペースの真上に建設されているんです。壁に激突した時に一番衝撃が伝わる場所なので、

起こるべくして起きた連鎖反応だと言えます」

『しかし、そのような乱暴な走りしたら2号室にいる山鳩専務もただでは済まないのではないですか？』

矢野警部の質問に礼士さんは少ししまった、という表情を浮かべた。

「これは失礼しました。それについての説明がまだでしたね。あのところ、山鳩専務と彼が運転していた2号室にはあまりダメージはありません。矢野警部、僕は部屋を鉄道車両として観察した時に連結器についてお話ししたよね？ 部屋と廊下ではなく、部屋同士を繋ぐ時に使う連結器です」

部屋そのものが電車だった、という話は聞いたけど連結器まであるのか。『電車館』を建てた人はよほどの道楽者か物好きだったに違いない。

「部屋同士を繋ぐ時の連結器にはジャンパ栓がありませんでした。車両間の一括制御を可能にする配線のことですね。僕はその時『連結器の中にジャンパ栓の機能が内蔵されている』と説明しました。本当に申し訳ありません、あれは嘘です。あの場には真犯人である島海先生がいたので、下手に真相を明らかにすることができなかつたんです」

さすがに矢野警部と犬塚刑事は不愉快そうな表情をした。でも推理の先が気になるのか、特に何も言わずに先を促した。

「おい、剣。って事は、部屋同士を連結するにもジャンパ栓はねえから、一括制御はできねえってことか？」

釜田さんが口を挟んだ。

「その通りです、釜田さん。なので、水郷さんに山鳩会長の殺害は不可能です。密室を解除できませんからね。」



それについては追々説明しますが、要するに山鳩専務がいた2号室から播磨社長がいた1号室の制御は不可能だったということです。2号室から1号室に向かって可能なのは、押すことだけです。1号室を力一杯押して、後は2号室だけブレーキをかければいい。そうすれば1号室は惰性で修理スペースに向かい、ブレーキがかからないまま壁に激突します。昔、操車場で行われていた突放と同じ原理です」

『あ、あの、とっぼうって何ですか？』

テレビから若い女性の声でした。

「その声は羽黒さんですね。突放というのは、鉄道車両を突き放して惰性で転がすことです。昔、ヤードという今の貨物ターミナルの前身みたいな施設で貨車の入換を行う時によく用いられていた手法です。全区間を機関車が押したり引いたりするのは時間も手間もかかるので、途中で機関車を止めて貨車だけを途中から勢いで移動させ、他の列車とぶつけるようにして連結させるんです」

でも、それって貨車にブレーキをかけられないんじゃないの？

「連結器を完全に連結しない状態で走らせれば、2号室だけがブレーキをかけた時に1号室は自然と切り離されて突放状態になります。1号室と2号室の間にある連結器を調べてみて下さい。連結器同士が密着に失敗し、ぶつかった時にできるような古傷が見つかるはずですよ。1号室はコントロールが起動していない状態のために壁にぶつかるという算段です。播磨社長が死亡した1号室は密室状態でしたが、当然です。そもそも誰も室内に入っていないのですから」

礼士さんの推理はようやく第一の事件を終えた。

「ここで、どうして播磨社長は『電車館』を建てたのかを考えてみます。これについては完全に僕の想像になってしまい、根拠不十分です。それを差し引いて聞いて下さい。播磨社長は鉄道愛好家の中でも、元は撮り鉄として活動していました。時局が悪かったので一概に非難はできませんが、その活動が『電車館』に現れたのではないかと邪推します」

叶ちゃんが私の方に近寄り、メモに丸っこい字で「盗り鉄」と書いて見せてくれた。撮り鉄じゃないのね。

「播磨社長は様々な鉄道グッズを保有していました。将来的には鉄道好きの仲間を集めたりすることもあったでしょう。この部屋の移動機能を使えば、監視カメラの目に触れることなく他の部屋にも出入りできます。悪い言い方をすると盗み放題です。グッズだけでなく、取引先や競合企業の方を招待すれば企業秘密だって盗み出せるかもしれません。他にも夜這いとか、後ろめたい事にはいくらでも使えます。もちろん、それだけが目的なら隠し通路を作りましょう。そうしなかったのは、やはり『自分だけの本物の鉄道が欲しい』と考えたからだと思えます」

『動機は何なんですか？』

犬塚刑事が口を挟んだ。

「僕にもはっきりした事は分かりませんが、恐らく『電車館』に大量に置かれた鉄道グッズが目当てだったのか、それか『エルム模型』を掌握する事だったのかもしれない。物欲に目が眩んだといったところでしょう」

礼士さんは冷淡に言った。

「ここから第二の事件の推理に移ります。仁賀保で三辺製作所の当時の取締役、三辺治作さんが焼死した事件で

すね。先に言ってしまうと、これも山鳩専務による犯行です」

『本当ですか、剣さん！？』

敷島取締役の声のトーンが跳ね上がった。

「考えられるとしたら、です。山鳩専務には動機がありました。さて、ここで質問です。『電車館』の部屋、つまり鉄道車両を製造し納入したのはどこでしょう？」

高知での事件に巻き込まれた私たちはきよとんとした。でも、秋田で事件に巻き込まれた比叡さんが手を挙げた。

「もしかして、あの部屋を作ったのは三辺製作所の鉄道車両製造部門ですか？」

「その通りです、比叡さん。もうお分かりでしょう、山鳩専務は『電車館』の秘密を隠匿するために、つまり口封じのために三辺取締役と事務室の資料に火を放ったんです」

礼士さんはまたお茶を飲んで喉を湿らせた。

「播磨社長の葬儀に三辺取締役も参列していました。山鳩専務はその時に彼と接触し、行動スケジュールを把握し、逃げられない時間に放火したのでしよう。敷島取締役が放火の被害を受けた後に鉄道車両製造部門から手を引くと判断したのは賢明でしたね。経営的にはなく、もしかしたらあなたも口封じのために殺害されていたかもしれません」

タコ社長の顔がなすびみたいに真っ青になった。

『ですが、剣さん。あの人にはアリバイがあったんですよ？ それはどう説明するんですか？』

「ああ、それは鹿島さんに聞いてみましょう。鹿島さん。今からする質問に正直に答えて下さい。あの日、あ

「な、本当は名古屋で山鳩専務と一緒に宿泊したんですか？」

鹿島さんの顔色がテレビを通して分るくらいに蒼白になった。

「疑うのには訳があります。僕は図書室で偶然、山鳩会長がインタビューを受けた日経新聞の『私の履歴書』を目にしました。その中にこんな記述を見つけたんです。あの人、鉄道以外にも温泉に目が無かったそうですね？」

温泉？ それはどうしたんだろう。

「あなたと山鳩会長が宿泊したホテル『サクラパレス名古屋』は最上階の天然温泉大浴場を売りにしています。当然、温泉に目が無い山鳩会長ならそこに入るでしょう。ですがあなたは、『山鳩会長とはずっと離れなかった、風呂も部屋のものを使った』と話してくれました。おかしくありませんか？」

鹿島さんは返事をしない。

「凶星ですか、なら僕の方で勝手に喋らさせてもらいますね。ここでもう一人の人物を紹介しましょう、当時のお手伝いさんだった白根さんです。矢野警部、彼女の写真を見せてもらえますか？」

「ああ、はい。少々お待ち下さい。犬塚刑事、どうやってやればいいのですか？」

『このファイルを開いて、画面共有をすればですね……』

やがてテレビから『電車館』の人々が消え、女性の写真が映し出された。男性のように細身に短髪な女性だ。

「剣さん、見えていますか？」

「ええ、ありがとうございます。僕の推理はやや荒唐無稽

かも知れませんが、単純なものです。この人が山鳩会長になりすましたのだと考えています」

礼士さんは少し言葉を切った。

「アリバイトリックを練るにあたっては、身代わりを立てるのが効果的な場合が多いです。身代わりが表立って行動している間に、犯人はこっそりと陰に隠れて犯行に移る。事件が警察に見つかり、捜査が始まる時には身代わりが作ったアリバイを堂々と主張すればいい。白根さんの場合、体格は山鳩専務とほぼ同じ、髪の毛の長さもとても短いです。なりすますことは可能でしょう。それに、白根さんには事件当時にアリバイはありませんでした」

「あの、でも、剣さん？ どうしてあなたは身代わりって考えているんですか？」

羽黒さんがおおずおと質問した。控え目というか、少し引つ込み思案な性格が口調から伺える。

「山鳩会長になりすました白根さんが同行した場合、大浴場に行かなかったことにも納得できます。彼女は女ですからね、男としてなりすましている以上、性別が赤の他人に明らかになる共同浴場は避けるでしょう。一連の事件の直後に退職を申し出て、退職金に色を付けたというのにも気がかかります。口止め料だった、と考えれば筋は通るではありませんか？」

礼士さんはパソコンの画面越しに鹿島さんを睨む。

「ただ、さすがに放火殺人をやるから身代わりになってくれ、とまでは言わなかったと思います。何か適当な理由をつけてなりすましを頼んだのではないのでしょうか？ 万一高知でのサミットに間に合わなくなっても、鹿島さんがうまくフォローする、などと言いくるめたのかもしれない。どうなんですか、鹿島さん？」

質問を受けた未亡人は悩むように俯いた。

「まだ明言してもらえないみたいなので、山鳩専務のアリバイを崩してしましましょう。口で説明するのはじれったいので、スライドを作ってきました。矢野警部、画面共有の解除をお願いします」

礼士さんは霧島さんに席を譲る。役人はパソコンにUSBメモリを差し込み、パワーポイントを立ち上げる。

「山鳩専務自身と山鳩専務になりすました白根さんが入れ替わるとすれば、『南風3号』の車内でしょう。なので、どのように山鳩専務が仁賀保から乗り継いで『南風3号』に乗ったか、ということが焦点となりました。口で説明するのは面倒なので、スライドで説明します。皆さん、画面にご注目下さい」

礼士さんは、まずは山鳩専務が主張したアリバイを見せた。次に、そのアリバイトリックを崩す乗り換えを表した。

『南風3号・しまんと5号』は千多津から連結して走ります。つまり、『南風3号』に間に合わなくても『しまんと5号』に間に合えばいいわけです」

「僕の方から補足です。あ、申し遅れました。運輸安全委員会委員の霧島と申します。この日の列車、飛行機、高速バスの運行状況ですが、いずれも平常通りでした。特に『ドリーム鳥海2号』は、定刻より20分くらい早く東京駅に到着したと、当時の業務日誌に記載がありました」

霧島さんの援護射撃が終わり、叶ちゃんが挙手した。

「剣さん、連結した列車って乗り換えれるものなんですか？ 新幹線とかは通り抜けできないじゃないですか」

「大丈夫です、大和さん。この写真を見て下さい」

礼士さんはネットから画像を引っ張り出してきて。

# 山鳩専務 アリバイトリック (2004.10.6~10.7)

普通558M

秋田20:37→仁賀保21:17

三辺製作所事務室に放火、三辺治作氏を殺害。

寝台特急『あけぼの』

仁賀保21:56→象潟22:07

高速バス『ドリーム鳥海』

象潟駅前22:20→東京駅八重洲口6:15

東京駅から羽田空港まで車で約30分

日本航空1401便

羽田7:00→高松8:10

高松空港から高松駅まで約40分

特急『しまんと5号』

高松9:10→宇多津9:32→高知11:31

宇多津～高知は特急『南風3号』と併結。車内で鹿島、白根と合流し白根と入れ替わる。

日本鉄道模型サミット

12:00～

出典：交通新聞社『全国版コンパス時刻表 2004年10月号』

「特急『南風』と特急『しまんと』が連結した時の様子を車内から撮影したものです。これを見れば分かりますが、車内は通り抜けができるようになっていきます。乗り換えは簡単ですよ」

補足説明を終え、改めて鹿島さんに向き直る。



「いかがですか、鹿島さん？ だんまりでは分かりません」

鹿島さんは少しの逡巡の末、やがて諦めたように頷いた。

「なぜ黙っていたんですか？」

礼士さんは無機質に質問をぶつける。

『その、怖かったんです……秋田に戻って三辺さんが亡くなったと聞いて、まさかと思っただけです。夫に聞いてみてもはぐらかされるばかりで、でも『身代わりの件は

黙っている』ときつく厳命されて……それっきり、夫が殺人犯だと知ることが怖くなってしまったんです。だから聞くことができませんでしたし、話すこともできなかったんです。……申し訳ございませんでした』

矢野警部が立ち上がり、鹿島さんに近付く。さすがに何を言っているのかまでは聞こえなかったけれど、後で詳細を聞くのだろう。

「さて、ここから話は現代に移ります。ですがその前に、大事なことを一つ。矢野警部、播磨社長と三辺取締役が写った写真が写真集の中にあります。持ってきてもらえませんか？」

『あ、それならネットのドライブに上げているので画面共有で見せますね。剣さんは画面共有をオフにして待っていて下さい』

犬塚刑事が慣れた手つきでマウスを操作する。そして、また画面に写真が映し出された。

「えっ!？」

「え、あれ!？」

次の瞬間、私と霧島さんは同時に驚きの声を上げた。

「ちよつと礼士さん、この人って」

礼士さんは私の方を向いて頷き、敷島取締役に話を振る。

「敷島さん、三辺取締役のご家族の名前を教えてくださいませんか？」

『え？ えー、奥さんが美寿子さん、娘さんが洋子さんでした、ハイ』

「やはりそうですか。瑞穂さん、あなたはこの写真を見て、何に驚いた？」

礼士さんは私をパソコンの方に手招きした。

「だって、この人、津軽さんとそっくりじゃない！」

私の言葉を聞いた『電車館』の人々に動揺が走った。

「敷島さん、これが最後の質問です。奥さんの旧姓は何  
といたしましたか？」

『えー……津軽、だったはずです、ハイ』

礼士さんは大きく頷いた。

「ここから第三の事件として、一昨日の夜にかけて発生  
した高知での事件を皆さんにご説明します。僕は直接関  
わっていないので瑞穂さんに説明を代わってもらいます  
が、最初に予め犯人の正体を明らかにしておきましょう  
う。犯人である津軽洋子は三辺取締役の娘です。」

そうだ。私は写真を見てある人物に釘付けになった。

じつとりとした目つき、割と黒っぽい肌をした男の人  
に。津軽さんとそっくりなこの人が放火で殺害された三  
辺さんなのだろう。

「瑞穂さん、少し交代。さすがに疲れたよ」

「お疲れ様、任せて」

私は礼士さんに代わってパソコンの前に座る。礼士さ  
んの体温が私の背中や尻に一気に伝わった。私は事件の  
概要、そして謎解きを語った。島風教授を殺害した方  
法、常盤さんを身代わりにした方法、津軽が組んだアリ  
バイトリック……正直、これを全部語るだけでへとへと  
だった。

「……以上から、私と霧島さんは津軽が犯人だと判断し  
ました。それは事実であり、彼女は高知県警に逮捕され  
ました」

画面の中で矢野警部が手を挙げた。

『確氷さん。二つ伺いたい事があります。まず、津軽さ  
んはどのようなにして常盤さんの裏口入学を知り、それを

脅迫の手段にしたのですか？ そしてもう一つ、津軽洋  
子が島風教授を殺害する動機は何なのですか？』

私は言葉に詰まった。実のところ、私にもそれがさつ  
ぱり分からないのだ。

「それについては僕の方から説明しましょう。ありがと  
う、瑞穂さん。もういいよ」

「うん。礼士さんも頑張つて」

「ありがとう、任せておいて」

私は礼士さんに推理をバトンタッチする。たった一回  
の推理でここまで疲れるのに、礼士さんは本当にタフ  
だ。

「津軽洋子の動機を明らかにするには、ある人物に焦点  
を当てる必要があります。島海高志、今回『電車館』で  
山鳩会長を殺害した真犯人です。……おっと、ここで新  
たなゲストが到着しようですね」

画面に新たな枠が追加され、見知った顔が表示され  
た。

「どうも、八雲警部。ご無沙汰しております」

「遅くなりました。警視庁の八雲です。霧島さん、剣さ  
ん、お久しぶりです。いっぞやお世話になりました」

警視庁？ どうしてここで警視庁が出てくるの？

「ではまず、八雲警部から島海先生の来歴を語ってもら  
おうと思います。八雲警部、お願いします」

『はい。島海先生は元々、安政大の交通経済学講師とし  
て雇われていました。ですがある日、彼の発表した論文  
にデータの改竄、捏造が発覚しました。本人は無実を主  
張しましたが、結局この騒動が元になって島海先生は古  
巣の安政大を辞職、後に宝永大で交通経済学講師として  
勤務しています。その捏造、改竄を指摘したのが島風教  
授でした』

「ありがとう、ございます、八雲警部。これが事実なら、  
島海先生は島風教授に対して恨みを持っていると考えら  
れます。そして、津軽さんは父親を殺害した山鳩会長に  
対して恨みを持っていたと考えられます。不思議です」

ね。島海先生と津軽さん、場所がうまい具合に入れ替わ  
った先で同じ日にそれぞれの恨みの矛先である山鳩会長  
と島風教授が殺害されています」

私はその言葉に閃いた。

「礼士さん、これって……交換殺人？」

私の言葉に旅館、それに『電車館』にも衝撃が広がっ  
た。

「その通りだよ、瑞穂さん」

探偵は私に向かって優しく微笑み、最後の推理の幕を  
開ける。

「羽黒さん、交換殺人について説明してもらえます  
か？」

『えっ？ あつ、はい。交換殺人っていうのは、関係の  
ある犯人二人がそれぞれ殺す相手を交換して、互いのア  
リバイが成立する状況で殺人を行うものです。殺人現場  
では動機を持ち合わせず、動機の線から捜査を受けても  
鉄壁のアリバイを用意できます。ミステリでもたまに見  
かけるもので、最近の国内新本格ミステリでも、それこ  
そ高知の山奥を舞台にした作品があります』

「ありがとう、ございます、羽黒さん。その辺で結構です  
よ。瀬戸刑事、津軽さんの来歴は分かりますか？」

礼士さんは麻呂眉の女性刑事の方を見た。

『はい。彼女は2009年に島海高志さんと離婚してい  
ます』

「やっぱりそうですか、ありがとうございます。……実のところ、僕が鳥海先生を高知まで連れ出したのには津軽さんと対面させて、反応を見て証拠となる動機を引き出そうとしたからなんです。それに、交換殺人である以上、秋田と高知でそれぞれの犯人の動きは連動しています。仮に鳥海先生を先に犯人だと指摘してしまつたら、瑞穂さんが危険な目に遭う可能性が極めて高いです。鳥海先生と津軽さんはお互いの犯行の進捗を逐一報告し合つていたでしょうし、その中で僕と瑞穂さんの関係、そして僕が過去にどのように事件に対処してきたかを知ることが簡単です。僕が鳥海先生を犯人だと指摘した場合、津軽さんは僕への当てつけとして瑞穂さんに手を出す可能性がある。だからこそ、僕は偽の推理で皆さんを騙し、鳥海先生に油断をさせ、高知まで連れて行つたんです。申し訳ありませんでした」

礼士さんはパソコンに向かって深々と頭を下げた。『まあ……事情は分かりますし、今回は不問としましよ、結果的に正しい犯人を捕まえることができましたし、誰かを誤認逮捕に導いたわけでもありませんから』

矢野警部が渋い顔をして言った。

「感謝します、矢野警部。黒潮警部、鳥海先生の取り調べが進んでいることと思いますが、あの人は鳥風教授についてどのように話していますか？」

探偵はダルマに垂れ目を向けた。

「ええと、そうですね……『私の論文を奪い、自分の手柄にした挙句私を大学から追い出した。それがきっかけで妻に離縁を突き付けられた。私の人生をめちゃくちゃにしたあの女をどうしても許すことができなかつた』と語っているようです」

礼士さんは頷き、推理を再開させる。

「先に論文改竄や裏口入学の問題から片付けてしまいましようか。八雲警部が大学で見つけた論文が鳥海先生のものとの部分的に類似している、という話がありましたね？ 恐らくあれは鳥風教授による鳥海先生が書いた論文の盗用でしょう」

『まさか！ 今時、論文の盗用に学会などは厳しいですし、そんなものすぐにはれるんじゃないですか？』

八雲警部の横で沖刑事が反論した。相変わらずの七三分けだ。

「もちろん、そのまま盗用すればばれるでしょうね。だからこそ、鳥風教授が鳥海先生の論文を改竄したんですよ。盗用した元のデータそのものを書き換えて、それを改竄というかたちで鳥海先生のせいに仕立て上げて、罪をなすりつけたんです。盗用された本人である鳥海先生を大学から追い出すことができれば、ばれる心配もありません」

私はそつと鳥風ゼミの生徒たちを見た。三人とも言葉を失っている。

「この時点では、鳥風教授が裏口入学を斡旋していた事は無関係だったでしょう。しかし、鳥風教授には一つ誤算がありました。安政大の中に鳥海先生に非常にお世話になった職員がいて、その人が偶然か必然か、裏口入学の事を知ってしまったんです」

『磯風事務員か！』

沖刑事が画面の中でパンと手を叩いた。

「その磯風さんという事務員の方がどこまで情報を挿ん

でいたのかは分かりません。ただ、他大学に移籍した鳥海先生が安政大、鳥風教授の内部事情を知ることができたとすればそこしか無いでしょう。そう、常盤さんを脅迫して旅館『吉野川』に誘導したのは鳥海先生だったんですよ」

礼士さんは続ける。

「恐らく、津軽さんの破綻しかけたアリバイを何度も工面したのは鳥海先生だと思います。あの人は鉄道にも詳しいから、時刻表トリックを組むのにも長けている可能性が高いです。逆に、『電車館』のからくりは津軽さんからもたらされたものでしょう。彼女は『電車館』に部屋、もとい鉄道車両を納入した張本人の娘ですからね。どこかで情報を得ていたと考えるもおかしくはありません」

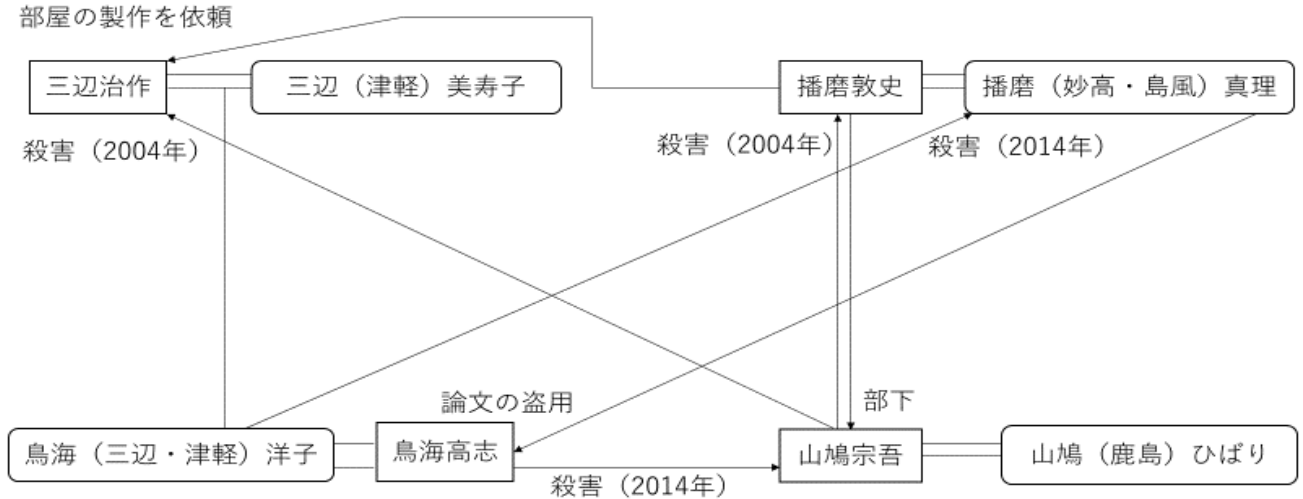
つまり、夫婦で助け合つて殺人を執行したということか。こんな形でしか夫婦の絆を發揮できない、というのも何だか可哀想だ。

「参考までに、一連の事件の人物相関図を置いておきます」

私は思わず目が点になった。とても入り組んだ図になっている。

「鳥風教授の正体が播磨社長の元妻だったと矢野警部から聞かされた時にはさすがに驚きましたよ。だから、鳥風教授は津軽さんを見て驚いたんでしょうね。三辺家と播磨夫妻は家族ぐるみの付き合いだという話でしたから、鳥風教授は三辺治作氏の顔も、まだ子供の頃の津軽さんの顔も知っています。津軽さんの顔があまりにも三辺治作氏にそっくりで、驚いたのでしょう」

# 人物相関図



それで驚いたのなら無理もない。それにしても、何と  
いう因果な関係だろう。

「それにしても剣さん、あなたはいつから鳥海先生が犯  
人やって気付いていたんですか？」

霧島さんが質問する。言われてみればその通りだ。

「犯人、とまでは言わずとも変な人だな、と思ったきつ  
かけはいくつかありました。皆さん、まずはこの動画を  
観て下さい」

礼士さんは動画サイトを開き、ある曲名を打ち込む。  
数秒後、とてもメジャーなアニソンが流れ始めた。

♪残酷な天使のように  
少年よ神話になれ

何を思ったかいきなり『残酷な天使のテーゼ』を流し  
始めた礼士さんに、私を含めみんな呆気に取られた。

「アニメ『新世紀エヴァンゲリオン』の主題歌、高橋洋  
子さんによる『残酷な天使のテーゼ』ですね。聴いたこ  
とがある方も多いと思います。一昨日の夜、テレビで  
『エヴァンゲリオン新劇場版・序』が放送されていまし  
た。『電車館』だと大和さんが図書室で観ていまし  
た。『電車館』だと大和さんが図書室で観ていまし  
た。その時、あの人はこんな事を言っていたんです。

『この映画の主題歌は高橋洋子ではないのか』と。大和  
さんは宇多田ヒカルだと訂正していました。僕はここで  
まず疑問を覚えました。主題歌担当者を知らない事では  
なく、名前の読み方です。洋子は普通「ようこ」と読む  
でしょう。なぜあまり一般的でない、「ひろこ」という読

み方が真つ先に出てきたのか？ この時はまだ事件が起  
きる前だったので、特に気に留めることもありませんで  
した」

まさか『電車館』の方でもエヴァが関わっていたと  
は。いや、でも全国放送だから当たり前と言えは当たり  
前か。

「ですが、秋田と高知のそれぞれで事件が発生し、瑞穂  
さんや霧島さんから高知の事件について詳細を聞いた時  
に衝撃を受けました。まず、高知での被害者は鳥海先生  
が恨みを持っていた島風教授であったこと、もう一つは

高知の容疑者の中に津軽洋子ひろこという名前の人がいたこ  
と。とても先の読み間違いとは偶然の一致、とは思えま  
せんでした。交換殺人に思い至ったのもこの辺です。津  
軽さんと鳥海先生の間には何か関係があるのではない  
か、そう思った僕は鎌をかけた」

洋、という字は「ひろし」などと人名で読むこともあ  
る。ただ、一発で洋子を「ひろこ」と読むことはなかな  
かできない。そういえば、女将さんは津軽さんのことを  
「ひろちゃん」とよく呼んでいた。あれも名前をそのま  
まあだ名にしたのか。

「羽黒さんに手伝ってもらい、鳥海先生の素性を割り出  
そうとしたんです。昨日の夕食で僕は鳥海先生と相席し  
たんですが、僕はわざとビールをこぼれそうな乱暴な勢  
いで注ぎました。すると鳥海先生はこう言ったんです。

『まける』って」

私と霧島さん、高知県警コンビは即座にピンと来た。  
でも他のみんなは何が言いたいのかわく分かっていない  
みたいだ。私は礼士さんに父の話をした時の事を思い出



した。あの時、礼士さんは「まける」という言葉がまだ耳慣れていなかった。

『まける』というのは土佐弁なんですよ、高知の方言で『こぼれる』といった感じの意味合いです。それが自然に出てきたということは、鳥海先生は少なくとも何らかの形で高知県に縁がある人だろうと考えました。まだあります。あの時、僕はビールを注いだり、逆に注ぎ返してもらったりしました。あれも高知県の風習で『献杯・返杯』と呼ばれる飲み会でのしきたりです」

「俗に言う「土佐のおきやく」ってやつですなあ。『おきやく』とはこれも土佐弁で宴会の意味です」

黒潮警部が補足説明を入れた。見るからに宴会好きのよくな体形をしている。

「鉄道関係でももう一つ罫を張りました。僕はあの時、席でわざと鉄道の話に持っていきました。皆さん、ここで一つ質問です。『とでん』と聞いて何を思い浮かべますか？」

「そりゃ劔さん、土電こと土佐電鉄でしょう」

「高知の路面電車じゃないんですか？」

『都電荒川線の事ですか？』

『東京都電ですよね？』

霧島さんと瀬戸刑事が土電、八雲警部と沖刑事が都電と回答し、場が少し混乱した。

「そう、『とでん』だけではどちらか分からないんです。あの時、僕は会話の文脈からも東京都電と土佐電気鉄道、どちらの「とでん」を指すのか分からないように話を誘導しました。鳥海先生はどちらを選ぶのかを見てみようと思いましたが。あの人は「土電」、土佐電鉄を選びましたよ。ここまで高知に絡んだ言葉や風習が素で出てくる辺り、どうも怪しいと感じたんです。あ、方

言と風習については大学でそっち方面の研究をしている羽黒さんを中心に、「まける」については以前瑞穂さんからレクチャーしてもらいました。ありがとうございます」

私はここでパンと手を叩いた。

「そういうえば、津軽さんも漬物のことを『がっこ』って言うってたわね。『がっこ』って秋田の言葉で漬物を指すけど、ここで聞くのは何だか変だと思つたのよ」

「僕も津軽さんに接触しましたけど、あの人、生まれは雪国だとか以前に親を亡くしたとかバツイチだとか、今考えてみると条件に符合することを漏らしてました」

私と霧島さんの援護射撃を受け、礼士さんはさらに推理を展開する。

「鳥海先生にも離婚歴があることを矢野警部や大塚刑事の質問から察しました。ただ、本人はその話題に触れることを露骨に嫌がっていました。今思えば、離婚した相手と協同で殺人を行っていたのですから、無理からぬ話です」

離婚というのは聞く側も気を遣い、場合によっては避けることも多い話題だ。そこをついた先に高知の事件の犯人が出てくるとはさすがに思いもしないはずだ。

「津軽さんの場合は苗字に翻弄されましたね。今の日本では例外もありますが、結婚した女性は苗字が男性の苗字に統一されます。鳥海先生と離婚して旧姓の津軽に戻っていたことも、三辺治作氏が死亡して母方の旧姓津軽に戻ったことも、この事件の人間関係をややこしくしています。大和さんと比叡さんが姉妹なのに結婚した関係で苗字が異なること、島風教授の旧姓が妙高、さらに播

磨社長と結婚していた頃は播磨真理を名乗っていたことがヒントになりました」

礼士さんは口には出さずとも私の方をちらりと見た。私も結婚すれば碓氷瑞穂から劔瑞穂になる。この人の頭の中ではそう願っていた未来もヒントになったのだろう。

「鳥海先生が高知での殺人を計画した、と考えれば筋は通ります。『南風』の振り子式構造と豊永橋梁という全国的に無名な橋梁を使つた偽のトリック、これは鉄道に、そして高知県に明るい鳥海先生だからこそ組めたものだと言えるでしょう」

『なるほど。それで、劔さん？ 鳥海先生はどのように山鳩会長、そして水郷さんを殺害したんですか？』

「そうですね、劔さん！ 水郷さんを殺した方法を早く教えて下さいよ！」

大塚刑事と比叡さんが口々に礼士さんに詰め寄る。「では、それを皆さんに説明して推理を終えたいと思います。皆さん、『電車館』内部の配線図、線路の形状を思い出して下さい。ポイントを介して半回転するような路線形状になっています。鳥海先生はあれを使いました」

礼士さんはお茶を飲んだ。コップの中が空になった。「その前に皆さんの誤解を解く意味も込めてもう一度だけ部屋の構造、特に連結器について説明します。連結器そのものは列車同士を繋ぐ役割があります。ですが、それだけでは一台の運転台から列車全体を制御することが不可能です。総括制御を可能とするには連結器の横に設けられた配線、ジャンパ栓も一緒に繋ぐ必要があります」

『……あれ？ ですが劔さん、1号室と2号室とを繋ぐ連結器にジャンパ栓は無かったってさっき言いましたよ



ね？」

敷島さんが疑問を呈する。

「その通りです。『電車館』の各部屋でジャンパ栓が付随している連結器は、廊下のドアと繋がる連結器だけです。なので、僕が偽の推理として提示した『水郷さんが山鳩会長の部屋と連結し、水郷さんの部屋の運転台を操作してドア開閉を行い、山鳩会長を殺害して密室状態にした』という推理は、実際には不可能なんです。そもそも、彼女に電車の走らせ方が分かるとも思えませんしね」

「じゃあ鳥海はどうやって山鳩会長を殺したんだよ？」

いい加減じれつたくなってきたのか、釜田さんがしびれを切らしたかのように問い詰める。

「今から説明します。少し複雑な手順なので、図を出しますね。この図に則って説明します」

礼士さんはまたパワーポイントを画面共有した。いつの間にか作ったんだらう？

「よく聞いて下さい。まず、図の①です。これが本来の部屋の位置です。ここから②に移ります。山鳩会長の部屋である1号室を修理スペースに押し込みます。この時、2号室もポイントを抜けて修理スペースに入ります。次に③です。1号室を牽引しつつ、3号室と4号室の方にポイントを切り替え、3号室と4号室を押しながら進みます。後は、1号室と2号室がカーブを挟んで向かい合わせになるように停車すれば準備完了です。④の段階ですね。ポイントを通ることで、車両の向きを逆転させることができるからこそ為せる技です。双方の部屋の連結器とジャンパ栓を繋いだら、2号室の運転台からドアなどの一括制御が可能になります。鳥海先生はこう

して1号室のドアを開け、山鳩会長を殺害したんです」  
礼士さんはここで言葉を一度切り、全員の理解が済みまで待った。私もどうにか理解することができた。

「部屋と廊下を繋ぐ連結幌は、全て部屋側に設置されています。1号室と2号室を繋ぐ時も、双方の連結幌を繋げば通路が完成します。後で実際に実験してみてもいいかもしれませんね」

矢野警部が大塚刑事に何か耳打ちする。鑑識と協力して再現実験の手配をするのだろう。

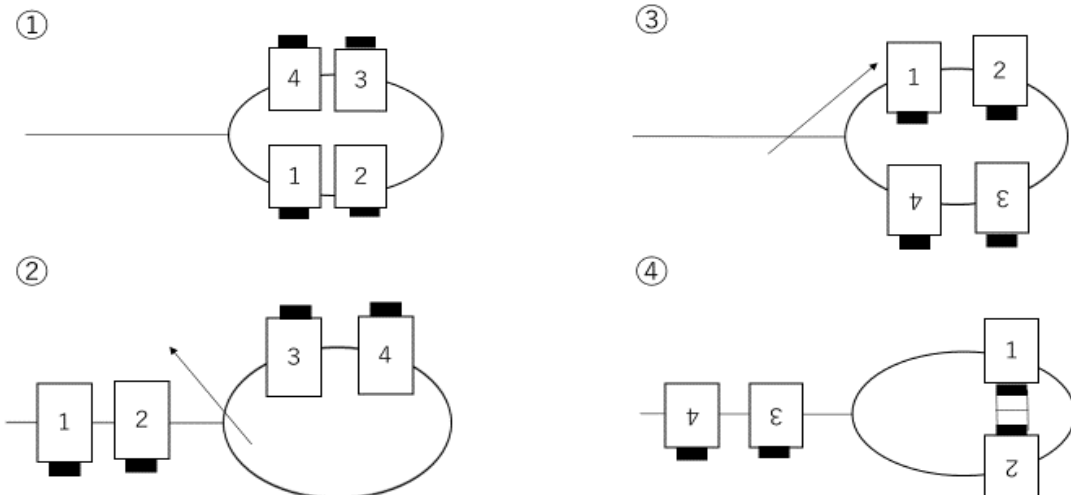
「この手順からお分かり頂ける通り、鳥海先生はこの手順を2号室から出ないでやっています。ですが、この作業中に異変が起こります。停電です」

停電？ そういえば、礼士さんの推理の中にもちらりと触れられていたような気がする。

「停電の原因は水郷さんでした。この図から分かる通り、鳥海先生は全ての部屋を移動させました。低速での移動だったとは思いますが、移動させる以上は部屋に振動が発生するのは避けられません。水郷さんはその振動を疑問に思い、外に出てしまったんです。先程、播磨社長殺害のトリックで突放の話をしましたが、この時も3号室と4号室に同様の事態が起こったのかもしれないですね。低速だったからこそ大事には至りませんでした。水郷さんが部屋を出て見た光景はあまりにも衝撃だったでしょう。本来あるはずの廊下が消え、代わりによく分からない広い空間があったのですから」

部屋が動くだなんて、にわかには信じられなかったに違いない。

## 『電車館』 部屋移動手順



「『電車館』の方々には既にお伝えしましたが、あの部屋は車輪が乗っているレールから直に給電します。鉄道模型と同じですね。水郷さんは部屋から出て、探検するうちに誤ってレールに触れてしまい、感電死してしまっただんです。この時にレールに流れる電流がショートか何かしてしまい、停電したんです。それか、鳥海先生が念のために部屋から出て設備を点検しているうちに、レールに触れて倒れている彼女を見つけたのかもしれない。レールから彼女をどかすためにやむを得ず停電させ、レールに流れる電流を切ったとも考えられます。いずれにせよ、鳥海先生にとってもこれは大きな誤算だったでしょう」

礼士さんは画面共有を閉じ、最後に付け加える。

「交換殺人では、二人の犯罪者のバランスが求められます。片方が一人を殺し、もう片方が五人を殺す、みたいなことはアンバランスなんです。なので僕は、水郷さんについては事故死だろうと推測します」

探偵は眼鏡をずり上げて、最後の推理を締めくくる。

「鳥海先生と津軽さん、二人にとって最大の誤算は僕と瑞穂さんの存在でしょうね。『電車館』と旅館『吉野川』とを結ぶ人間関係が犯人二人以外にも存在し、しかもよりによって今まで何度も事件に巻き込まれてきた人だというのは、あの二人にとって最大の不運でした。ですが、考えようによってはうまく使えるものでした。僕がここに着いた時、津軽さんの手によって僕は瑞穂さんよりも殺されかけました。瑞穂さんのおかげで返り討ちにできましたが、あの時僕たちが殺されていたら……恐らく、鳥海夫妻は僕と瑞穂さんに全ての罪をなすりつけたでしょうね」

長かった推理は、ようやく幕を閉じる。  
「僕の推理は以上です、お疲れ様でした」

## 最終章 決別

\*確水瑞穂 —— 高知県大豊町豊永・旅館『吉野川』

推理を終え、そのまま食堂で昼食になった。津軽がいなくなり、私と叶ちゃん、釜田さんが女将さんを手伝って用意することになった。

「あの、先輩？」

「ん？」

レタスを切りながら叶ちゃんが私に話しかける。

「先輩はこれからどうするんですか？ ……やっぱり、

秋田には戻らないんですか？」

私は静かに笑った。

「そんなことはないわ、用事を済ませたら秋田に戻るから。ごめんなさいね、いきなり勝手に辞めちゃって」

「なあんだ、心配させないで下さいよ。……でも、先輩は何でこんな所にいたんですか？」

後輩のくりくりした目が私を見上げた。

「ここにはね、私のお母さんのお墓があるの。墓参りに来ていたら事件に巻き込まれてしまったのよ」

「先輩、死神か何かなんじゃないですか？」

「その減らず口縫い合わせるわよ」

軽口を叩き合いながら料理を作るのも久しぶりだ。今はただ、無性に懐かしい。

「確水、梅チャーハンを頼む。食材はその冷蔵庫に揃

ってるってよ。冷ご飯はオーブンでチンしてるから、少し待っててくれ」

「はい、了解です」

私は冷蔵庫に向かい、梅干しに青ねぎ、胡麻、しらす、バターを取り出す。中華鍋を借り、ごま油とバターを入れて熱する。

「叶ちゃん」

「はい？」

レタスを切り終え、トマトを切っていた彼女に私は呼びかける。

「さっきはありがとう、礼士さんを助けてくれて」

「式でのブーケ、期待してますよ」

私は青ねぎと梅干しを刻みながら苦笑いした。

「相変わらず欲張りね」

「いいじゃないですか、欲しい物は欲しいって言わないと伝わりませんよ」

久々の談笑は、まるでつい昨日まで私が居酒屋で働いていたかのようにブランクを感じさせない。帰ってきてもいいよ、と言葉裏に言われているような気がした。

「皆さん、お昼ができましたよ」

女将さんの一声でみんな集まり、昼食になった。礼士さんと比叡さんが梅チャーハンを山盛りでお代わりし、中華鍋を空にしてしまった。

\* \* \*

旅館『吉野川』は改めて全面的に警察の捜査が入ることになり、私たちは別の場所に移動を余儀なくされた。  
「今から秋田に帰るのも面倒だ、今夜は高知の方に宿を取らねえか？」

「お、ええですね。美味しい鰹のたたきを出す店がありますよ」

「本当ですか？ いいですね、それ！」  
釜田さんと叶ちゃんに引きずられて私と礼士さんも高知で一泊することになった。

「すみませんが、剣さんと碓氷さんは『南風』で高知に向かってくれませんか？ 大杉駅が大歩危駅まで送るんで。僕の手やと全員を一度に高知まで運ぶのは無理です」

「分かりました。僕もどうせなら高知まで乗ってみたいと思っただけですよ」

私は自室に戻り、荷造りをすることにした。津軽が突き破った窓、柵が消えたベランダに散乱するガラスの破片、ひっくり返された広縁の椅子とテーブルが戦乱を物語っている。

「ねえ、瑞穂さん」

礼士さんが布団を畳みながら私に話しかける。

「高知に出る前に少し行きたい所があるんだけど、案内してくれる？」

「え？ いいけど、どこ？」

私はトラックに荷物を詰め終え、立ち上がりながら聞いた。この部屋に戻ることも、もう無いだろう。

\* \* \*

杉木立の中、川の流れると時々国道を通る車の音が風に乗って聞こえてくる。

「ここよ、礼士さん」

「そっか……旅館から道具を借りてきたから、少し掃除していいかい」

礼士さんは水を垂らし、デッキブラシに力を込めて苔を削ぎ落とす。私はほうきで落ち葉や苔を掃き出す。少し汗ばむ頃に、墓は本来の黒々とした輝きを取り戻した。

初日に買った残りの線香を立てる。お母さんが眠る墓の前で、礼士さんは静かに手を合わせた。沈黙の中、遠くから『南風』が走ってくる音が聞こえてくる。

私も目を閉じて、手を合わせる。

お母さん。

行つてきます。止めないで下さい。

ようやく安住の地を見つけたみたいです。

私は、この人と生きていきます。

あなたと違い、私を愛してくれる人と。

『南風』が通り過ぎる頃に祈りを捧げ終え、目を開ける。

「……行きましょう、礼士さん」

私はほうきを片手に来た道に戻る。今度は苔を踏みつけないように、ゆっくりと。

今度は何も引き留めるものも無い。私はついに振り返らず、永い眠りにつく母の元を去った。

「礼士さんは何てお祈りしたの？」

「ご挨拶だよ。娘さんとの結婚を認めて下さい、つてね」

\* \* \*

大歩危駅まで宿のトラックで送ってもらえることになった。宿の入口で女将さん、それに黒潮警部と瀬戸刑事の見送りを受ける。

「もしかしたら、捜査の一環で何かお話を伺うかもしれない。その時はご協力をお願いします」

瀬戸刑事が頭を下げた。私と礼士さんも頭を下げ返す。

「皆さん、色々とお世話になりました。それでは失礼します」

礼士さんは軽く挨拶を済ませて、私も一礼して踵を返す。

そうとする。

「碓氷さん」

黒潮警部が私を呼び止めた。

「はい？」

「いえ、その……お元気で」

ダルマらしくない、少しぎこちない笑顔を見せる。

「ええ、黒潮警部も体に気を付けて」

私も小さく笑い、今度こそ踵を返す。

トラックに乗り込む。太り気味の支配人と大柄の礼士さんに挟まれ、少し狭い。

「今回は色々とし訳ありませんでした、碓氷さん」

「いえそんな、怪我していた所をわざわざ泊めて頂きましたから」

恐縮そうに謝罪する支配人に私は首を横に振った。

「ですが、宿の方も大変ですね。警察の捜査が終わっても、料理する方がいらつしやらないのではありませんか？」

「礼士さんが少し心配そうに聞く。」

「まあ、何とかしますかね。気にせんといて下さい」

支配人さんは気楽に笑った。霧島さんの笑顔とよく似ている。さすが、と言うべきかやはり、と言うべきか親子だ。

そのまましばらく道なりに、右に左にトラックは山道を走る。雲一つない青空の下、春の陽光が溪谷を照らす。

「着きましたよ」

大歩危駅が見えてきた。祖谷のかずら橋を少し観光してから、高知に向かう手筈になっている。

「碓氷さん、それに剣さん、本当にお世話になりました」

「いえいえ、こちらこそ」

「ありがとうございます」

私と礼士さんはトラックを降り、国道の彼方に消えるまで見送った。

旅は、少しずつ終わりに近づいている。

\* 礼士 —— 高知県高知市・特急『南風11号』車中

大歩危から乗った『南風11号』は、ますます峻険になる四国の山道を相手に死闘を繰り広げる。窓から見える吉野川は深い青だったり、陽に照らされて濃い緑になったり、様々に色合いを変える。

「ねえ、礼士さん。一つ聞いていい？」

窓側の席に座る彼女が僕の方を見た。青いアンダーリムの眼鏡越しに、吊り気味の目が姿を見せる。

「別に嫌だとかそういうわけではないんだけど、どうしてもずっと、私の事をさん付けで呼ぶの？」

僕は少し考えた。意識してみたことも無かった。それくらい自然になってしまっていた。

「うーん……何となく、かな？」

言葉を繋ぎながら考える。列車はトンネルに突っ込んだ。

「強いて言うなら、敬意かもしれない。瑞穂さんは強いし、そしてまっすぐだから。そういう所に僕は憧れるし、尊敬している。だからだと思っよ」

瑞穂さんは意外そうな表情をして、窓の方を向いた。

トンネルの暗さで窓ガラスは鏡になり、彼女の頬の赤みがよく見えた。

列車はトンネルを抜け、鉄橋を渡る。鉄橋の中に駅があるという全国的に珍しい構造をしている土佐北川駅

だ。橋の真ん中に駅を設けざるを得ないほどに、土讃線の環境は過酷だ。

「私もよ、礼士さん」

そっぽを向いたまま、瑞穂さんは小さく言った。

\* \* 『南風11号』に揺られて高知に着いた頃には15時半を回っていた。駅には既に霧島さんたちが迎えに来て

くれていた。

「どうでしたか、『南風』の旅は？」

「面白かったですよ。ジェットコースターみたいでした」

眠気も吹っ飛ばような激走だった。

「どうします、宿にチェックインしてから？」

「どこか観光できるようなところは無いんですか？ できれば写真映えするような」

比叡さんが一眼レフを片手に霧島さんに聞いた。

「そうですね、桂浜とか行きますか？ 龍馬像とか水族館とかがあるんですよ。はりまや橋からバスで行けますよ」

海か。僕は少し心配になり、ちらりと瑞穂さんの方を見た。でも、あまり関心を示していないといった感じで、表情から何かを読み取ることはできなかった。

「せっかくだ、行ってみるか」

そのまま流れで桂浜に行くことが決まってしまった。

\* \* \*

桂浜は太平洋に面した高知の景勝地だ。太平洋の向こうを見つめる巨大な龍馬像や、桂浜水族館といった観光

スポットも併設されている。はりまや橋まで年代物の路面電車が揺られ、そこから路線バスで30分ちよつとで

辿り着いた。

「わー、きれい！」

大和さんがいの一歩に駆け出す。比叡さんもカメラを持って後に続いた。

時間帯的に夕暮れだった。また冷たい海風が僕たちの間を吹き抜ける。僕は瑞穂さんと並んでしんがりを務める。

「怖くない？」

僕はそっと聞く。彼女は小さく首を横に振る。

「大丈夫。怖いけど、怖くない」

そのまま瑞穂さんは、そっと僕の手を握る。「向き合うつて、逃げないつて、そう決めたから。だから、平気」

大きな海に夕陽が沈み始める。水面が金色に輝き、僕

たちを照らす。3年前、僕と瑞穂さんに牙を向けたあの海とは比べ物にならないほどに穏やかな海だった。

「せんぱーい！ 剣さーん！」

「おーい！ お前らもこっち来いよ！」  
大和さんと釜田さんが呼ぶ。瑞穂さんは大きく手を振り返し、僕を連れて歩き始めた。

\* \* \*

桂浜からはりまや橋に戻る頃には日が暮れていた。「で、霧島？ 鰹のたたきが美味しい店つてのはどこにあるんだ？」

『ひろめ市場』ですよ。ここから路面電車で二つ行った所です。宿もその近くなんで、ゆっくり飲んでいきましょう」

ひろめ市場？ 高知が初めての僕には耳慣れない。

「瑞穂さん、ひろめ市場つて行ったことある？」

「ええ。何日か前に食べたわ。飲み屋街みたいなの」  
また年代物の路面電車が揺られて行ってみると、果た

して飲み屋街そのものだった。唯一違うのは、一つの巨大な建物の中にたかさんの飲み屋ばかりがひしめき合っているという点だ。

空きテーブルを陣取り、めいめいに建物の中を探検する。気に入ったものを買ってテーブルに戻り、そこで宴会をするのだ。僕は始終瑞穂さんと一緒に回った。鯉のたたきを扱う店は何軒もあるが、それ以外にも「焼き、揚げ物、干物、野菜ステイック、アイスクリン、何でもある。酔っ払いの楽園だ。」

「たたき二つ。それと、『酔鯨』」

「あいよ！ たたき二つと『酔鯨』！」

瑞穂さんがある店で鯉のたたきを注文する。大将が奥のドラム缶に向かい、中に入っている藁に火をつける。藁焼きたたきだ。

「お客さん、新婚かえ？」

ねじり鉢巻きを額に巻いた大将が聞く。踊る藁火の上に網を渡し、太い鯉のさくを二つ並べる。

「ええ、そんなとこです」

「ええねえ、どつから来たが？」

鯉の銀皮に焦げ目が少しついた所で火から離し、手際よく包丁を入れる。

「秋田です」

「おっ！ 秋田美人って本当ながやねえ」

僕の横で瑞穂さんは苦笑しながら顔を赤くした。秋田の人ではないことはめんどくさいから黙っておいた。大将は塩をまぶしてから青ねぎ、みょうが、にんにくスライスをしてんこ盛りにして僕たちに渡してくれた。

「たたき二つと『酔鯨』、お待ちとお！」

日本酒は小瓶ごとくれた。どれだけ豪快な店なんだ、と思っただけ、あちこちのテーブルに日本酒やワイ

ン、ビールの瓶が林立している。これがメジャーなのだろう。

あちこちに寄り道しながらテーブルに戻ると、既に他のみんなが戻っていた。ウツボの唐揚げやたたきゅうり、いかの天日干しといったつまみの外に、僕と瑞穂さんのぶんの生ビールや『土佐鶴』『豊野梅』『ダバダ火振』といった日本酒や焼酎もスタンバイされていた。

「遅かったですね、迷いました？」

霧島さんが待ちきれないように僕と瑞穂さんを席に座らせた。

「いえ、目移りしてしまっただけ」

瑞穂さんは心なしか楽しそうだ。

「さ、乾杯しようぜ。今日も一日お疲れさん、乾杯！」

「かんばーい！」

僕たちはビールの大ジョッキをぶつけ合い、そして一息に飲み干した。宴の始まりだ。

\*確氷瑞穂 —— 高知県高知市・高知城

『ひろめ市場』でしこたま飲み食いした私たちは、酔い覚ましに歩いてホテルに向かうことにした。ヤシの木が植えられた追手筋を歩く。土佐の日曜市が毎週開かれ、夏になればよさこい踊りが開催される幹線道路だ。

「あれが高知城ですよ。日本でも珍しく、江戸時代の天守閣が現存している城です。奥に行けば山内一豊、板垣退助の銅像もありますよ」

霧島さんが夜空を指差す。白いサーチライトに照らされた天守閣が小さく見える。手前にある門は大手門とい、これも当時のものがそのまま残っているのだという。比叡さんがストロボを焚きながらシャッターを切り

まくる。

「いいところですね、高知って」

「まあ、お街は発展しちゅうんですよ」

礼士さんの言葉に霧島さんは少し微妙な笑顔で返す。少しふらつく足取りで、私は歩いていく。一歩歩くごとに夜が更けていく。こんなに飲んだのは久しぶりだ。

「ホテルはどの辺にあるんだ？」

「電車通りにでもうちよつとだけ歩きます。10分もあれば着きますよ」

3月の高知は秋田と打って変わって肌寒い、それくらい感覚で済んでいた。酒を飲んで体が暖まっているせいかもしれないけれど、改めて南国を実感する。

いや、暖かいのはそれだけではない。

「ん？ どうしたの、瑞穂さん？」

隣にあなたがいるから。

「何でもない」

私は笑い、歩き続ける。

\* \* \*

その夜、私は久しぶりに礼士さんに抱かれた。深いキスは酒とにんにくの匂いがし、お互いに絡め合う手足、重ね合う肌は煙草と汗の匂いがした。

こういう事をするのは久しぶりだった。井上に、笠原に穢された私の心身を清め、傷を癒し、上書きするように礼士さんは私を優しく、そして丹念に染めていった。何度も何度も染められ、互いが溶け合い輪郭すらも分からなくなるほど交じり合い一つになるうちに、とつと日付が変わっていた。

いつの間にか泥のように眠り、気が付くとすっかり朝になっていた。軽く二日酔い気味だった。今日、礼士さんは秋田に戻る。

でも、私には……私には、もう少しだけ寄り道したい所が、回り道するべき所が残っている。

ぐちゃぐちゃに乱れたベッドに礼士さんの姿は無かった。シャワールームから水流の音が聞こえる。私は軽くノックして、一緒に汗と眠気を洗い流すことにした。

「あ、おはよう。起きたんだね」

眼鏡を外し、そのままの垂れ目が私を見る。

「入っていい？」

「うん、狭いけど」

ぬるま湯のシャワーで頭から全身を洗い流していく。

「ねえ、礼士さん」

「ん？」

私は寄り道の事を話そうとした。でも、私の目には礼士さんの大きな背中が、そしてそこに刻まれた刀痕が飛び込んできた。

「……もう、痛くないの？」

傷跡を目にするのは初めてだった。

「ああ、これ？ 全然だよ。もう職場復帰するにも支障は無いしね。明日から復帰するよ」

そう言う礼士さんはどこか楽しそうだ。やっぱり、列車を走らせる事はこの人にとって天職なのだろう。

「謝らなくていい」

私の心を見透かしたかのように、礼士さんは先回りして言った。

「謝るのは僕の方だよ。あの時、笠原から瑞穂さんを守れなかった、辛い思いをさせてしまった……だから、今度こそはあなたを守る、そう決意してここまで来たんだ」

私はシャワーの湯を止めた。

「でも、その傷は……」

礼士さんは私を抱き寄せた。

「瑞穂さんも、あちこち傷だらけじゃないか。お揃いだと思えばこれくらい、どうってことないよ」

お揃い、ねえ。そこまで言われてしまっただけ私も笑って返すしかない。

「一緒に守り合っていいよ。ね？」

「……うん」

\* \* \*

高知駅のホームまで霧島さんが送ってくれた。

「僕はこれから本来の仕事で土電の方に向かいますので、ここでお別れです。名残惜しいですが」

「またいつでも来てくれよ。店で待ってるぜ。大和が奢ってくれるってよ」

「な、何言ってるんですか釜田さん！ 霧島さん、今の冗談ですからね！」

「お世話になりました、またいつか」

釜田さんと叶ちゃん、礼士さんのそれぞれと固い握手を交わす。

「比叡さん、また東京で一緒に飲みましょう」

「こちらこそ。またよろしくお願いします」

雑誌記者とも握手する。

「確水さんも大変お世話になりました。お元気で。式には呼んで下さいね」

少しお茶目に役人は言った。履いているスーツのズボンはクリーニングに出し、焼酎の染み抜きも済んでいるものだ。

「ええ。私の方こそ、本当に色々ありがとうございます。しました」

私も手を差し出し、がっちり握手した。県産杉をふんだんに使った駅の『くじらドーム』に発車ベルが響き

渡る。

『一番のりばから、特急『南風12号』岡山行きが発車します。ドアにご注意下さい』

「それじゃ、道中お気をつけて！」

ドアが閉まり、霧島さんの声が聞こえなくなる。数秒後、列車は床下からエンジン音を響かせ始めた。ホームに立つ霧島さんの姿が段々と小さくなっていき、やがて見えなくなった。

\* \* \*

『南風12号』の旅は快調そのものだった。列車は順調に高知平野を離れ、やがて四国山地との苦闘を開始する。

「あっ」

ぼんやりと車窓を眺めていた私は、ある駅を通り過ぎた時に駅名標にはっとした。

繁藤。もう一昨日になるのか、霧島さんが教えてくれた災害のあった所だ。そのまま窓の外を見ると、慰霊碑の横を列車は一瞬で走り抜けていった。

「どうしたんだ、確水？」

「え？ ああ、いえ」

釜田さんは少し変な顔をした。私は窓の外に視線を戻し、物思いに耽る。

やっぱり、忘れないでいることしかできないのだろう。忘れることができる、ということが幸せのなら、私は猶更忘れてはいけない。忘れずに、引きずったまま幸せを掴む。

「あ、そろそろ豊永じゃないですか？」

叶ちゃんが言った次の瞬間、『南風12号』は車体を大きく左に傾けた。勢いよく鉄橋を渡る。そして一瞬、車窓を旅館『吉野川』が横切り、列車は豊永駅を通過し

た。

さようなら、お母さん。

さようなら、もう一人の私。

私は、愛してくれる人と生きる。

私は、人を愛して生きる。

私は目を閉じて、眠ることにした。

\* \*

目が覚めると、列車は丸亀を出た所だった。とつくに四国山地との激闘を制し、列車は瀬戸大橋に差し掛かる。いよいよ四国ともお別れだ。

「次に来るときは事件とかを抜きにして、もっとゆっくりにしたいですね」

「だな。瀬戸内の方を巡っても面白そうだ」

叶ちゃんと釜田さんのお喋りをよそに、列車はついに四国を脱出した。瀬戸大橋の観光案内放送が流れ始める。

次にお母さんに会えるのはいつだろうか？

私は振り向いた。高知が、四国が、段々と遠ざかっていく。お別れだ。

青々とした穏やかな瀬戸内海は遠くにぼんやりと霞がかかる。瀬戸大橋は途中で何度か曲がり、私の視界からついに四国を隠してしまった。

\* \*

高知から2時間半、『南風12号』は定刻通りに岡山駅に到着した。

礼士さんたちはここから新幹線に乗り換えて一路秋田を目指す。でも私は……まだ言い出せていなかった。

「釜田さん、大和さん、それに比叡さん。駅弁を買ってくるので先に行って下さい」

「おう、分かった」

三人は先に新幹線ホームに上がっていった。

「瑞穂さんも駅弁買ってく？」

「え、ええ」

駅弁屋には西日本各地の駅弁やお土産物が所狭しと並べられている。私はあなご弁当を、礼士さんはたこめしにきびだんごを買った。

「行かなくていいの、瑞穂さん？」

「えっ？」

礼士さんの垂れ目が優しく私を見下ろし、そして東京とは反対側に向かう列車の電光掲示板に向いた。

「……気付いたの？」

「事件も終わったのに熱心に時刻表を読んでいたからね。鹿児島に行く新幹線のページだったから、もしかしたらと思つて……お父さんの墓参りに行くのかい？」

本当、この人にはつくづく敵わない。

「独身最後の日だ、がつつり羽伸ばしてこい」

「そうですね、先輩。鹿児島まで行くなら黒豚をお願いしますね」

いつの間にか釜田さんに叶ちゃんが私の背後に立っていた。

「でも、私……」

「分かってるよ、ちゃんと帰ってくる。分かってるから」

礼士さんは笑った。

「僕の分まで、お父さんよろしく言っておいてくれると嬉しいな」

私は笑うしかなく、ポケットの中できつぷを握りしめた。

「参ったわ、全とお見通しつてわけね。……ありがとう、行ってきます」

私は改札を出て、出水までのきつぷを買い求める。戻るのは何年ぶりだろうか？ もう遠い昔だ。

新幹線ホームに上がるエスカレーターの前、私はお別れする。

「俺たちはあっちのホームだ。じゃ、確氷。達者でな」

「秋田に戻ったら、また一緒に働きましょうよ。今度は私が先輩ですからね！」

「何言ってるのよ」

叶ちゃんとは最後まで軽口を叩き合う。居酒屋で釜田さんにどやされながら軽口を叩き合い、一緒に働いていた日々が戻ってくるのは、もう少し先になりそうだ。

「手にかかる妹ですが、これからお世話になります」

「いいえ、また店に遊びに来て下さい」

「釜田さん」

「ん？」

先にエスカレーターを登ろうとした店主を呼び止める。

「また私を雇ってくれて、ありがとうございます」

釜田さんの糸のように細い目が私を見る。そして彼はにかりと笑った。

「き使うからな、覚悟しとけよ。じゃあな」

居酒屋組が上に消え、エスカレーターの前には私と礼士さんだけが残された。

「明日には戻るから。約束する」

「うん。じゃあ、気を付けて」

礼士さんは手を振り、歩き出そうとする。私はその手を掴み、礼士さんを引き寄せる。傷のついた頬に唇を押し当てた。

「……うん、またね。礼士さん」



少し驚いたような礼士さんに私は笑いかける。そして、私と礼士さんは別々のホームへと登って行った。

\* 劔礼士 —— 東京駅・『のぞみ28号』車中

東京に向かう新幹線の中、僕は釜田さんに比叡・大和姉妹に散々にからかわれた。いつぞやの東京駅での瑞穂さんの激走には敵わないけれど、いきなりキスされるのはさすがに照れくさい。というかこの三人、どこで見えたのだろうか？ 車窓に厚く雪を被った富士山が見えてくる頃まで、三人の猛攻は続いた。

東京駅に着いた。比叡さんとはここで別れた。

「比叡さん。水郷さんの件、改めてすみませんでした」

「いえ、いいんです。でも劔さん、あそこまでしたからには確水さんと仲良くやって下さい」

「もちろんです」

僕は比叡さんと握手をした。

「また店に来てくれ。初夏になればじゅんさいが美味いからな」

「もしかしたら、今度取材させてもらうかもしれません」

「お手柔らかに頼むぜ？」

釜田さんはそう言いつつも、不敵な笑みを浮かべる。

「はいはい。じゃあ、妹をお願いします」

「おう」

最後に比叡さんは妹に向き合う。

「お姉ちゃん、またね。旦那さんとうまくやってよね」

「うん。じゃあまたね、叶」

姉妹の抱擁を経て、雑誌記者は在来線との乗り換え口に消えていった。

「じゃあ……行くか」

僕たちは釜田さんを先頭に、東北新幹線のホームに向かう。長旅の最後を飾る列車は『こまち45号』。瑞穂さんを秋田駅から送り出した時の『こまち28号』の折り返し列車だ。

ホームに出る。僕の初恋の相手は、その凛々しい佇まいを線路に横たえていた。

E3系『こまち』に乗客として乗る最後の機会だ。しっかりと味わおうと心に決め、僕は車内に入った。

\* 確水瑞穂 —— 鹿児島県出水市・出水駅

お父さんの故郷に着いたのは17時半頃、もうすっかり日が暮れていた。出水駅は私が高校生の頃からほとんど変わらずにいた。

駅から記憶を頼りに歩く。再開発されたみたいで、私の記憶にある街並みとはかけ離れていた。お父さんが営んでいた洋裁店は、跡地すらどこにあるのか分からなかった。

でも、お墓の場所だけは覚えていた。駅前の花屋で仏花を買い求め、タクシーに乗る。獄死したお父さんは出水で葬儀が執り行われ、駅からしばらく行った寺に眠っている。

寺は一応明かりが灯っていたものの、時間が時間だけに薄暗かった。それでも、不思議と気味悪くはない。敷地に入ってしまうばこっちのもので、私はすぐに目的の墓に辿り着いた。

花を生け、線香を焚く。

お父さん。

私は、ようやく安住の場所を見つけたみたいです。

色々な事があつたけれど、夫婦で守り合って生きていきます。

秋田だからなかなかこっちに帰ってくることはできないけれど、許して。

最後の娘のわがままだと思って、許して。

合わせる手に水滴が落ちた。

「え……？」

私の涙だった。

\* \* \*

駅に戻って叶ちゃんへのお土産に黒豚のチャーシューを買い、新幹線で来た道を引き返す。出水で一泊することも考えたけれど、少しでも早く秋田に、あの人の所に戻りたかった。熊本で後続の速達列車に乗り換える。

『お待たせ致しました。『みずほ608号』新大阪行きが参ります……』

新大阪まで向かう最終列車は、奇しくも私と同じ名前だった。そこそこ混んでいる。『みずほ』は夜の中へ滑るように走り出した。

大阪に着くのは23時半、そこから寝台特急で東京に出ることも考えたけれど、さすがに体力が持たない。駅直結のビジネスホテルに部屋を取った。

寝て時間を潰そうかと思っただけで、なかなか寝付けない。車内販売で熊本赤牛の駅弁と缶チューハイを買い、夕食にする。食べ終える頃には関門海峡が目前に迫っていた。

一日で四国から九州に渡り、そして本州に舞い戻る。我ながら呆れるほどの強行軍だ。でも、今はこれでいい。私は両親の事を忘れていない、それだけは伝わったはずだ。

忘れてはいけない人は、まだいる。

明日、お別れを言いに行こう。  
関門トンネルを抜け、列車は本州に入る。アルコールが回ったのか、私は終点に着くまでうつらうつらと浅い眠りに落ちていた。

翠朝、8時前の『のぞみ』で東京に向かった。私は改めてきつぷに印字された行先を見る。

石巻。  
車内ドア上の電光掲示板にニューステロップが流れる。

『東京日報ニュース◇東日本大震災から3年となる今日、各地で追悼式典の準備。政府は14時から式典を開き、天皇后両陛下や安倍首相が出席予定』

そう。  
私がああ男を、井上をこの手で殺害してから、今日で3年になる。

たとえ私が私自身を、礼士さんを、全てを忘れたとしても、この男だけは忘れてはならない。

東京で東北新幹線に乗り換え、仙台に着く頃には12時を回っていた。仙台駅地下の花屋で仏花を買おうとしたが、やはり今日という日は売り切れだった。仕方なく他の花を買い、石巻に向かう。

石巻に向かう列車は無かった。津波で線路が流され、途中の高城町までしか列車が走っていない。地元の人たちに混じって私は終点まで揺られ、高城町から代行バスに乗って石巻を目指す。

車窓は異様だった。重機や土嚢、仮設の建物があるばかりで、それ以外は土がむき出しになっている。堤防は再建工事をしているのか、防音のシートを吊った灰色の足場が組まれている。

あの日と比べると見違えるようだった。でも、私は石巻を捨てて他の街並みに慣れてしまった。その私からすれば、やっぱり異様だった。

代行バスを降り、海に歩く。道は聞くまでも無かった。高台に続く道があった。あの日、ここに避難した人も多かったという。

薄曇りの寒い日なのに、私が高台を登り切る頃には汗をかいていた。高台には先客が何人もいた。老若男女問わず、いっぱい。

私もその群衆の中の一人になり、海を見下ろす。

私の罪を飲み込んだ、あの海を。

私の腕時計が14時46分を指した。

非常警報が長く、重苦しく耳障りに鳴り響く。

私は花束を海に投げ、そして手を合わせた。

赦されるはずがない。

分かっている。

それでも、必死に赦しを乞いながら。

私はこぼれる涙もそのままに、永く手を合わせた。

\* \* \*

「……はい、では、井上友三様の死亡届ですね。こちら、震災による行方不明者となっておりますが、よろしいですか？」

「ええ、お願いします」

石巻市役所は石巻駅のすぐ近くにある。ここも津波で浸水したけれど、今はあまりその面影が無い。

書類の説明を受ける。分からないものも多く、今の場で井上が公的に死亡したことにはできそうにない。恐らく、またここに来るか、郵送で書類の手続きをすることになるだろう。

井上名義の財産、アパートの土地とかは全て相続放棄

するつもりだった。土地だけは先に行政に投げ渡ししまい、今はどうなっているか分からない。恐らく、この地域の復興の一助になっているのだろう。

とにかく、私は決めた。

井上友三を、この世から消す。

私が殺したというその事実を、改めて確固たるものにするために。

どんなに私が逃げ出したくなっても、絶対に逃げられないように。

\* \* \*

仙台駅に戻る頃には、すっかり夜になっていた。吐息が白い。牛タンの駅弁だけ買って、私は新幹線ホームに上がる。

『こまち45号秋田行きとはやて45号新青森行きが16両編成で参ります。こまち号の停車駅は盛岡、雫石、田沢湖、角館、大曲、秋田です……』

暗闇の向こうから、眩い前照灯の光と共に列車が入ってくる。白と銀のツートンにビビッドピンクの帯を巻き、前面を黒く塗装した列車。

「確か、E3系って言ったっけ……」

鮮やかな3色、赤、青、黄で描かれた『こまち』のマークには、桜のイラストと共に『ありがとう』と描かれている。ドアが開き、車内へ。

「そういえば、もうすぐ引退するって言ってたわね」

私の旅の最後を締めくくる列車が、礼士さんの初恋の相手……礼士さんの人生を決め、私に巡り合わせてくれた列車だというのは、偶然なのだろうか。

ベルが鳴り、ドアが閉まる。

私の、旅の終わりが始まる。

\* \* \*

車内は妙に空いていた。私は指定された席に座る。そういえば、この指定席から礼士さんが犯罪を見破ったこともあったつけ。

列車は夜のみちのくをぐんぐんと加速していく。時折トンネルが現れ、それを抜けるたびに車窓に黒く染まった白い地面が見える。雪だ。

弁当を食べ、お腹が膨れた。眠気が私に忍び寄る。でも、誰かがそれを吹き飛ばした。

「お前、何のつもりだ？」  
聞き覚えのある声に鳥肌が立った。

私の前の座席がゆっくりと回転し、二人の男が現れた。

「まさか……どうして……!?!」

「久しぶりだな、この人殺し」

井上と笠原が、私に蔑むような笑みを向けた。

\* \*

恐怖。

苦痛。

蘇る記憶。

でも、今の私はあの時の私ではない。

「あら、ご挨拶じゃない。この獣」

私は逃げないと決めた。

守ってくれる人がいる。

守るべき人がいる。

だから、私は立ち向かう。

私の過去に。

あの日の自分に。

「お前、あの男と結婚するのか？」

笠原がにたにたと笑いながら聞く。

「あんたに答える義理は無い」

「結婚して、幸せになってもいいと、本気で思ってるのか？ ああ？」

井上も悪辣な笑顔を浮かべる。

「まるで私が幸せになつてはいけなような言い草ね」

「そう言ってるんだよ」

私は不敵に微笑む。

「へえ、じゃああんたたちは？」

私の心に点つたのは、燃え滾る憤怒。

「私を強姦して、礼士さんを殺そうとして、そんなあなたたちが今更何なの？ 自分の事を柵に上げて説教垂れようつての？ 論外だわ」

「調子に乗ってんじゃねえぞ！」

井上が凄む。でも、私にはまるで響かない。

「弱い犬ほどよく吠えるとはよく言ったものね」

「何だと!?!」

「あんたたちはクズだつて、そう言ってるのよ。何度でも言っただけのわ、このクズ」

私も言っただけのわ、このクズ」

私に立ち上がり、獣二匹に詰め寄る。

「あんた、私を責めてばかりじゃないの。責められて当然な事をしたのは分かっているわ。でも、あんたたちが私を責めれば責めるほど、私はあんたたちの所業を忘れないわよ」

二匹には一言も言わせない。私は言葉の機関銃を撃ち続ける。

「私はあんたたちを忘れない。あんたたちにした行いを背負って生きていくために」

「うるさい、死ぬよ」

笠原が吐き捨てる。

「はん、よく言うわ。今更私に死ねだなんて。あんたたちには私を殺す知恵も勇気も無かったですよ？ あの

時、私をいくらでも殺せたのにそれをしなかったんだから」

段々と私の声が大きくなっていく。

「私は絶対に止まらない。誰にも止められはしない。私が生きていくことを、私があんたたちに向き合うことを、私は誰にも邪魔させない！」

大声を出して、息を切らす。

「あんたたちの事は忘れない、絶対に。私はあんたたちを殺したことを死ぬまで悔やみ続ける。それと同時に、あんたたちにされた鬼畜の所業を死ぬまで恨み続ける！ ……あんたたちにその覚悟はある？ あるわけないわよね、クズだもんね、弱虫だもんね、人をいたぶって喜ぶようなカスだもんね」

「黙れ！」

井上がキレる。私はついに逆上した。

「お断りよ！ クズ、カス、ゴミ！ これは全部あんたたちに言われた言葉そのままよ！ 黙って受け取れ！ 受け取れないなら出ていけ！ 自分では何も生み出すことすらできず、人を傷付けることを楽しむしかない下劣なゴキブリども、あんたたちに私は殺せない！ あんたたちに私は背負えない！」

私は席についた。氷のように冷たい口調で続ける。

「消えてくれる？ 私が何度も思い出すのは、あんたたちを殺したという事実。あんたたちそのものじゃない。あんたたちが生み出して、散らかした不幸を終わらせるためにも私は生きる。目障りよ、出て行って」

「……てめえ、なめた口きき」

最後まで言わせずに笠原の胸ぐらを掴み、思いっきり張り手を食らわせる。ちらりと見えた口の中には、舌が無かった。

『間もなく、盛岡です。東北本線、山田線、花輪線、田沢湖線、IGRいわて銀河鉄道線はお乗り換えです。盛岡を出ますと、次は雫石に停まります……』

『降りなさい』

私は二人を焼き尽くすように睨みつける。

「無賃乗車はお断りよ。この列車は、私の心は、あなたたちを乗せるためにあるんじゃない」

\* \* \*

いつの間にか眠ってしまったみたいだ。窓の外を見ると、『盛岡』と書かれた駅名標が見える。

全身にぐっしりと汗をかいていた。うなされたのだろう。恐らく、これからも何度もうなされるに違いない。

「だから私は幸せになるのよ。あなたたちにうなされてもいいように」

目の前の椅子は私に背を向けている。やっぱり夢だったのだろう。

ドアが閉まる。

『こまち45号』は、滑らかに秋田へと走り出した。

エピローグ 帰還

奥羽山脈を越え、最後の雪が積もった夜を走り抜けた

『こまち45号』の車内にチャイムが鳴り響く。

『長らくのご乗車、誠にありがとうございました。間もなく終点の秋田、終点の秋田に到着致します。11番線到着、降り口は右側です。車内に落とし物、お忘れ物などをなさいませんよう、今一度お手回り品をお確かめ下

さい。終点、秋田です』

21時59分。『こまち45号』は定刻通り、寸分の振動も無く秋田駅に滑り込んだ。

『ご乗車、お疲れ様でした。秋田、秋田です。お忘れ物の無いよう、ご注意ください。この列車は、ご乗車できませんのでご注意ください……』

終着駅だ。

私はそっと立ち上がり、網棚に上げた紺のトレンチコートに身をまとう。他の乗客に先を譲り、私は最後に列車を後にした。

ホームはあちこちに雪が積もっていた。この雪もやがて溶けるだろう。乗客はみな足早に改札につながるエスカレーターを登っていく。私はそんな乗客たちの群れを横目に、何となくホームから離れがたかった。

とうとう、私がホームに残る最後の一人になってしまった。

『ドアが閉まります』

自動音声と共に列車のドアが閉まる。

とうとう帰ってきた。その実感がようやく湧き始める。

あの人はどこだろう？ アパートの部屋に行けば会えるだろうか？ そう思い、私は歩き出した。しかし、誰かの姿が私の視界に入り、私は足を止めた。

『こまち』の運転席のドアが開き、誰かが降りてくる。

黒い制服に身を包んだ男性。

がっしりと大きな体つき。

左頬に刻まれた傷跡。

そして、黒縁眼鏡の中にある優しげな垂れ目。

運転士は、『こまち』のマークを挟んで私の目の前で

立ち止まる。

「おかえり、瑞穂さん」

それは、ずっと私の帰りを待ち焦がれていた、暖かく優しい声。

「ただいま、礼士さん」

私は止まらなかつた。最愛の人に、生涯の伴侶に駆け寄り、抱きしめる。お互いのぬくもりを、お互いの存在を、両腕でしっかりと離さない。

「ねえ……指輪、嵌めてよ」

私はコートのポケットの中から、紺色の小さな箱を取り出す。あの日、この場所で渡された箱。

礼士さんは白手袋を外し、ケースを開く。銀に輝く指輪を取り出し、私の左手を取る。

「瑞穂さん」

「礼士さん。私は、あなたと生きます。あなたと結婚します」

指輪がぴつたりと、左の薬指に嵌まる。

「ありがとう、瑞穂さん」

『こまち』のマークの前。秋田駅のホームで。私と礼士さんは永遠を誓い、唇を重ねる。

終わりにしたいものがある。

忘れてはならないものがある。

守りたいものがある。

帰るべき居場所がある。

歩みたい未来がある。

掴むべき幸せがある。

そして、共に生きたい人がいる。

だから、私は生きる。

私は、あなたと生きる。

だから、私は旅に出る。  
私は、あなたと旅に出る。

暖かい南風が『こまち』と、礼士さんと、そして私を  
包み込む。  
春はもうすぐだ。

おまけ 未来

澄んだ雪晴れの夜に、少し欠けた月が輝いている。吐  
息が白く凍える。しかし私は沸き立つような心のまま、  
夫を迎えに行く。

私と礼士さんが結婚して1年が経とうとしていた。そ  
の歳月は確実に私達に老いを与えた。礼士さんは若白髪  
が目立つようになり、私は目元の小皺が少し増えた。で  
も、かけがえのない人とゆっくり時間を重ねていられる  
ことが、たまらなく嬉しい。

もうすぐ真夜中を迎える秋田駅のホームで礼士さんを  
待つ。誰もいないがらんとしたホーム。いるのは私達だ  
だけ。

『間もなく11番線に、秋田止まりの列車が到着します  
……』

アナウンスが凍える空気を破り、私の心を躍らせる。  
遠くの闇の中から光が見え、それがどんどん近づいてく  
る。やがて私の目の前で茜い最終列車が停まった。

『乗車お疲れ様でした。秋田、秋田です……』

まばらな客が私の横をすり抜けてエスカレーターへと  
吸い込まれていく。静寂を取り戻したホームはまた私達

だけになった。

運転室から見慣れた人影が、私が待ち望んだ人影が姿  
を現した。

「お帰り、礼士さん」

「瑞穂さん、たたいま。わざわざ駅に来てくれるなんて、  
どうしたの？ 体調は大丈夫なのかい？」

「大丈夫。いいから来て、ほらこっち」

私は礼士さんの手を掴み、そのまま在来線への乗り換  
え改札を抜ける。

「ねえ、どこに行くの？」

「行けば分かるわよ」

礼士さんは不思議そうな顔をしている。珍しく察しが  
悪い。私と礼士さんは早歩きで2番線に向かった。

跨線橋からホームに降りると、よかった、まだ来てい  
ない。雪とかで少し遅れているのだろう。水銀灯だけが  
煌々とホームと私達を照らしている。

「どうしたの？」

礼士さんの声はいつものように優しいが、不思議そう  
な表情はそのままだ。

「どうしても見せたいものがあって」

「僕に？」

ホームにアナウンスが響いた。

『2番線に列車が到着します。黄色い線の内側までお下  
がり下さい。この列車にはご乗車できませんのでご注意  
下さい……』

礼士さんにもようやく察しがついたようだ。

「瑞穂さん……ああそうか、今日で引退だったね」

遠くの闇に光が灯り、段々大きくなってくる。私の人  
生を変えた列車が、雪にまみれながら入線してきた。

「トワイライトエクスプレス……まさか、またこうやつ

て会えるなんてね」

礼士さんは私の手を握ったまま、ゆっくりと列車を見  
て回る。深緑色の艶やかな車体、天使のエンブレム、何  
もかもあの日と変わっていない。

「以前乗った時、覚えてるよね？」

「ええ、忘れられない」

「これ、まさにあの時に乗っていた機関車と客車だよ」

「あの時と全く同じ車両ってこと？」

「うん。ほら、ここが僕と釜田さんが泊まった部屋だ」  
二段窓を指す。閉められたカーテンの隙間から柔らか  
な光が漏れている。隣の部屋で起きた事件のことも含め、  
この列車の旅は確かに私の人生を変えた。

「じゃあ、私が告白されたのってあの辺？」

私は礼士さんを引っ張りながら食堂車・ダイナープレ  
ヤデスに近づく。

「うん。あの時の料理、本当に美味しかったよね」

「礼士さんに告白されて全部吹っ飛ばしちゃったってば……  
でも、もう食べられないのは寂しいわね」

「でも、もう食べられないのは寂しいわね」

「レシピ本とか出せばいいのにな。僕には一緒に作って、  
一緒に食べてくれる奥さんがいるし」

「調子良いんだから」

「でも、まんざらではない。」

「瑞穂さんの部屋は……あった、ここだ」

「ほんと、よく覚えてるわね」

少し呆れた笑いを浮かべる。列車の最後尾に近い。

「せっかくだし、写真撮らない？」

私は鞆からスマホを出した。

「お、そうだね」

礼士さんは私からスマホを受け取り、カメラを起動す  
る。かしやり。思い出の列車を背景に、私達の最初の家

族写真だ。

とりとめもないおしゃべりをしながら先頭に向かう。

さて、礼士さんにどう切り出したものか。握った手は離さない。離されない。

「またいつか、こんな列車で楽しい旅がしたいね、瑞穂さん」

「え？ うん、そうね」

「今度は二人つきり、夫婦水入らずでさ」

「二人つきり、ね。残念だけど、当分厳しいと思う」

「えっ？」

礼士さんが戸惑いを顔に浮かべる。私は立ち止まった。いつの間にか、先頭の機関車のところまで来ている。

「ねえ、礼士さん。触って？」

私は繋いだままの礼士さんの手を、自分の腹に当てる。

「瑞穂さん……まさか!？」

私は満面の笑みで頷く。

「2カ月だって。あなたと私の子供よ、礼士さん」

午前零時。ホームに甲高い警笛が響く。

「……じゃあ、僕は父親になるの？」

私は大きく頷く。礼士さんの背後で、トワイライトエクスプレスが最後の旅路を歩み始める。

「……嬉しいよ」

私は礼士さんに抱きしめられる。強く、暖かく。

「泣いてるの？」

「うん……こんなに嬉しいことって……!」

私も抱きしめる力を強める。

「しっかりとよ、お父さん」

「……お父さん、か」

礼士さんの泣き顔に笑顔が灯る。

「そうだね、しゃんとしないとね……お母さん」

……お母さん、ね。私の顔にも笑顔が咲く。

礼士さんは抱きしめる腕の力を緩める。

「帰ろうか。ここは寒いから、風邪をひいたら大変だ。」

瑞穂さんも、赤ちゃんもね」

「ええ。でもせめて、見送っていい？」

私は後ろの列車に目をやる。礼士さんも私の視線を追う。列車は私達の目の前から離れ、その車体を夜の闇に溶かしていった。雪との激闘も今夜が最後だろう。

「さよなら、ね」

「またね、だよ」

「……それもそうね」

トワイライトエクスプレス。夜の闇に浮かぶその柔らかな部屋の灯りも、赤い尾灯も、天使のマークも、やがてゆつくりとカーブの向こうに消えてしまった。手元には思い出と、その向こうに実を結んだ未来がある。

「瑞穂さんも、赤ちゃんも、ありがとう……僕在所に来てくれて」

静かに顔を上げた。

「ありがとうって言うのは私の方よ、礼士さん」

あなたに出会えて良かった。飽きるくらい繰り返した言葉を、また贈る。

「帰ろうか」

遠くから鋭い警笛が聞こえた。

「ええ」

私は礼士さんの手を握り直し、家路についた。